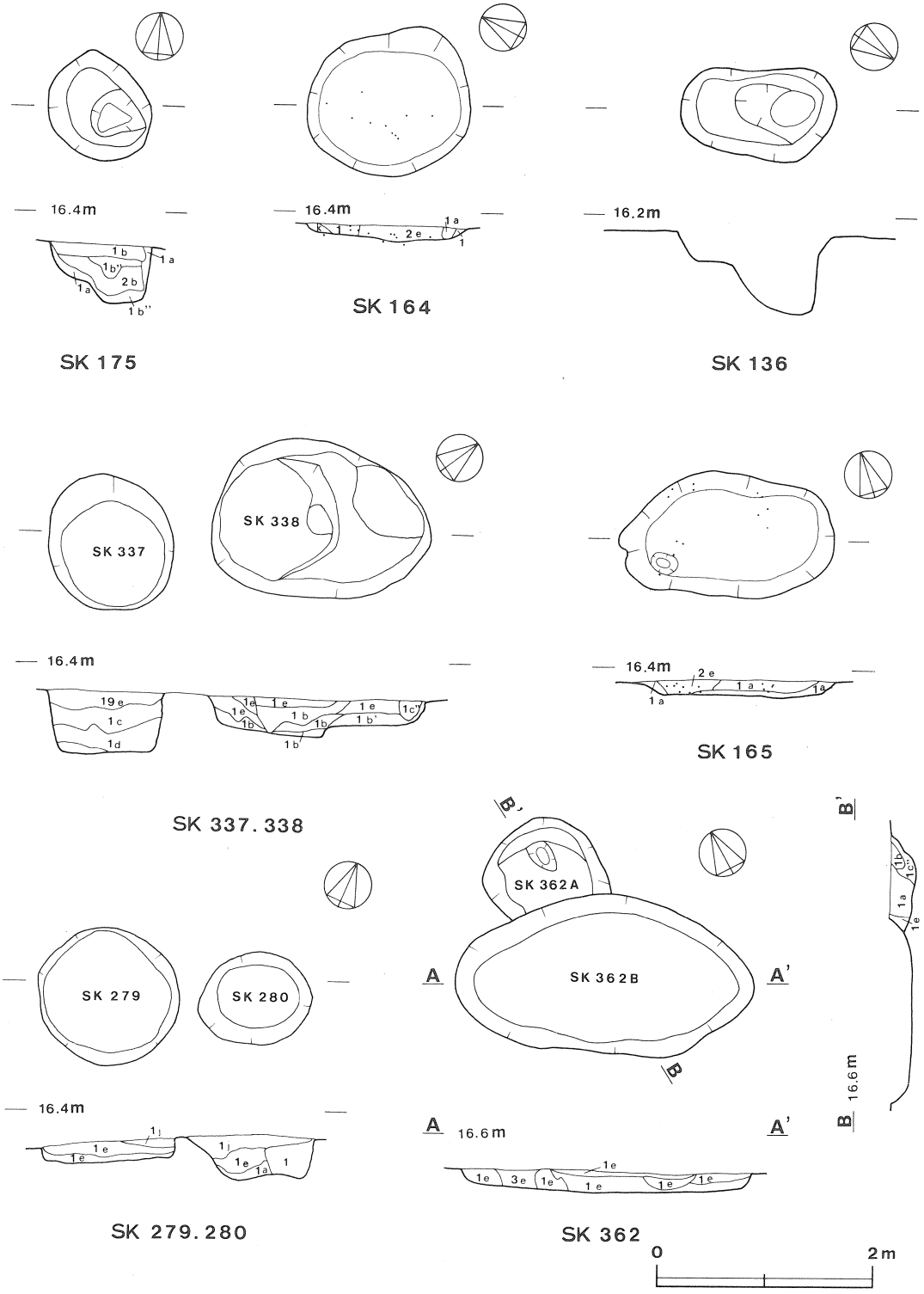
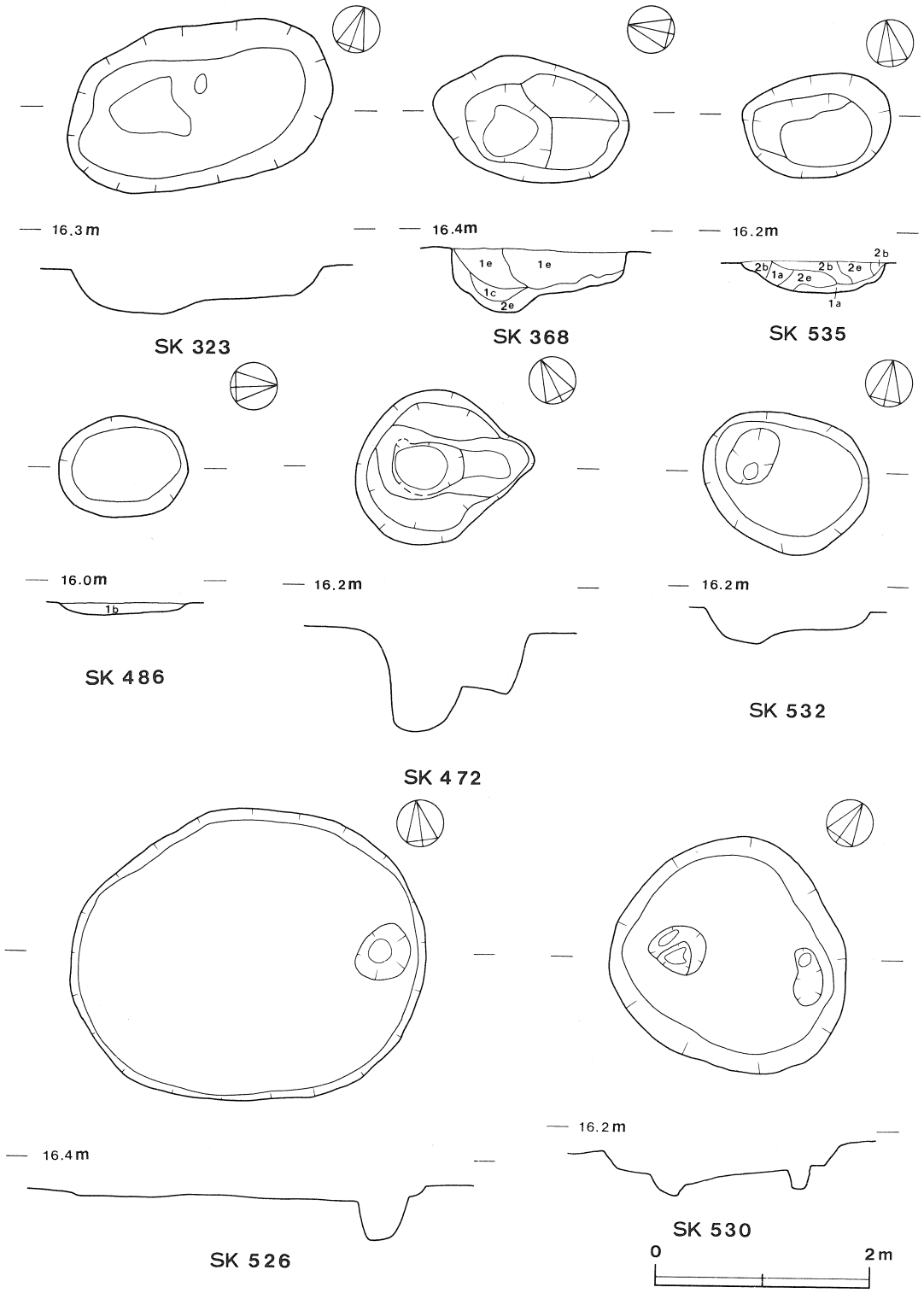


第160図　土壙実測図 (44)



第161図　土壙実測図 (45)

第4節　埋　　甕

当遺跡から検出された埋甕は，７基である。

第１号埋甕（第162図）

本埋甕は，筒戸Ｂ遺跡の南部のM10h_3区，２号住居跡内の南側の床面に検出されたものである。出土状況は，口縁部を上位にし，底面から約30°の角度をもって斜位に埋甕され，方向は，Ｎ－23°－Ｗを指している。確認された時にすでに上部は欠損していた。掘り方は，長径63cm，短径60cmほどの円形を呈し，16cmほどほぼ垂直に掘りくぼめている。覆土は，Ⅳ層からなる。下層に黒色土混じりの褐色土を埋めた後に土器を斜位に埋設し，土器内には黒色土が認められる。

時期は，２号住居跡より新しいもので，加曽利ＥⅢ期に比定されるものである。

第２号埋甕（第162図）

本埋甕は，筒戸Ｂ遺跡の北部のＫ10d_5区，16号住居跡内の南側の床面に検出されたものである。出土状況は，口縁部を上位にし正位に埋設されたもので，底部は欠損している。掘り方は，長径56cm，短径52cmほどの円形を呈し，床面を53cmほど円筒状に掘り込んでいる。覆土は，いずれも褐色土であるが，土質，含有物によりⅢ層に細分できる。上層は，ロームブロックを含む黒色土であるが硬く締まりがある。中位から下層は，黒色土混じりの柔らかい土質で中位には赤味をおびた硬いロームブロックが検出されている。

時期は，16号住居跡の時期判定資料となり，縄文時代中期の加曽利ＥⅢ期に比定されるものである。

第３号埋甕（第162図）

本埋甕は，筒戸Ａ遺跡の北東部のＫ９d_8区，52－Ｂ号住居跡の南側に検出されたものである。出土状況は，正位で埋設されているが，上部と底部を欠損している。掘り方は，長径52cm，短径50cmほどの円形を呈し，28cmほど土器の形に合わせて掘り込んでいる。覆土は，Ⅲ～Ⅳ層に区分され土質は全体的に軟らかい。52－Ｂ号住居跡に伴うものであるかどうかは，住居跡と重複する覆土がほとんど認められないため明確ではないが，３号埋甕が口縁部を有するものであれば，住居跡の覆土，床を切ることになり，52－Ｂ号住居跡より新しいものと考えられる。

時期は，縄文時代中期の加曽利ＥⅢ期に比定されるものと考えられる。

第４号埋甕（第162図）

本埋甕は，筒戸Ａ遺跡の北部のＪ９f_3区に位置し，西側には土壙群が所在している。出土状況は口縁部を下にする逆位で，口縁部の一部と底辺部は欠損している。掘り方は，長径98cm，短径89cmほどの円形状を呈し，22cmほど掘り込み底面は平坦である。覆土は，Ⅱ～Ⅲ層に区分され，土質はそれほど締まりがみられない。極少量であるが層中に炭化粒子と焼土粒子が検出されている。

時期は，縄文時代中期の加曽利ＥⅢ期に比定される。

第５号埋甕（第162図）

本埋甕は，筒戸Ａ遺跡の北部のＫ９c_2区に位置し，296号土壙を掘り込んで埋設されている。出土状況は，正位で検出されたが，口縁部と底部は欠損している。掘り方は，長径63cm，短径60cmの円形を呈し，44cmほど土器の形に合わせて掘り込まれている。覆土は，Ⅲ層に区分される。上層の1a，2aからは少量の炭化粒子が確認され，下層の11dからは少量の焼土小ブロックが検出されている。土質は全体的にやや軟らかい。

時期は，296号土壙より新しく，縄文時代中期の加曽利ＥⅢ期に比定されるものと考えられる。

第６号埋甕（第162図）

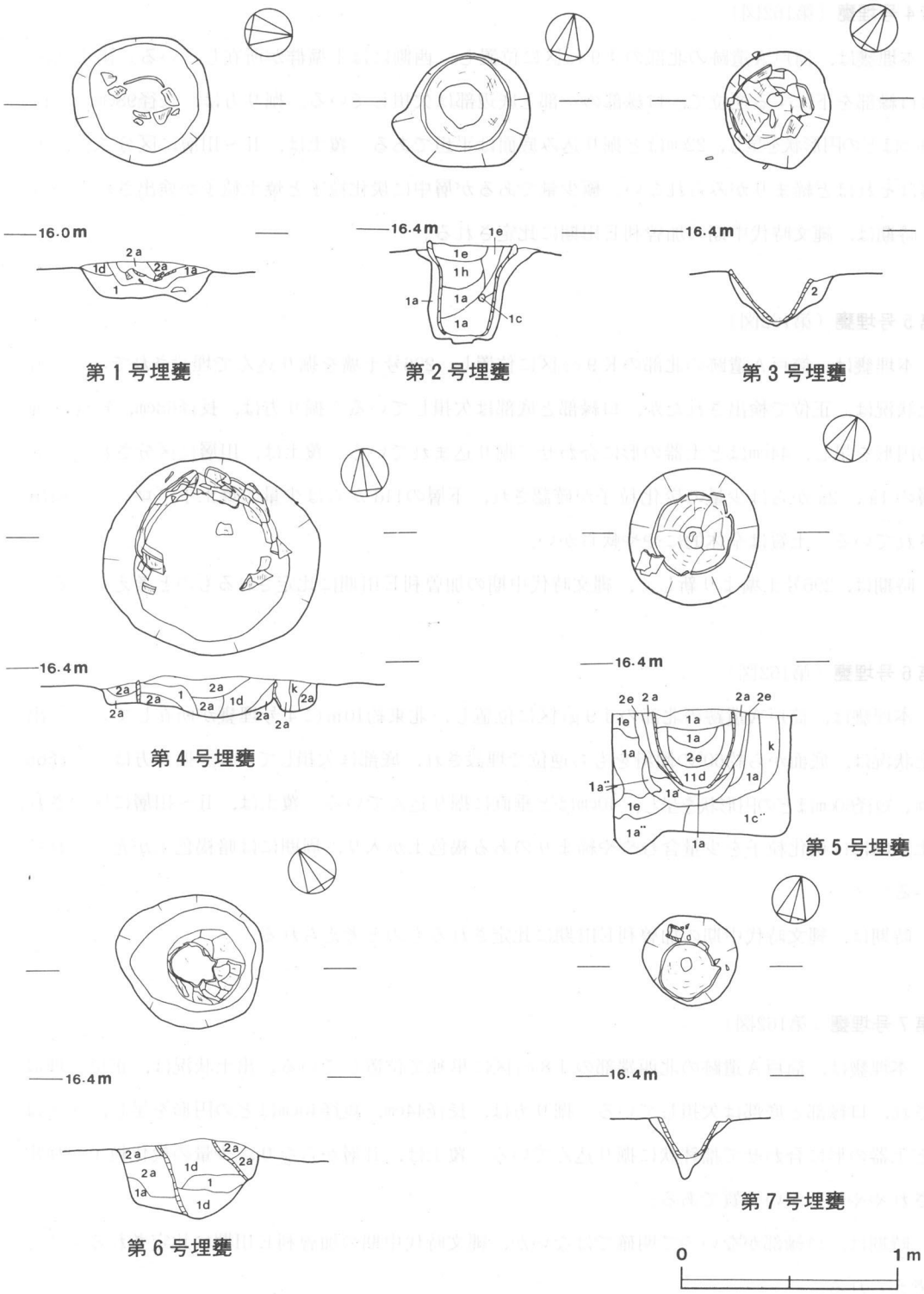
本埋甕は，筒戸Ａ遺跡の北部のＪ９g_1区に位置し，北東約10ｍに４号埋甕が所在している。出土状況は，底面から約60°の傾斜をもち逆位で埋設され，底部は欠損している。掘り方は，長径66cm，短径60cmほどの円形状を呈し，40cmほど垂直に掘り込んでいる。覆土は，Ⅱ～Ⅲ層に区分され，土器内には炭化粒子を少量含むやや締まりのある褐色土が入り，周囲には暗褐色土が充塡されている。

時期は，縄文時代中期の加曽利ＥⅢ期に比定されるものと考えられる。

第７号埋甕（第162図）

本埋甕は，筒戸Ａ遺跡の北西端部のＪ８e_4区に単独で位置している。出土状況は，正位で埋設され，口縁部と底部は欠損している。掘り方は，長径44cm，短径40cmほどの円形を呈し，30cmほど土器の形に合わせて擂鉢状に掘り込んでいる。覆土は，Ⅱ層からなり，少量の炭化粒子が検出されやや軟らかい土質である。

時期は，口縁部がないので明確ではないが，縄文時代中期の加曽利ＥⅢ期に比定されるものと考えられる。


16.0m
2a
1d
2a
1a
1
第1号埋甕
16.4m
1e
1e
1h
1a
1a
1a
1c
第2号埋甕
16.4m
2
第3号埋甕
16.4m
2a
2a
1
2a
1d
k
2a
2a
2a
2a
第4号埋甕
16.4m
2e
2a
2a
2e
1e
1a
1a
2e
k
1a
11d
1a
1a"
1a
1e
1c"
1a"
1a
第5号埋甕
16.4m
2a
2a
1d
2a
2a
1
1a
1d
第6号埋甕
16.4m
第7号埋甕
0
1m

第162図　埋甕実測図

第5節　そ　の　他

筒戸B遺跡では，その他性格不明の遺構が3基検出されている。

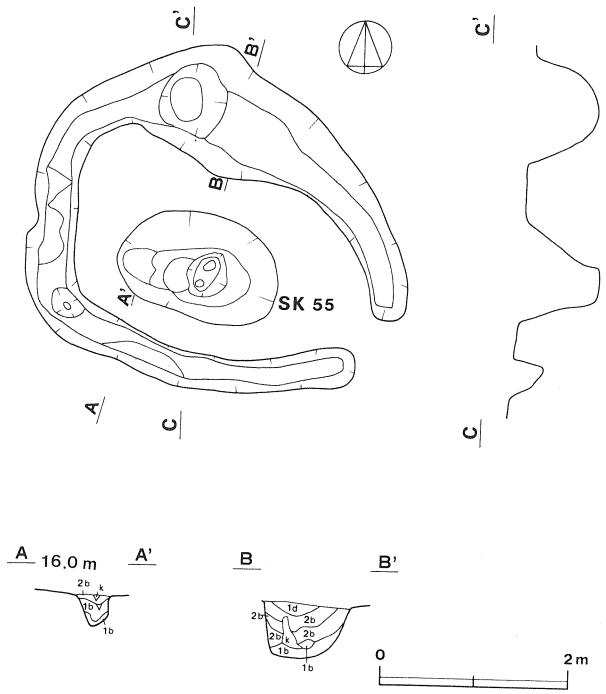
SX1（第163図）

本跡は，筒戸B遺跡の南部のM10e3区を中心に位置し，内側に55号土壙が重複している。

平面形状は，長軸4.23m，短軸3.34mほどで南東側が開く馬蹄形状を呈し，方形周溝状の溝が確認されている。長軸方向は，N－66°－Wを指している。溝は，上幅35～110cm，下幅20～63cmで南東側の一部を除いて周回し，北側はかなりの幅がみられる。深さは，おおむね20～35cmであるが北側は深く75cmである。溝内の覆土は，ロームブロックと黒色土を混入する軟らかい暗褐色土である。遺物は，検出されていない。

性格は，不明であるが覆土の状況や溝底の状況を観察すると，いわゆる方形周溝となる遺構でははなく，風倒木あるいは何らかの攪乱によるものと考えられる。

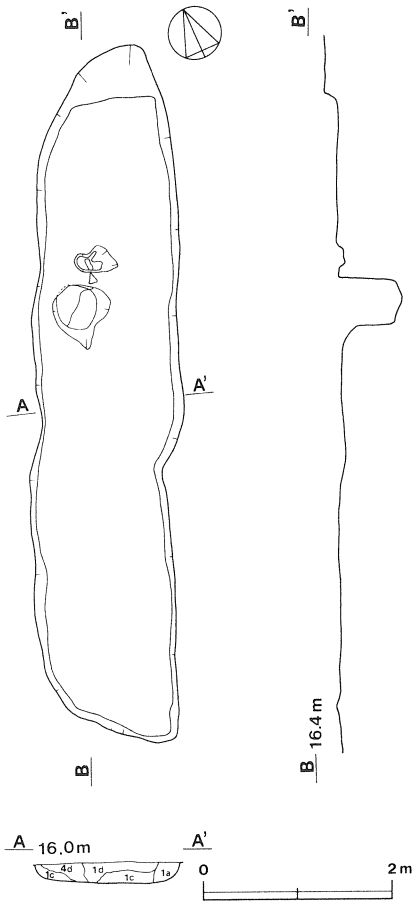
なお，中央に位置する55号土壙は，長径1.68m，短径1.1mほどの楕円形を呈し，底面は凹凸状をなし，壁は軟弱で覆土もロームブロックを含む軟らかい土層であり，新しい何らかの攪乱によるものであろう。



第163図　SX1実測図

ＳＸ２

本跡は，筒戸Ｂ遺跡の南部のＭ９a_3区周辺に確認された土壙群（ＳＫ56～60，80，88～98）に位置するものである。調査の結果，ＳＫ56～58，60，80，89，98は小動物が入れる程度の小穴によって連結され，覆土もロームブロック混じりの軟質なものである。ＳＫ90～97も同様なものである。ＳＫ90の西側には，不整形のかなり大きい掘り込みがみられ，あるいは粘土採掘のものかとも考えたが，前述の土壙としたものと同じく小動物の巣ではないかと判断し，土壙番号は欠番とし，図面の掲載も省略した。



第164図　ＳＸ３実測図

ＳＸ３（第164図）

本跡は，筒戸Ｂ遺跡の北部のＪ10g_4区を中心に位置するもので，確認の段階では溝としてとらえたが，途中で立ち上がり長く続く溝とはならずその他の遺構として取り扱ったものである。

平面形状は，長軸7.4m，短軸1.54mほどの長方形を呈している。深さは，７～15cmで中央から北側にかけてやや深く南側が浅くなり外傾ぎみに立ち上がっている。底面は，ほぼ平坦で中央に２か所のピットが認められる。覆土は，Ⅲ～Ⅳ層に区分される。土質はロームブロック混じりで軟弱であり，自然流入的な状況を示している。

遺物は検出されていない。性格は不明であるが，周辺に密集する土壙群との関連も考慮されるが，後世の攪乱とも考えられる。

第4章　遺　　物

第1節　遺物の概要と記載方法

1　遺物の概要

当遺跡から出土した土器片の総数は，47,667点，石器総数221点，土錘72点である。

出土した土器は，縄文時代中期加曽利ＥⅡ～Ⅳ式期に属するものであり，縄文時代中期中葉から後葉に位置する。

これらの遺物の住居跡・土壙等からの出土状況を観察すると，遺物は，遺構覆土中からの出土が主であり，遺構内に遺物が一括投棄された状態や，遺構周辺から徐々に流入し堆積した状態を示している。これらのことから出土土器の多くは，遺構の廃絶された後に，投棄したり，廃棄したりしたものと考えられる。

以上の点から，住居跡・土壙から出土した土器，石器が必ずしもその遺構の営まれた時期に伴うものでなく，また，遺構の時期を決するものでもないと考えられるので，当遺跡から出土した土器，石器類に対しても上述の点をふまえて，比較検討を行いたい。

2　遺物の記載方法

当遺跡から出土した遺物の中で土器については，次の方法で記載した。

竪穴住居跡，土壙等から出土した土器片の中で，復元され実測可能な物については，すべて実測を行い，石器類と共に第4章の項に記載した。

また，遺跡内や各遺構から出土し，復元不可能な土器片については，拓本実測を行い，第5章まとめの項に分類記載した。なお，遺物記載図版類の縮尺は，½・⅓・¼・⅙・⅛とした。

第２節　竪穴住居跡出土遺物

１　縄文式土器

第５号住居跡出土土器（第165・166図１～10）

(1)　キャリパー形を呈する深鉢形土器。口縁部内彎を示す。口縁部は接続部に渦巻文をもち，楕円区画４単位，区画内に斜縄文が押圧されている。胴部には懸垂文が施され，区画内は磨り消されている。楕円区画内は，原体Ｒの横位回転，胴部は，Ｒの縦位回転縄文が施されている。

(2)　キャリパー形を呈する深鉢形土器。口縁部は内彎し，隆帯による渦巻文，楕円区画が施されている。区画内に斜縄文が押圧されている。口縁部から胴部にかけて無文帯がみられる。

(3)　キャリパーを呈する深鉢形土器。口縁部は隆帯による渦巻文，楕円区画が施されている。区画内は刺突文が押圧され，口縁部から胴部にかけては，２本の沈線がみられる。胴部は「∩」形の沈線を交互に施し，「∩」形の内側は，原体Ｒの横位回転縄文が施されている。

(4)　深鉢形土器。口唇部欠損。口縁部に沈線による楕円区画が施され，区画内に斜縄文が押圧されている。斜縄文を地文としている。

(5)　胴部破片。器面全体に縄文が施文され，縦・横位による沈線がみられ，２本の縦位の垂下する沈線間は研磨が施されている。

(6)・(7)　底部破片。

(8)　深鉢形土器。口縁部は内彎し，接続部に隆帯による渦巻文をもち，楕円区画が４単位，区画内に斜縄文を押圧している。胴部に懸垂文が施され，区画内は磨り消されている。

(9)　口縁部が内彎する深鉢形土器。口縁部は，沈線による渦巻文，楕円区画が施され，区画内は斜縄文が押圧されている。口縁部と胴部の間には一条の隆帯がはっきりつけられ，胴部には懸垂文が施されている。

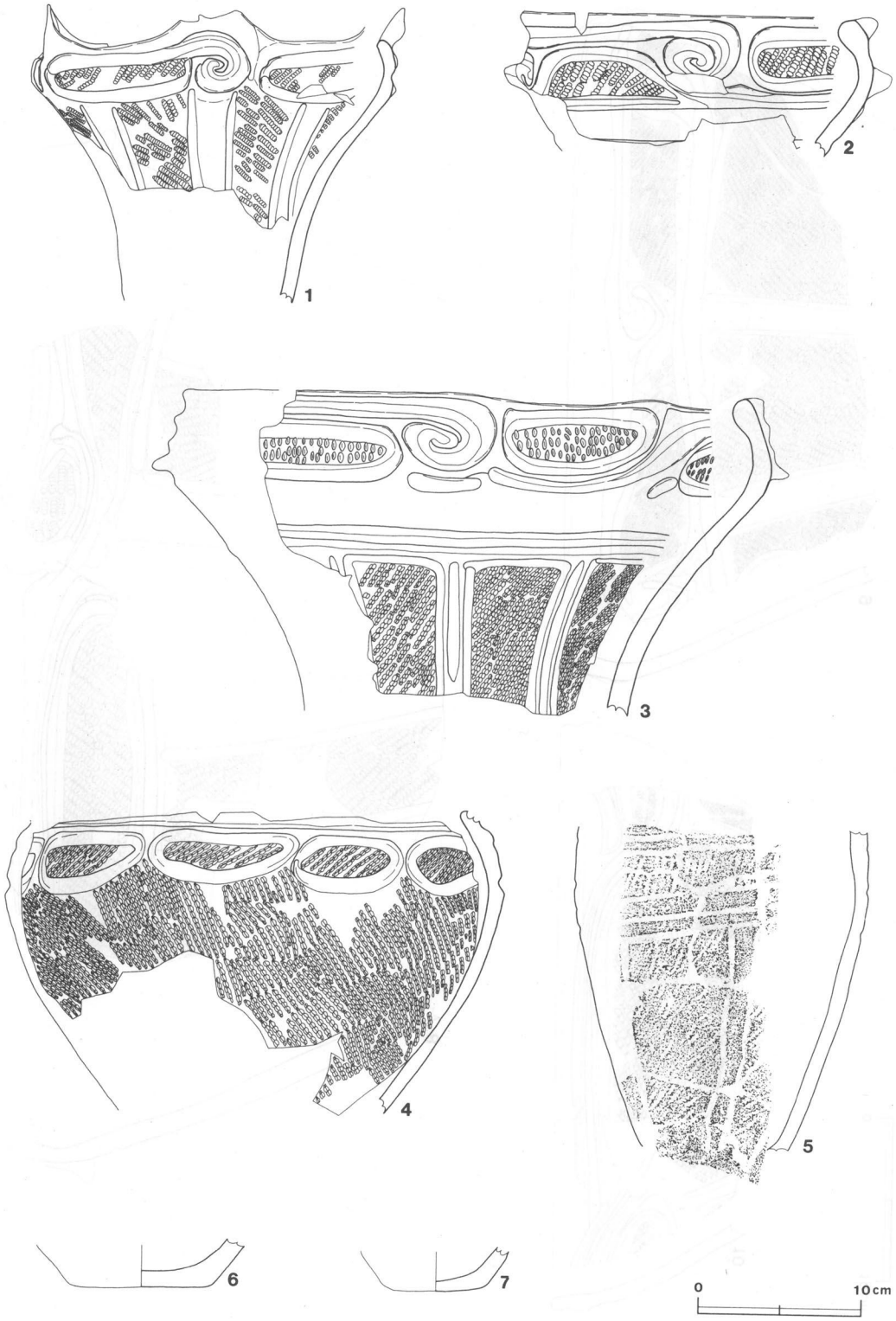
(10)　深鉢形土器。口縁部は，沈線による楕円区画が施されている。区画内，胴部は無節の斜縄文が押圧されている。胴部に懸垂文が施され，区画内は磨り消されている。

第６号住居跡（第167・168図１～５）

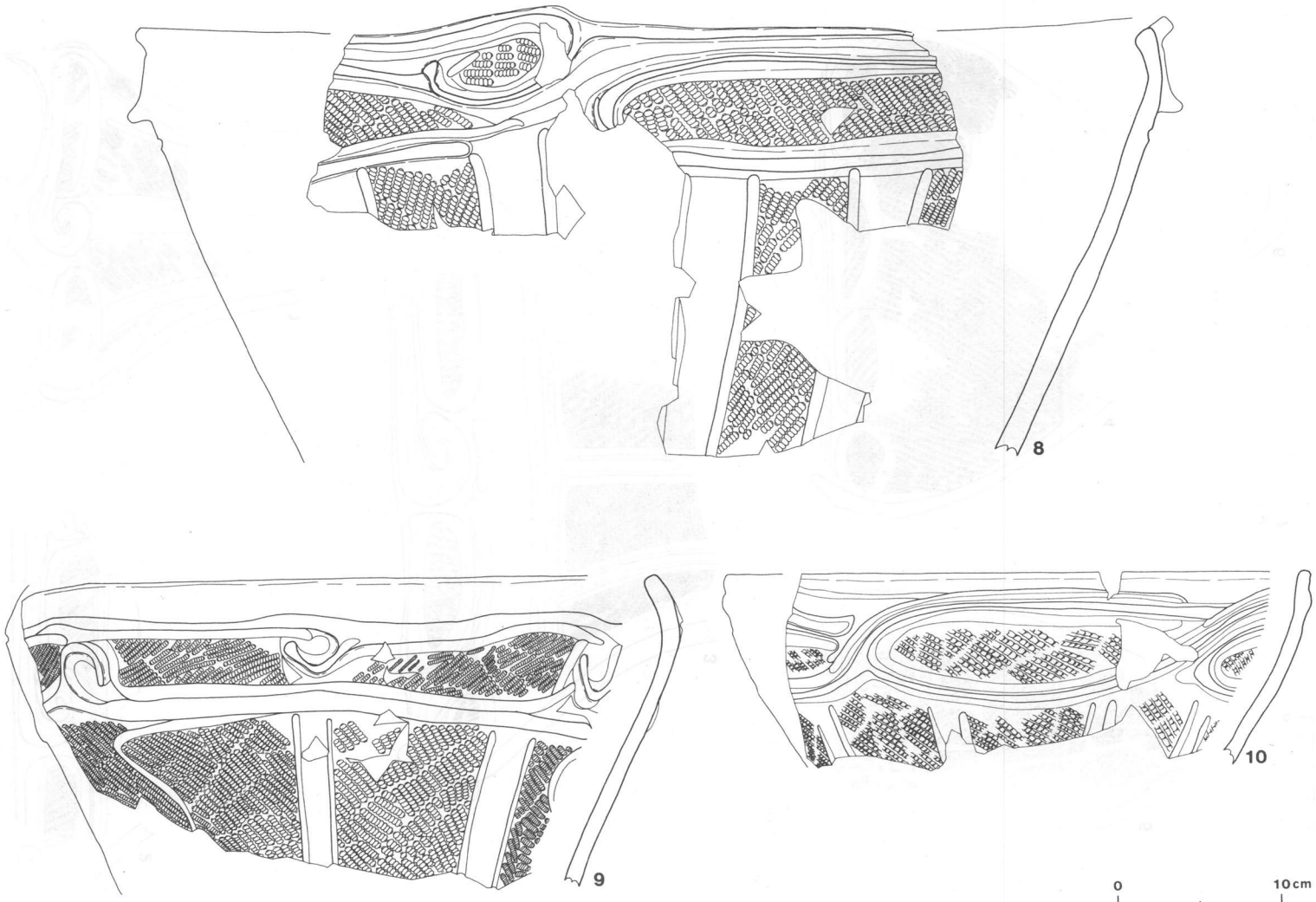
(1)　深鉢形土器。口縁部は沈線による楕円区画が施されている。区画内は斜縄文が押圧され，胴部は「∩」形の沈線を交互に施し，「∩」形の内側は，原体Ｒの横位回転縄文を施している。

(2)　キャリパー形を呈する大型の深鉢形土器の破片である。胴部地文は，斜縄文であり，胴部は，幅の広い磨り消しによる懸垂文が施されている。

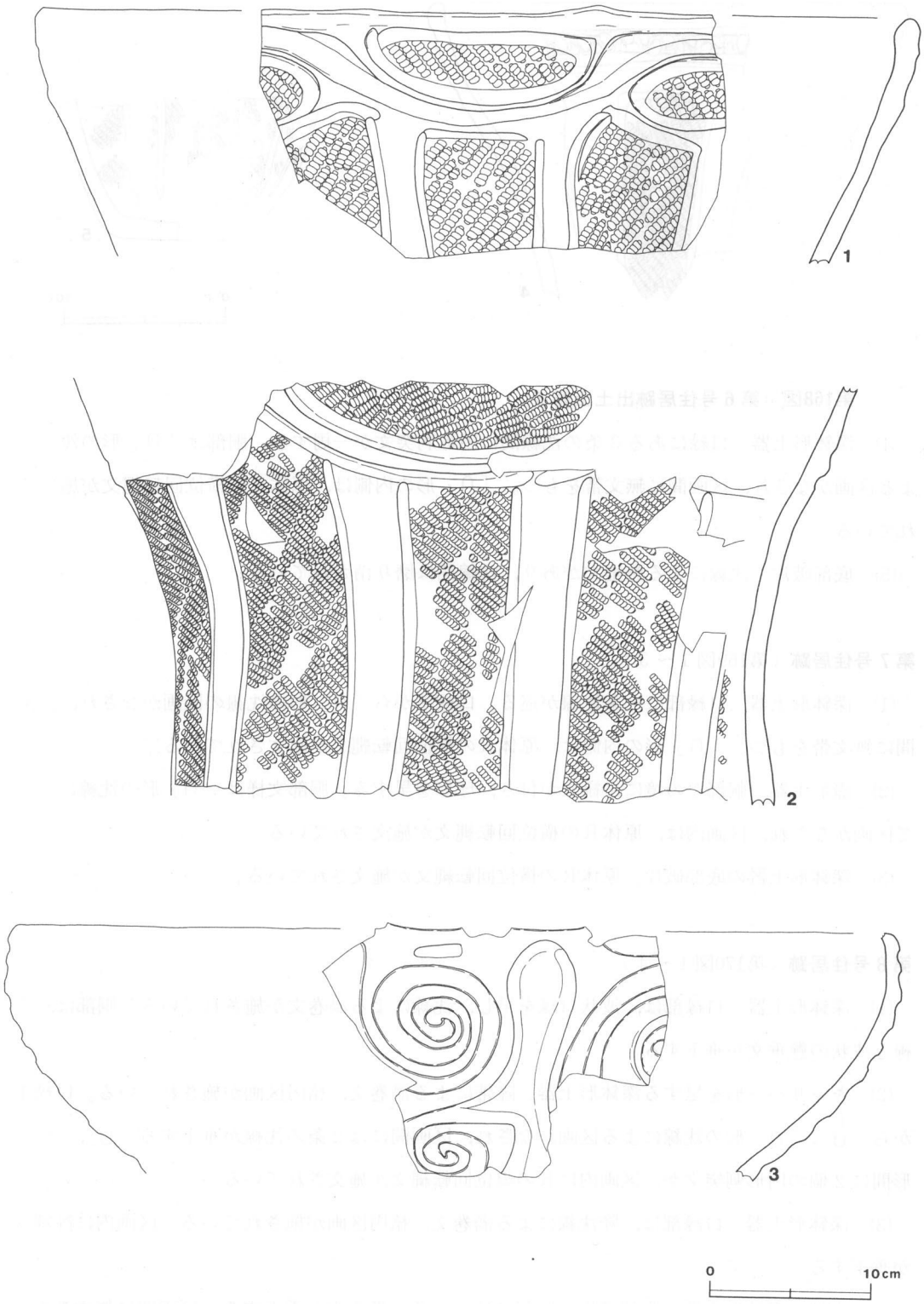
(3)　鉢形土器。渦巻のモチーフをもち，隆帯と沈線との組み合わせで描き出されている。



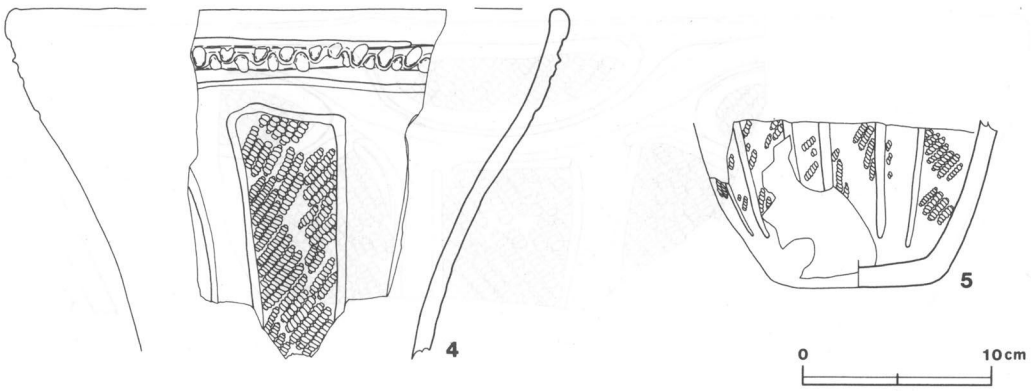
第165図　第５号住居跡出土土器(1)



第166図　第５号住居跡出土土器(2)



第167図　第６号住居跡出土土器(1)



第168図　第６号住居跡出土土器(2)

(4)　深鉢形土器。口縁にある３条の沈線間に円形刺突文が一周する。胴部は「∩」形の沈線による区画がなされ，区画間に無文帯をもつ。「∩」形の内側は，原体Ｒの横位回転縄文が施文されている。

(5)　底部破片。沈線による懸垂文があり，沈線間は磨り消されている。

第７号住居跡（第169図１～３）

(1)　深鉢形土器。口縁部に一条沈線が巡る。口縁下から「∩」形の沈線の区画がなされ，区画間に無文帯をもつ。「∩」形の内側は，原体Ｒの横位回転縄文が施文されている。

(2)　壺形土器。胴部との境に吊紐穴が付き，球形を呈する。胴部文様は「∩」形の沈線によって区画がなされ，区画内は，原体Ｒの横位回転縄文が施文されている。

(3)　深鉢形土器の底部破片。原体Ｒの横位回転縄文が施文されている。

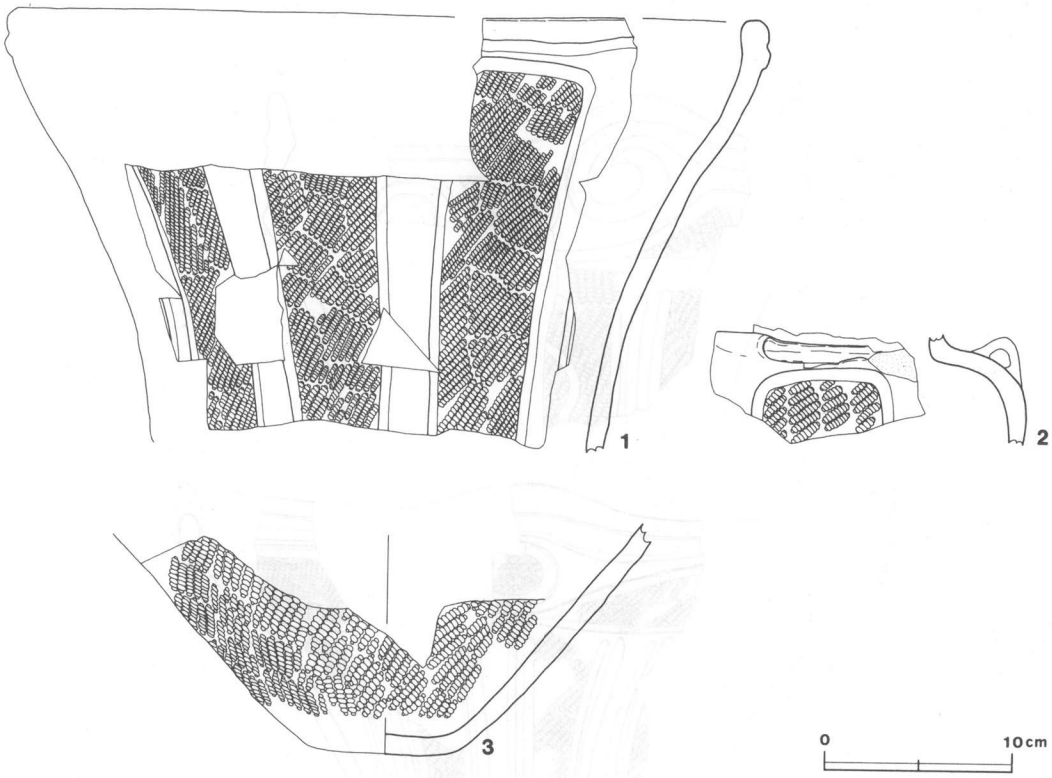
第８号住居跡（第170図１～４）

(1)　深鉢形土器。口縁部は，波状口縁を呈し，沈線による渦巻文が施されている。胴部は，直線と波状の懸垂文が垂下する。

(2)　キャリパー形を呈する深鉢形土器。隆帯による渦巻文，楕円区画が施されている。口縁下から「∪」，「∩」形の沈線による区画がなされ，区画間には２条の沈線が垂下する。「∪」，「∩」形間に２個の円形刺突文が，区画内にＲの縦位回転縄文が施文されている。

(3)　深鉢形土器。口縁部は，隆沈線による渦巻文，楕円区画が施されている。区画内に斜縄文が垂下する。

(4)　小型の深鉢形土器。胴部破片。胴部には，２条の懸垂文が垂下する。区画間に無文帯をもつ。地文は，原体Ｌの縦位回転縄文が施されている。



第169図　第７号住居跡出土土器

第９号住居跡（第171図１～６）

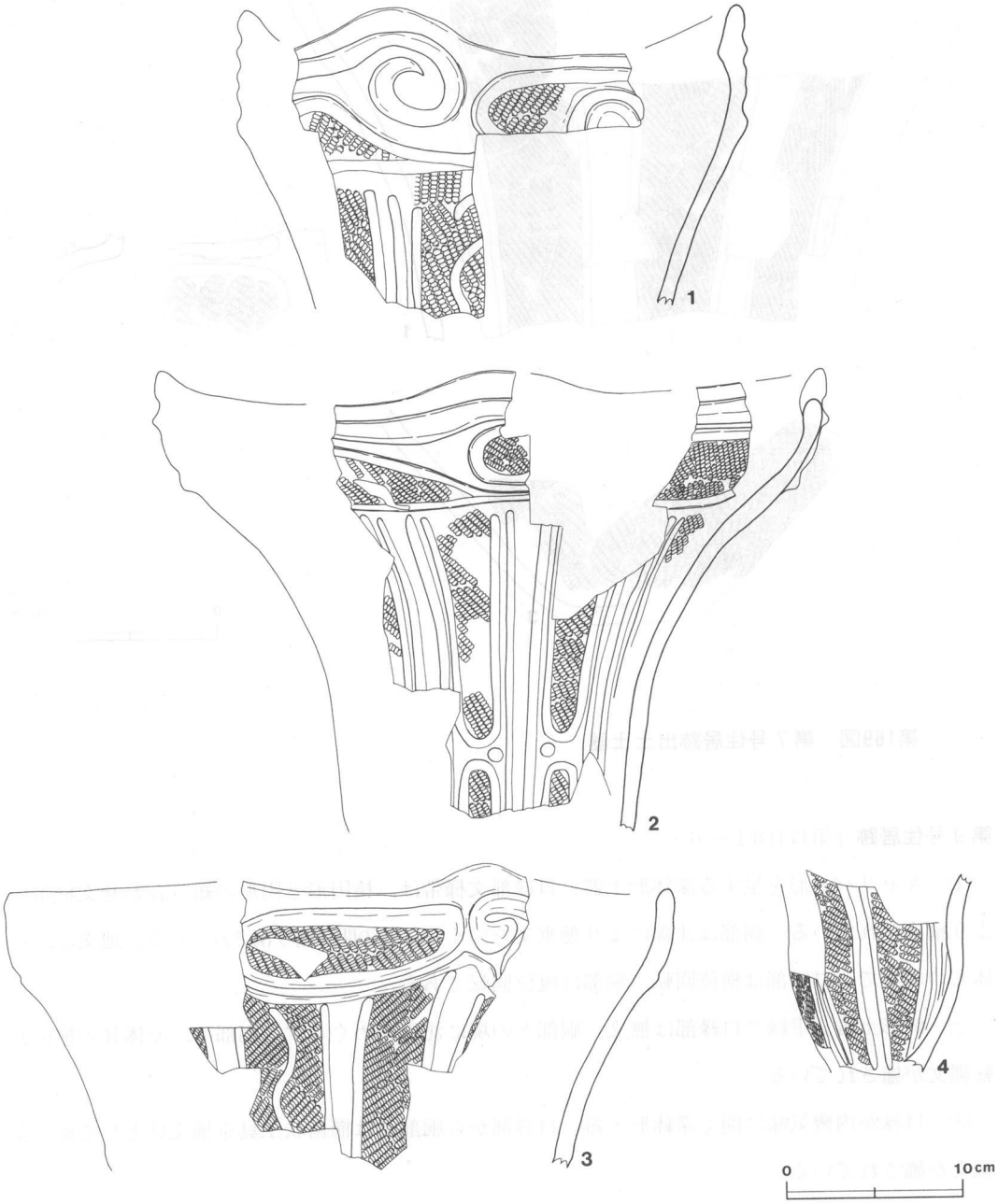
(1)　キャリパー形を呈する深鉢形土器。口縁部文様帯は，楕円形と円形の組み合わせ文様帯により構成されている。胴部は沈線により懸垂文をつくり，その間が磨り消されている。地文は，原体Ｌの縄文で，口縁部は横位回転，胴部は縦位回転である。

(2)　鉢形土器。平縁で口縁部は無文，胴部との境に沈線をめぐらす。胴部は，原体Ｒの横位回転縄文が施されている。

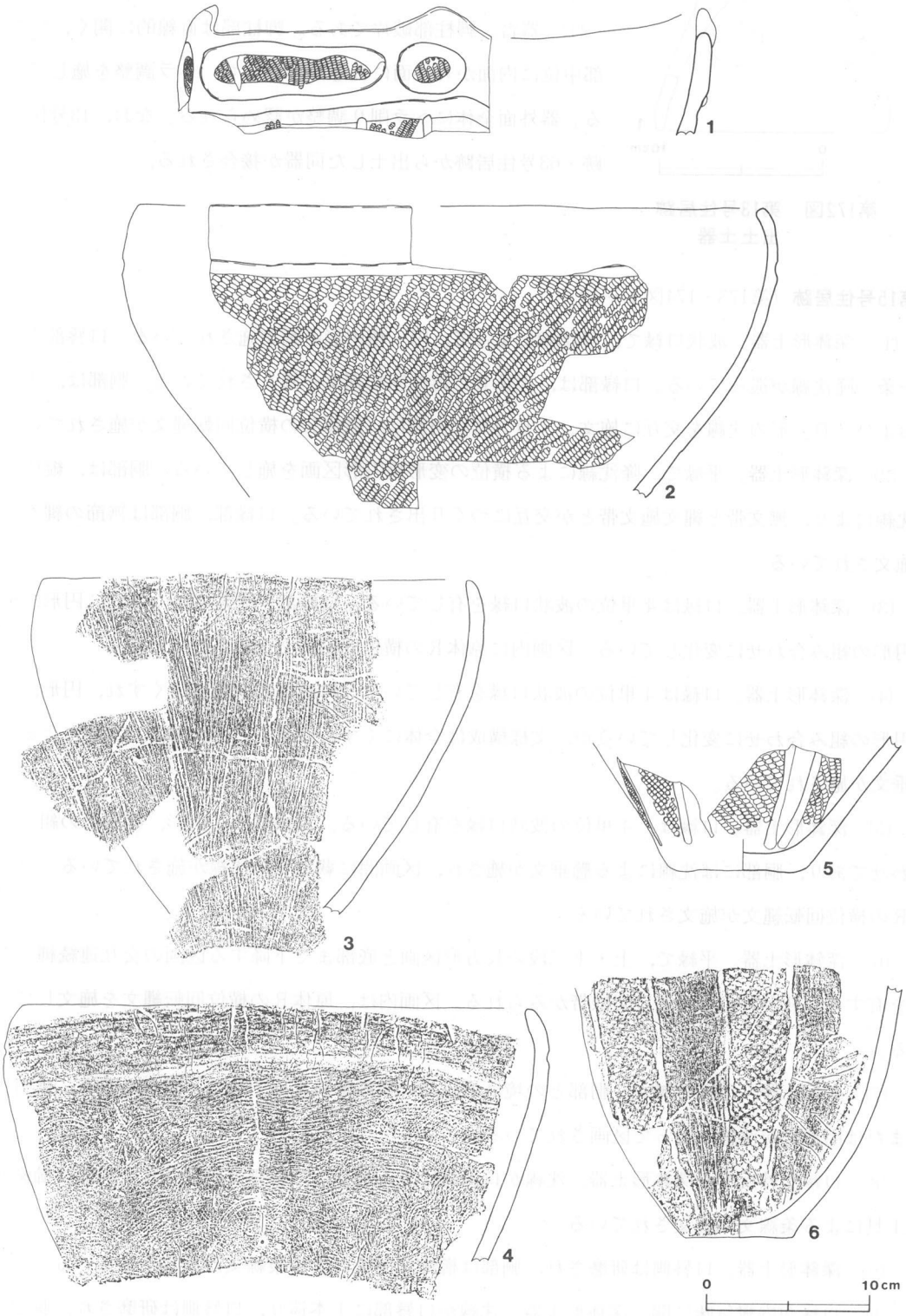
(3)　口縁が内彎気味に開く深鉢形土器。口唇部から胴部には櫛歯状工具を施文具として縦に条線文が施されている。

(4)　口縁は内彎気味に開く深鉢形土器。沈線が口縁部に１本巡り，口唇側は研磨され，胴部には櫛歯状工具を施文具として横に条線文が施されている。

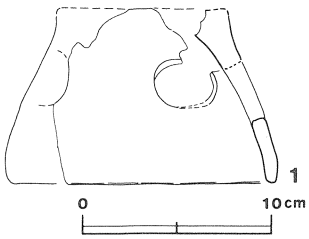
(5)・(6)　底部破片。沈線による懸垂文が施され，その間は磨り消されている。



第170図　第８号住居跡出土土器



第171図　第９号住居跡出土土器



第172図　第13号住居跡
出土土器

第13号住居跡（第172図１）

(1)　器台。脚柱部破片である。脚柱部は直線的に開く，脚柱部中位に内面から外面に孔を穿ったのち，ヘラ調整を施している。器外面全体にヘラ削り調整が認められる。なお，13号住居跡・63号住居跡から出土した同器が接合される。

第15号住居跡（第173・174図１～12）

(1)　深鉢形土器。波状口縁で，隆沈線によって，円・楕円形区画が施されている。口唇部下に，一条の隆沈線が巡っている。口縁部は，原体Ｒの縦位回転縄文が施文されている。胴部は，沈線および「∩」形の沈線を交互に施文。「∩」形の内側は，原体Ｒの横位回転縄文が施されている。

(2)　深鉢形土器。平縁で，隆沈線による横位の変形楕円形区画を施している。胴部は，縦位の沈線により，無文帯と縄文施文帯とが交互につくり出されている。口縁部，胴部は無節の縄文が施文されている。

(3)　深鉢形土器。口縁は４単位の波状口縁を有している。口縁部の渦巻文はくずれ，円形，楕円形の組み合わせに変化している。区画内に原体Ｒの横位回転縄文が施されている。

(4)　深鉢形土器。口縁は４単位の波状口縁を有している。口縁部の渦巻文はくずれ，円形，楕円形の組み合わせに変化しているが，文様構成は全体にくずれが激しい。胴部は，沈線による懸垂文が施されている。

(5)　深鉢形土器。口縁は，４単位の波状口縁を有している。口縁部は，円形，楕円形の組み合わせであり，胴部には沈線による懸垂文が施され，区画間に蕨手状の沈線が施されている。原体Ｒの横位回転縄文が施文されている。

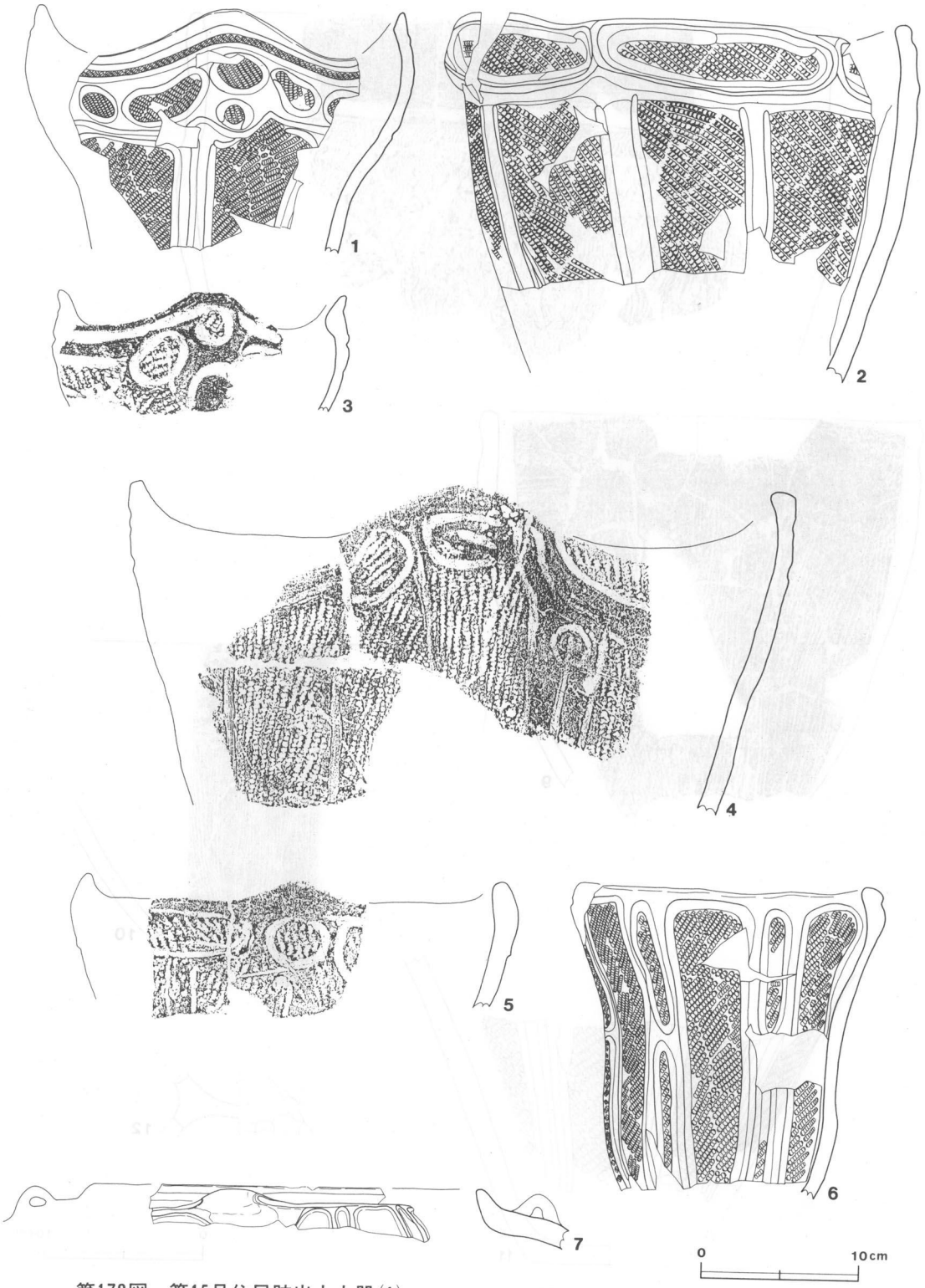
(6)　深鉢形土器。平縁で，上・下二段の長方形区画と底部まで下降する区画の交互連続縄文帯を有する。Ｈ字状の磨り消し文様帯がみられる。区画内は，原体Ｒの横位回転縄文を施文している。

(7)　壺形土器。平縁で無文。胴部との境に吊紐穴（装飾帯）をめぐらせ，胴部は張り，楕円，または円形文が沈線によって区画されている。

(8)　口縁が外反する深鉢形土器。沈線が口唇部に１本巡り，口唇側は研磨され，胴部は櫛歯状工具による条線文が施文されている。

(9)　深鉢形土器。口唇側は研磨され，胴部は櫛歯状工具による条線文が施文されている。

(10)　口縁が内彎気味に開く深鉢形土器。沈線が口唇部に１本巡り，口唇側は研磨され，胴部は櫛歯状工具による条線文が底部近くまで施文されている。



第173図　第15号住居跡出土土器(1)

第174図　第15号住居跡出土土器(2)

⑾　底部破片である。３条の磨り消しによる懸垂文がある。地文は，原体Ｒの縦位回転縄文である。

⑿　台付鉢の台部である。脚柱部に孔がある。

第16号住居跡（第175図１～６）

(1)　深鉢形土器。埋設土器。平縁で，隆沈線で渦巻文，横位楕円文が施されているが，ややくずれている。区画内は原体Ｒの縦位回転縄文が，胴部は，Ｒの横位回転縄文が施文され，２本の沈線が垂下し，無文帯と縄文施文とを交互につくり出し，区画間は磨り消している。（Ｍ－２）

(2)　鉢形土器。平縁で，口唇部は直立し，口唇側は研磨されている。口縁部は隆帯によって区画がなされ，区画と区画の間は，変化した渦巻文が施されている。区画内は，原体Ｒの縦位回転縄文，胴部には原体Ｒの横位回転縄文が施文されている。

(3)　深鉢形土器。平縁で口縁部から胴部にかけて沈線による縦位の波状磨り消し縄文，楕円区画が施され，区画内には原体Ｒの横位回転縄文が施文されている。

(4)　キャリパー形を呈する深鉢形土器。縄文地文上に沈線区画，あるいは蛇行する沈線を施している。

(5)　胴部破片。沈線による縦の懸垂文が施され，地文は原体Ｌの縦位回転縄文である。

(6)　鉢形土器。胴部から縦位の沈線による区画がなされ，無文帯とが交互に施文されている。

第17号住居跡（第176図１～３）

(1)　深鉢形土器。平縁で口唇部に沈線が巡る。胴部はくびれ，原体Ｒの横位回転縄文を施文後沈線で「∩」形の区画をしている。

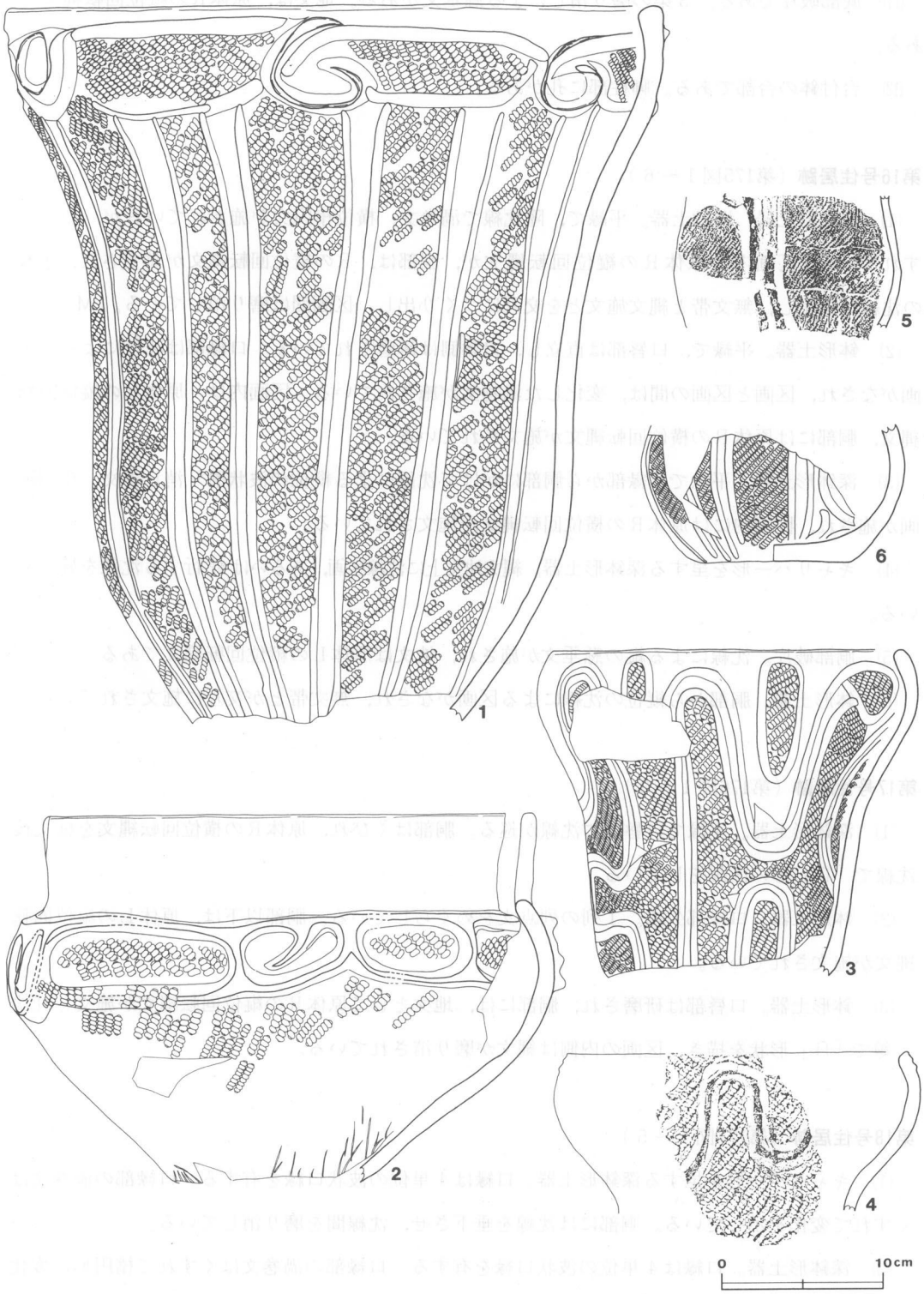
(2)　鉢形土器。口縁部欠損。１列の列点文をめぐらしている。胴部以下は，原体Ｌの縦位回転縄文が施文されている。

(3)　鉢形土器。口唇部は研磨され，胴部には，地文として原体Ｒの縦位回転縄文が施文され沈線で「∩」形状を描き，区画の内側は縄文が磨り消されている。

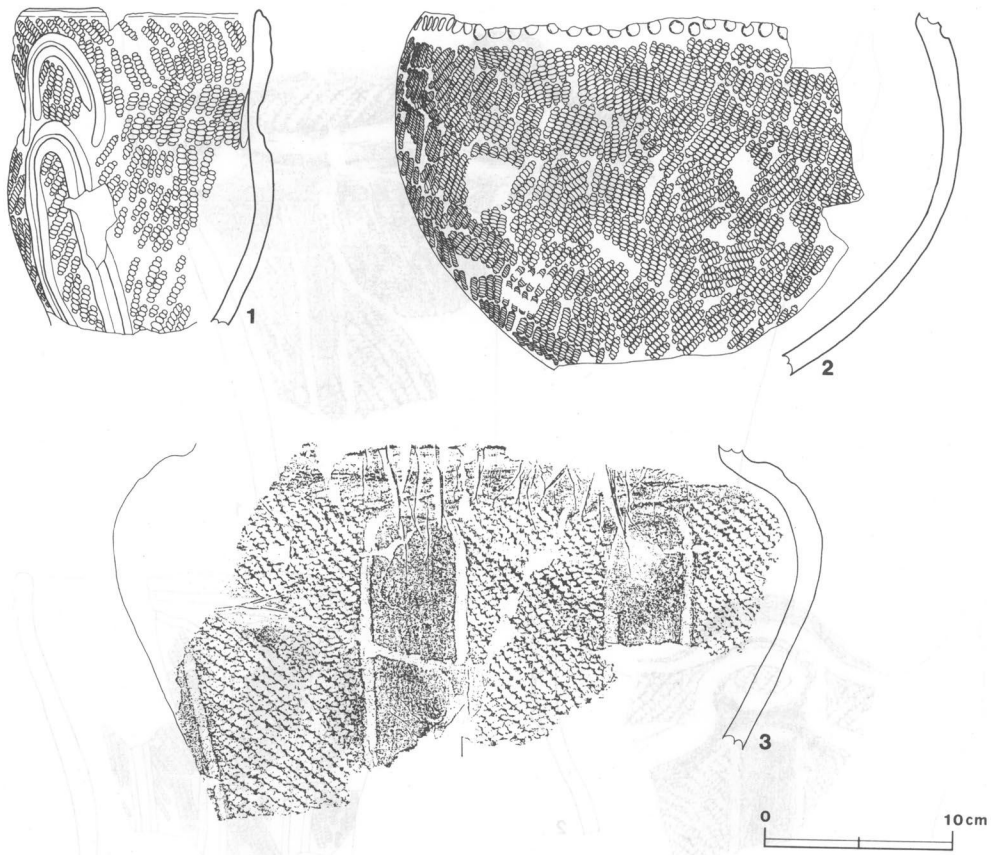
第18号住居跡（第177図１～５）

(1)　キャリパー形を呈する深鉢形土器。口縁は４単位の波状口縁を有する。口縁部の渦巻文はくずれて変化を示している。胴部には沈線を垂下させ，沈線間を磨り消している。

(2)　深鉢形土器。口縁は４単位の波状口縁を有する。口縁部の渦巻文はくずれて楕円形に変化している。胴部には原体Ｒの横位回転縄文を施文後，沈線による「∩」形区画を施し，区画内を磨り消している。



第175図　第16号住居跡出土土器



第176図　第17号住居跡出土土器

(3)　深鉢形土器。沈線が口唇部に１本巡っている。胴部に沈線による「∩」形区画を施し，区画内を複節の縄文で充填している。

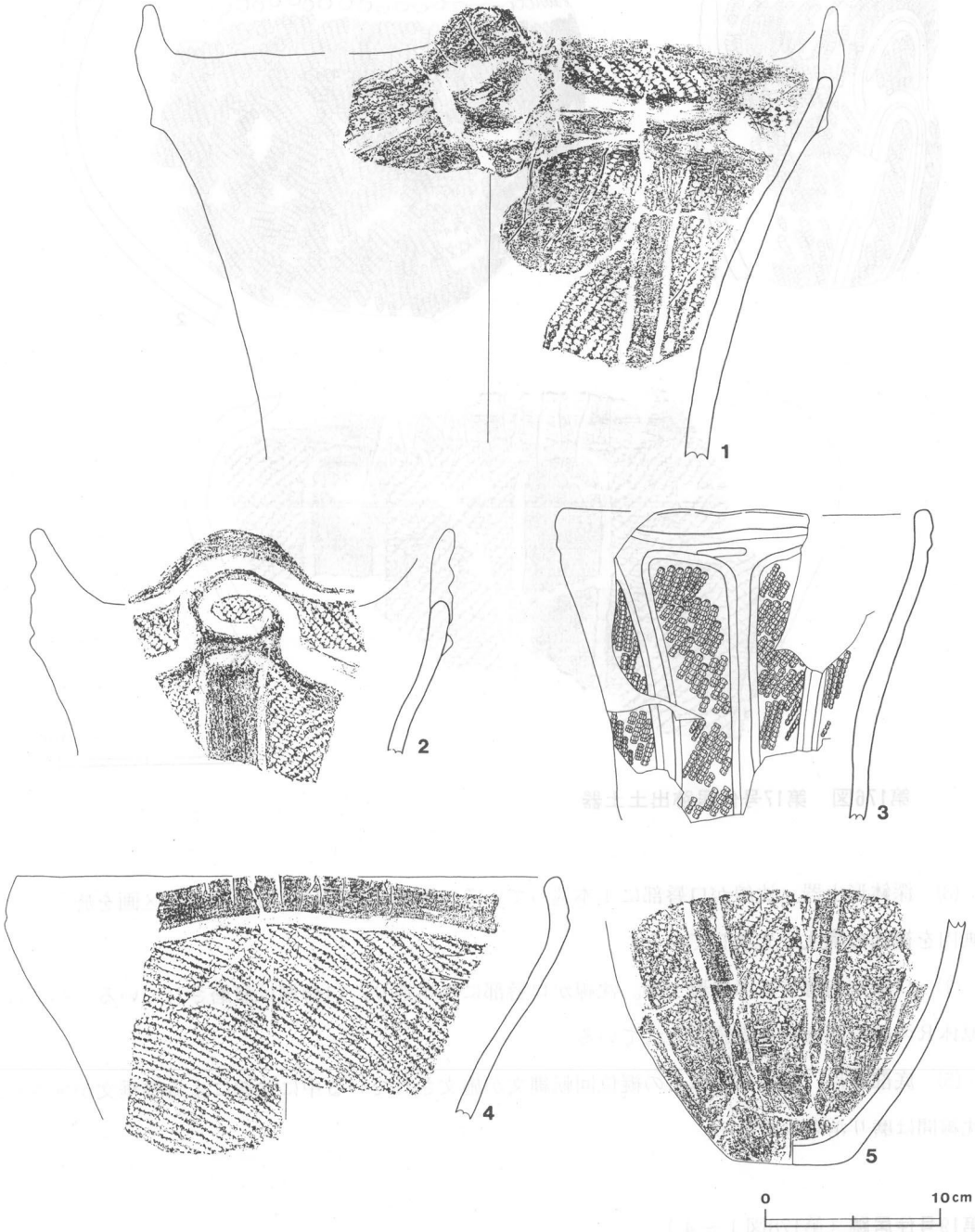
(4)　口縁が内彎する深鉢形土器。沈線が口唇部に１本巡り，口唇側は研磨されている。胴部は原体Ｒの縦位回転縄文が施文されている。

(5)　底部破片。地文に原体Ｌの縦位回転縄文が施文されている中に沈線による懸垂文が施され，沈線間は磨り消されている。

第19号住居跡（第178図１～４）

(1)　キャリパー形を呈する深鉢形土器。口縁部には，２列に連続刺突文が施されている。胴部は沈線による「∩」形の区画がなされ，区画間に無文帯をもつ。区画内は，原体Ｒの横位回転縄文が施されている。

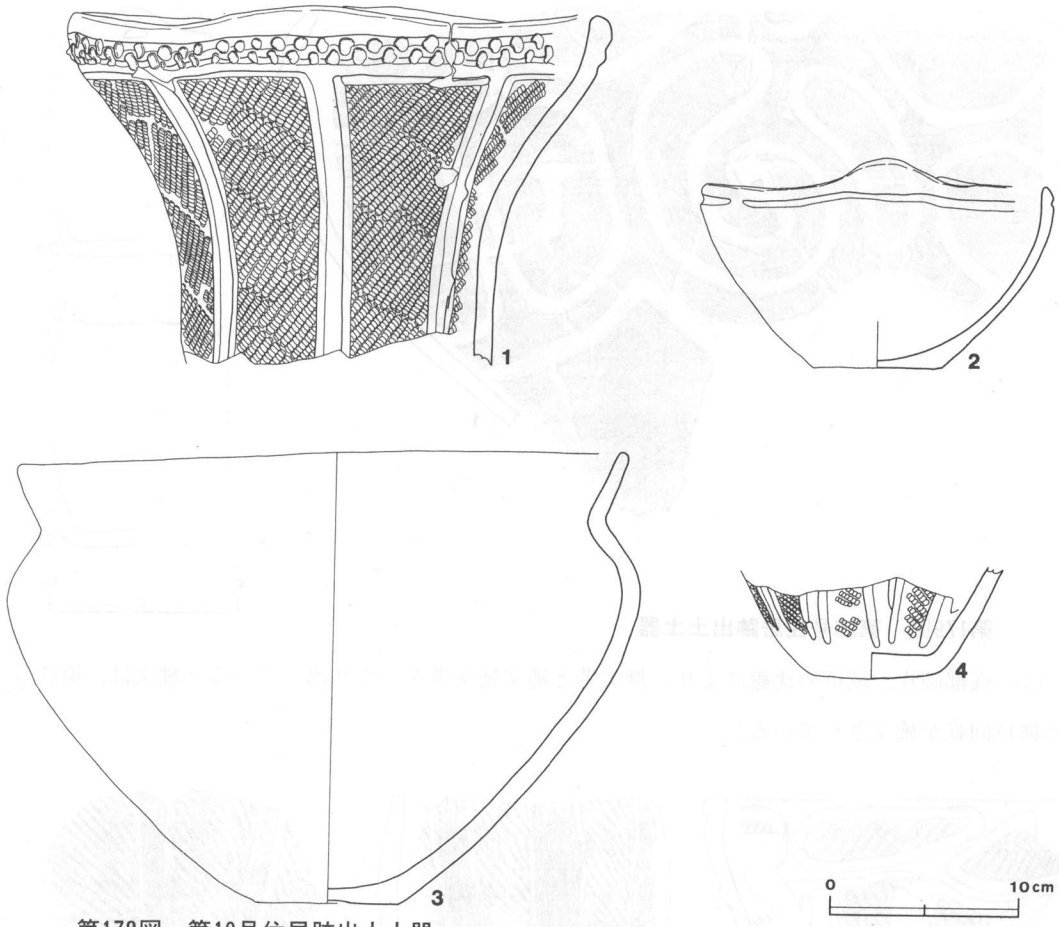
(2)　浅鉢形土器。口縁は２単位の波状口縁を有する。口縁下に１条の沈線が施されている。胴部は，ヘラ削り調整がみられる。



第177図　第18号住居跡出土土器

(3)　浅鉢形土器。口縁は，外反して立ち上がる。胴部は無文である。

(4)　底部破片。2条の沈線により懸垂文がつくられている。



第178図　第19号住居跡出土土器

第20号住居跡（第179図１・２）

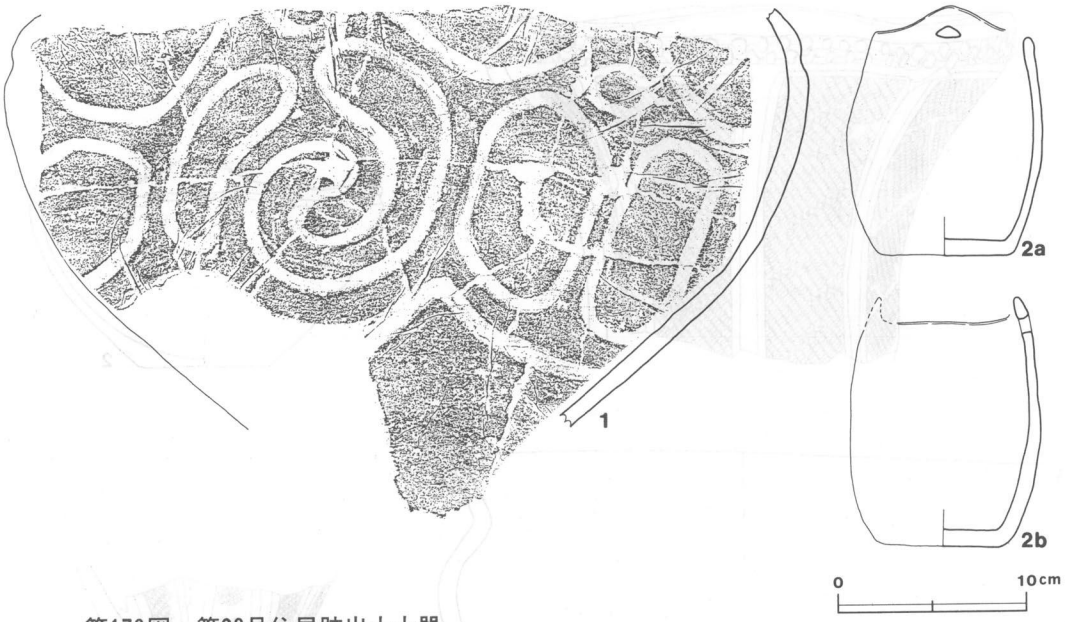
(1)　鉢形土器。器面は研磨され，胴部には，沈線による円形，楕円形文，波状沈線が施文されている。

(2)　壺形土器（蛸壺形土器）。口縁部は，若干内彎し，一対の釣手状把手を有する。内面に朱の付着が認められる。器壁面には，削り整形が施されている。

第27号住居跡（第180図１～３）

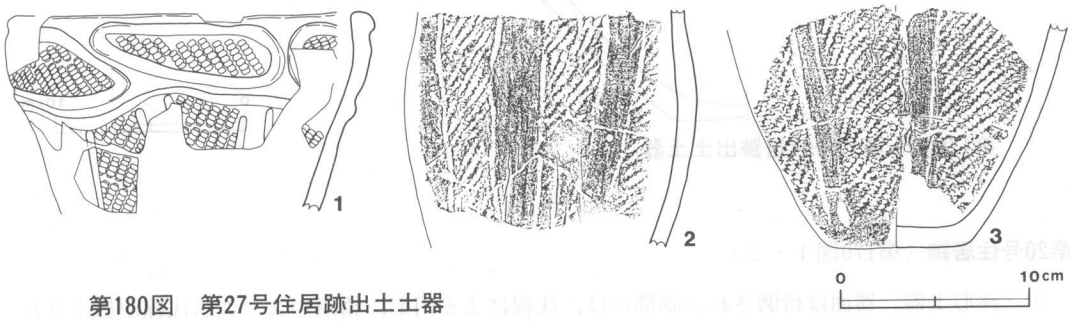
(1)　深鉢形土器。胴部欠損。口縁部は，沈線により楕円形区画がなされている。口縁部の区画内は原体Ｒによる横位回転縄文。胴部は縦位の沈線により，無文帯と縄文施文帯をつくり出している。

(2)　胴部破片。縦位の沈線により，無文帯と縄文施文帯をつくり出している。縄文は，原体Ｒの横位，斜位の回転もみられる。



第179図　第20号住居跡出土土器

(3)　底部破片。縦位の沈線により，無文帯と縄文施文帯をつくり出している。縄文は，原体Rの横位回転が施文されている。

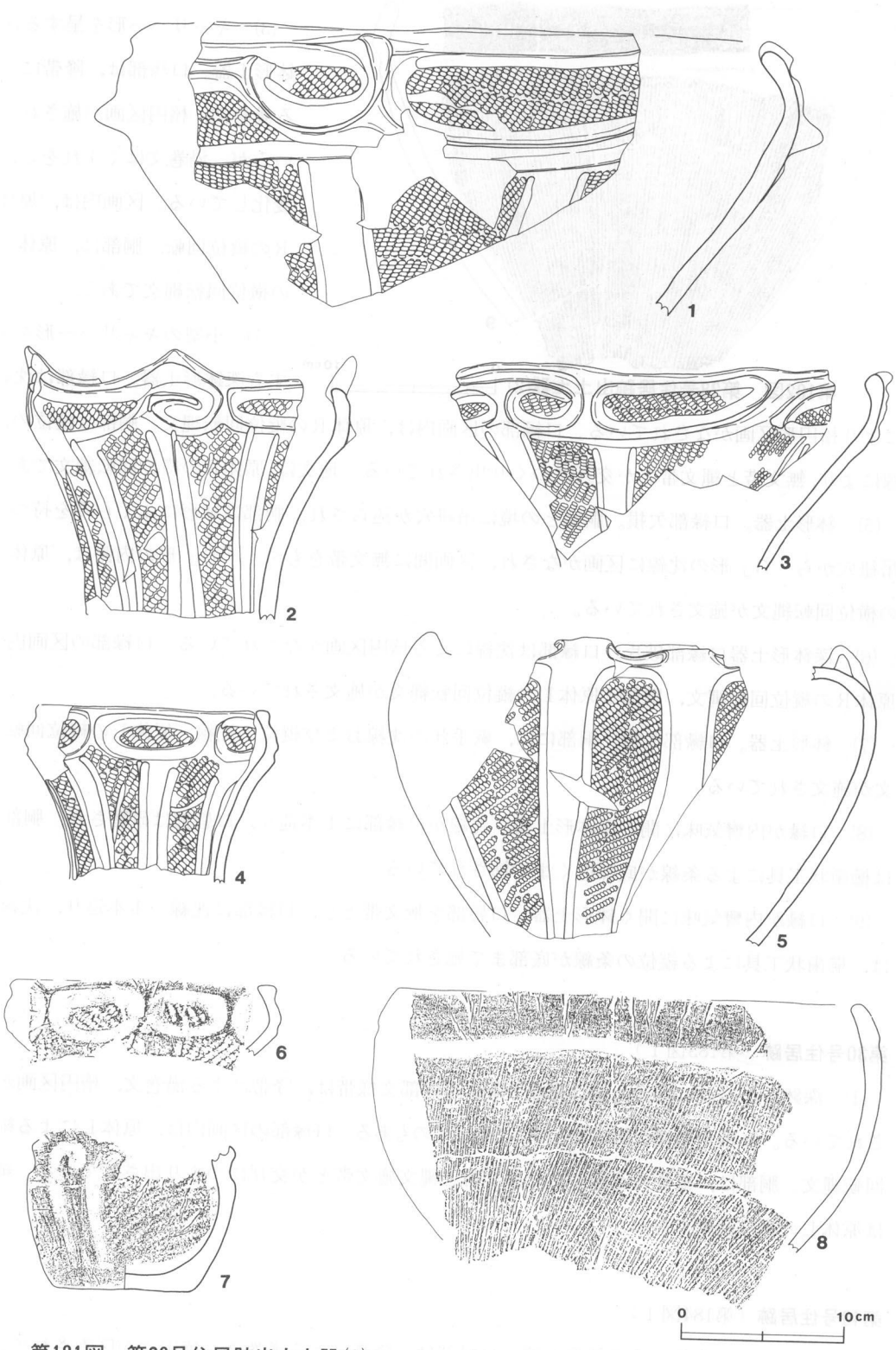


第180図　第27号住居跡出土土器

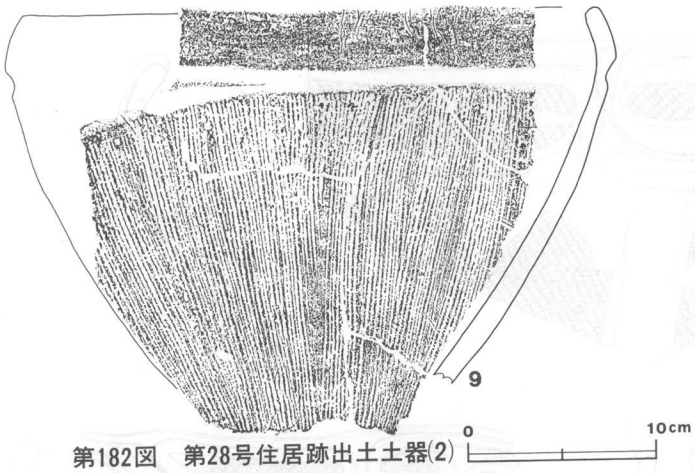
第28号住居跡（第181・182図1～8）

(1)　キャリパー形を呈する深鉢形土器。口縁部は，隆帯による渦巻文，楕円区画が施されているが，渦巻文はくずれて変化を示している。縄文施文は，区画内は原体Rの縦位回転縄文，胴部はRの横位回転縄文が施文され，縦位の沈線により，無文帯と縄文施文帯とが交互につくり出されている。

(2)　キャリパー形を呈する深鉢形土器。口縁部は4単位の波状口縁を有する。隆沈線による渦巻文，楕円区画が施されている。区画内に斜縄文が押圧され，胴部は縦位の沈線による懸垂文がつくられている。



第181図　第28号住居跡出土土器(1)



第182図　第28号住居跡出土土器(2)

(3)　キャリパー形を呈する深鉢形土器。口縁部は，隆帯による渦巻文，楕円区画が施されているが，渦巻文はくずれを示し変化している。区画内は，原体Rの縦位回転，胴部は，原体Rの横位回転縄文である。

(4)　小型のキャリパー形を呈する深鉢形土器。口縁部は沈線により楕円形区画がなされている。口縁部の区画内は，原体Rの縦位回転縄文。胴部は縦位の沈線により，無文帯と縄文帯とが交互につくり出されている。地文は，原体Rの横位回転縄文である。

(5)　鉢形土器。口縁部欠損。胴部との境に吊紐穴が巡らされ，胴部は球形にふくらみを持つ。吊紐穴から「∩」形の沈線に区画がなされ，区画間に無文帯をもつ。「∩」形の内側は，原体Rの横位回転縄文が施文されている。

(6)　深鉢形土器口縁部破片。口縁部は沈線による楕円区画がなされている。口縁部の区画内は原体Rの縦位回転縄文，胴部は原体Lの縦位回転縄文が施文されている。

(7)　鉢形土器。口縁部欠損。胴部には，蕨手状の沈線および縦位の沈線，原体Lの縦位回転縄文が施文されている。

(8)　口縁が内彎気味に開く深鉢形土器。沈線が口縁部に1本巡り，口唇部は研磨され，胴部には櫛歯状工具による条線が底部近くまで施されている。

(9)　口縁が内彎気味に開く鉢形土器。口唇部を無文帯とし，口縁部に沈線が1本巡り，沈線下は，櫛歯状工具による縦位の条線が底部まで施されている。

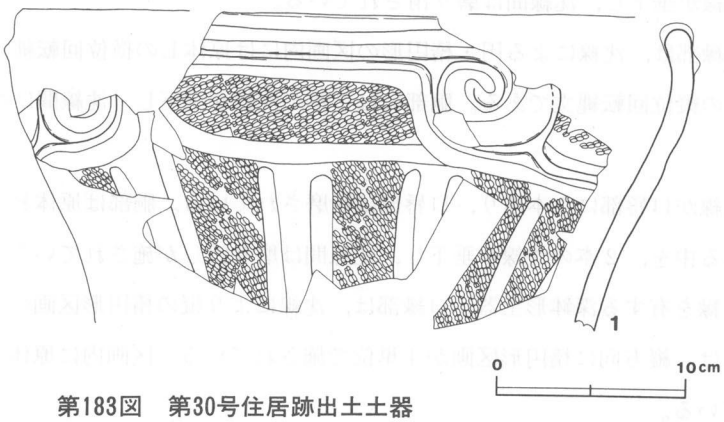
第30号住居跡（第183図1）

(1)　深鉢形土器。口縁部上端に沈線1条。口縁部文様帯は，隆帯による渦巻文，楕円区画がなされている。隆帯の先端が渦巻文となっているものもある。口縁部の区画内は，原体Lによる縦位回転縄文。胴部は，縦位の沈線により無文帯と縄文施文帯とが交互につくり出されている。縄文は原体Lの横位回転である。

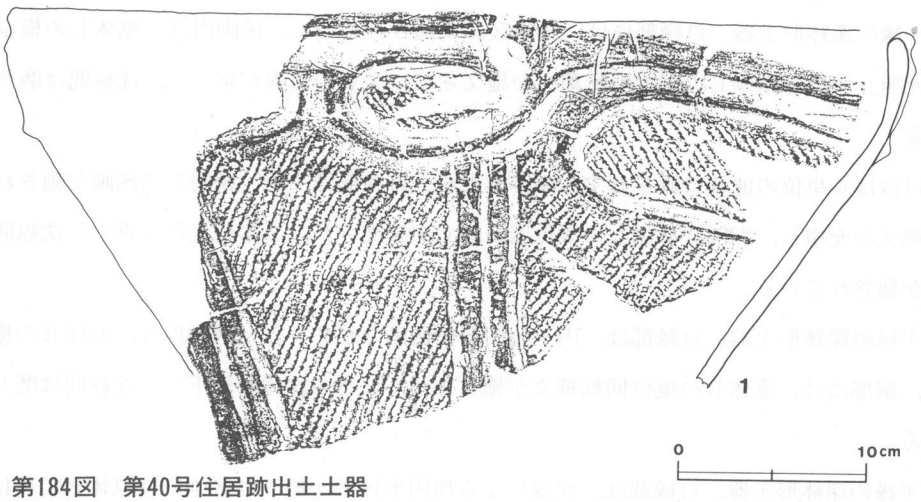
第40号住居跡（第184図1）

(1)　口縁がやや内彎する深鉢形土器。口縁部は，隆帯による渦巻文，楕円文が区画されているが，くずれて変化を示している。区画内は原体Rの縦位回転縄文が，胴部には原体Rの横位回転

縄文が施文され，３本の沈線を垂下させ沈線間を磨り消している。



第183図　第30号住居跡出土土器



第184図　第40号住居跡出土土器

第42号住居跡（第185・186・187・188図１～26）

(1) キャリパー形を呈する深鉢形土器。口縁部は，渦巻文，楕円文の区画が施されている。区画内は原体Ｒの縦位回転縄文。胴部には，２本の沈線が垂下し，沈線間は磨り消されている。地文は，原体Ｒの横位回転縄文である。

(2) 口縁は４単位の波状口縁を有する深鉢形土器。口縁部の渦巻文はくずれて変化している。胴部には，原体Ｌの縦位回転縄文を施文後「∩」形の沈線で区画し，区画内を磨り消している。

(3) 口縁は４単位の波状口縁を有し，口縁部は，円・楕円形の区画を施こし，区画内は原体Ｒの縦位回転縄文が施文されている。胴部には，原体Ｒの横位回転縄文が施文され，３本の沈線が垂下し，沈線間は磨り消されている。

(4) 口縁は４単位の波状口縁を有する深鉢形土器。口縁部は，円・楕円形の区画を施し，地文は無節の縄文が施され，胴部には，２本の沈線が垂下し，沈線間は磨り消されている。

(5) 平縁の深鉢形土器。口縁部は，隆帯による円・楕円形の区画を施す。地文は複節の縄文が

施文され，胴部には２本の沈線が垂下し，沈線間は磨り消されている。

(6)　平縁の深鉢形土器。口縁部は，沈線による円・楕円形の区画内には原体Ｌの横位回転縄文が施文され，地文は，原体Ｌの縦位回転縄文である。胴部には２本の沈線が垂下し，沈線間は磨り消しが施されている。

(7)　平縁の深鉢形土器。沈線が口唇部に１本巡り，口唇部は研磨されている。胴部は原体Ｒの縦位回転縄文が施文されている中を，２本の沈線が垂下し，沈線間は磨り消しが施されている。

(8)　口縁は８単位の波状口縁を有する深鉢形土器。口縁部は，沈線により縦の楕円形区画の間に，蕨手状の沈線が，胴部には，縦方向に楕円形区画が４単位で施されている。区画内に原体Ｒの横位回転縄文が充塡されている。

(9)　平縁の深鉢形土器。口縁部には，楕円区画が施されている。区画内は，原体Ｌの横位回転縄文が充塡。胴部は原体Ｌの縦位回転縄文が施文され，２本の沈線が垂下し，沈線間は磨り消されている。

(10)　口縁は４単位の波状口縁を有する深鉢形土器。口縁部は，円・楕円形の区画が施され，区画内は縄文が充塡し，胴部は原体Ｌの縦位回転縄文が施文され，２本の沈線が垂下し沈線間は磨り消しが施されている。

(11)　平縁の深鉢形土器。口縁部は，円・楕円形が区画されている。区画内は，原体Ｒの横位回転縄文，胴部には，原体Ｒの縦位回転縄文が施文され，２本の沈線が垂下し，沈線間は磨り消されている。

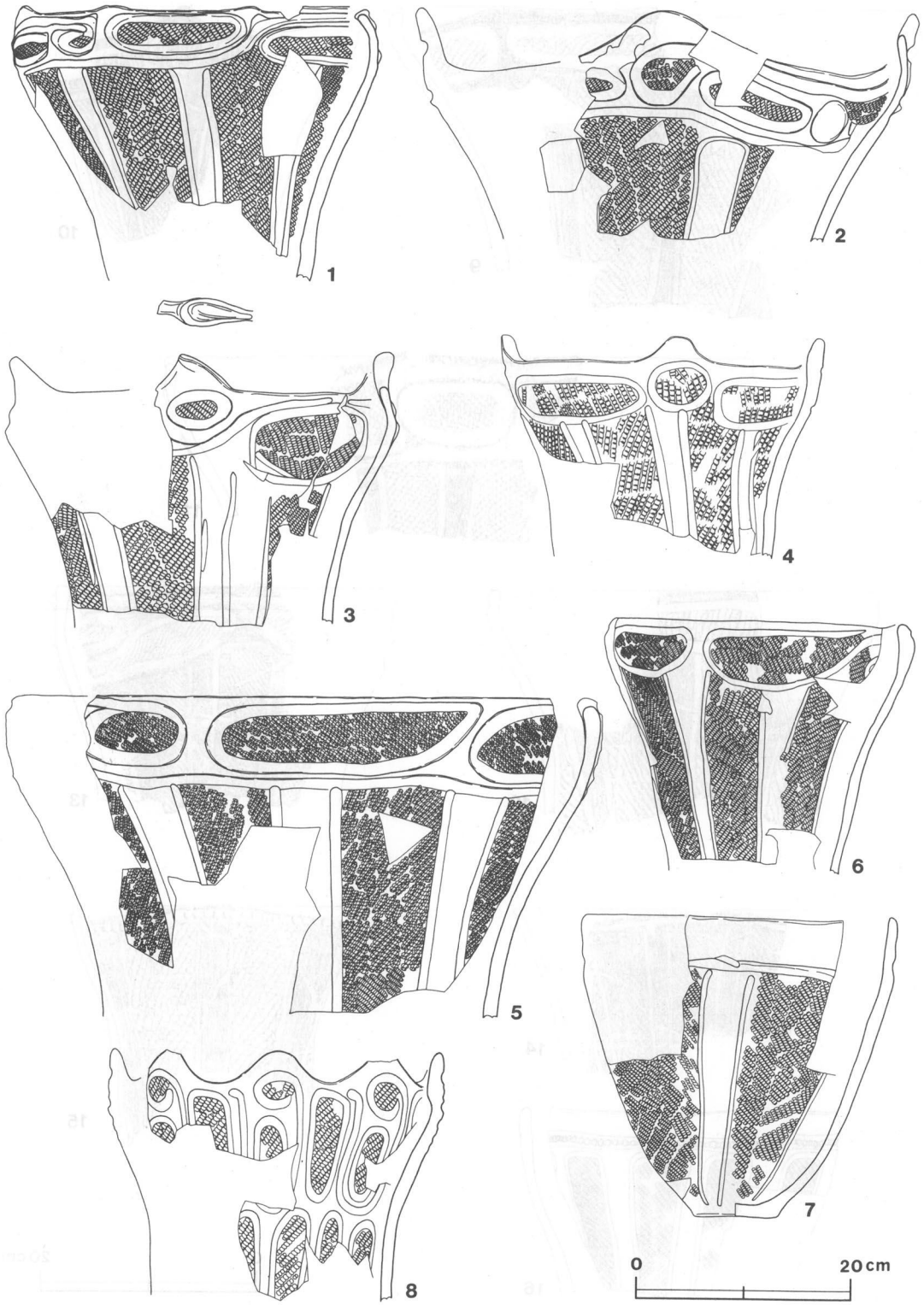
(12)　平縁の深鉢形土器。口縁部は，沈線による楕円形区画が施され区画内は原体Ｒの縦位回転縄文，胴部は原体Ｒの横位回転縄文が施文され，２本の沈線が垂下し，沈線間は磨り消されている。

(13)　平縁の深鉢形土器。口縁部は，隆帯による楕円形区画が施されているが，くずれて変化を示している。胴部には２本の沈線が垂下し，沈線間は磨り消しが施されている。

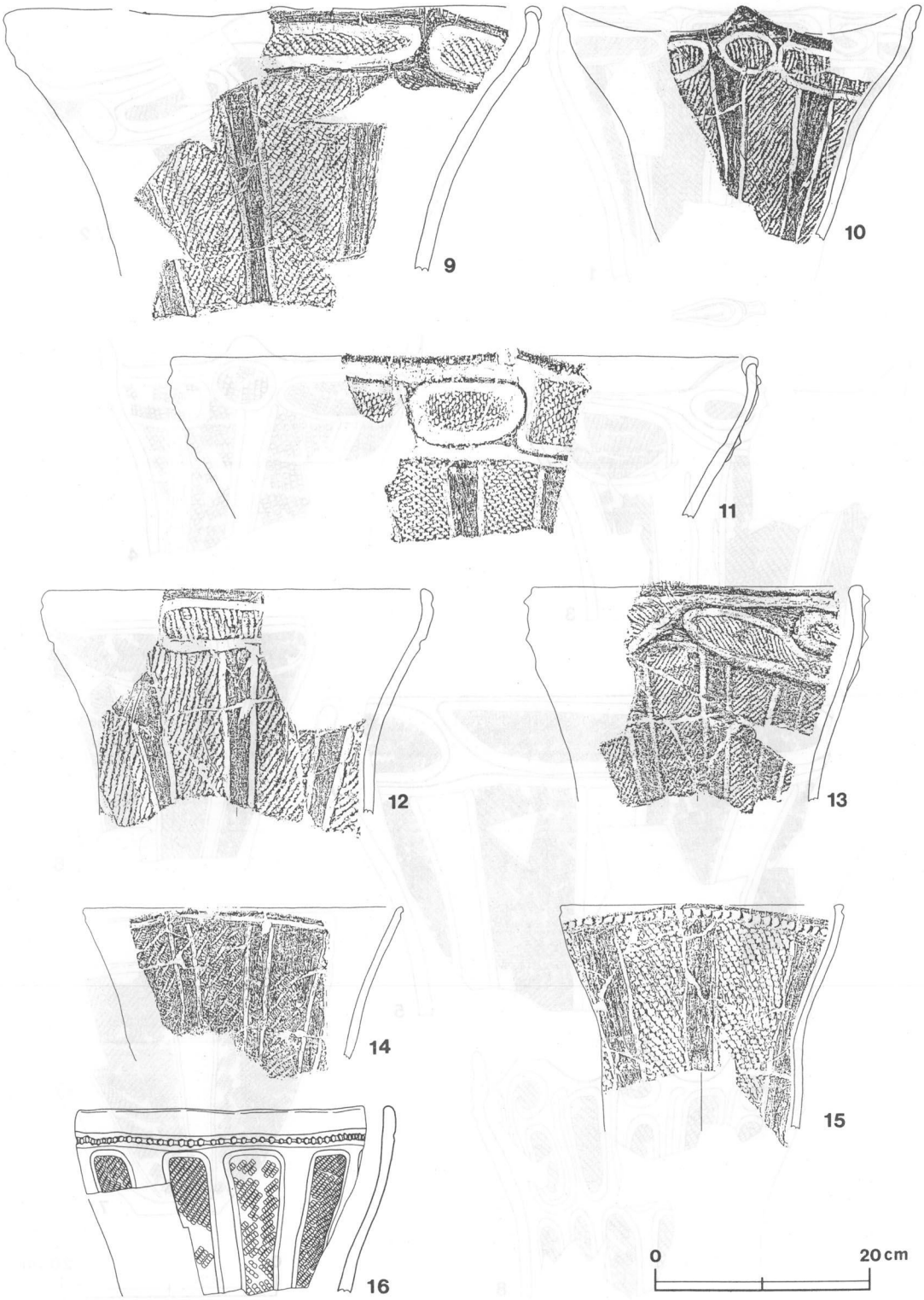
(14)　平縁の深鉢形土器。口唇部は外反し，沈線が口唇部に１本巡り，研磨されている。胴部に原体Ｒの横位回転縄文が施文されている中を２本の沈線が垂下し，沈線間は磨り消しが施されている。

(15)　平縁の深鉢形土器。口唇部は内彎し，沈線が口唇部に１本巡り，沈線内に円形の列点文が巡らされ，列点文下に２本の沈線が垂下する。地文は，原体Ｒの縦位回転縄文が施文され，沈線間は磨り消しが施されている。

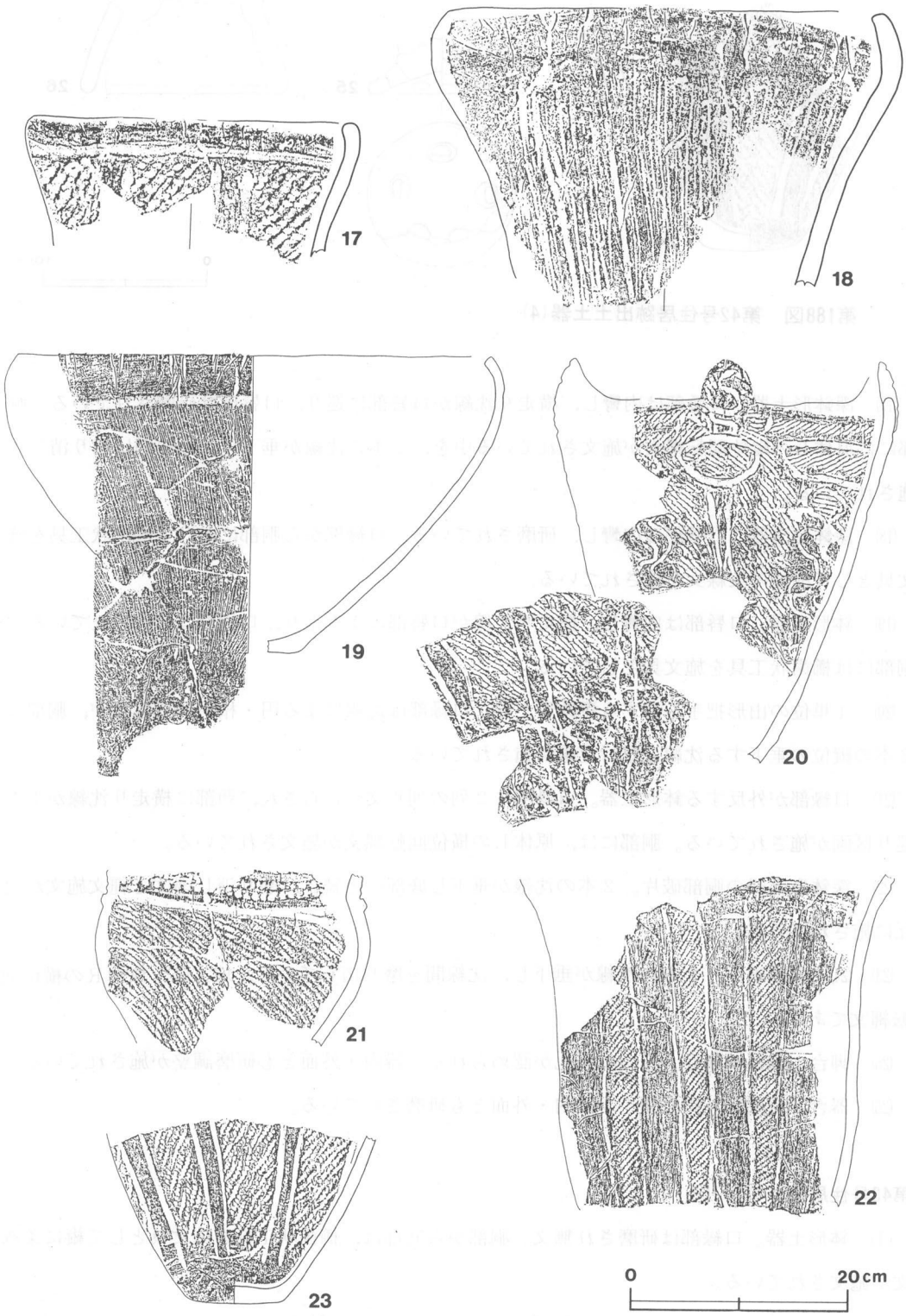
(16)　深鉢形土器。沈線が口唇部に１本巡り，口唇部は研磨されている。沈線内に円形の列点文が巡らされている。口縁下から胴部には，「∩」形の沈線による区画がなされ，区画間に無文帯をもつ。「∩」形の内側は，原体Ｒの横位回転縄文が施文されている。



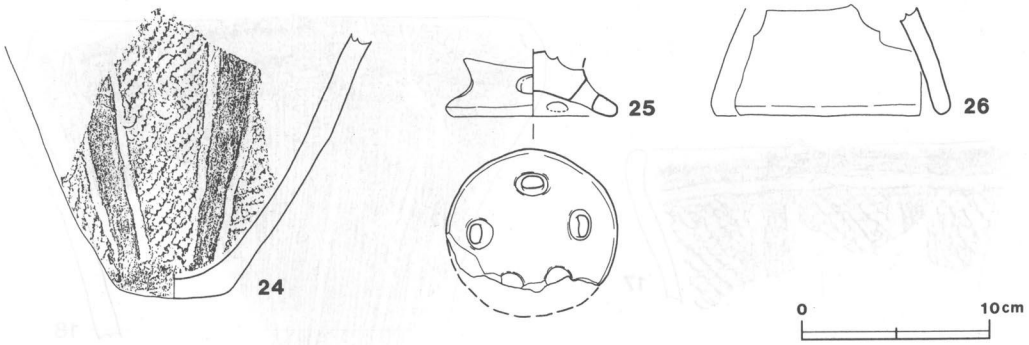
第185図　第42号住居跡出土土器(1)



第186図　第42号住居跡出土土器(2)



第187図　第42号住居跡出土土器(3)　17・18－S＝1/3



第188図　第42号住居跡出土土器(4)

(17)　深鉢形土器。口唇部は内彎し，横走り沈線が口唇部に巡り，口唇部は研磨されている。胴部には原体Ｌの縦位回転縄文が施文されている中を，２本の沈線が垂下し，沈線間は磨り消しが施されている。

(18)　深鉢形土器。口唇部は内彎し，研磨されている。口縁部から胴部にかけて櫛歯状工具を施文具として縦位の条線文が施されている。

(19)　鉢形土器。口唇部は内彎し，横走り沈線が口唇部に１本巡り，口唇部は研磨されている。胴部には櫛歯状工具を施文具としている。

(20)　４単位の山形把手を有する深鉢形土器。口縁部は沈線による円・楕円形区画文が，胴部に２本の縦位の垂下する沈線と蛇行沈線が施されている。

(21)　口縁部が外反する鉢形土器。口縁部に２列の列点文が巡らされ，頸部に横走り沈線が１本巡り区画が施されている。胴部には，原体Ｌの横位回転縄文が施文されている。

(22)　深鉢形土器の胴部破片。２本の沈線が垂下し底部へと続き，磨り消し縄文と縄文施文が交互に施されている。

(23)・(24)　底部破片。２本の沈線が垂下し，沈線間を磨り消している。地文は，原体Ｒの横位回転縄文である。

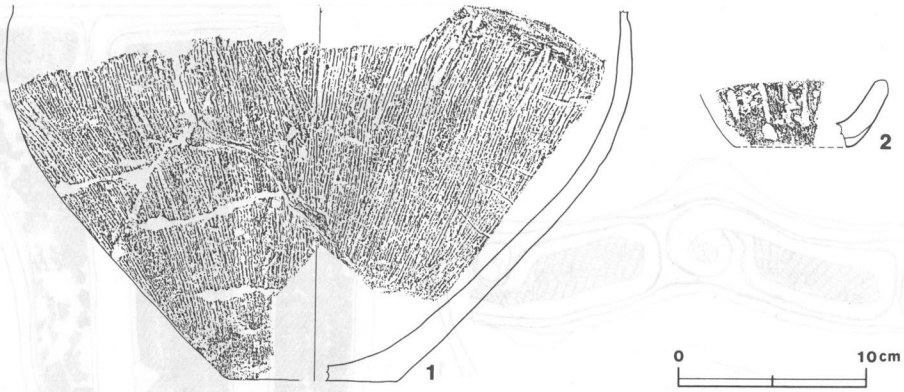
(25)　脚台。脚部の残存。５つの穿孔が認められる。器内・外面とも研磨調整が施されている。

(26)　器台。台部は外側に開く。器内・外面とも研磨されている。

第43号住居跡（第189図１・２）

(1)　鉢形土器。口縁部は研磨され無文。胴部から底部は，櫛歯状工具を施文具として縦に条線文が施文されている。

(2)　２本の沈線，原体Ｌの縦位回転縄文である。(底部片再利用)

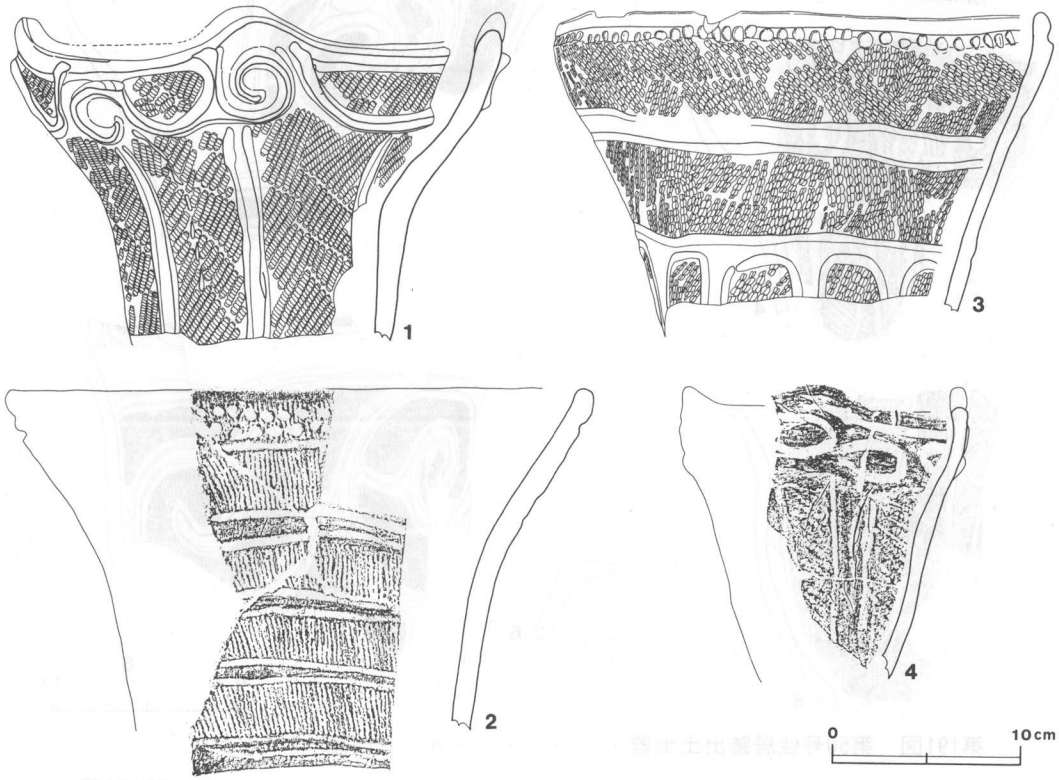


第189図　第43号住居跡出土土器

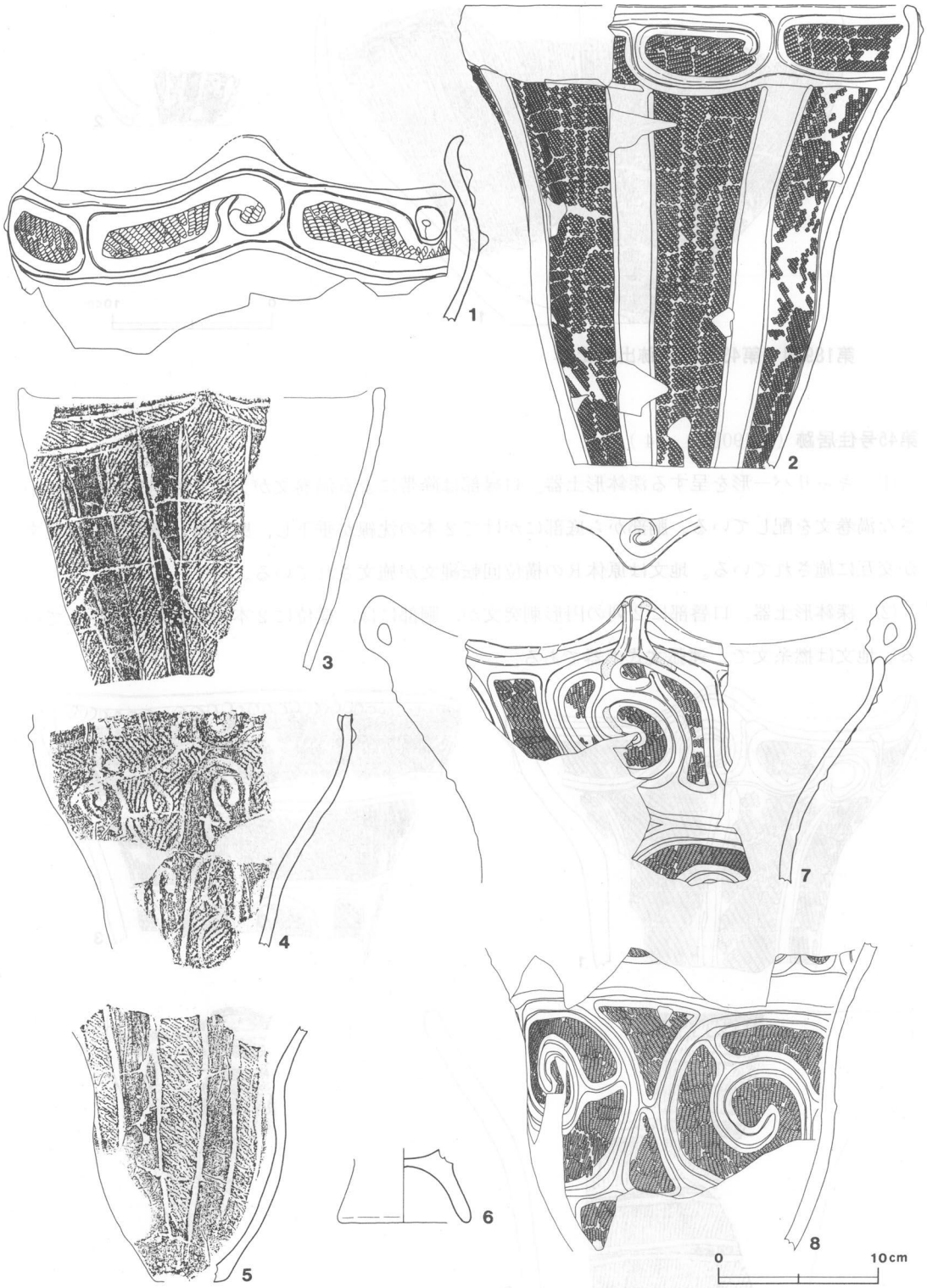
第45号住居跡（第190図１～４）

(1)　キャリパー形を呈する深鉢形土器。口縁部は隆帯による渦巻文が大きく展開し，中間に小さな渦巻文を配している。胴部から底部にかけて２本の沈線が垂下し，磨り消し縄文と縄文施文が交互に施されている。地文は原体Ｒの横位回転縄文が施文されている。

(2)　深鉢形土器。口唇部に２列の円形刺突文が，胴部には，横位に２本の沈線が施文されている。地文は撚糸文で，連弧文式土器である。



第190図　第45号住居跡出土土器



第191図　第50号住居跡出土土器　2・3・7・8－S＝⅛

(3)　平縁の深鉢形土器。口唇部に円形刺突文が施され，頸部には横位に２本の沈線が，胴部には，「∩」形の沈線を交互に施し，地文は，Ｒの縦位回転縄文が施文され，沈線区画間は磨り消しが施されている。

(4)　口縁は４単位の波状口縁を有する深鉢形土器。口縁部は隆帯による楕円形文が区画され，胴部には縄文が施文され，２本の沈線が垂下し，沈線間を磨り消している。

第50号住居跡（第191図１～８）

(1)　口縁は４単位の波状口縁を有する深鉢形土器。口縁部は隆帯による横位の渦巻文，楕円文が区画されている。区画内は，原体Ｒの縦位回転縄文が充填されている。

(2)　平縁の深鉢形土器。口縁部は隆帯による横位楕円文が区画されている。区画内は，原体Ｒの横位回転縄文が充填されている。地文は，原体Ｒの縦位回転の複節縄文が施文されている。

(3)　口縁は，４単位の波状口縁を有する深鉢形土器。

口縁部は，隆沈線による横位の変形楕円文を施し，区画内は，原体Ｒの縦位回転縄文が充填している。胴部は，２本の沈線が垂下し，沈線間を磨り消している。地文は，Ｒの横位回転縄文が施文されている。

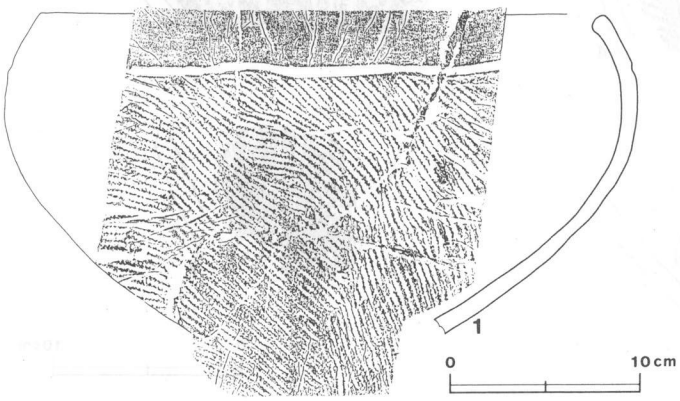
(4)　深鉢形土器。胴部文様は，沈線による蕨手文，Ｓ字文が区画され，縄文が施文されている。

(5)　キャリパー形を呈する深鉢形土器。胴部から底部破片。２本の沈線が垂下し，磨り消し縄文の施文が交互に施されている。地文は，複節縄文が施文されている。

(6)　台付鉢の台部である。

(7)　口縁は４単位の山形・橋状把手を有する深鉢形土器。口縁下には，隆帯による変形渦巻文を施している。地文は，原体Ｒの縦位回転縄文が施文されている。

(8)　深鉢形土器の胴部破片。胴上部には横位の無文帯を付け，胴下には，沈線区画により変形渦巻文を施している。地文は，原体Ｒの縦位回転縄文である。



第192図　第52号住居跡出土土器

第52号住居跡（第192図１）

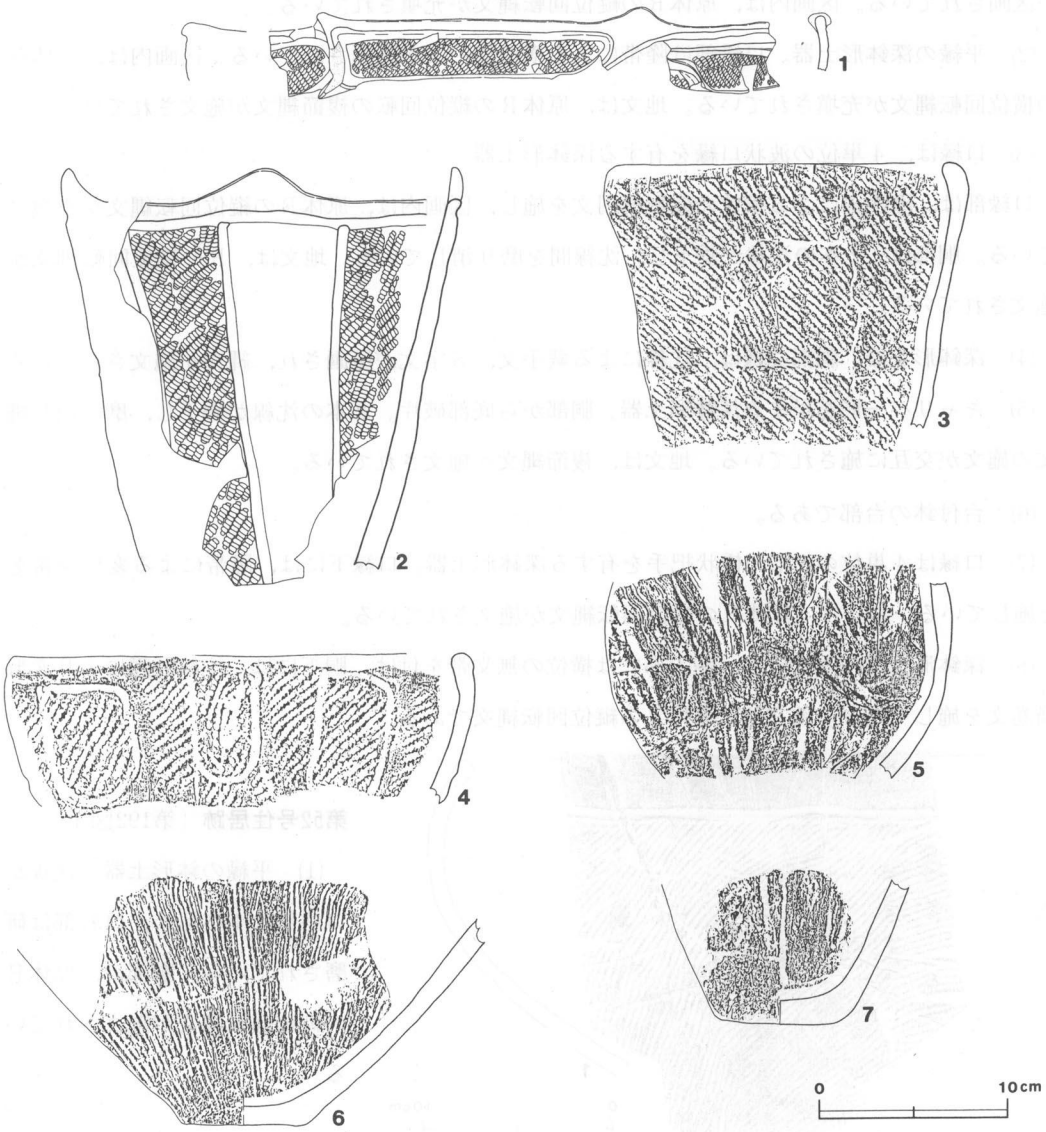
(1)　平縁の鉢形土器。沈線が口唇部に１本巡り，口唇部は研磨されている。胴部は，原体Ｒの縦位回転縄文が施文されている。

第56号住居跡（第193図１～７）

(1)　口唇部に，山形把手を有する深鉢形土器。口縁部は隆帯による渦巻文，沈線による楕円形区画が施され，区画内は，原体Ｒの縦位回転縄文が施文されている。

(2)　口縁は４単位の波状口縁を有する深鉢形土器。口縁部には，１本の横走りする沈線が施され，胴部から底部にかけて，２本の沈線が垂下し，磨り消し縄文と縄文施文が交互に施されている。地文は，Ｒの横位回転縄文が施文されている。

(3)　平縁の口縁部が内彎を呈する深鉢形土器。器面全体に原体Ｌの横位回転縄文が施文されている。

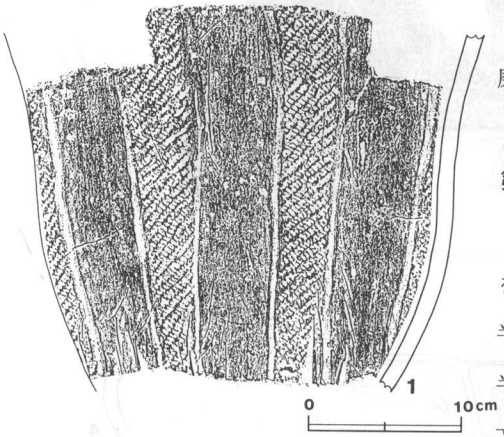


第193図　第56号住居跡出土土器　１－Ｓ＝⅛

(4)　平縁の口縁部が内彎を呈する深鉢形土器。器面全体に原体Ｒの横位回転縄文を施したのち，縦位の楕円文を沈線区画している。

(5)　櫛歯状工具を施文具として縦位の条線文を施し２本の沈線間は磨り消している。

(6)・(7)　底部破片。(6)は櫛歯状工具を施文具として縦位の条線文を施文。(7)は，２本の沈線が垂下し，沈線間は磨り消している。



第194図　第57号住居跡出土土器

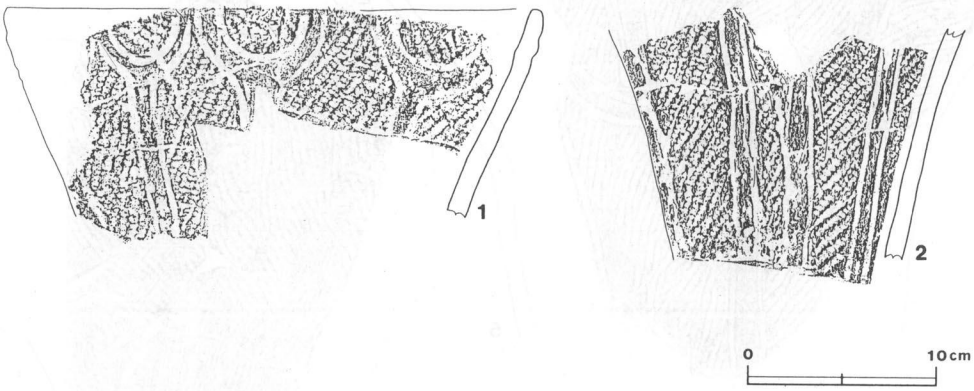
第57号住居跡（第194図１）

(1)　胴部破片。２本の沈線が垂下し底部へと続き，磨り消し縄文と縄文施文が交互に施されている。

第63号住居跡（第195図１・２）

(1)　平縁の深鉢形土器。口縁部に半円状の沈線文を施し，これを「Ｙ」字状の沈線がとりかこみ，胴下半まで垂下し，沈線間は磨り消しが施されている。半円状内は縄文が充塡され，地文はＬの縦位回転縄文が施文されている。

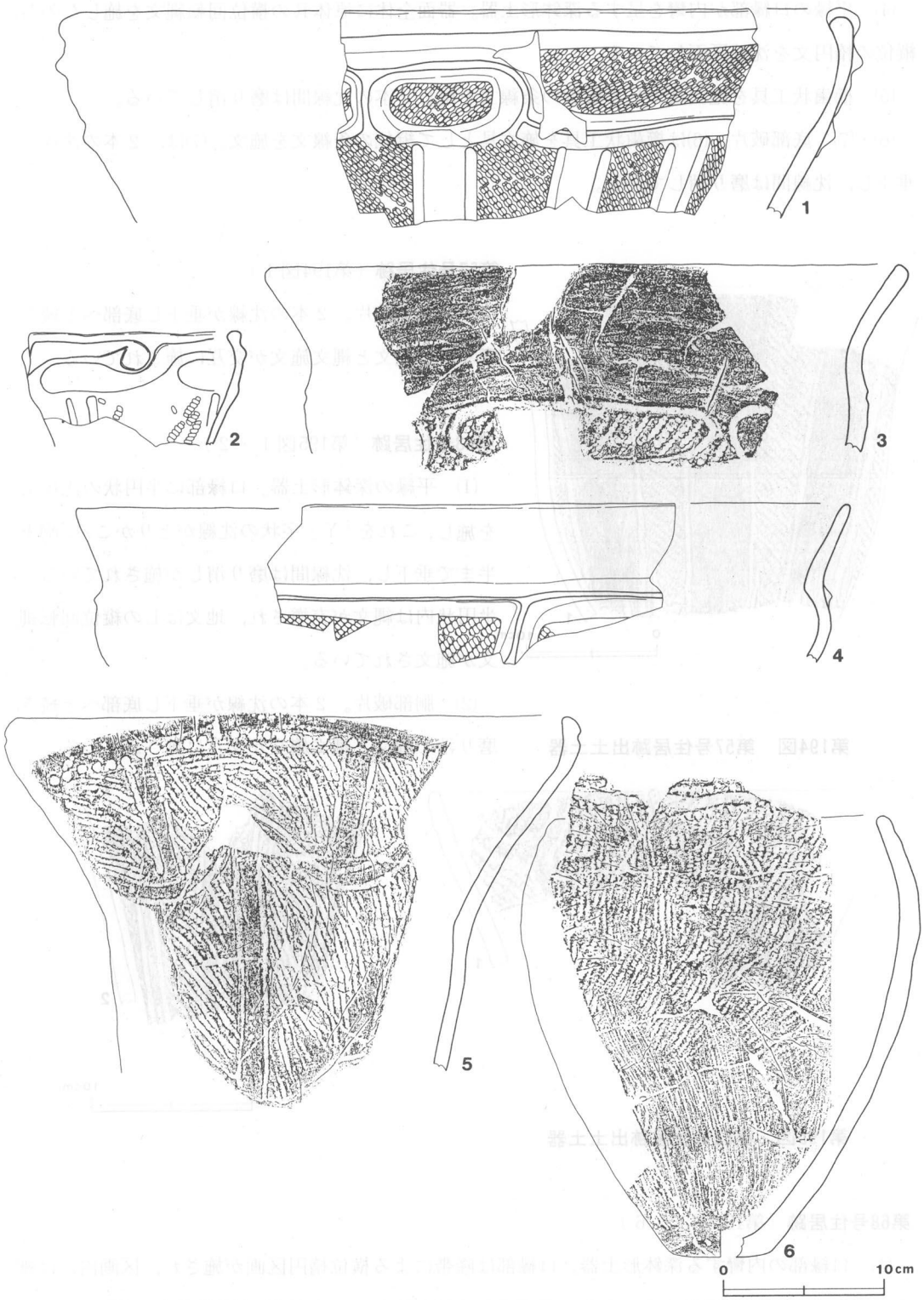
(2)　胴部破片。２本の沈線が垂下し底部へと続き磨り消し縄文と縄文施文が交互に施されている。



第195図　第63号住居跡出土土器

第68号住居跡（第196図１～６）

(1)　口縁部の内彎する深鉢形土器。口縁部は隆帯による横位楕円区画が施され，区画内には縄文が充塡している。胴部には，２本の垂下する沈線が施され，沈線間は磨り消しが行われている。口縁部区画内は，原体Ｌの縦位回転縄文。胴部は，Ｌの横位回転縄文が施文されている。



第196図　第68号住居跡出土土器

(2) 小型の深鉢形土器である。口唇部は平縁で口縁部に隆沈線による変形渦巻文，楕円形区画が施されている。胴部には，縦位の２本の沈線が垂下している。区画内は，原体Ｌの縦位回転縄文が施され，区画間はすべて磨り消しが行われている。

(3) 口縁部が「く」の字形に屈折する深鉢形土器。口縁部は研磨され無文。肩部は沈線による楕円文が施され，区画内には原体Ｒの横位回転縄文が充塡されている。

(4) 深鉢形土器。口縁部は研磨され無文。胴部は隆帯による「∩」形区画が施され区画内は縄文が施文されている。

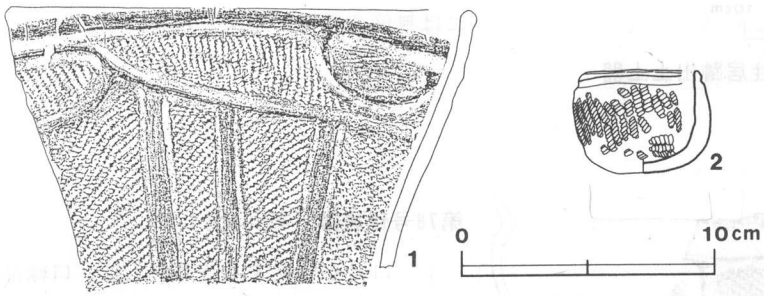
(5) キャリパー形を呈する深鉢形土器。沈線が口唇部に１本巡り，沈線内に円形の列点文がめぐらされ，列点文下に２本の沈線が垂下する。胴部には，２本の沈線による横位の波状文が施され，さらに胴下部は，２本の沈線が垂下する文様形態を示している。

(6) 口縁部が内彎する深鉢形土器。沈線が口唇部に１本巡っている。口縁部，胴部には縄文が，胴部から底部には櫛歯状工具を施文具として条線文が施文されている。

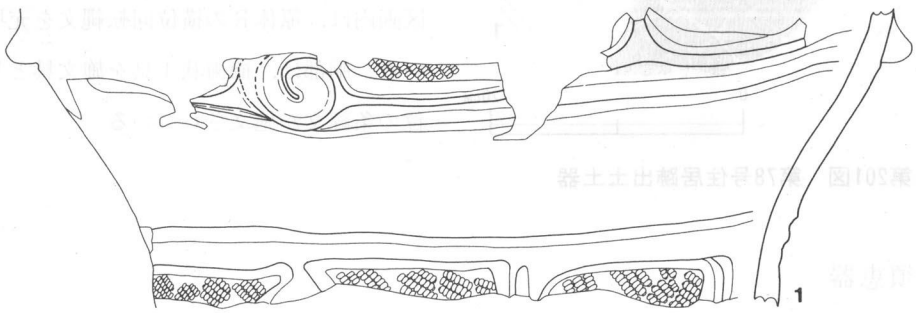
第69号住居跡（第197図１・２）

(1) 平縁の深鉢形土器。口縁部は隆沈線による横位の変形楕円文を施している。胴部は，２本の沈線が垂下し，磨り消し縄文と縄文施文が交互に施されている。地文は，複節縄文である。

(2) ミニチュア土器（手捏）。口唇部に１条の沈線が巡る。器面全体に縄文が施文されている。



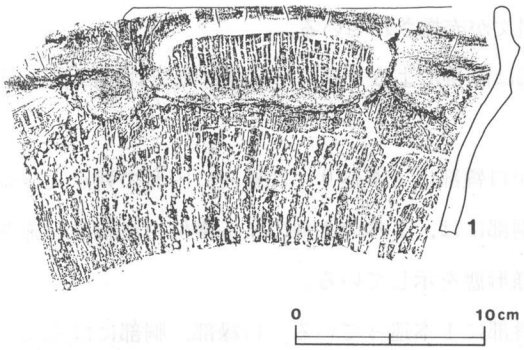
第197図 第69号住居跡出土土器 1－S＝1/6



第198図 第72号住居跡出土土器

第72号住居跡（第198図１）

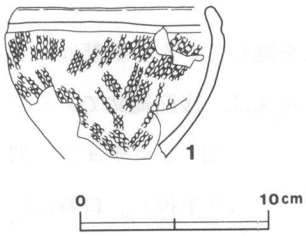
(1) キャリパー形を呈する深鉢形土器。口縁部は隆帯による渦巻文，楕円の区画をおこない，胴部との境に１本の横走する沈線を施し，胴部には縄文を施文後「∩」形の沈線で区画し，区画間を磨り消している。



第199図　第74号住居跡出土土器

第74号住居跡（第199図１）

(1) 平縁の深鉢形土器。口縁部は隆沈線による横位の渦巻文，楕円形区画を施している。区画内，胴部は，櫛歯状工具を施文具として縦位の条線が施文されている。炉内埋設土器。



第200図　第77号住居跡出土土器

第77号住居跡（第200図１）

(1) 平縁の内彎する浅鉢形土器。口唇部に一本の横走りする沈線が施されている。胴部には無節の縄文が施文されている。

第201図　第78号住居跡出土土器

第78号住居跡（第201図１）

(1) 口縁が外反する浅鉢形土器。口縁部から胴部にかけて隆沈線による楕円文が施され区画内は，原体Ｒの横位回転縄文を充填している。胴部は，櫛歯状工具を施文具として縦位の条線文が施文されている。

２．須恵器

第10号住居跡（第202図１）

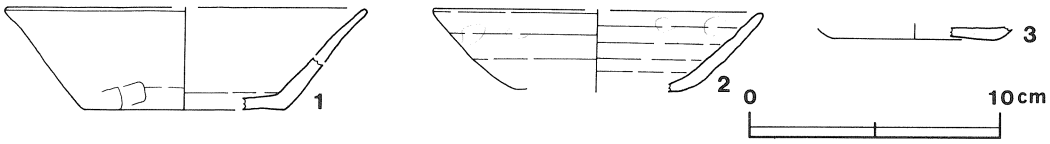
(1) 須恵器坏。底部は平底を呈し，体部は外傾気味に立ち上がり，口唇部は外反する。胴部に

水挽き痕，底部周辺にヘラ削り調整痕が残る。

第31号住居跡（第202図２・３）

(2)　須恵器坏。底部は欠損し，体部は外傾しながら立ち上がる。

(3)　須恵器底部破片。



第202図　第10・31号住居跡出土土器

第３節　土壙・グリッド出土土器

１　土壙

第106号土壙（第203図１）

(1)　深鉢形土器底部破片。原体Ｌの縄文が施文され，２本の沈線が垂下し，沈線間を磨り消している。

第116号土壙（第203図２）

(2)　深鉢形土器。口縁部は，隆沈線による楕円文が区画され，区画内に原体Ｒの横位回転縄文を充填している。胴部には，原体Ｒの縦位回転縄文が施文され，２本の沈線が垂下し，沈線間を磨り消している。口縁部に把手の痕跡を残している。

第132号土壙（第203図３・４）

(3)　キャリパー形を呈する深鉢形土器。口縁部は，くずれて変化した隆帯の渦巻文，楕円文が区画されている。区画内は，縦位の刺突文が施文されている。

(4)　キャリパー形を呈する深鉢形土器。口縁部は，沈線による楕円形文が区画され頸部に横走りの沈線が１本巡る。区画内は，原体Ｌの横位回転縄文が，胴部には，原体Ｌの縦位回転縄文が施文され，２本の沈線が垂下し，沈線間を磨り消している。

第248号土壙（第203図５）

(5)　口縁は４単位の波状口縁を有する深鉢形土器。口縁部はくずれて変化した隆帯の渦巻文，楕円形区画を施し，区画内は，原体Ｒの縦位回転縄文が，胴部には，原体Ｒの横位回転縄文が施

文され，２本の沈線が垂下し，沈線間を磨り消している。

第266号土壙（第204図６）

(6)　平縁の鉢形土器。口唇部は内彎し，横走り沈線が口縁部に１本巡り，口唇部は研磨されている。胴部は，櫛歯状工具を施文具として縦に条線文が施文されている。

第350号土壙（第204図７・８）

(7)　平縁の鉢形土器。口唇部は内彎し、口縁部に横走り沈線が１本巡り，口唇部は研磨されている。胴部には，原体Ｒの横位回転縄文が施文されている。

(8)　小型鉢形土器。口縁部に横走り沈線が１本巡り，口唇部は研磨されている。胴部には，原体Ｌの横位回転縄文が施文されている。

第407号土壙（第204・205図９・10）

(9)　平縁の鉢形土器。口唇部は若干内反する。口唇部は研磨され，沈線が１本巡り，胴部は，縄文が全面に施文されている。

(10)　キャリパー形を呈する深鉢形土器。口縁部は，隆沈線による円・楕円形区画が施され，区画内は，複節の縄文が斜位回転で施文されている。胴部は，地文，複節の斜位回転縄文が全面に施文され，２本の沈線が垂下し，沈線間を磨り消している。

第418号土壙（第205図11～16）

(11)　平口縁で無文。胴部との境に有段を巡らし，胴部は球形にふくらみを持つ。

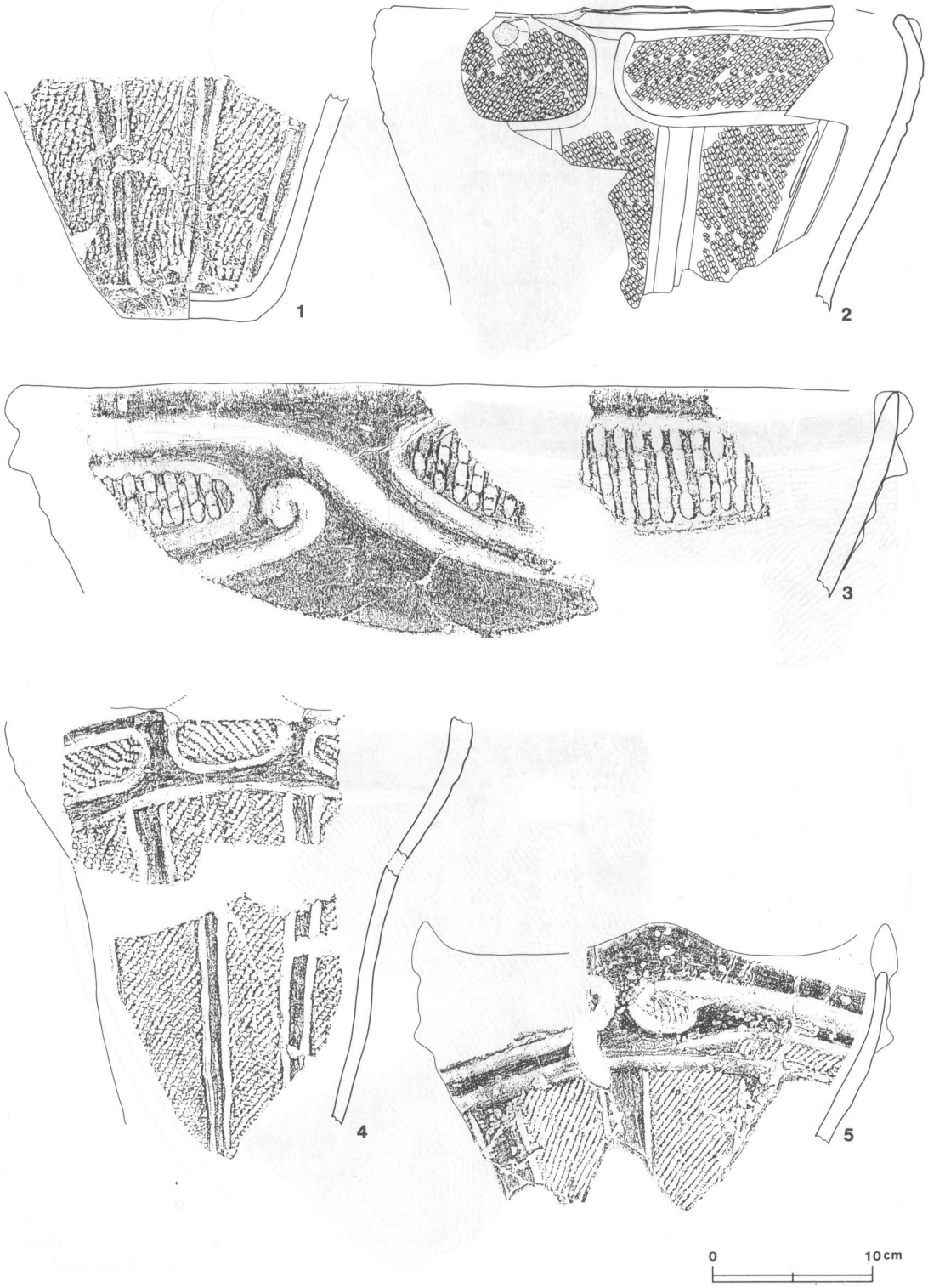
(12)　深鉢形土器の胴部破片。隆沈線による渦巻文，変形楕円形区画が施され，楕円区画間に沈線が垂下している。区画内は，原体Ｌの縦位回転縄文が施文され，区画間はすべて磨り消しが施されている。

(13)　小型浅鉢形土器。手捏土器であり，部分的に内・外面にナデ調整が施されている。

(14)　器台。台付部はほぼ垂直に立ち上がり，孔が１点確認される。

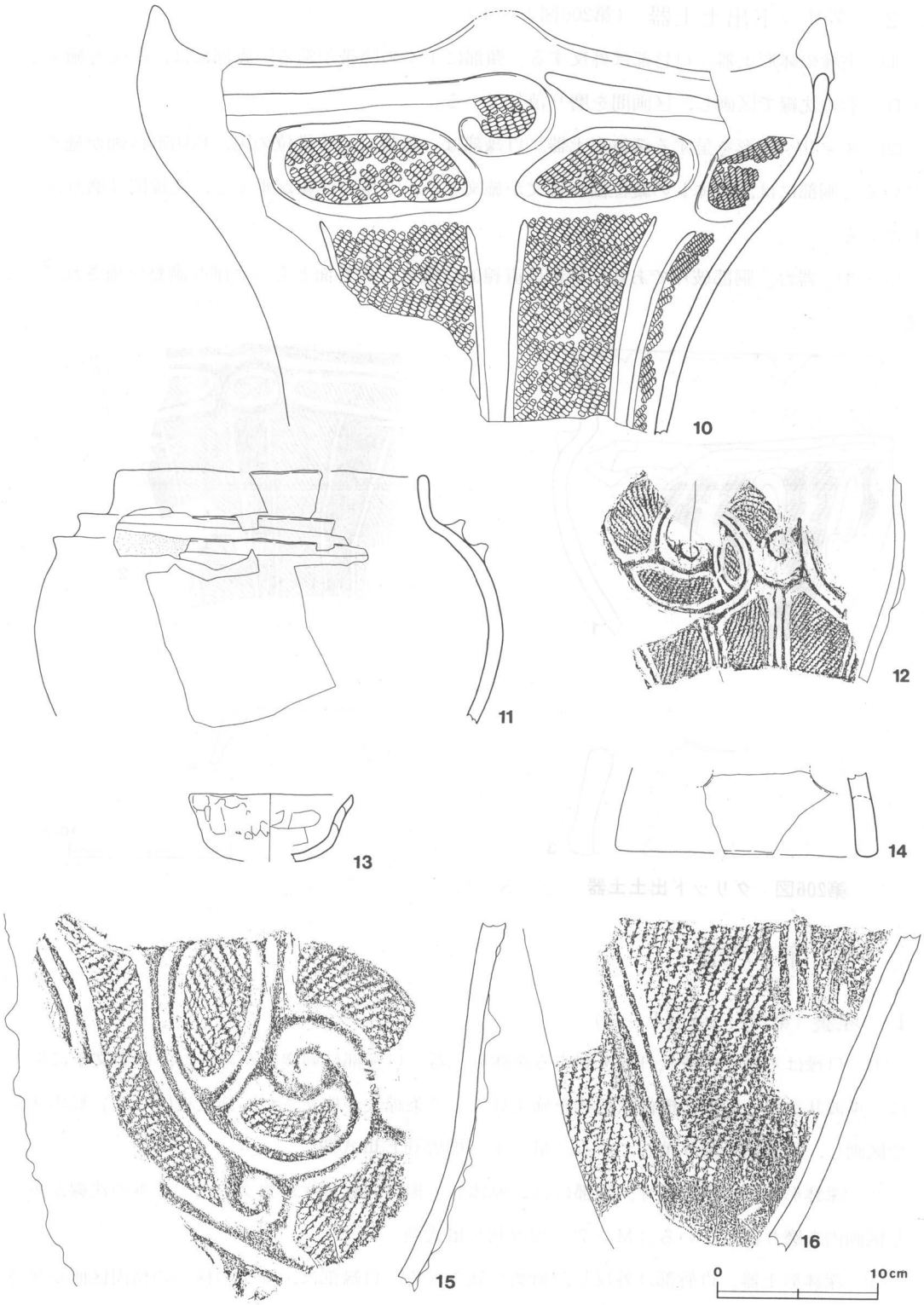
(15)　深鉢形土器の胴部破片。隆帯による渦巻文，変形楕円形によって区画され，区画内は原体Ｌの縦位回転縄文が施文され，区画間は，すべて磨り消しが施されている。

(16)　深鉢形土器の胴部破片。地文に原体Ｌの縦位回転縄文が施文され，３本の沈線が垂下し，沈線間を磨り消している。



第203図　土壙出土土器(1)

第204図　土壙出土土器(2)　8－S＝½



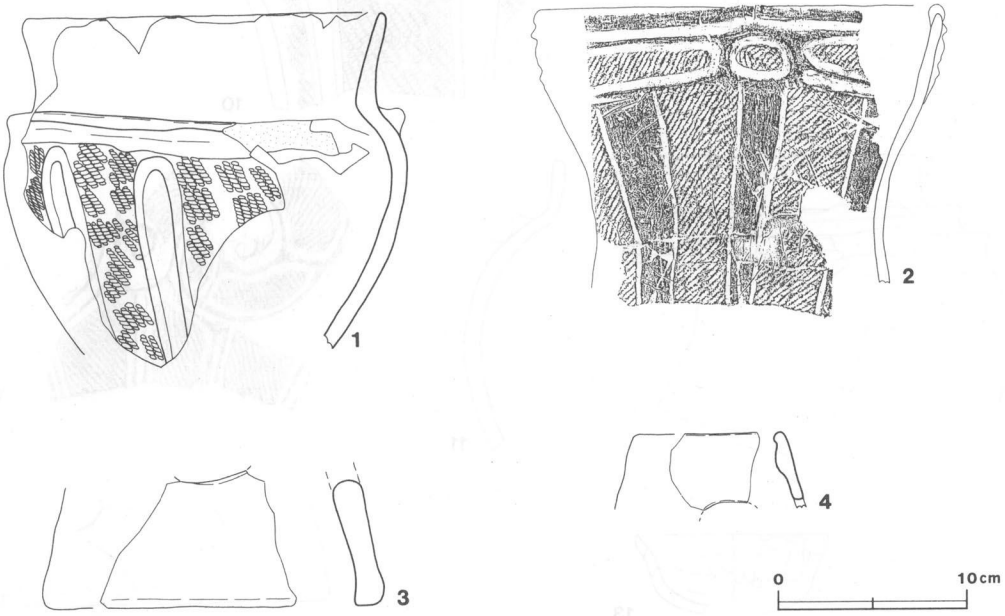
第205図　土壙出土土器(3)　12－S＝1/8

2　グリッド出土土器（第206図１～４）

(1)　平縁の鉢形土器。口唇部は外反する。頸部に１本の隆帯が巡る。胴部には，縄文を施文後「∩」形の沈線で区画し，区画間を磨り消している。

(2)　キャリパー形を呈する深鉢形土器。口縁部は，隆帯による横位の円，楕円形区画が施されている。胴部には，原体Ｌの縦位回転縄文が施文され，２本の沈線が垂下し，沈線間は磨り消されている。

(3)・(4)　器台。胴部破片である。脚部は直線的に開き，内外面ともヘラ削り調整が施されている。



第206図　グリッド出土土器　２－Ｓ＝⅛

第４節　埋甕

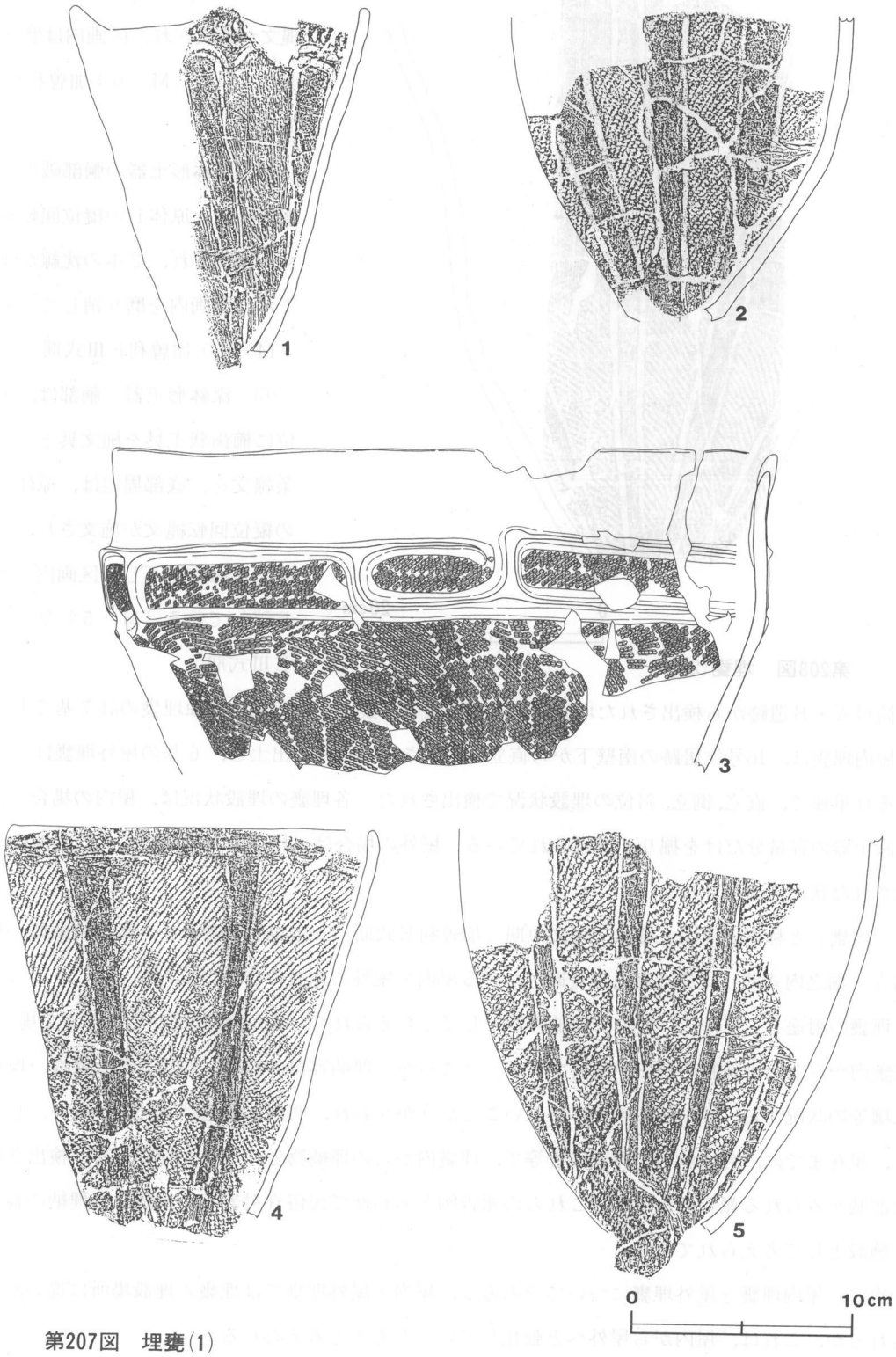
1　埋甕（第207・208図１～６）

(1)　口縁は４単位の波状口縁を有する深鉢形土器。口唇部に刺突文が施され，刺突文下に横位に一本波状沈線・胴部に櫛歯状工具を施文具として条線文が施文され，施文後に「∩」形の沈線で区画し，区画内を磨り消している。(Ｍ－１）加曽利ＥⅢ式期

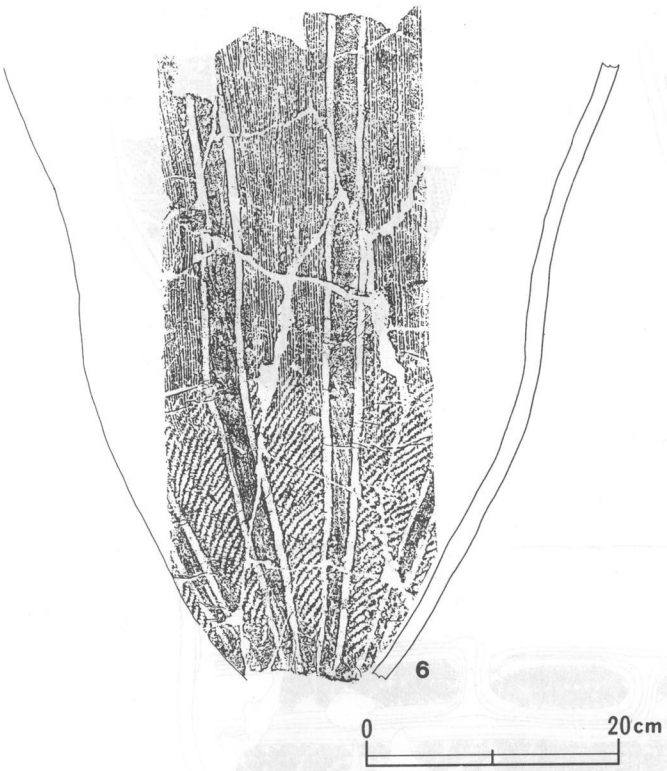
(2)　深鉢形土器の胴部破片。胴部には，原体Ｌの縦位回転縄文が施文され，２本の沈線が垂下し区画内を磨り消している。(Ｍ－７）加曽利ＥⅢ式期

(3)　深鉢形土器。口唇部は外反し，研磨が施される。口縁部は，隆帯の横への楕円区画が施され，区画内・胴部には原体Ｒの縦位回転縄文が施文されている。(Ｍ－４）加曽利ＥⅢ式期

(4)　深鉢形土器。口唇部は研磨され，口縁部から底部にかけて２本の沈線が垂下し区画してい



第207図　埋甕(1)



第208図　埋甕(2)

る。地文は，原体Ｌの縦位回転縄文が施文され，区画内は磨り消している。(Ｍ－６）加曽利ＥⅢ式期

(5)　深鉢形土器の胴部破片。胴部には，原体Ｌの縦位回転縄文が施文され，２本の沈線が垂下し，区画内を磨り消している。（Ｍ－３）加曽利ＥⅢ式期

(6)　深鉢形土器。胴部は，縦位に櫛歯状工具を施文具として条線文を，底部周辺は，原体Ｒの縦位回転縄文が施文され，２本の沈線が垂下し，区画内を磨り消している。(Ｍ－５）加曽利ＥⅢ式期

筒戸Ａ・Ｂ遺跡から検出された埋甕は，１基の屋内埋甕と６基の屋外単独埋甕の計７基である。

屋内埋甕は，16号住居跡の南壁下から直立で埋設された状態で出土し，６基の屋外埋甕は，それぞれ単独で，直立,倒立,斜位の埋設状況で検出された。各埋甕の埋設状況は，屋内の場合には埋設土器の容量分だけを掘り，埋設されている。屋外の場合は，楕円形，円形プランの土壙に埋設された状況で検出された。

「埋甕」と称する埋設土器は，縄文中期（加曽利Ｅ式期）に出現して盛行し，後期初頭期（称名寺・堀之内式期）に急に衰退の経過をたどる屋内・屋外の施設のひとつである。

埋甕の用途としては，一般的に埋納容器としてとらえられているが,機能面からとらえた場合,埋甕内からの出土遺物の検出が重要である。ところが，埋納容器の形態，埋設された状態，堆積土壌等の状況から，埋納物の残存率の低いことがうかがわれ，明確な実証はされていない。しかし，現在までに，各地からの調査報告等で，埋甕内からの埋納物として小児骨や骨片が検出された記載がみられる報告例があり，これらの報告例とあわせて民俗資料等から判断して埋納の容器・施設として考えられている。

次に，屋内埋甕と屋外埋甕についてであるが，屋内・屋外埋甕では埋甕の埋設場所に違いがみられるが，これは，屋内から屋外へと転化していったものと考えられる。

屋内から屋外への転化は，遺跡内における配置状況等を考えると，家族的性格から共同体性格

へと転化された社会背景がうかがわれる。また，集落構成においても，中央に広場をもち，広場を囲む形で住居区域，土壙（貯蔵）区域，屋外埋甕・土壙（墓域）と構成がなされたものと考えられる。

筒戸A・B遺跡から検出された屋内埋甕1基と屋外埋甕6基からは，埋納物を検出することは出来なかったが，容器の埋設状況等から判断して，埋納容器として使用されたものと考えられる。

また，機能上から考えて，屋内埋甕は，小児用（胎盤埋納等も含む），屋外埋甕は小児用・成人用と推察している。以上のことは，一概には論じえないことであり，今後は縄文期における集落構成等を的確にふまえていくと同時に，化学分析等の成果をとり入れて，解明されていく課題と考える。

表4　出土遺物観察表

（A～口径，B～器高，C～底径）

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土 焼成 色調	備考
5号住① 居跡	キャリパー状の深鉢形土器	A 21.7 B(18.1)	口縁部～渦巻文・楕円区画・胴部～懸垂文。原体～Rの縦位回転。	砂粒(少)・雲母 黄橙色	165図
②	キャリパー状の深鉢形土器	A 21.2 B(8.5)	口縁部～渦巻文・楕円区画。	砂粒(少)・スコリア 橙色・にぶい橙色	165図
③	キャリパー状の深鉢形土器	A 34.4 B(19.7)	口縁部～渦巻文・楕円区画・胴部～「∩」形区画。原体～Rの縦位回転。	砂粒・スコリア 橙色・浅黄橙色	165図
④	深鉢形土器	A(26.0) B(18.3)	口縁部～楕円区画。	砂粒・スコリア 橙色	165図
⑤	胴部破片	B(19.8)	胴部～2本の縦位の沈線。	砂粒・スコリア にぶい橙色	165図
⑥	底部破片	B(3.1) C(8.8)		砂粒・スコリア にぶい橙色	165図
⑦	底部破片	B(2.5) C 6.1		雲母・砂粒・石英粒 長石粒・橙色	165図
⑧	深鉢形土器	A(62.9) B(27.8)	口縁部～渦巻文・楕円区画。胴部～懸垂文。	砂粒(少)・スコリア 褐灰色・にぶい赤褐色	166図
⑨	深鉢形土器	A(38.6) B(19.0)	口縁部～渦巻文・楕円区画。胴部～懸垂文。	砂粒・にぶい橙色	166図
⑩	深鉢形土器	A(35.3)	口縁部～楕円区画。胴部～懸垂文。	砂粒・長石・スコリア 浅黄橙色	166図
6号住① 居跡	深鉢形土器	A(54.0) B(15.9)	口縁部～楕円区画。胴部～「∩」形区画。原体～Rの横位回転。	砂粒(少)・スコリア 長石微粒・淡橙色	167図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土 焼成 色調	備考
6号住② 居跡	キャリパー状の深鉢土器	B(26.1)	胴部～懸垂文。	砂粒・スコリア 橙色	167図
③	鉢形土器	A(55.0) B(15.5)	口縁部～渦巻文（隆沈線）。	砂粒・スコリア 灰褐色・黒褐色	167図
④	深鉢土器	A(30.0) B(18.2)	口縁部～沈線間に円形刺突文。胴部～「∩」形区画。原体～Rの横位回転縄文。	砂粒・スコリア 長石粒・灰褐色	168図
⑤	底部破片	B(8.7) C(9.0)		砂粒・橙色	168図
7号住① 居跡	深鉢形土器	A(39.2) B(22.9)	口縁部～沈線。胴部～「∩」形区画。原体～Rの横位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア 長石微粒・浅黄橙色	169図
②	壺形土器		胴部～「∩」形区画。原体～Rの横位回転縄文。	砂粒(少)・褐灰色・にぶい橙色	169図
③	深鉢形土器	B(11.6) C(8.0)	原体～Rの横位回転縄文。	砂粒・スコリア 長石粒・橙色・にぶい褐色	169図
8号住① 居跡	深鉢形土器	A(28.0) B(17.0)	口縁部～渦巻文。胴部～懸垂文。	砂粒(少)・スコリア 長石微粒・にぶい赤褐色・にぶい橙色	170図
②	キャリパー状の深鉢形土器	A(37.5) B(26.3)	口縁部～渦巻文・楕円区画。胴部～「∪」・「∩」形区画。原体～Rの縦位回転縄文。	砂粒・スコリア 浅黄橙・橙・灰褐色	170図
③	深鉢形土器	A(37.5) B(17.3)	口縁部～渦巻文・楕円区画。	砂粒(少)・スコリア 橙色	170図
④	深鉢形土器	B(10.9)	胴部～懸垂文。原体～Lの縦位回転縄文。	砂粒・スコリア にぶい橙・灰褐色	170図
9号住① 居跡	キャリパー状の深鉢形土器	A(30.0) B(8.1)	口縁部～円形・楕円形区画。胴部～懸垂文。原体～口縁部はLの横位回転，胴部は縦位回転縄文。	砂粒(少)・橙色	171図
②	鉢形土器	A(37.3) B(17.7)	原体～Rの横位回転縄文。	砂粒・スコリア にぶい橙・褐灰色	171図
③	鉢形土器	A(26.2) B(20.6)	口唇部・胴部～条線文。	砂粒・スコリア 橙・灰褐色	171図
④	深鉢形土器	A(30.8) B(15.6)	口縁部～沈線。胴部～条線文。	砂粒(少)・にぶい橙・褐灰色	171図
⑤	底部破片	B 7.9 C 7.5	懸垂文。	砂粒(少)・スコリア 橙・にぶい橙色	171図
⑥	底部破片		懸垂文。	砂粒(少)・スコリア にぶい橙・橙色	171図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土 焼成 色調	備考
13号住①居跡	器台	B(9.0) C 14.0		砂粒・スコリア にぶい橙・灰褐色	172図
15号住①居跡	深鉢形土器	A(23.2) B(15.4)	口縁部～円・楕円形文。原体～口縁部はRの縦位回転，胴部はRの横位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア 橙・灰褐色	173図
②	深鉢形土器	A(27.7) B(22.8)	口縁部～変形楕円文。	砂粒(少)・スコリア にぶい橙・にぶい褐色	173図
③	深鉢形土器	A(18.2) B(7.4)	口縁部～波状口縁で円形・楕円形文。原体～Rの横位回転縄文。	砂粒・灰褐色	173図
④	深鉢形土器	A(40.8) B(20.6)	口縁部～波状口縁で円形・楕円形文。胴部～懸垂文。	砂粒(少)・スコリア 長石微粒・にぶい橙色	173図
⑤	深鉢形土器	A(26.8) B(8.0)	口縁部～波状口縁で円形・楕円形文。胴部～懸垂文間に蕨手状文。原体～Rの横位回転縄文。	砂粒・スコリア 石英粒・橙色	173図
⑥	深鉢形土器	A(18.1) B(20.0)	口縁部・胴部～懸垂文・楕円形。原体～Rの横位回転縄文。	砂粒・橙色	173図
⑦	壺形土器	A(24.2) B(3.7)	口縁部～吊紐穴(装飾帯)。胴部～円・楕円形文。	砂粒(少)・スコリア にぶい橙・にぶい褐色	173図
⑧	深鉢形土器	A(40.0) B(20.8)	口縁部～沈線。胴部～条線文。	砂粒・スコリア にぶい橙・にぶい褐色	174図
⑨	深鉢形土器	A(27.8) B(24.1)	胴部～条線文。	砂粒(少)・浅黄 橙・にぶい褐色	174図
⑩	深鉢形土器	A(27.4) B(19.1)	胴部～条線文。	砂粒・スコリア 浅黄橙・にぶい橙色	174図
⑪	底部破片	A(19.0) C 9.0	胴部・底部～懸垂文。原体～Rの縦位回転縄文。	砂粒・にぶい橙色	174図
⑫	台付鉢		脚柱部に孔。	砂粒(少)橙・浅黄 橙・灰褐色	174図
16号住①居跡	深鉢形土器	A 39.9 B 44.6	口縁部～渦巻文・横位楕円区画。原体～口縁部はRの縦位回転縄文，胴部はRの横位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア 橙・黄橙・にぶい橙色	175図
②	鉢形土器	A(29.8) B(22.8)	口縁部～渦巻文。原体～口縁はRの縦位回転，胴部はRの横位回転縄文。	砂粒(少)・長石微粒 スコリア・橙色・にぶい橙色	175図
③	深鉢形土器	A 21.7 B(20.2)	口縁部・胴部～沈線による波状磨り消し縄文。原体～Rの横位回転縄文。	砂粒・スコリア にぶい橙色	175図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土 焼成 色調	備考
16号住④居跡	キャリパー状の深鉢形土器	A(21.2) B(10.0)	口縁部・胴部～沈線区画。	砂粒(少)・スコリア 長石微粒・にぶい橙 褐灰色	175図
⑤	胴部破片		胴部～懸垂文。原体～Lの縦位回転縄文。	砂粒(少)・長石微粒 にぶい橙・褐色	175図
⑥	鉢形土器	B(8.5) C 10.0	胴部～沈線。	砂粒・スコリア 長石微粒・橙・ 黒褐色	175図
17号住①居跡	深鉢形土器	A 12.0 B 16.9	口縁部・胴部～沈線で「∩」形区画。原体～Rの横位回転縄文。	砂粒・スコリア 褐灰・にぶい橙色	176図
②	鉢形土器	B(19.0)	原体～胴部はLの縦位回転縄文。	砂粒・スコリア 明赤褐・褐灰色	176図
③	鉢形土器	B(16.0)	胴部～沈線で「∩」形区画。原体～胴部はRの縦位回転縄文。	砂粒・スコリア 長石微粒・にぶい橙・橙色	176図
18号住①居跡	キャリパー状の深鉢形土器	A(39.2) B(26.0)	口縁部～波状口縁。胴部～懸垂文。	砂粒・スコリア 長石粒・褐灰・ にぶい橙色	177図
②	深鉢形土器	A(21.4) B(13.4)	口縁部～波状口縁・楕円区画文。胴部～沈線による「∩」形区画。原体～胴部はRの横位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア 長石粒・浅黄橙 にぶい褐色	177図
③	深鉢形土器	A(20.6) B(17.8)	胴部～沈線による「∩」形区画。	砂粒・長石粒 にぶい橙色	177図
④	深鉢形土器	A(31.0) B(13.9)	原体～胴部はRの縦位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア 長石微粒・浅黄橙・ にぶい橙色	177図
⑤	底部破片	B 14.0 C 7.0	胴部～懸垂文。原体～胴部はLの縦位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア 橙・浅黄橙色	177図
19号住①居跡	キャリパー状の深鉢形土器	A 27.8 B(18.7)	口縁部～連続刺突文，胴部～沈線による「∩」形区画。原体～口縁部はRの横位回転縄文。	砂粒 橙・浅黄橙色	178図
②	浅鉢形土器	A 18.0 B 11.2 C 6.7	口縁部～波状口縁。	砂粒・スコリア にぶい橙・黒褐色	178図
③	浅鉢形土器	A(34.0) B 24.1 C 7.4	口縁部～平縁。	砂粒(少)・スコリア 浅黄橙・黒色	178図
④	底部破片	B(5.8) C(7.0)	胴部・底部～懸垂文。	砂粒(少)・スコリア にぶい橙色	178図
20号住①居跡	鉢形土器	B(22.1)	胴部～沈線による円形，楕円区画文，波状沈線。	砂粒(少)・スコリア 橙・浅黄橙・にぶい褐色	179図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土 焼成 色調	備考
20号住②居跡	壺形土器	A 8.2 B 11.6	口縁部～釣手状把手，内面は朱塗り。	砂粒・スコリア 灰黄褐色	179図
27号住①居跡	深鉢形土器	A(18.3) B(10.5)	口縁部 ～ 沈線による楕円区画文。原体～口縁部はRの横位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア にぶい橙・灰褐・明赤褐色	180図
②	胴部破片	B(12.7)	原体～胴部はRの横位，斜位回転縄文。	砂粒(少)・長石微粒 にぶい橙色	180図
③	底部破片	B(11.7) C(7.6)	原体～底部はRの横位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア 長石微粒・にぶい橙色	180図
28号住①居跡	キャリパー状の深鉢形土器	A(37.8) B(17.1)	口縁部～隆体による渦巻文・楕円文。原体～口縁部はRの縦位回転，胴部はRの横位回転縄文。	砂粒・橙・にぶい橙・褐灰色	181図
②	キャリパー状の深鉢形土器	A(19.8) B(16.4)	口縁部～波状口縁・隆沈線による渦巻文・楕円形区画。胴部は縦位の沈線。	砂粒(少)・スコリア 長石粒・橙・にぶい橙・明赤褐色	181図
③	キャリパー状の深鉢形土器	A(26.1) B(12.4)	口縁部～隆帯による渦巻文・楕円形区画。原体～口縁部はRの縦位回転，胴部はRの横位回転縄文。	砂粒・スコリア・長石粒・にぶい褐色・橙色	181図
④	キャリパー状の深鉢形土器	A(14.4) B(10.0)	口縁部～沈線による楕円形区画。胴部～縦位の沈線。原体～口縁部はRの縦位回転，胴部はRの横位回転縄文。	砂粒・長石微粒 にぶい橙・褐灰色	181図
⑤	鉢形土器		胴部～「∩」形区画，原体～胴部はRの横位回転。	砂粒(少)・スコリア にぶい橙・褐灰色	181図
⑥	深鉢形土器	A 15.0	口縁部～沈線による楕円区画。原体～口縁部はRの縦位回転，胴部はLの縦位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア 浅黄橙・にぶい黄橙色	181図
⑦	鉢形土器	C 8.3	胴部～蕨手状の沈線および縦位の沈線。	砂粒(少)・スコリア 橙・にぶい橙・褐灰色	181図
⑧	深鉢形土器	A 28.3	胴部～櫛歯状工具による沈線。	砂粒(少)・スコリア 長石粒・にぶい黄橙 浅黄橙・黒褐色	181図
⑨	鉢形土器	A(30.4) B(20.0)		砂粒(少)・スコリア・長石微粒・にぶい黄橙・浅黄橙・黒褐色	182図
30号住①居跡	深鉢形土器	A(35.2) B(16.5)	口縁部～隆帯による渦巻文・楕円区画。原体～口縁部はLの縦位回転，胴部はLの横位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア にぶい橙・灰褐色	183図
40号住①居跡	深鉢形土器	A(47.4) B(19.4)	口縁部～隆帯による渦巻文・楕円区画。胴部～縦位の沈線。原体～口縁部はRの縦位回転，胴部はRの横位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア 橙色	184図
42号住①居跡	キャリパー状の深鉢形土器	A(31.7) B(25.6)	口縁部～渦巻文・楕円区画。胴部～縦位の沈線。原体～口縁部はRの縦位回転，胴部はRの横位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア 橙・褐灰色	185図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土 焼成 色調	備考
42号住居跡②	深鉢形土器	A(46.0) B(21.5)	口縁部～波状口縁・渦巻文。胴部～「∩」形区画。	砂粒・スコリア にぶい褐・褐灰色	185図
③	深鉢形土器	A(34.6) B(25.4)	口縁部～波状口縁・円形・楕円形区画。胴部～縦位の沈線。原体～口縁部はRの縦位回転，胴部はRの横位回転縄文。	砂粒(少)・橙・にぶい橙色	185図
④	深鉢形土器	A(29.4) B(20.7)	口縁部～円形・楕円形区画。胴部～縦位の沈線。	砂粒・スコリア にぶい橙・黒褐色	185図
⑤	深鉢形土器	A(52.5) B(30.0)	口縁部～円形・楕円形区画。胴部～縦位の沈線。	砂粒・スコリア にぶい橙・黒褐色	185図
⑥	深鉢形土器	A 27.0 B(23.5)	口縁部～円形・楕円形区画。胴部～縦位の沈線。原体～口縁部はLの横位回転，胴部はLの縦位回転縄文。	砂粒・スコリア 橙・灰褐色	185図
⑦	深鉢形土器	A(28.2) B 28.1 C 7.9	胴部～縦位の沈線。原体～胴部はRの縦位回転縄文。	砂粒・スコリア・長石粒・橙・褐灰色	185図
⑧	深鉢形土器	A 30.2 B 23.0	口縁部～沈線による縦の楕円形区画。蕨手状文。胴部～沈線による楕円形区画。原体～胴部はRの横位回転縄文。	砂粒・砂粒(少)・スコリア・褐灰・にぶい橙色	185図
⑨	深鉢形土器	A(49.6) B(24.9)	口縁部～楕円区画。胴部～縦位の沈線。原体～口縁部はLの横位回転，胴部はLの縦位回転縄文。	砂粒・スコリア・長石粒・にぶい褐色	186図
⑩	深鉢形土器	A(33.0) B(21.6)	口縁部～波状口縁。円形・楕円形区画。胴部～縦位の沈線。原体～胴部はLの縦位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア 橙・にぶい橙・浅黄橙色	186図
⑪	深鉢形土器	A(54.8) B(15.2)	口縁部～円形・楕円形区画。胴部～縦位の沈線。原体～口縁部はRの横位回転，胴部はRの縦位回転縄文。	砂粒・スコリア・褐灰色・橙・にぶい橙色	186図
⑫	深鉢形土器	A(34.8) B(21.0)	口縁部～沈線による楕円形区画。胴部～縦位の沈線。原体～口縁部はRの縦位回転，胴部はRの横位回転縄文。	砂粒・長石粒 にぶい橙・橙色	186図
⑬	深鉢形土器	A(29.8) B(21.0)	口縁部～隆帯による楕円形区画。胴部～縦位の沈線。	砂粒・スコリア 橙・明褐・灰褐色	186図
⑭	深鉢形土器	A(36.6) B(17.5)	口縁部～沈線。胴部～縦位の沈線。	砂粒・長石粒・スコリア・橙・浅黄色	186図
⑮	深鉢形土器	A(26.6) B(21.2)	口縁部～沈線内に列点文。胴部～縦位の沈線．原体～胴部はRの縦位回転縄文。	砂粒・スコリア・長石粒・石英粒・にぶい橙黒褐色	186図
⑯	深鉢形土器	A(29.0) B(17.5)	口縁部～列点文。胴部～「∩」形区画。原体～胴部はRの横位回転縄文。	砂粒・スコリア・長石粒・明赤褐・にぶい橙色	186図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土 焼成 色調	備考
42号住⑰居跡	深鉢形土器	A(14.8) B(6.0)	口縁部～沈線。胴部～縦位の沈線。原体～Ｌの縦位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア・長石微粒・橙・黒褐色	187図
⑱	深鉢形土器	A 19.9 B(12.8)	口縁部・胴部～条線文。	砂粒・スコリア 褐灰・にぶい橙色	187図
⑲	鉢形土器	A 43.8 B 27.6 C(9.2)	口縁部～沈線。胴部～条線文。	砂粒(少)・スコリア 浅黄橙・橙・にぶい黄橙色	187図
⑳	深鉢形土器	A(28.5) B(37.2)	口縁部～円形・楕円形区画。胴部～縦位の沈線。	砂粒・長石粒・橙色 にぶい褐・褐灰・黒褐色	187図
㉑	鉢形土器	B(15.9)	口縁部～列点文。原体～胴部はＬの横位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア・浅黄橙・橙・褐灰色	187図
㉒	深鉢形土器	B(30.6)	胴部～縦位の沈線。	砂粒(少)・スコリア・橙・にぶい橙・褐灰色	187図
㉓	底部破片	B(16.4) C 8.9	胴部～縦位の沈線。	砂粒・スコリア・長石粒・黒褐・暗赤褐色	187図
㉔	底部破片	B 13.7 C 6.0	胴部～縦位の沈線。	砂粒・スコリア にぶい橙・褐灰色	188図
㉕	脚台	B 2.5 C 9.1		砂粒(少)・スコリア 橙・灰褐色	188図
㉖	器台	B 59.0 C(12.8)		砂粒・にぶい橙色	188図
43号住①居跡	鉢形土器	B(19.7) C(9.0)	胴部～条線文。	砂粒・スコリア にぶい橙・黒褐・橙色	189図
②	底部破片	C(6.6)	原体～胴部はＬの縦位回転縄文。	砂粒・スコリア・にぶい橙・褐灰色	189図
45号住①居跡	キャリパー状の深鉢形土器	A 25.2 B(17.5)	口縁部～隆帯による渦巻文。胴部～縦位の沈線。原体～胴部はＲの横位回転縄文。	砂粒・浅黄橙色	190図
②	深鉢形土器	A(30.5) B(18.1)	口縁部～刺突文。胴部～横位の沈線。	砂粒・スコリア・明赤褐・褐灰・にぶい橙・黒褐色	190図
③	深鉢形土器	A 25.5 B(17.4)	口縁部～刺突文。胴部～「∩」形区画。原体～胴部はＲの縦位回転縄文。	砂粒・にぶい橙・橙色	190図

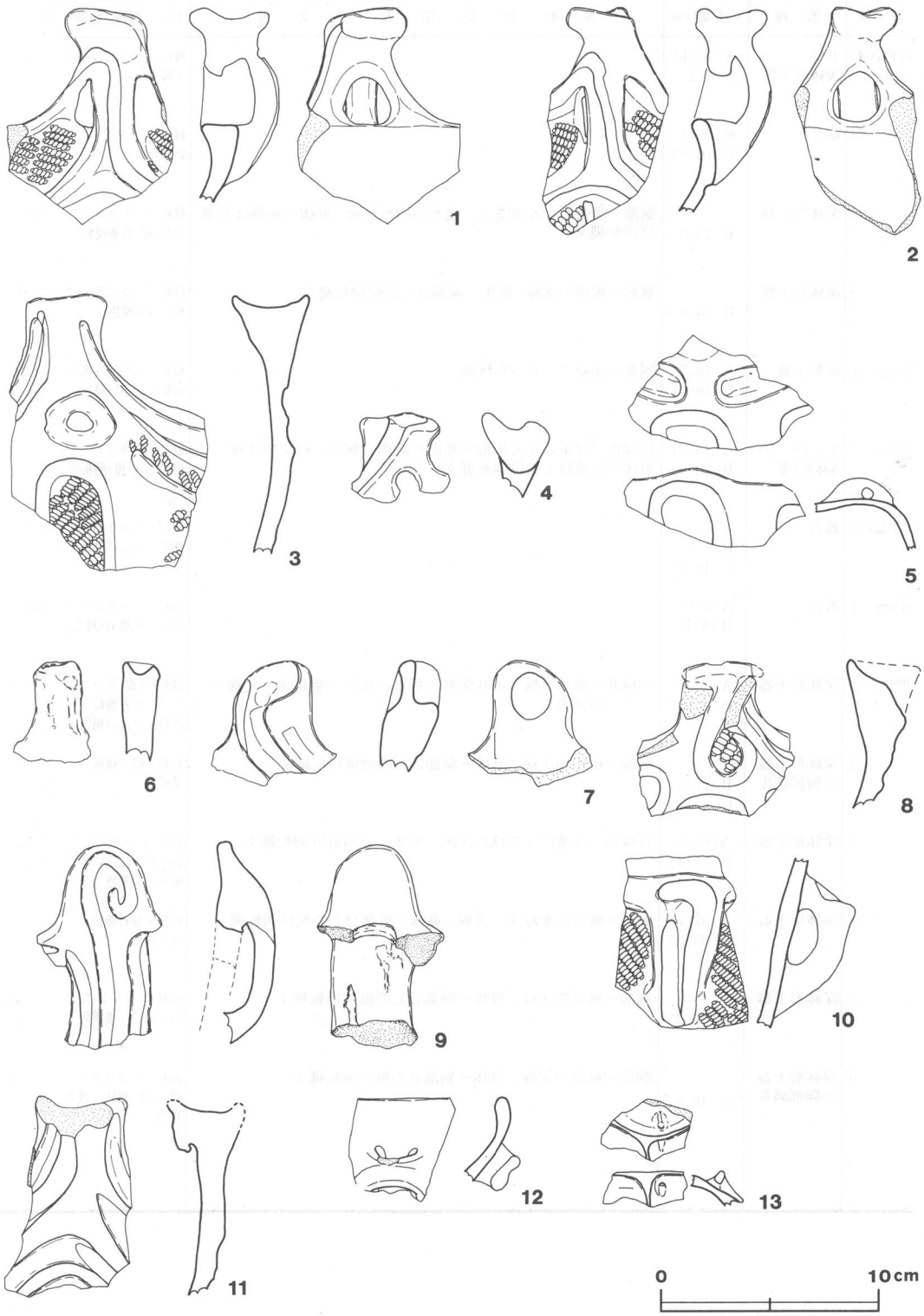
60

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土 焼成 色調	備考
45号住④居跡	深鉢形土器	A(14.4) B(15.9)	口縁部～波状口縁・隆帯による楕円区画。胴部～縦位の沈線。	砂粒・スコリア 橙・にぶい橙色	190図
50号住①居跡	深鉢形土器	A(26.5) B(13.7)	口縁部～波状口縁。隆帯による渦巻文，楕円区画。原体～口縁部はRの縦位回転縄文。	砂粒・スコリア 橙色	191図
②	深鉢形土器	A(56.0) B(58.0)	口縁部～横位楕円文。原体～口縁部はRの横位回転縄文，胴部はRの縦位回転縄文。	砂粒・スコリア・橙色・にぶい黄橙・黒褐色	191図
③	深鉢形土器	A(44.6) B(35.3)	口縁部～波状口縁，隆沈線による楕円文。胴部～縦位の沈線。原体～口縁部はRの縦位回転，胴部はRの横位回転縄文。	砂粒・褐灰・にぶい橙色	191図
④	深鉢形土器	B(14.5)	胴部～沈線による蕨手文，S字文区画。	砂粒・にぶい橙・橙色	191図
⑤	キャリパー状の深鉢形土器	B(15.7) C(4.3)	胴部～沈線。	砂粒(少)・にぶい褐・灰褐色	191図
⑥	台付鉢	B(3.7) C(8.0)		砂粒・スコリア・橙・浅黄橙色	191図
⑦	深鉢形土器	A(65.0) B(36.0)	口縁部～山形・橋状把手。胴部～渦巻文。原体～口縁部はRの縦位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア 橙色	191図
⑧	深鉢形土器	B(40.0)	胴部～渦巻文。	砂粒(少)・スコリア 橙色	191図
52号住①居跡	鉢形土器	A(30.0) B(16.9)	原体～胴部はRの縦位回転縄文。	砂粒・スコリア 橙・灰褐・黒褐色	192図
56号住①居跡	深鉢形土器	A(67.5) B(9.4)	口縁部～隆帯による渦巻文。原体～Rの縦位回転縄文。	砂粒・スコリア にぶい橙色	193図
②	深鉢形土器	A(20.6) B(21.5)	口縁部～波状口縁，沈線(横)。胴部～縦位の沈線。原体～胴部はRの横位回転縄文。	砂粒・スコリア 橙・にぶい橙色	193図
③	深鉢形土器	A 17.7 B(14.2)	原体～Lの横位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア 長石粒・にぶい橙色	193図
④	深鉢形土器	A(24.0) B(8.0)	原体～Rの横位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア 長石粒・にぶい橙・褐灰色	193図
⑤	深鉢形土器	B(10.5)	胴部～縦位の条線文。	砂粒・橙・にぶい橙・黒褐色	193図
⑥	胴部破片	B(9.5) C 6.5	胴部～縦位の条線文。	砂粒(少)・スコリア 橙・にぶい黄橙・灰黄褐色	193図

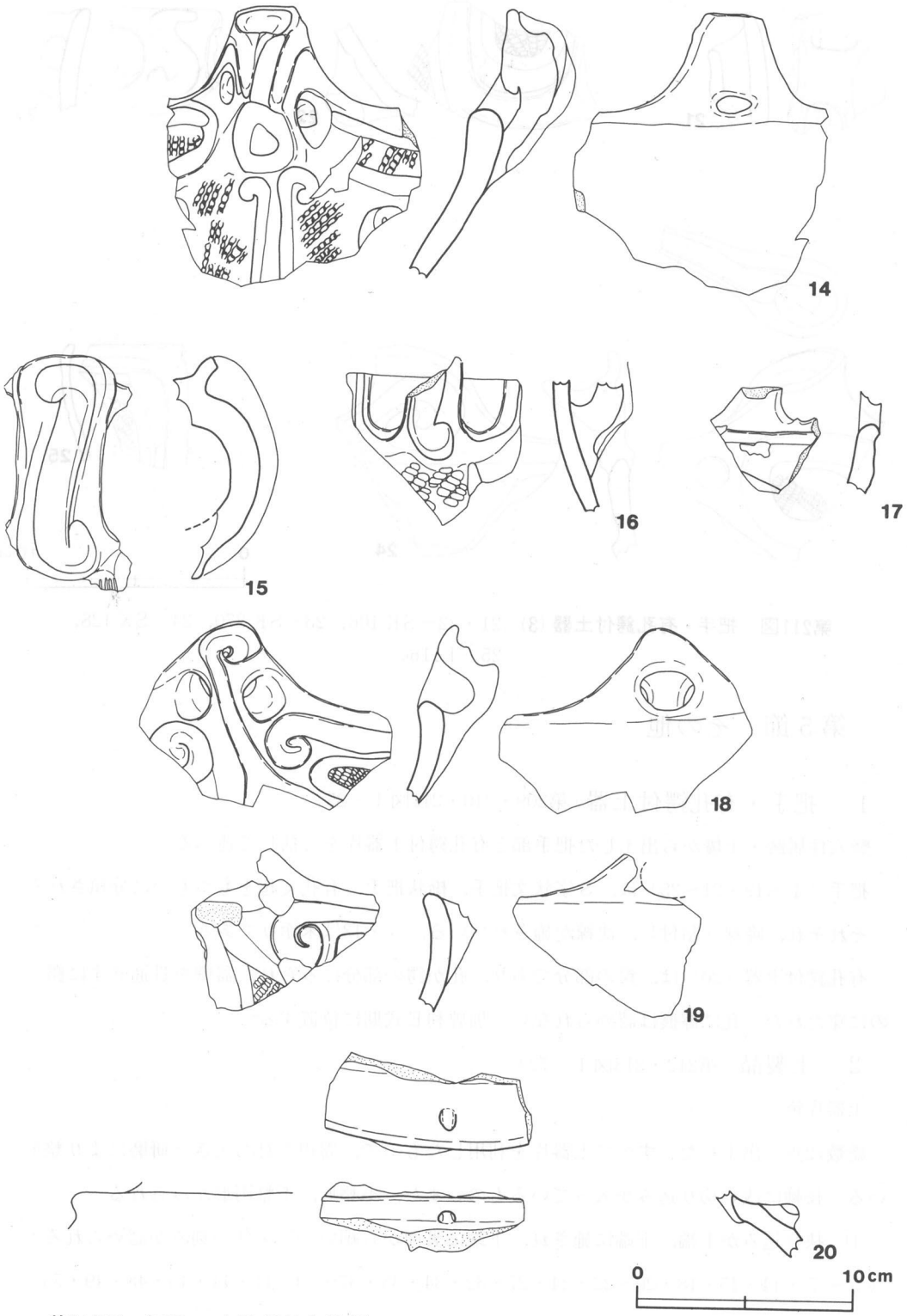
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土 焼成 色調	備考
56号住⑦居跡	底部破片	B(7.4) C 6.5	胴部～縦位の沈線。	砂粒・スコリア・長石微粒 赤・褐灰色	193図
57号住①居跡	胴部破片	B 23.5	胴部～縦位の沈線。	砂粒(少)・赤・にぶい橙・橙色	194図
63号住①居跡	深鉢形土器	A(28.5) B(11.1)	口縁部～沈線文。「Y」字状の沈線。	砂粒・スコリア・橙・灰褐色	195図
②	胴部破片	B(12.3)	胴部～縦位の沈線。	砂粒・スコリア・長石粒・石英粒・橙色にぶい橙・褐灰色	195図
68号住①居跡	深鉢形土器	A(47.4) B(13.1)	口縁部～隆帯による楕円文。胴部～縦位の沈線。原体～口縁部はLの縦位回転縄文，胴部～Lの横位回転縄文。	砂粒・スコリア 淡橙・にぶい橙色	196図
②	深鉢形土器	A(13.2) B(7.1)	口縁部～変形渦巻文・楕円形区画。胴部～縦位の沈線。原体～口縁部はLの縦位回転縄文。	砂粒(少)・にぶい橙	196図
③	深鉢形土器	A(39.3) B(11.7)	原体～口縁部はRの横位回転縄文。	砂粒(少)・にぶい橙・褐灰色	196図
④	深鉢形土器	A(48.0) B(10.0)	胴部～沈線「∩」形区画。	砂粒・スコリア・橙・灰褐・にぶい橙色	196図
⑤	キャリパー状の深鉢形土器	A(34.4) B(22.1)	口縁部～列点文。胴部～沈線による波状文。	砂粒・スコリア・橙灰褐・にぶい橙色	196図
⑥	深鉢形土器	A 20.5 B 27.4 C(6.0)	胴部～縦位の条線文。	砂粒(少)・スコリア・浅黄橙・にぶい黄橙色	196図
69号住①居跡	深鉢形土器	A(36.0) B(20.5)	口縁部～隆沈線による変形楕円文。胴部～縦位の沈線。	砂粒・スコリア・橙色・明褐色・灰赤色	197図
②	ミニチュア土器	A 4.4 B 4.1		砂粒・スコリア・にぶい橙・にぶい赤褐色	197図
72号住①居跡	キャリパー状の深鉢形土器	B 4.9	口縁部～隆帯による渦巻文・楕円文区画。胴部～沈線による「∩」形区画。	砂粒・赤橙・浅黄橙色	198図
74号住①居跡	深鉢形土器	A(19.7) B(12.1)	口縁部～隆沈線による横位の渦巻文・楕円文。胴部～縦位の条線文。	砂粒・スコリア 橙・灰褐色	199図
77号住①居跡	浅鉢形土器	A(10.4) B(8.1)		砂粒・スコリア 橙・にぶい橙色	200図

番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土 焼成 色調	備考
78号住① 居跡	浅鉢形土器	B(15.0)	口縁部～隆沈線による楕円区画。胴部～縦位の条線文。原体～口縁部はRの横位回転縄文。	砂粒・スコリア・長石粒・にぶい橙・褐灰色	201図
10号住① 居跡	須恵器坏		胴部～水挽き痕	長石粒・石英粒 暗青灰・灰色	202図
31号住② 居跡	須恵器坏			長石粒・石英粒・スコリア・黄灰・にぶい橙色	202図
③	須恵器底部破片			砂礫・橙・灰黄褐色	202図
106号 ① 土壙	深鉢形土器底部破片	B(14.0) C 8.4		砂粒(少)・スコリア・長石微粒 にぶい橙・褐灰色	203図
116号 ② 土壙	深鉢形土器	A(31.2) B(18.6)	口縁部～隆沈線による楕円文区画。胴部～縦位の沈線。原体－口縁部はRの横位回転縄文，胴部Rの縦位回転縄文。	砂粒・スコリア にぶい橙・黒褐・浅黄橙色	203図
③	キャリパー状の深鉢形土器	A(55.4) B(13.2)	口縁部～隆帯の渦巻文・楕円文区画。	砂粒・スコリア・浅黄橙・褐灰・にぶい橙・橙色	203図
132号 ④ 土壙	キャリパー状の深鉢形土器	B(28.8)	口縁部～沈線による楕円形文。胴部～縦位の沈線。原体－口縁部Lの横位回転，胴部Lの縦位回転縄文。	砂粒・スコリア・長石微粒・浅黄橙・灰褐・灰白色	203図
248号 ⑤ 土壙	深鉢形土器	A(28.8) B(13.7)	口縁部～波状口縁，隆帯の渦巻文・楕円文区画。胴部～縦位の沈線。原体は口縁部～Rの縦位回転，胴部～Rの横位回転縄文。	砂粒・スコリア・橙・にぶい橙・灰褐色	203図
266号 ⑥ 土壙	鉢形土器	A(33.4) B(17.9)	胴部～縦位の条線文。	砂粒・橙・灰褐・浅黄橙	204図
350号 ⑦ 土壙	鉢形土器	A(29.0) B(14.6)	原体～胴部はRの横位回転縄文。	砂粒・長石微粒・にぶい橙・橙・褐灰色	204図
⑧	小型鉢形土器	A 5.7 B 3.8	原体～胴部はRの横位回転縄文。	砂粒(少)・褐灰色	204図
407号 ⑨ 土壙	鉢形土器	A(49.1) B(30.5)	口縁部～沈線が巡る。	砂粒・スコリア 橙・にぶい橙・黒褐色	204図
407号 ⑩ 土壙	キャリパー状の深鉢形土器	A(41.5) B(26.1)	口縁部～隆沈線による円形・楕円形区画。胴部～縦位の沈線。	砂粒(少)・浅黄橙・褐灰色	205図
418号 ⑪ 土壙	壺	A(19.0) B(15.7)		砂粒・スコリア・にぶい黄橙色	205図
⑫	深鉢形土器	B(25.0)	口縁部～隆沈線による渦巻文・楕円形区画。原体～口縁部はLの縦位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア 橙浅黄・褐灰色	205図

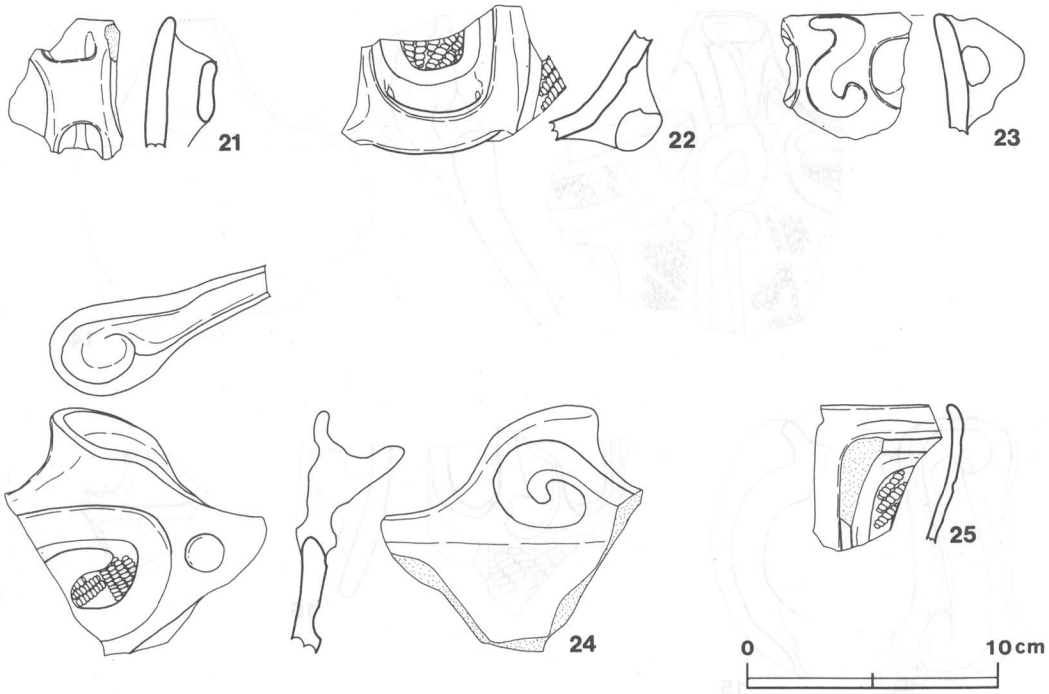
番号	器種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	胎土 焼成 色調	備考
418号土壙 ⑬	小型浅鉢形土器	A(10.1) B 4.2		砂粒(少)・にぶい橙・褐灰色	205図
⑭	器台	B(5.2) C(16.0)		砂粒・スコリア・にぶい橙色	205図
⑮	深鉢形土器	B 23.0	胴部～隆帯による渦巻文・変形楕円形区画。原体～胴部はL縦位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア淡橙・橙・灰黄褐色	205図
⑯	深鉢形土器	B(20.0)	胴部～縦位の沈線　原体～胴部はL縦位回転縄文	砂粒・スコリア橙・浅黄橙色	205図
K9g1 ①	鉢形土器	A 18.7 B(18.0)	胴部～沈線で「∩」形区画。	砂粒・スコリア・褐灰灰褐・にぶい橙色	206図
K9a1 ②	キャリパー状の深鉢形土器	A(43.2) B(29.6)	口縁部～隆帯による円形・楕円形区画。胴部～縦位の沈線。原体～胴部はL縦位回転縄文。	砂粒・スコリア橙・にぶい橙・明褐灰色	206図
K10g1 ③	器台	B 7.3 C 18.2		砂粒・スコリア・褐灰・にぶい橙色	206図
K9j0 ④	器台	A(8.0) B(4.1)		砂粒(少)・スコリアにぶい赤褐・灰褐色	206図
埋甕 ①	深鉢形土器	A(31.2) B(26.2)	口縁部～波状口縁・波状沈線。胴部～縦位の条線文・沈線の「∩」形区画。	砂粒・砂礫(少)・スコリア　長石微粒・赤橙・にぶい褐色	207図 M 1
②	深鉢形土器の胴部破片	B(27.5) C 8.5	胴部～縦位の沈線。原体～胴部はLの縦位回転縄文。	砂粒・橙・褐灰・黄橙色	207図 M 7
③	深鉢形土器	A(60.0) B(29.4)	口縁部～隆帯による楕円区画　原体～Rの縦位回転縄文。	砂粒(少)・スコリア・長石粒・にぶい橙・褐灰・黒褐色	207図 M 4
④	深鉢形土器	A 32.7 B(35.3)	胴部～縦位の条線文，沈線。原体～底部はLの縦位回転縄文。	砂粒・長石微粒・赤・橙色	207図 M 6
⑤	深鉢形土器	B(36.2)	胴部～縦位の沈線。原体～胴部はLの縦位回転縄文。	砂粒・スコリア・橙・にぶい橙・黄橙色	207図 M 3
⑥	深鉢形土器の胴部破片	B 48.8	胴部～縦位の沈線。原体～胴部Rの縦位回転縄文。	砂粒・スコリア・橙・灰褐・褐灰・浅黄橙色	208図 M 5



第209図　把手・有孔鍔付土器(1)　1・2－SI 5，3－SI 6，4－SI 7，5－SI 9，8～10－SI 15，11－SI 17，12－SI 28，13－SI 30



第210図　把手・有孔鍔付土器(2)　14－SI 43，15・16－SI 50，17－SI 68，18～20－SK 106



第211図　把手・有孔鍔付土器(3)　21・22－SK 106，23－SK 270，24－SK 128，25－L11b6

第5節　その他

1　把手・有孔鍔付土器（第209・210・211図1～25）

竪穴住居跡・土壙から出土した把手部と有孔鍔付土器片を一括して述べる。

把手（1～19・21～25）は，S字状文把手，橋状把手，有孔突起をもつものに分類される。

それぞれ，隆線（貼付），沈線が施されている。5・13は朱塗りである。

有孔鍔付土器（20）は，鍔の部分であり，孔が鍔の部分にみられ，器壁を貫通せずに鍔そのものに穿たれた。孔に擦痕は認められない。加曽利E式期に位置する。

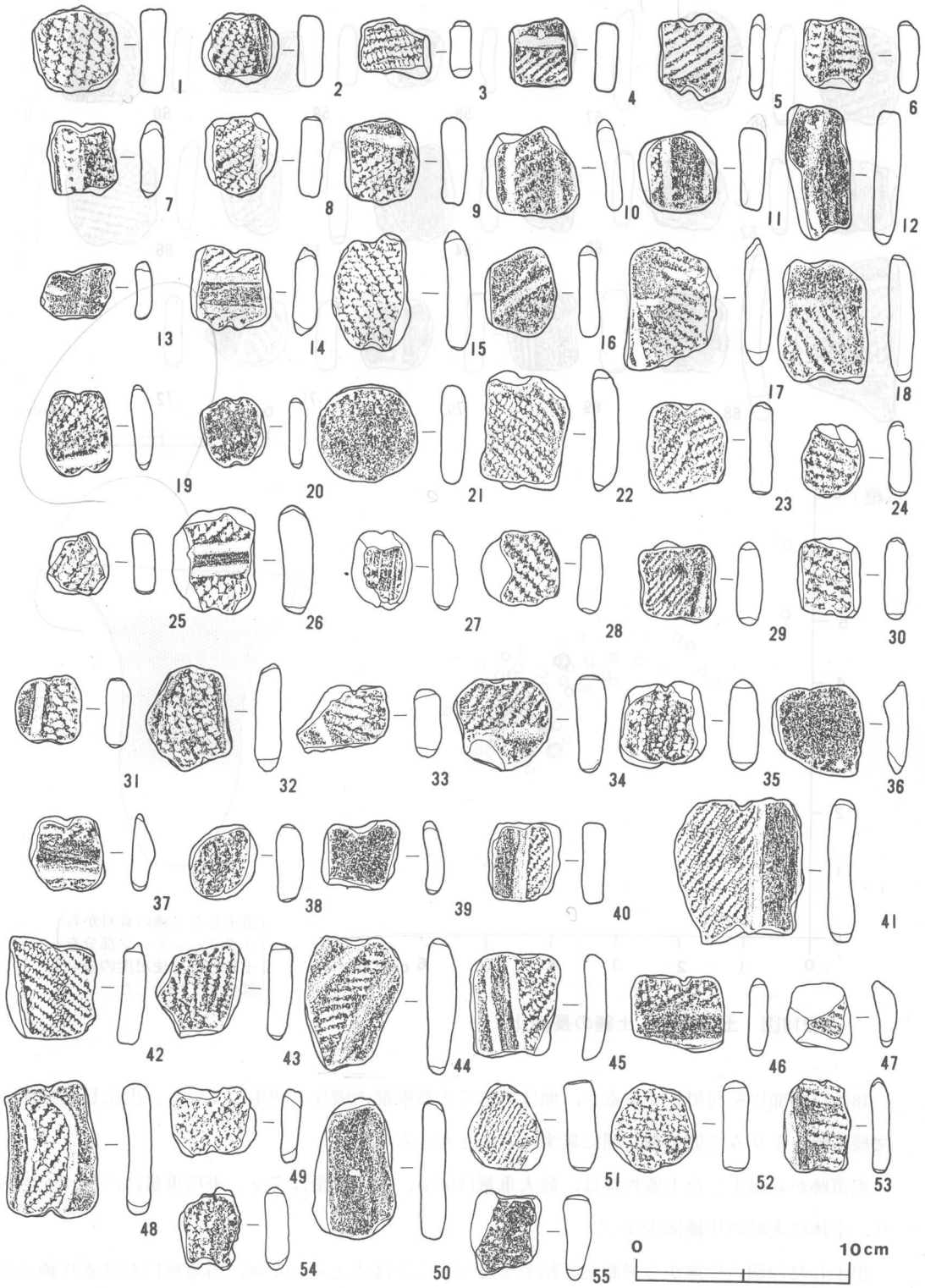
2　土製品（第212・213図1～72）

土器片錘

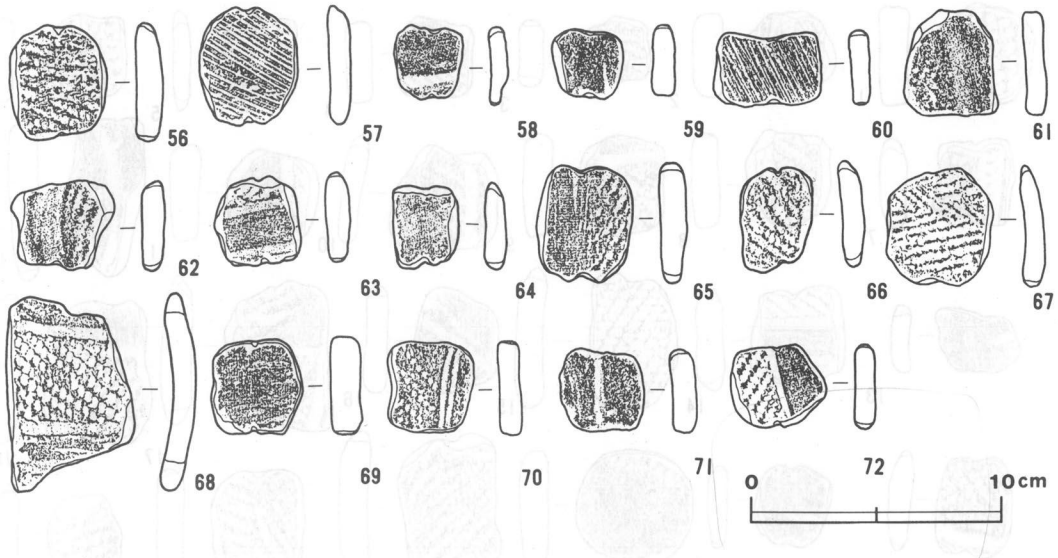
総数72点が出土した。すべて土器片を利用したもので，周辺を打ち欠きと研磨により整形している。長軸に浅い切り込みが入っているもの，また，不整形，不整円形がみられる。

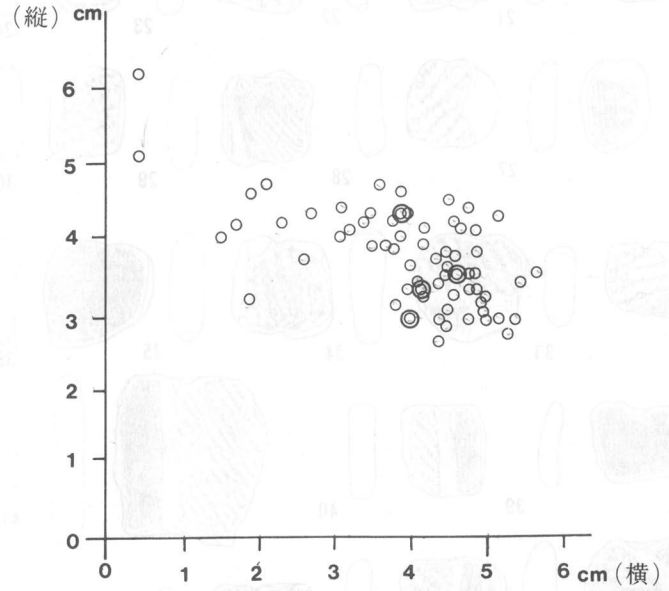
(1)　抉り込みが上端，下端に施され，下端に裏面から細い〝V〟字状の刻みが認められるもの。（5～7・14・15・18・20～22・24・27～32・34・35・37・39～41・44・45・48・49・53～60・63～67・69・71・72）

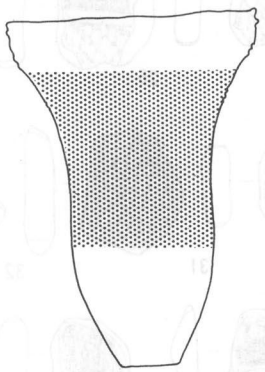
(2)　抉り込みが一方に認められるもの。（3・11・23・26・33・36・38・42・50・62・68）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
0
10cm

第212図　土器片錘







(出土した土錘の資料からスクリーントーン部分を土錘として使用度の多い部分として示した。)

第213図　土器片錘・土錘の長幅比

48は口縁部片を利用しているが，他はすべて土器胴部の破片を利用している。出土した片錘の文様・胎土よりみて加曽利E期に属するものと考えられる。

本遺跡から出土した土器片錘は，最大重量は66ｇ，最小重量は７ｇ，平均重量は，20.8ｇであり，全体に大形の片錘は少ない。

出土した72個の片錘から判断して結果を述べることは考えられるが，当遺跡における片錘の利用方法，形態，用途等については次の様な見解も考えられる。

漁網錘の形態は，土器片錘，切目石錘，有溝土錘，有溝鹿角錘，管状土錘の諸形態がみられる。

土器片錘は土器の破片を利用し，その周囲を長方形，長円形などに打ち欠いて整形したもので，周囲を磨くこともあるが，その長軸の両端に縄掛けのために切り込みを施した錘具であろうと考えられる。出土したすべての片錘が漁網錘として使用されたかは疑問を生じるところである。また本遺跡からは11個の浮子が出土している点からある程度の漁網撈がおこなわれたことが考えられ，大形，小形の片錘を漁撈の方法によって使いわけていたことも考えられる。今後はさらに，資料等の検討（機織，錘，釣針，銛等）を加えて考えていかねばならない問題と思われる。

表5　土錘計測表

図版番号	遺構番号	大きさ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	図版番号	遺構番号	大きさ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
212図1	5号住居跡	4.0×4.1	1.2	25	212図25	17号住居跡	3.0×2.9	1.0	10
212図2	〃	3.3×3.5	1.2	15	212図26	19号住居跡	5.1×4.0	1.5	24
212図3	〃	2.7×3.4	1.0	10	212図27	〃	3.3×2.8	1.1	15
212図4	〃	3.2×2.9	1.0	10	212図28	27号住居跡	3.6×3.8	1.1	21
212図5	〃	4.0×3.2	0.7	10	212図29	29号住居跡	3.8×3.7	1.3	25
212図6	〃	3.3×3.3	0.9	11	212図30	〃	3.7×3.0	1.1	23
212図7	〃	3.4×3.3	1.1	14	212図31	30号住居跡	3.2×3.2	1.1	19
212図8	〃	3.8×3.4	1.0	15	212図32	33号住居跡	5.0×4.1	1.2	31
212図9	〃	4.1×3.4	1.1	16	212図33	〃	3.4×4.4	1.3	21
212図10	〃	4.3×4.3	0.8	16	212図34	〃	4.3×4.6	1.4	37
212図11	〃	3.7×3.6	0.7	19	212図35	40号住居跡	4.2×4.1	1.3	31
212図12	〃	6.3×3.2	1.1	26	212図36	〃	4.2×4.3	1.1	24
212図13	〃	2.5×3.5	0.8	7	212図37	42号住居跡	3.2×3.5	1.1	19
212図14	6号住居跡	4.0×3.9	1.1	23	212図38	〃	3.6×3.2	1.2	16
212図15	〃	5.6×3.7	1.1	22	212図39	〃	3.3×3.8	0.8	11
212図16	〃	4.2×3.3	1.0	15	212図40	〃	3.7×3.5	1.1	24
212図17	9号住居跡	6.1×4.2	1.2	30	212図41	〃	7.8×6.2	1.3	66
212図18	〃	5.9×4.4	1.2	29	212図42	43号住居跡	4.7×4.3	1.1	25
212図19	14号住居跡	4.0×3.2	1.0	14	212図43	〃	4.4×4.2	1.2	17
212図20	〃	3.3×4.1	0.8	14	212図44	〃	6.3×4.6	1.4	43
212図21	15号住居跡	4.6×4.7	1.1	29	212図45	45号住居跡	5.1×4.4	1.0	26
212図22	〃	5.5×4.3	1.2	41	212図46	〃	3.7×4.5	0.9	19
212図23	〃	4.3×4.3	1.1	20	212図47	〃	3.2×3.0	0.9	10
212図24	〃	3.4×3.1	1.1	11	212図48	50号住居跡	6.5×4.2	1.3	36

図版番号	遺構番号	大きさ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	図版番号	遺構番号	大きさ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
212図49	50号住居跡	3.5×4.1	0.9	19	213図61	69号住居跡	4.4×3.8	0.8	16
212図50	〃	6.7×4.0	1.2	31	213図62	〃	3.6×4.2	0.9	14
212図51	63号住居跡	4.2×3.6	1.5	23	213図63	72号住居跡	3.4×3.5	1.0	15
212図52	〃	4.3×4.6	1.3	27	213図64	74号住居跡	3.4×2.6	0.9	16
212図53	〃	4.4×3.1	0.9	15	213図65	78号住居跡	4.2×3.9	1.1	24
212図54	〃	3.8×2.9	1.2	14	213図66	421号土壙	4.2×2.9	0.9	14
212図55	〃	4.0×3.3	1.5	21	213図67	$J10f_4$	4.8×4.4	0.9	25
213図56	68号住居跡	4.5×3.9	1.1	25	213図68	$L11b_6$	7.8×5.1	0.9	46
213図57	〃	4.7×3.9	1.0	22	213図69	$K10j_2$	3.7×3.8	1.3	21
213図58	〃	2.9×2.7	1.0	8	213図70	$J10e_1$	3.6×3.5	0.9	15
213図59	〃	2.8×2.9	0.9	10	213図71	$J10j_1$	3.3×3.5	1.0	16
213図60	〃	3.0×4.3	0.8	15	213図72	$J10j_1$	3.4×2.9	0.8	16

3　石器

筒戸A・B遺跡には，縄文時代中期の遺構，遺物が平安時代の遺構（住居跡2軒）と一部重複しながら検出された。

ここで報告する石器類についても当然廃棄，投棄された状態で出土したものがあり，このことを考慮すると，出土した石器は，住居跡の営まれた時期と同一時期として把握することは必らずしもできない。

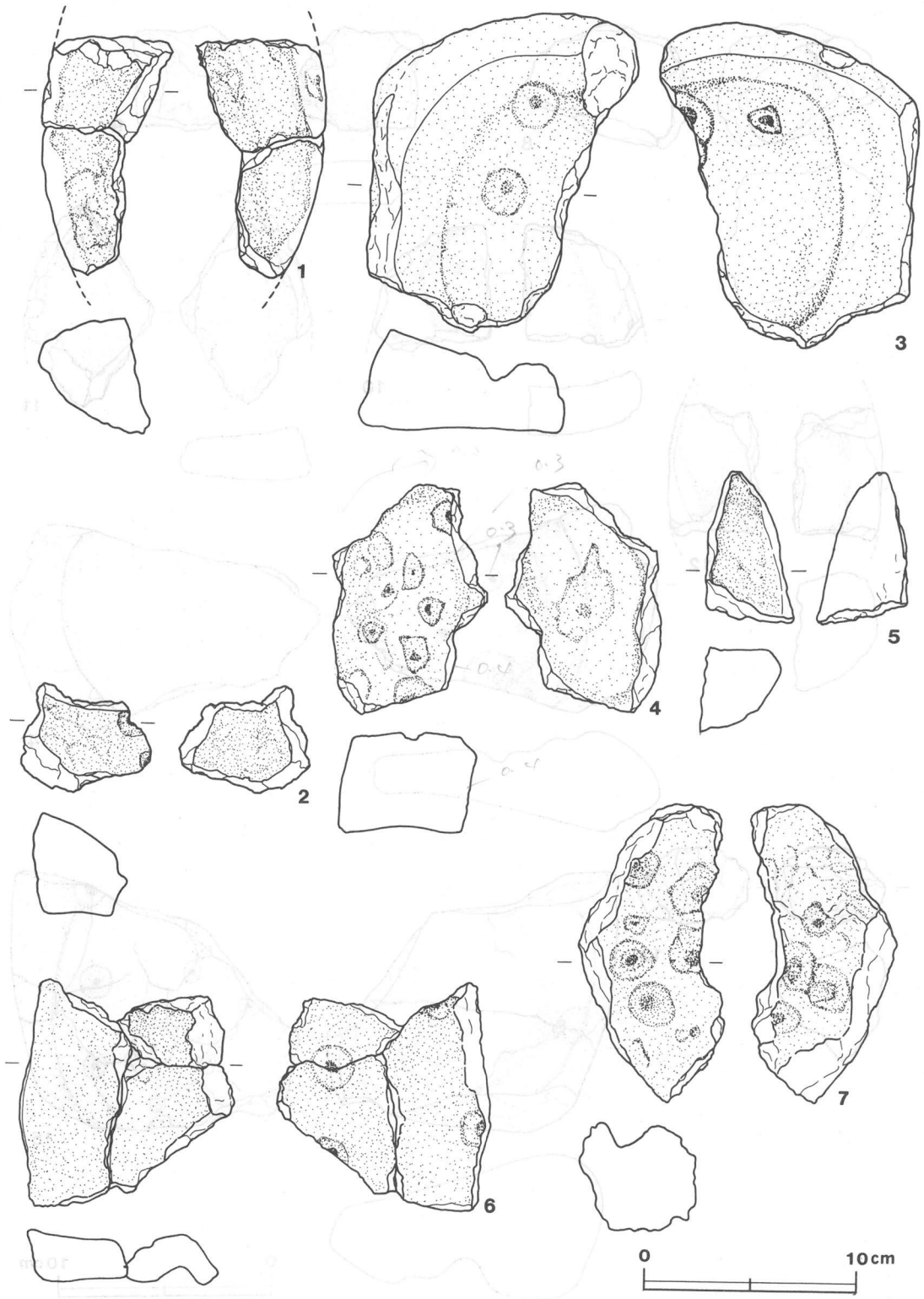
また，石器自体に生活痕跡が認められ，出土量の多い石器類（石皿・磨石・石鏃・石斧）の用途等を考えると，筒戸A・B遺跡における社会背景・経済状況等（食糧採集・加工等）が若干であるが推察できるのではなかろうか。出土石器の出土区，石質別一覧表は表6に，それぞれ示した。法量で（　）がつけられた数字は，すべて現存長を示す。

以上の点をふまえ，石器の器種ごとに説明をおこなう。

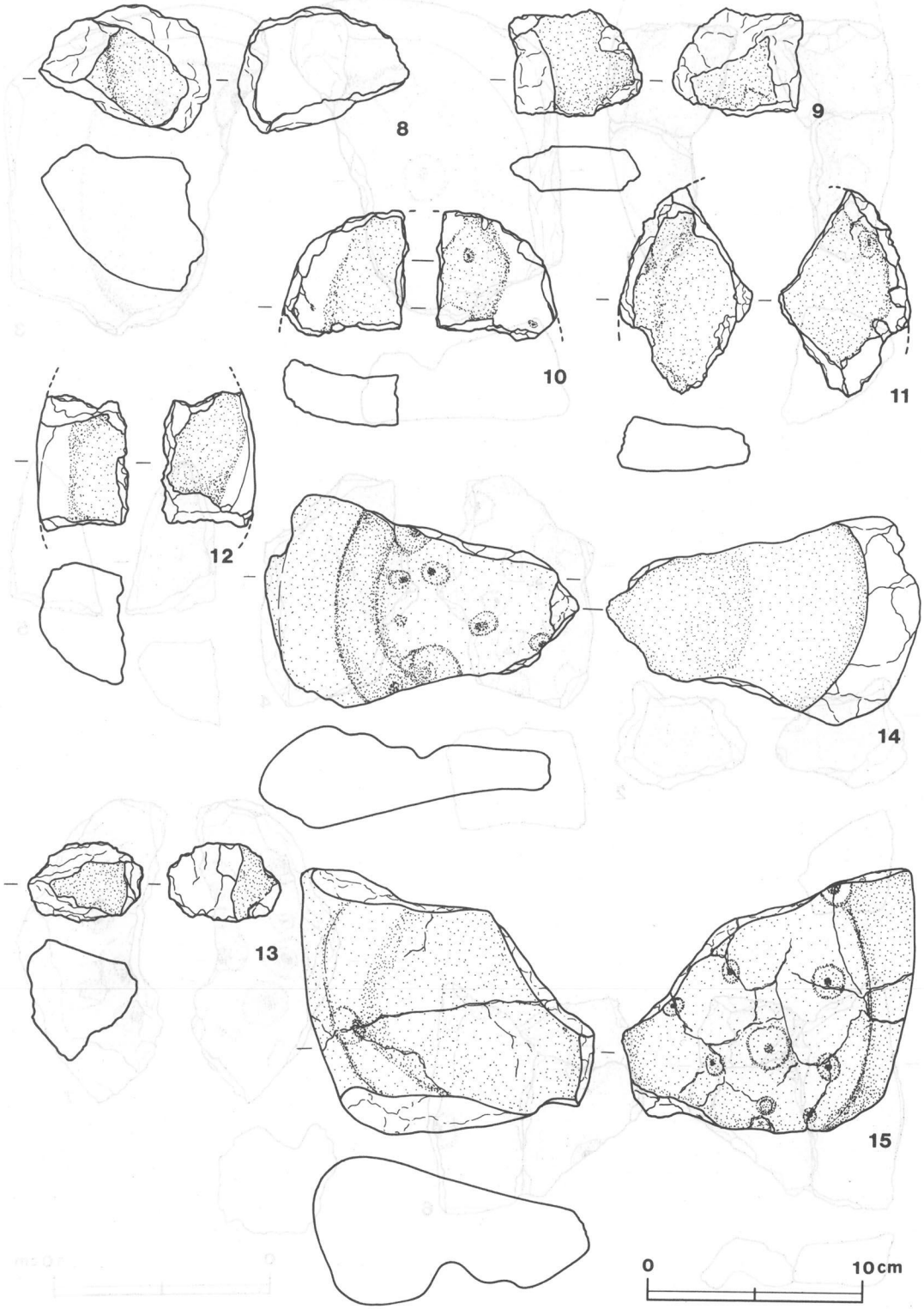
(1)　石皿（第214～220図1～43）

総数46点。当遺跡出土の石皿は，すべて破片であり，石皿として使用した後，大部分が二次利用されている。また凹面には使用痕が観察でき，裏面には，凹穴が認められる。

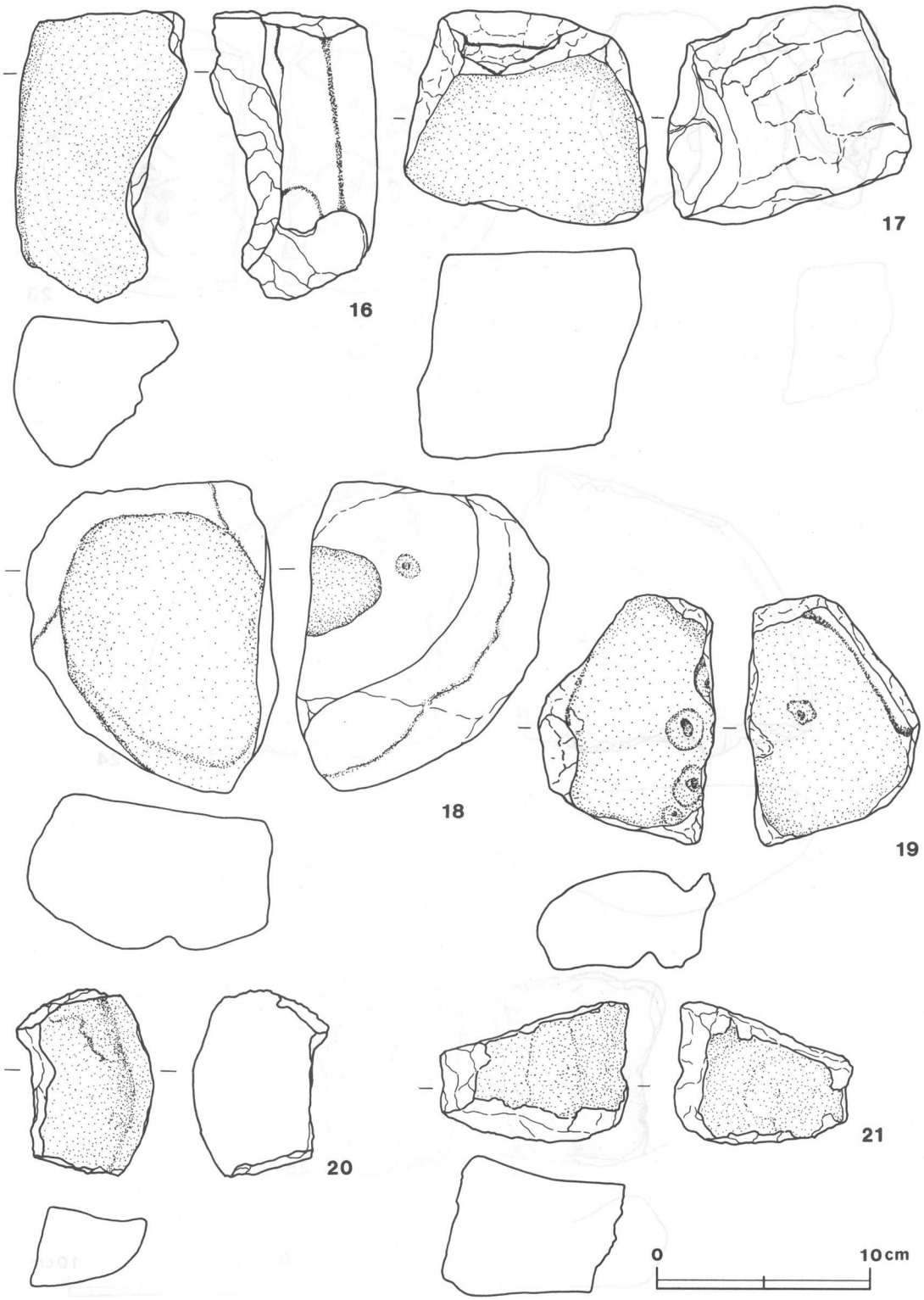
石皿の用途は，対象物の破砕，粉化が目的であり，打撃痕・調整痕が使用痕跡として場所によって認められる。また，磨耗は皿部に特に認められる。皿部は舟底状を呈するものと広く平坦状を呈するものとに分けられ，これは磨石等の形状，作動のあとをある程度反映しているものと考えられる。石質は多孔質安山岩，角閃石安山岩等を主に使用している。



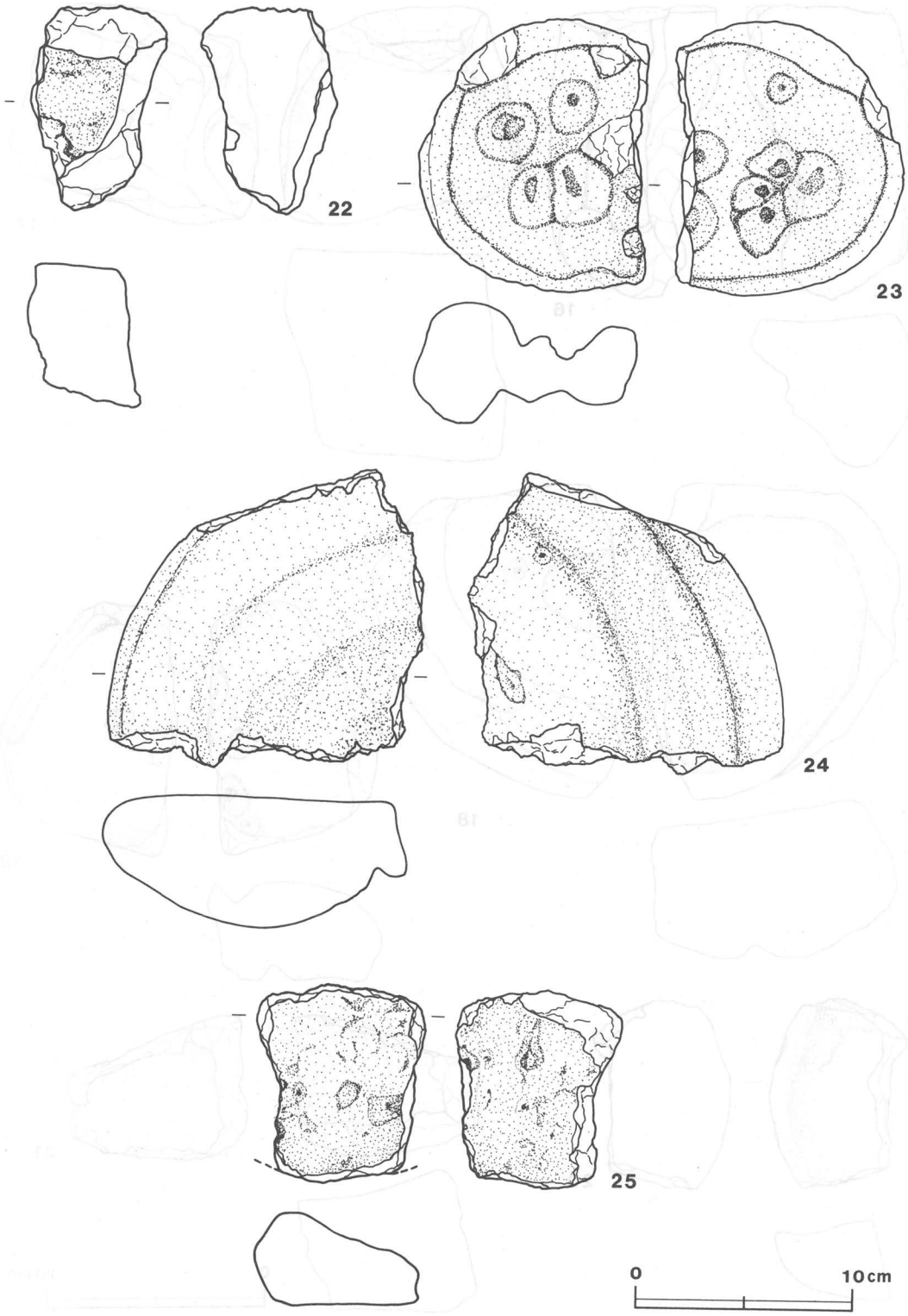
第214図　石皿(1)



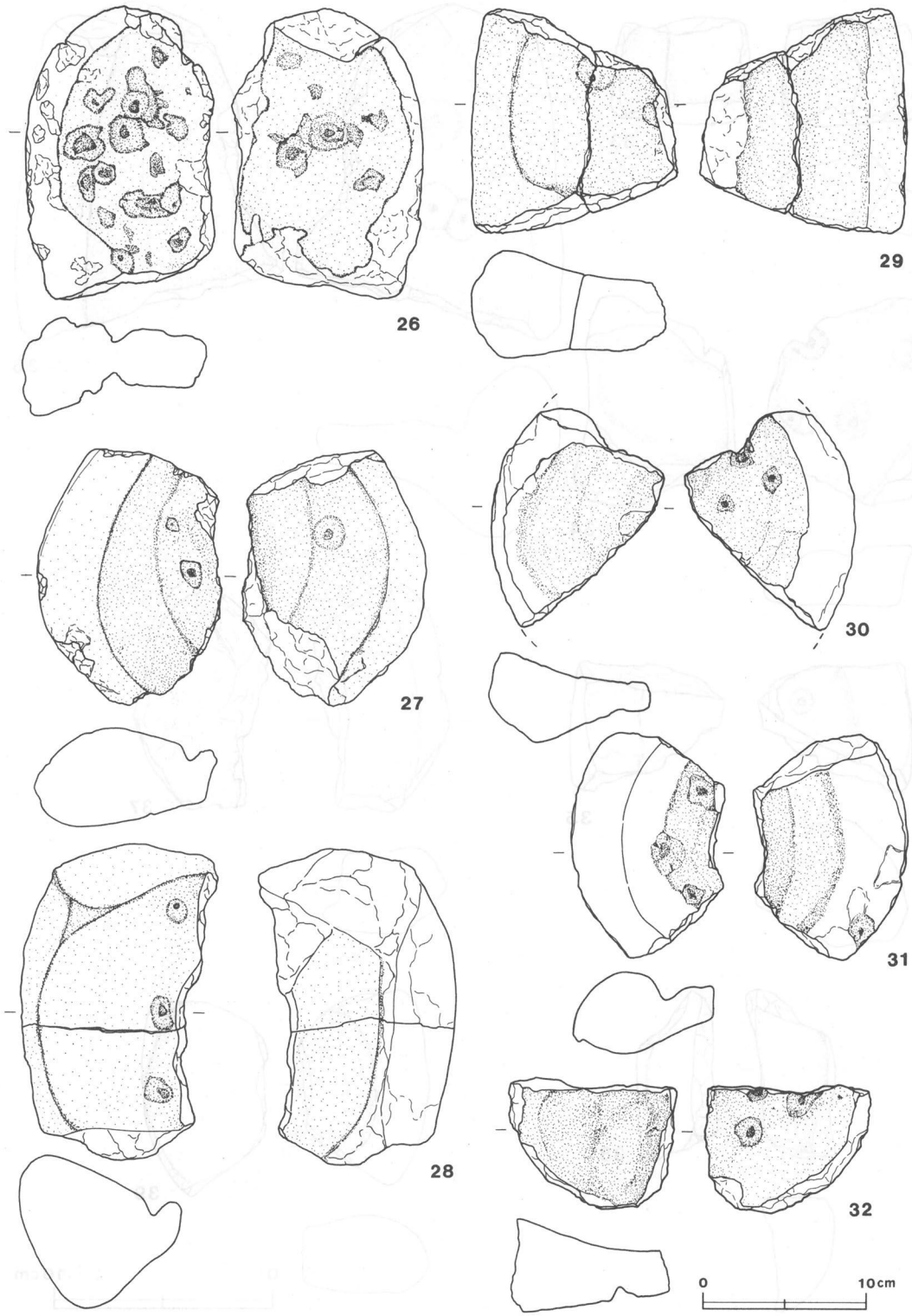
第215図　石皿(2)



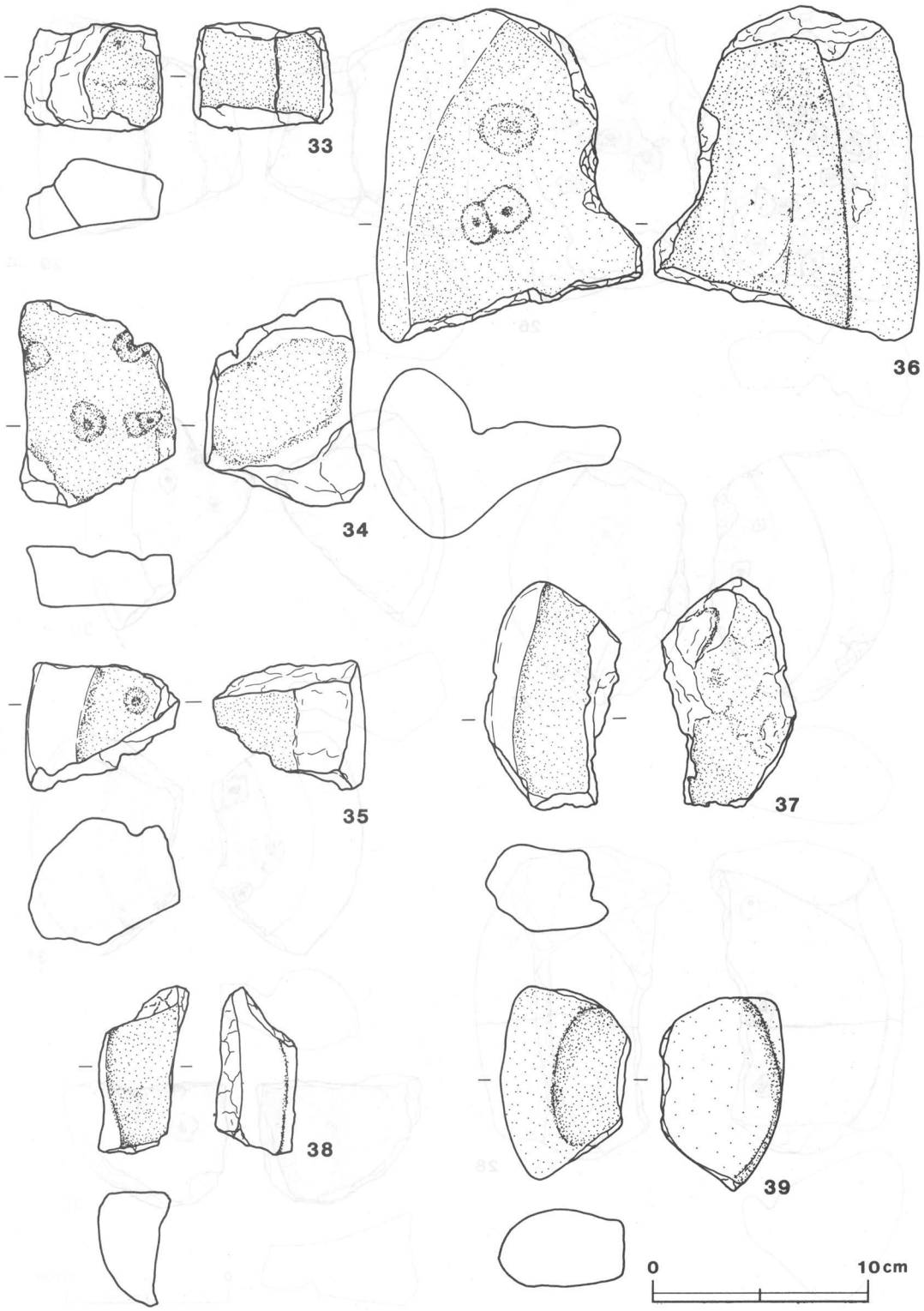
第216図　石皿(3)



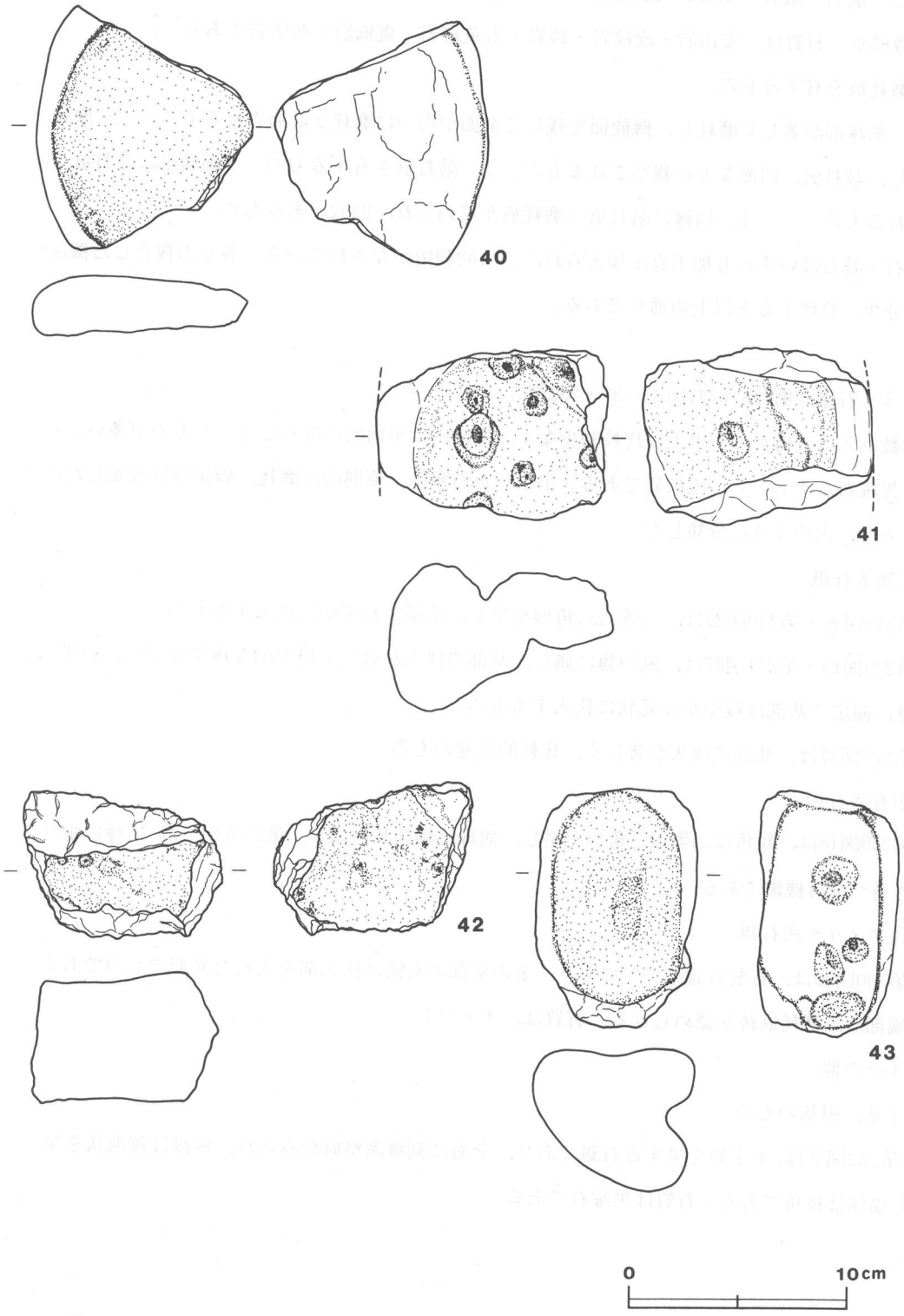
第217図　石皿(4)



第218図　石皿(5)



第219図　石皿(6)



第220図　石皿(7)

(2) 磨石・敲石（第221～227図１～81）

総数85点。石質は，安山岩・流紋岩・砂岩・石英斑岩・斑糲岩・花崗岩である。

○磨耗痕を有するもの。

1，側縁部が著しく磨耗し，機能面を残して全面が均一に磨耗が認められるもの。2，磨耗痕を残し，敲打痕，凹面などが観察されるもの。3，敲打痕を有するもの。（両端部に敲打痕が認められるもの。）　4，周縁に敲打痕・磨耗痕が認められ，凹穴があるもの。

磨石・敲石はいずれも加工痕が加えられ，二次的利用がなされている。各々の複合した機能により分類，整理すると以上の通りである。

(3) 石鏃（第228～231図１～37・232図３）

総数38点。遺構からの出土は比較的少なく，遺跡内に平面的に散布していたものが多い。石質は，黒曜石，チャート，流紋岩である。出土した石鏃は，原則的に磨耗，破損等は復元した状況でとらえ，次のように分類した。

①無茎石鏃

第228図８・第230図21は，二等辺三角形を呈し，基部がわずかに抉入するもの。

第229図15・第231図37は，鍬型鏃に属し，基部の抉入が著しく典型的な鍬型を呈し，いずれも薄身，幅広で基部は緩やかな弧状に抉入するもの。

第229図17は，基部の抉入が著しく，比較的長身のもの。

②有茎石鏃

第229図18は，鋭角な二等辺三角形を呈し，側縁は鋸歯状を呈し，第230図８は，側縁に張り出しを持つ飛行機鏃である。

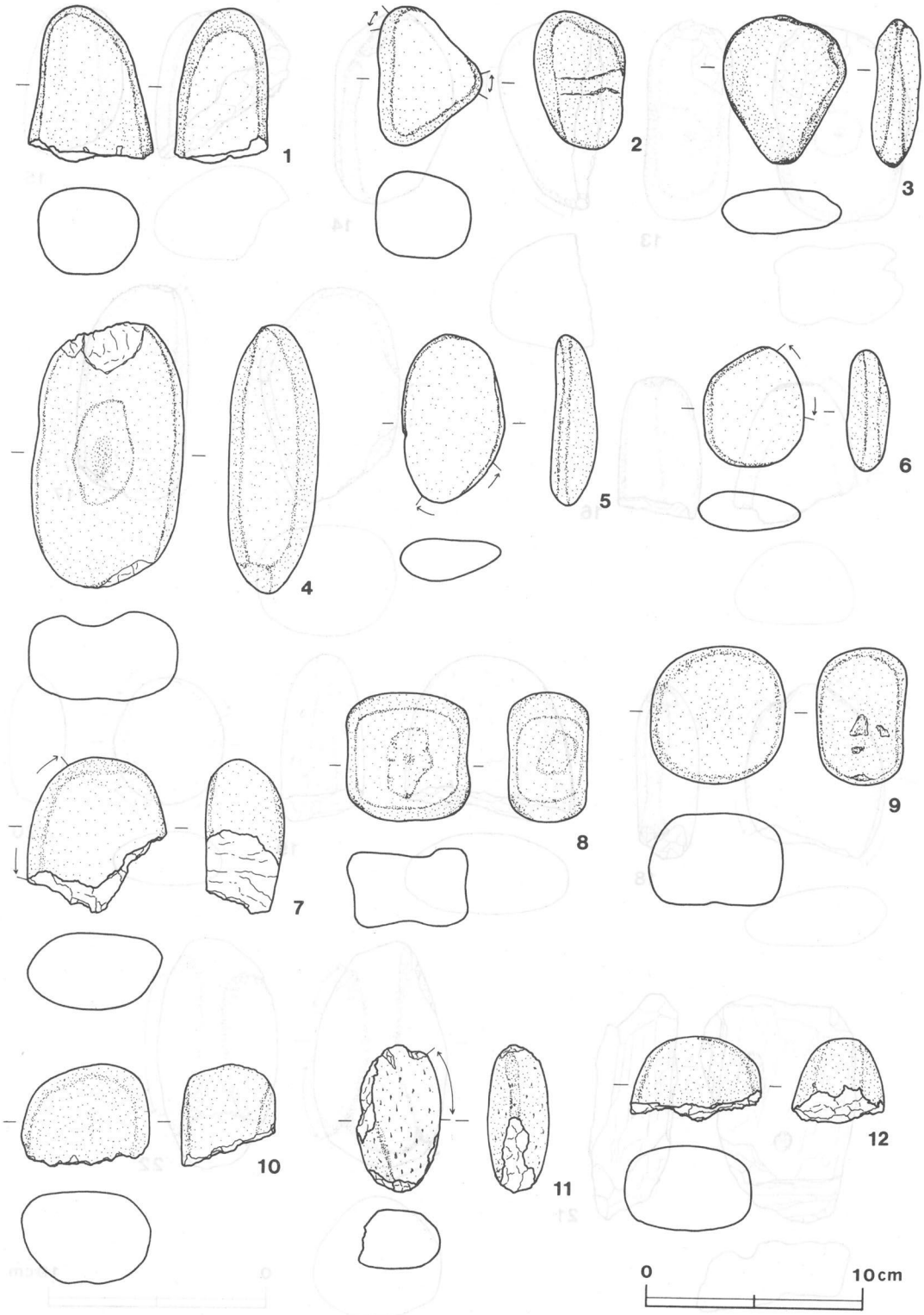
③アメリカ式石鏃

第230図30は，打製石鏃の一型であり，茎の基部の両側に抉入部を入れた異形のものである。尖端部は，磨耗痕跡が認められる。石質は，チャート。

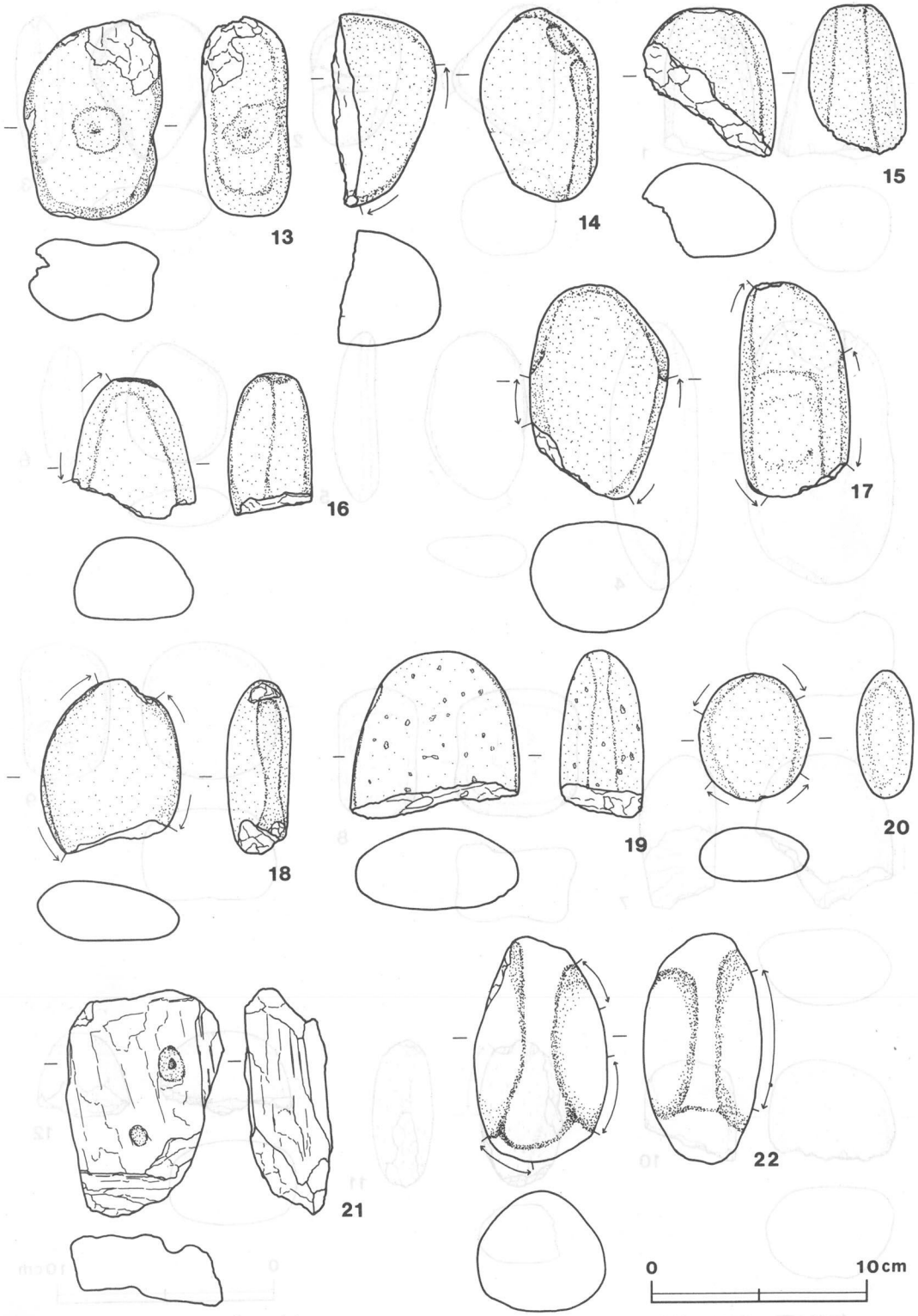
④その他

平基，円基のもの。

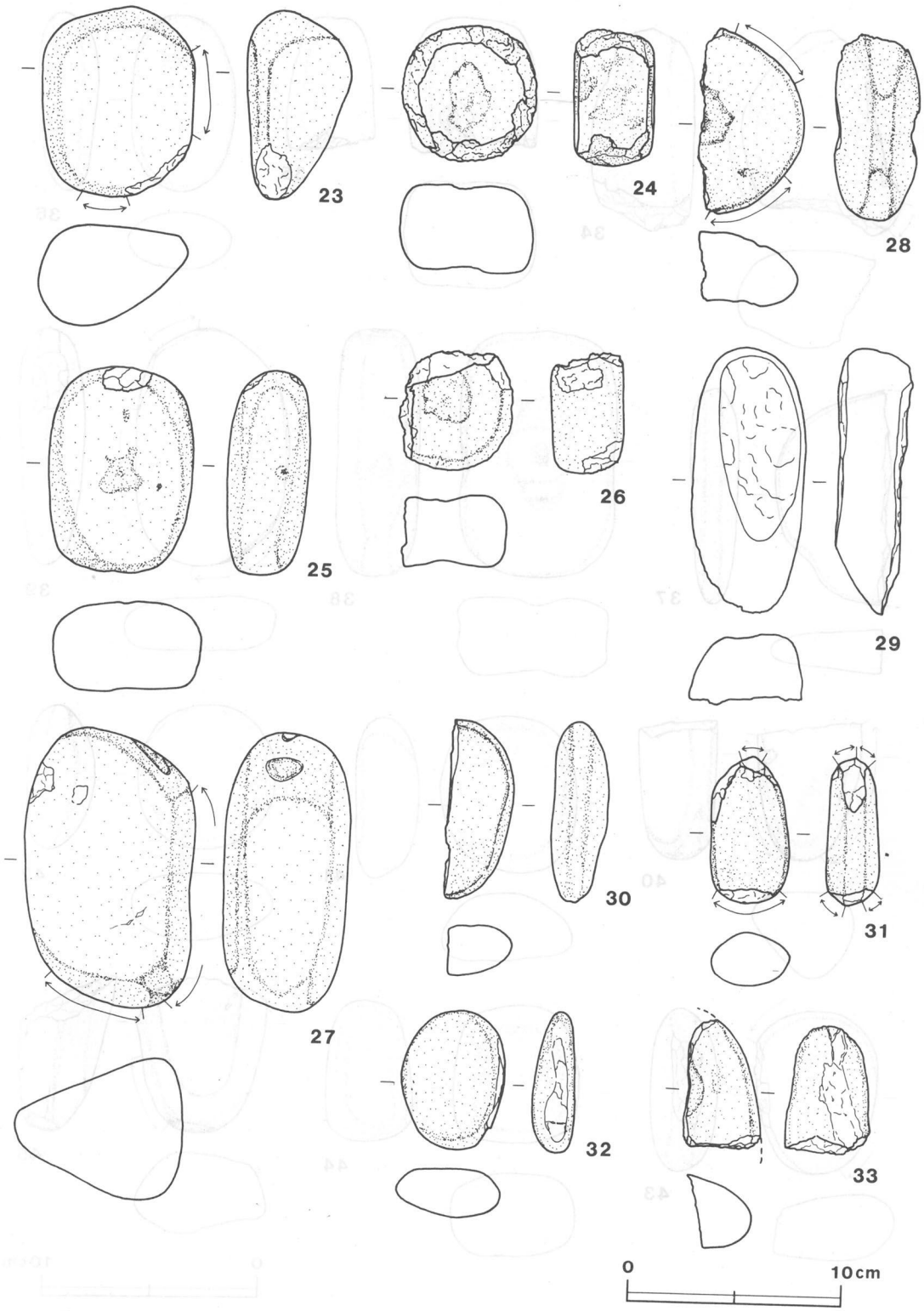
第232図３は，十字形を呈する石鏃であり，全面に剥離調整痕がみられ，側縁は鋸歯状を呈し，先端部は鋭角である。石質は黒曜石である。



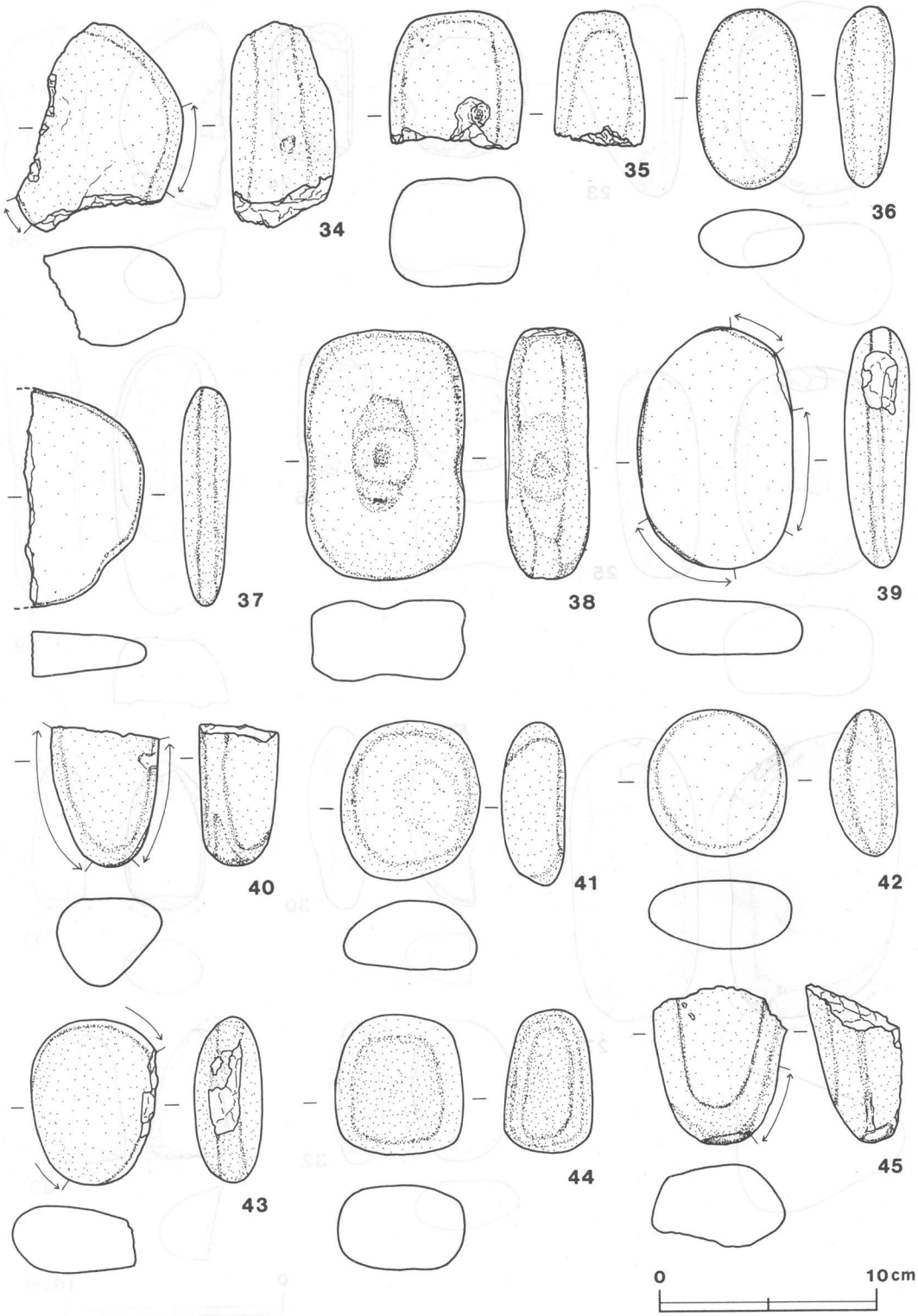
第221図　磨石・敲石(1)



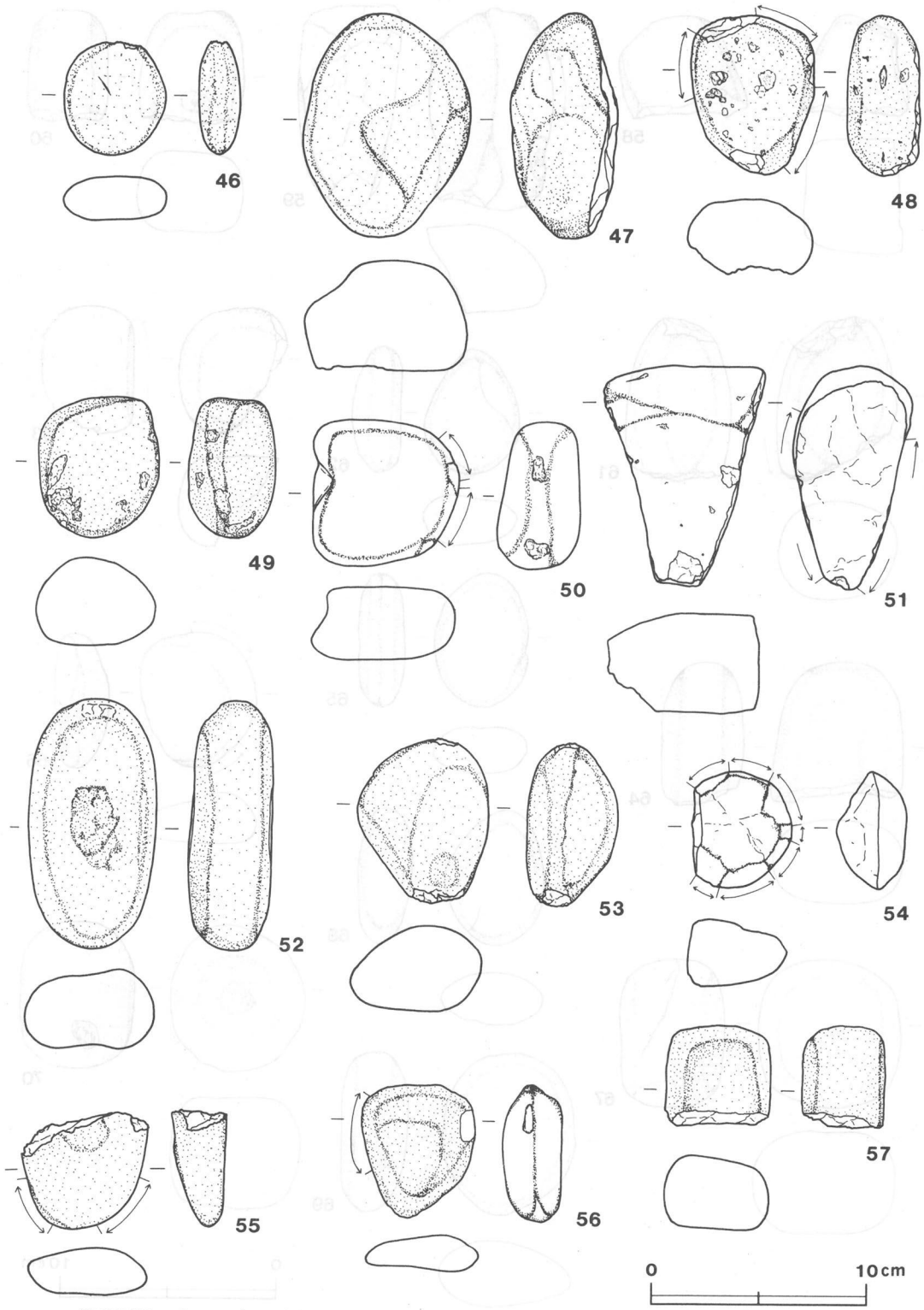
第222図　磨石・敲石(2)



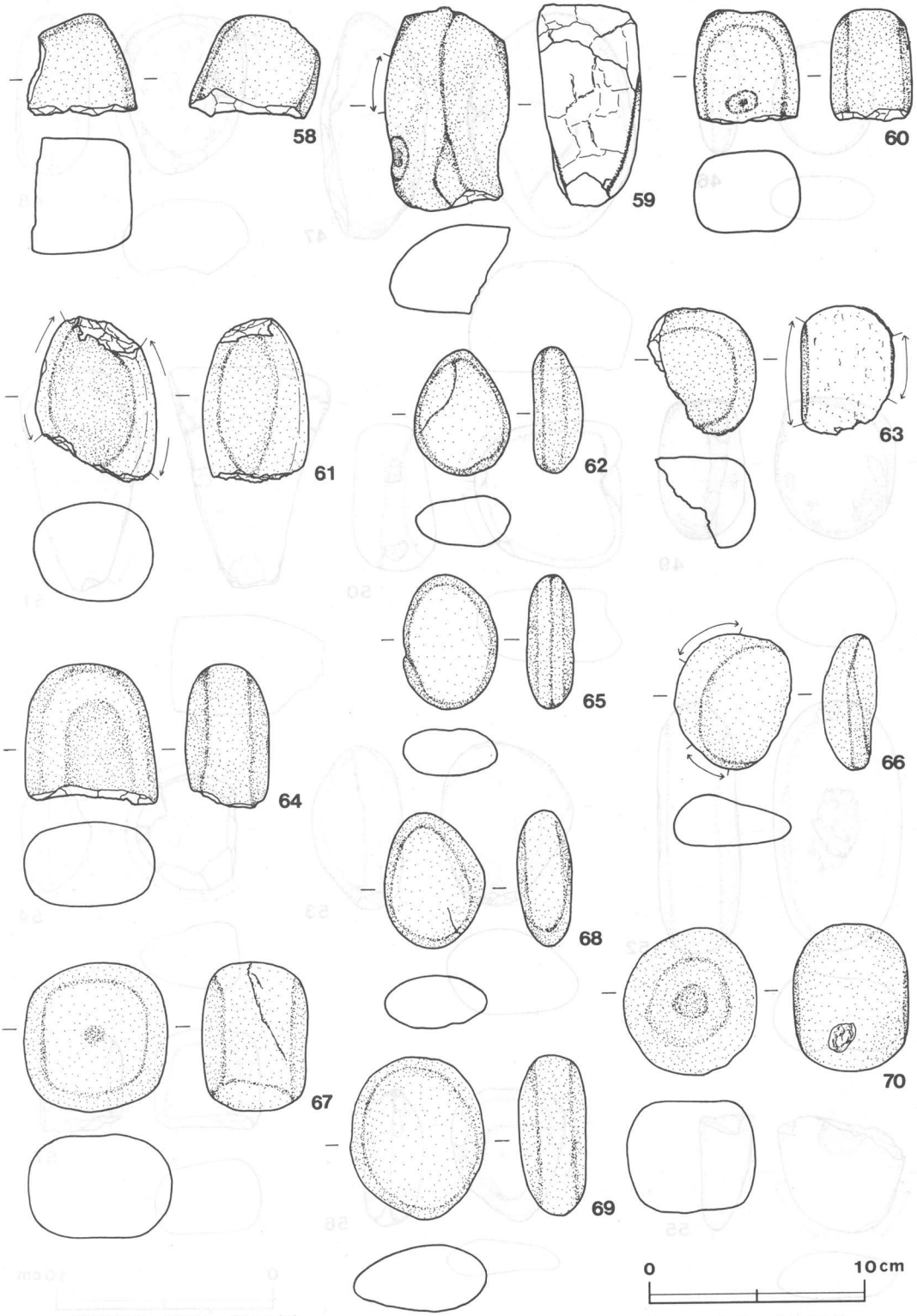
第223図　磨石・敲石(3)



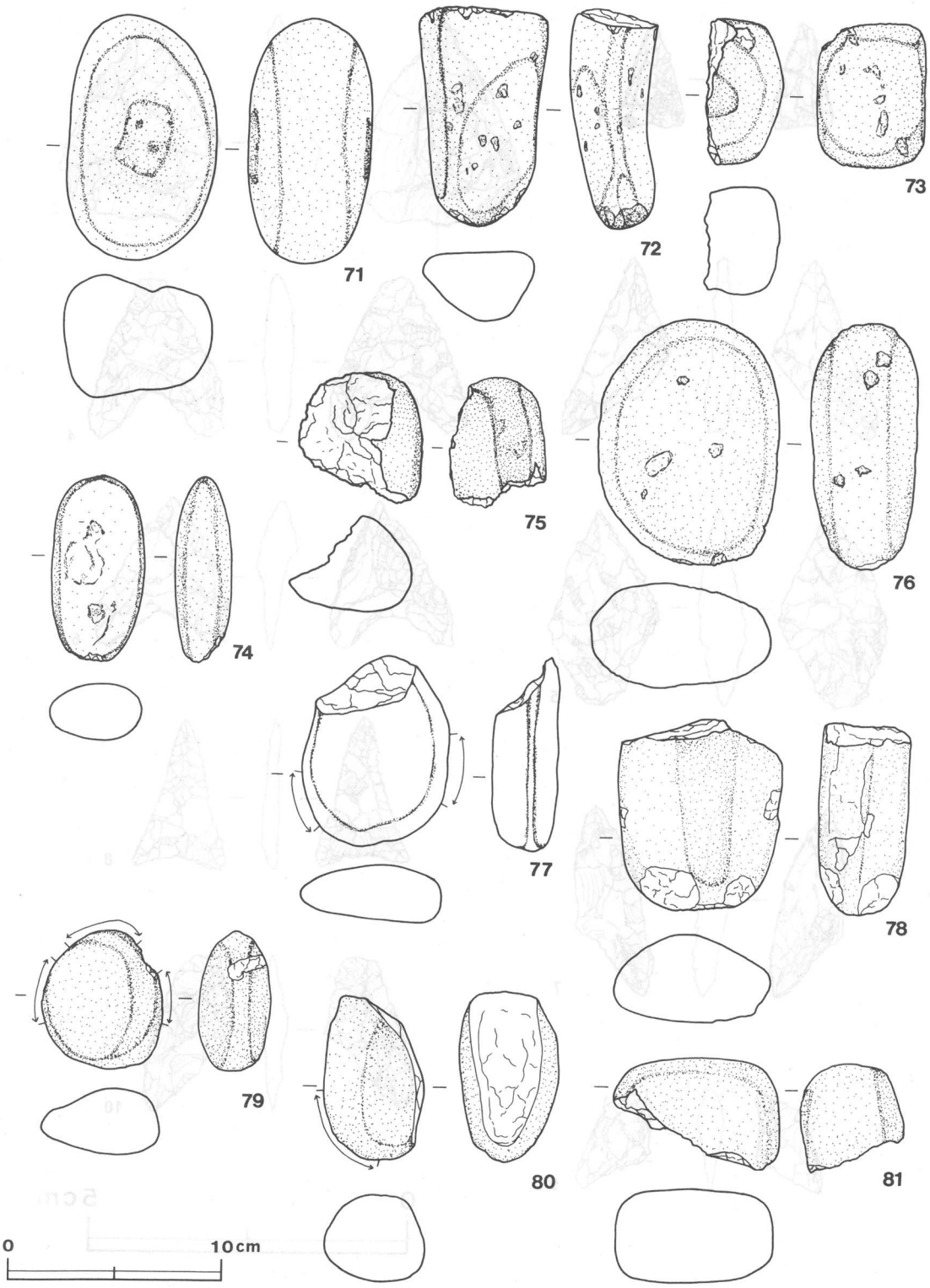
第224図　磨石・敲石(4)



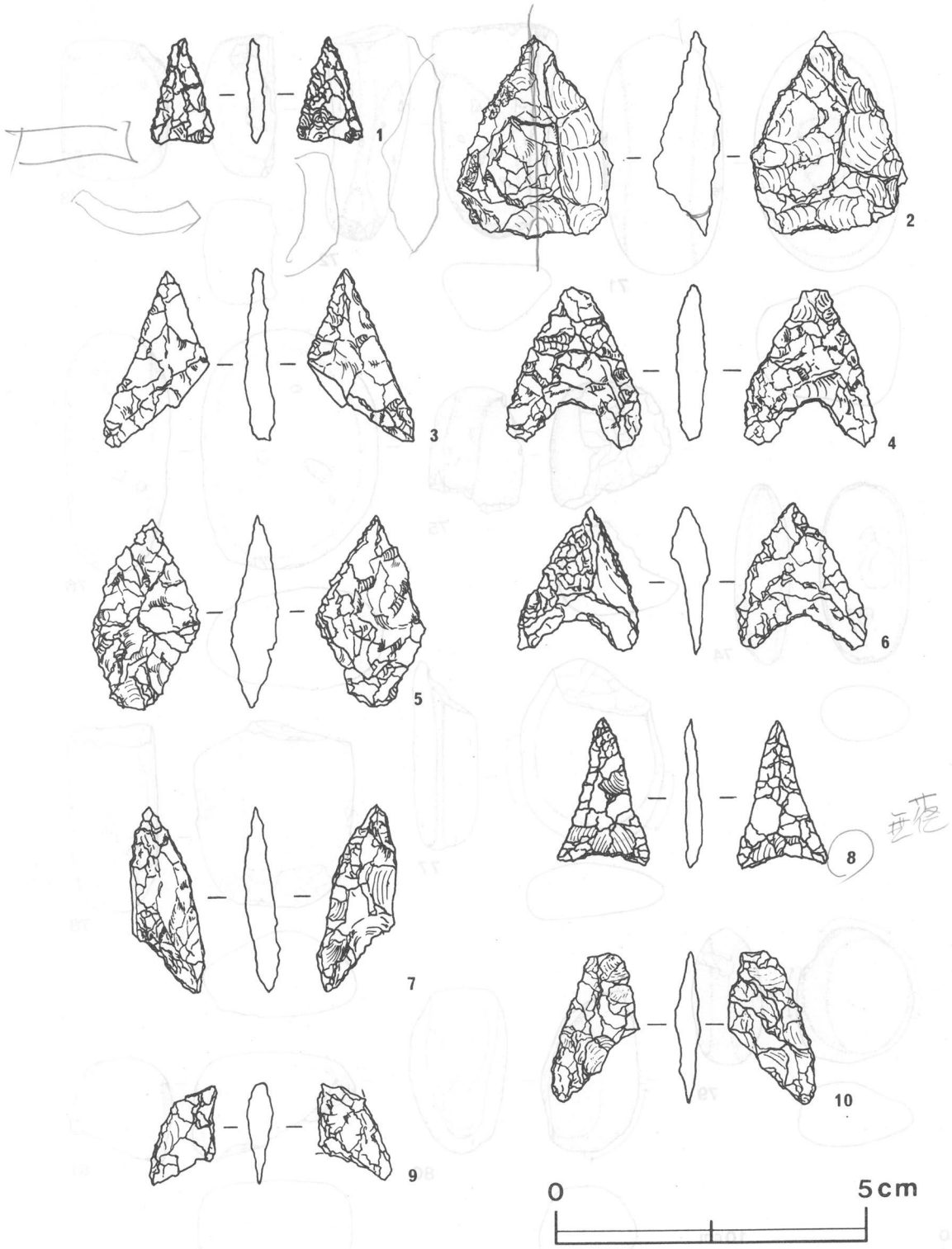
第225図　磨石・敲石(5)



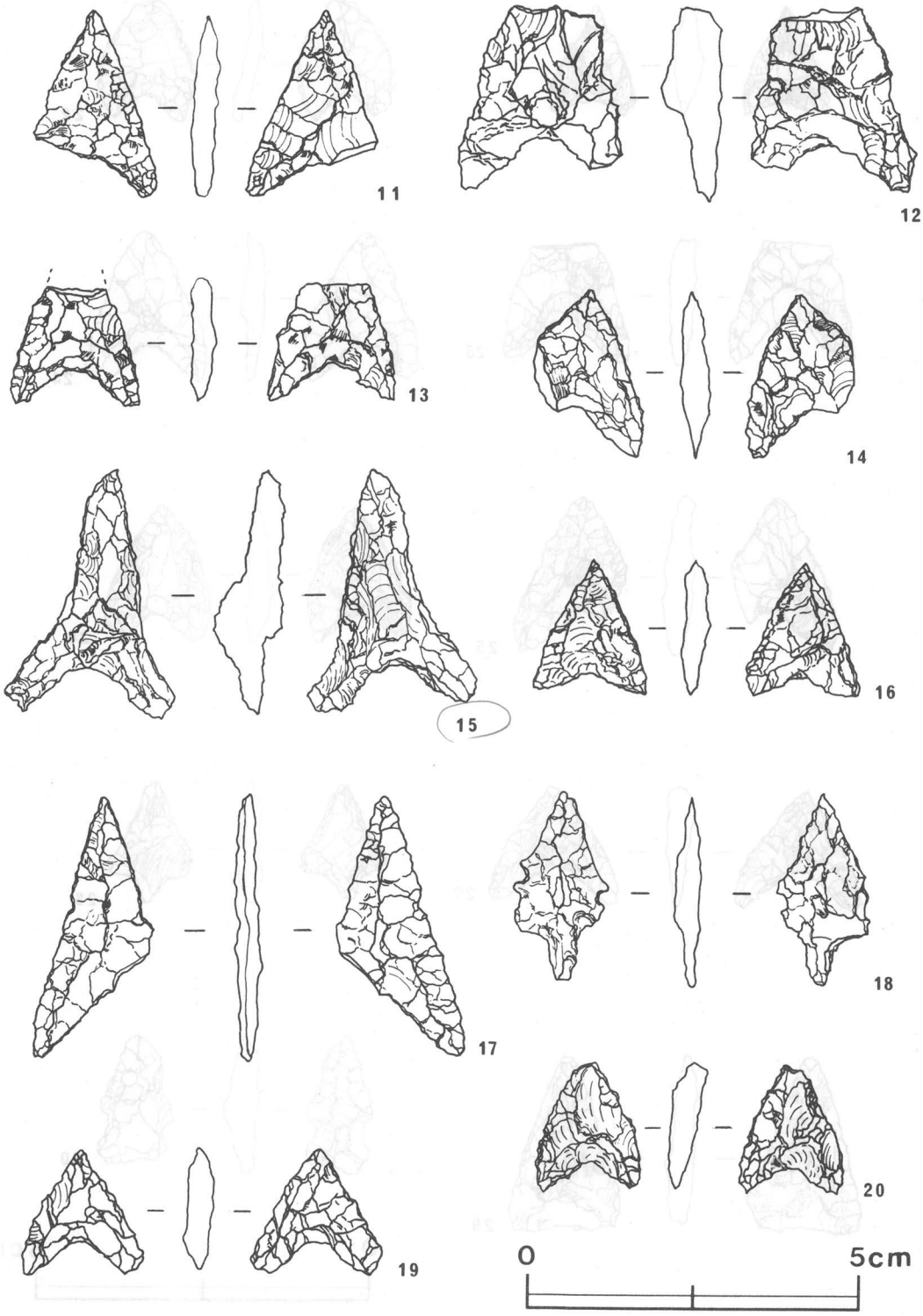
第226図　磨石・敲石(6)



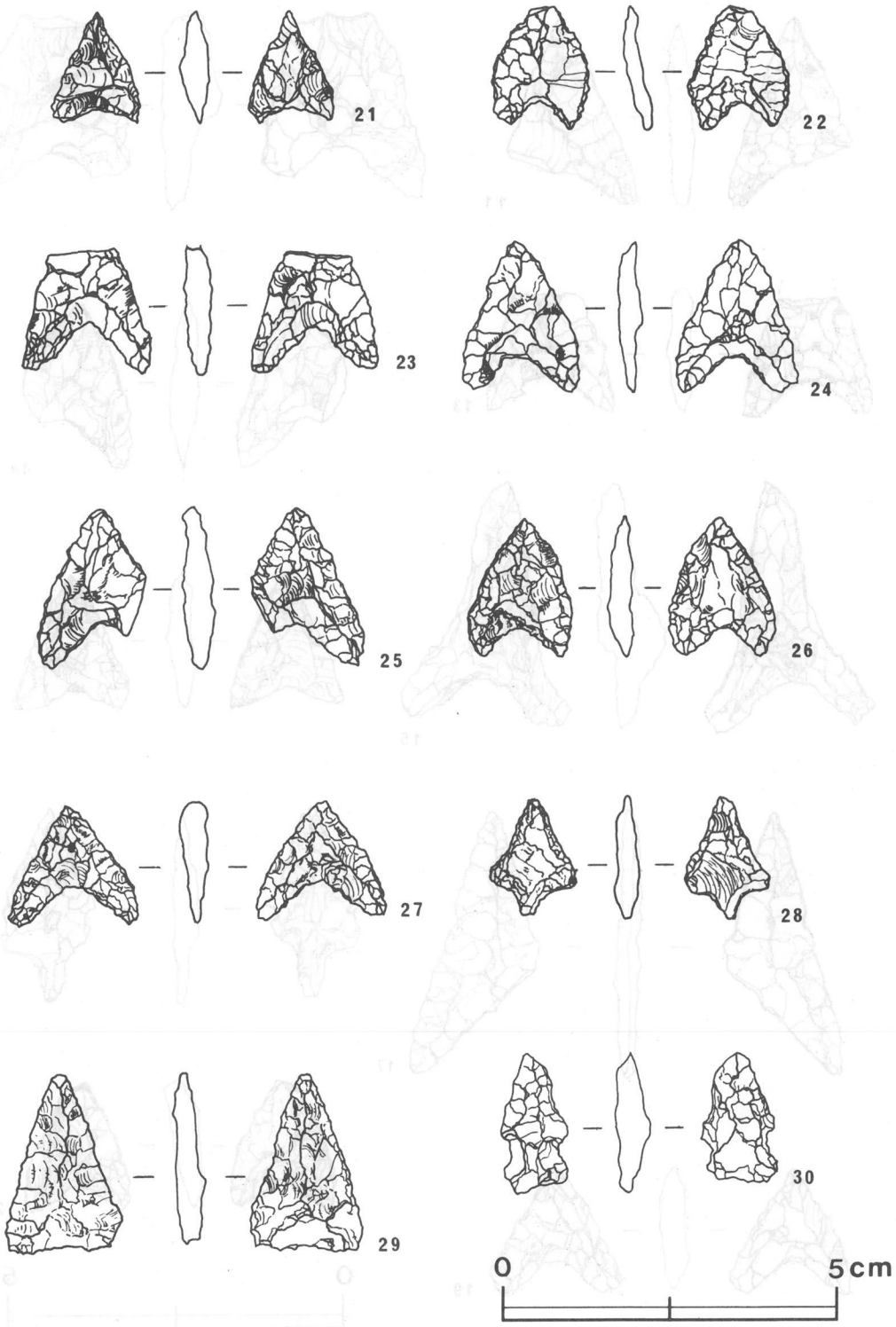
第227図　磨石・敲石(7)



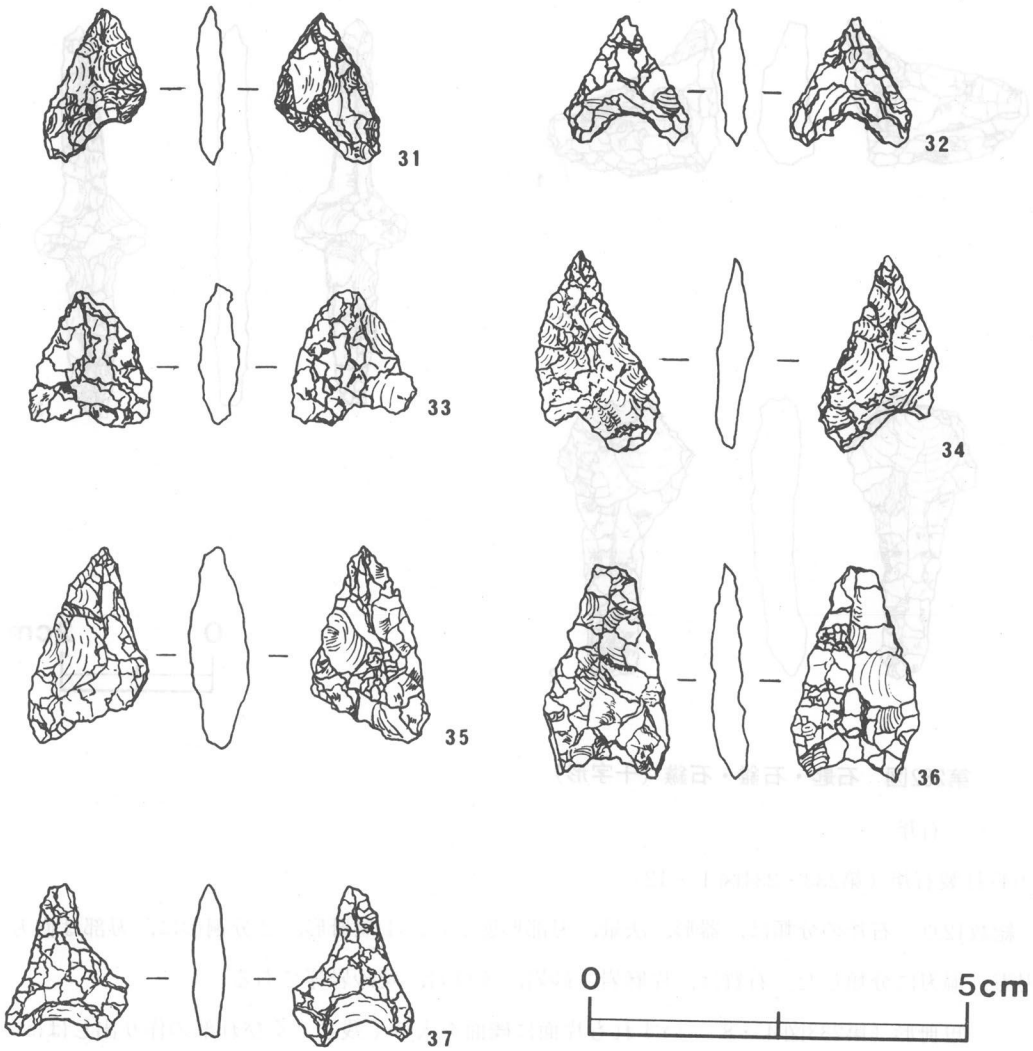
第228図　石鏃(1)



第229図　石鏃(2)



第230図　石鏃(3)



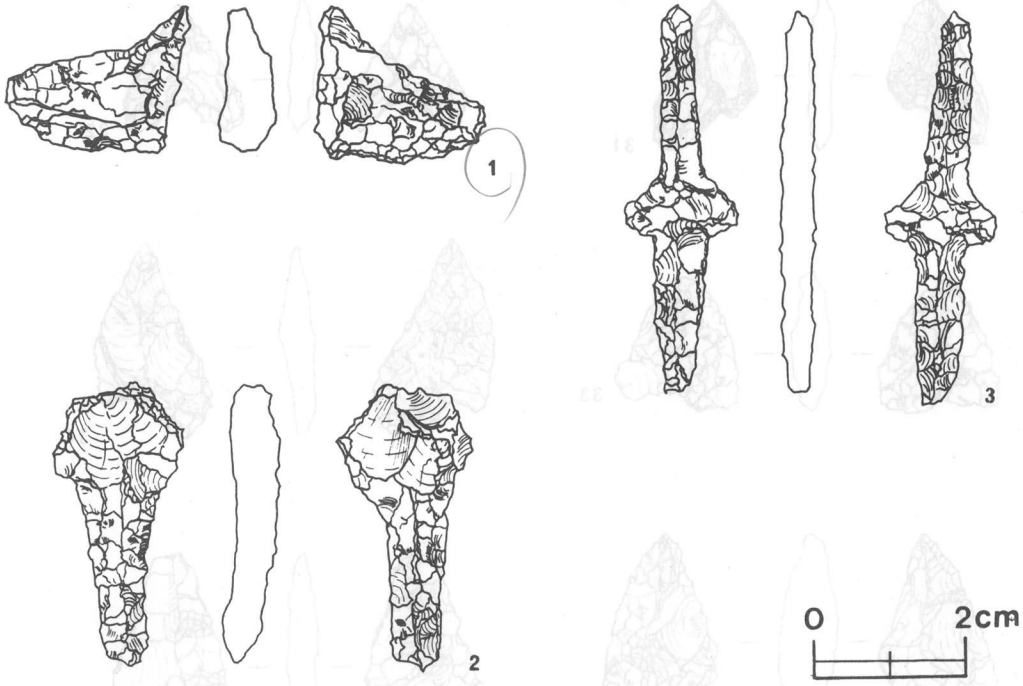
第231図　石鏃(4)

(4)　石匙（第232図１）

横長の剝片の周縁をわずかに加工し，つまみ部を両側からノッチを入れて仕上げている。石質は，チャートである。

(5)　石錐（第232図２）

板状の素材の⅔を使って石錐の舌部を作り出している。舌部の加工は，両面の両縁辺よりおこなっている。断面は平行四辺形をなしている。石質は，黒曜石である。



第232図　石匙・石錐・石鏃（十字形）

(6)　石斧

(1)打製石斧（第233・234図１～12）

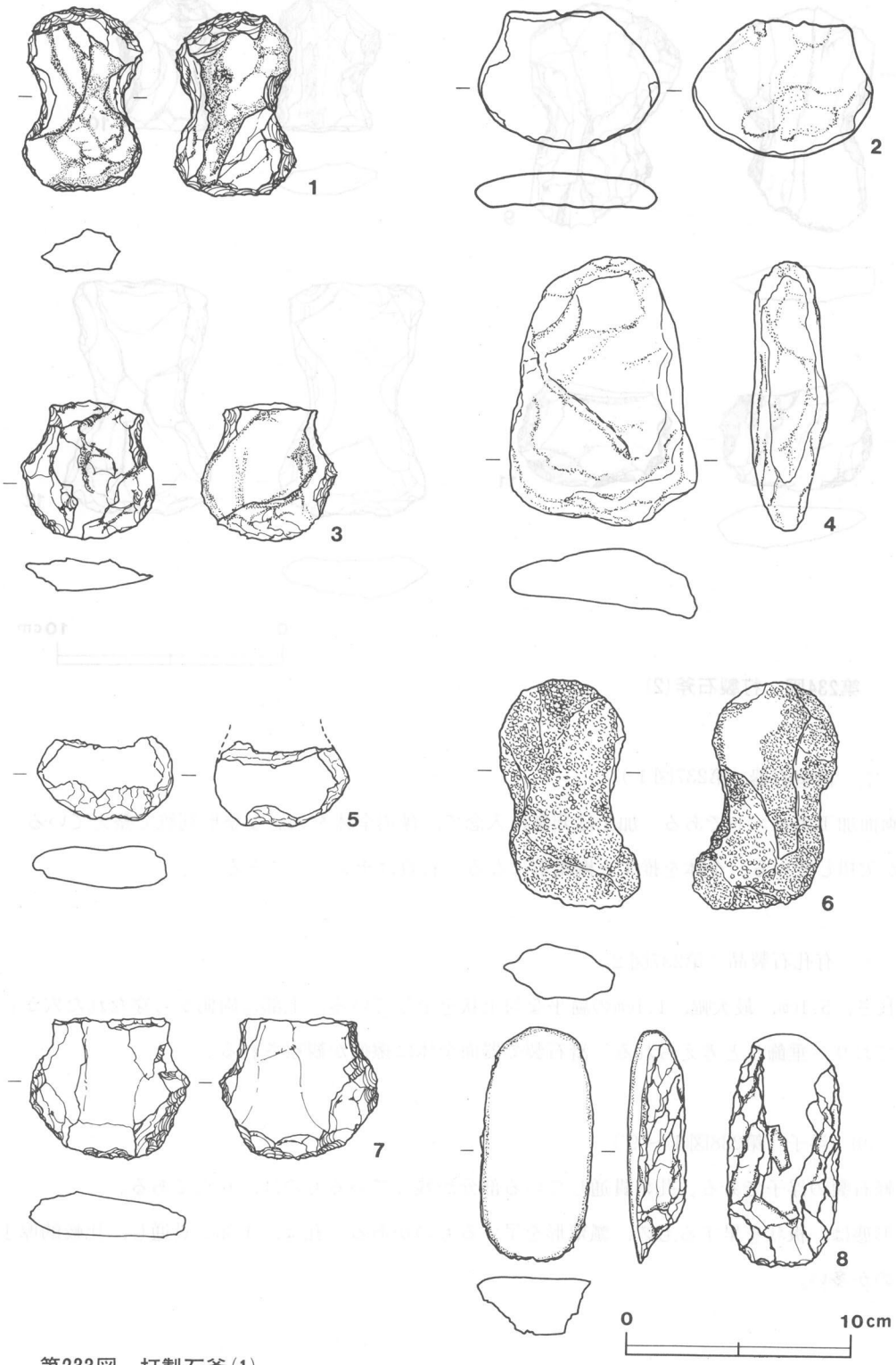
総数12点。石斧の分類は，器形，法量，刃部形態から，(1)短冊形，(2)分銅形に，刃部は直刃，円刃，偏刃に分類した。石質は，片麻岩，砂岩，流紋岩，硬砂岩等である。

○　短冊形（第233図４・８）いずれも片面に礫面を大きく残し，くびれ部の作り出しははっきりしない。刃部の使用痕は，小さな剥離痕によって認められる。

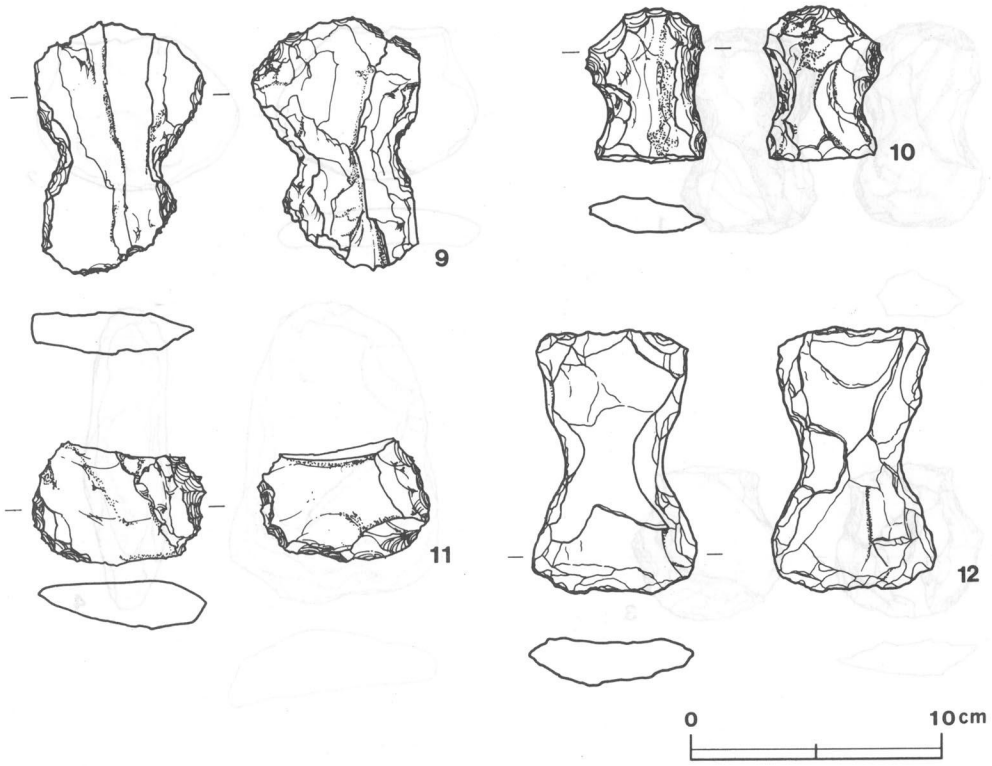
○　分銅形（第233図１～３・５～７，第234図９～12）中央部にくびれ部を有し，分銅形となるものである。頭部，刃部の別はなく，両方に使用痕が認められる。

(2)磨製石斧（第235・236図１～14）

総数14点。いずれの石斧も表裏に丹念な研磨痕が残り，基部および刃部には使用によると思われる磨耗痕，小剥離痕が認められる。断面は，刃部付近をのぞいて全体に厚く，基部付近では，ほぼ円形をなすものが多い。刃部はすべて両刃の円刃（ハマグリ刃）をなし，器面の整形は，全面をていねいに研磨したもののほかに，敲打による整形痕を広く残しているものもある。また，側面が２本の明瞭な稜線によって画され断面形が長方形をなすもので，いわゆる「定角石斧」等がある。なかには，使用時に受けた打撃痕により激しく欠損し，再生を行っているものもみられる。石質は，閃緑岩，砂岩，緑泥片岩，粘板岩である。



第233図　打製石斧(1)



第234図　打製石斧(2)

(7)　槍型石器（第237図１）

両面加工ポイントである。加工は非常に入念で，縁辺全体を入念な整形剥離で整えている。基部が欠損している。全体を推すと柳葉形になる。石質はチャートである。

(8)　有孔石製品（第237図２）

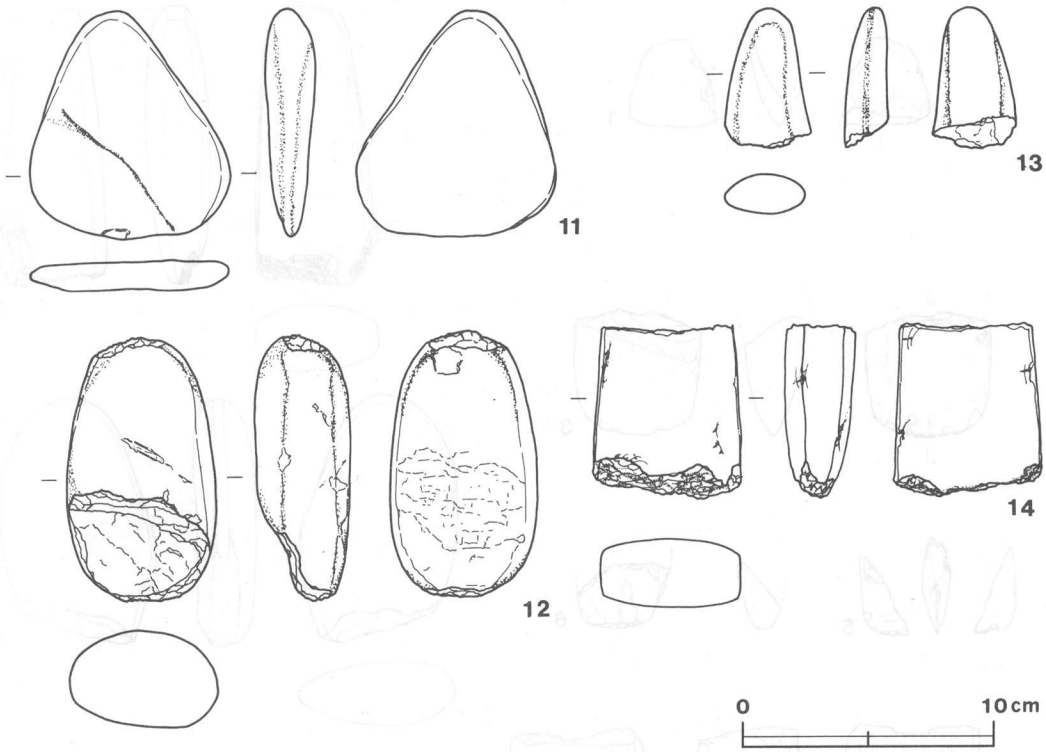
長さ，5.1cm，最大幅，1.1cmの扁平な勾玉状を呈している。上部に両側から穿たれた穴が貫通しており，垂飾りと考えられる。滑石製で器面全体に擦痕が観察される。

(9)　浮子（第238図１～９）

軽石製の浮子である。孔の貫通している部分が残っているものは，６点である。

形態は，板状を呈するもの，瓢箪形を呈するものがある。孔は，４部が貫通し，比較的厚手のものが多い。

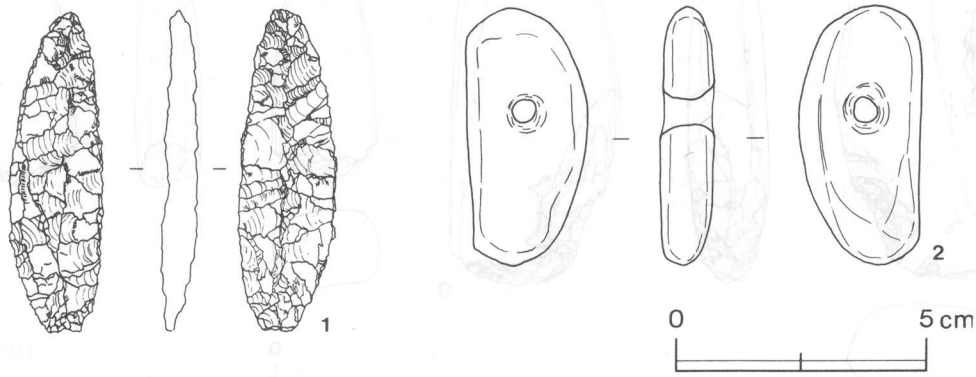
第235図　磨製石斧(1)



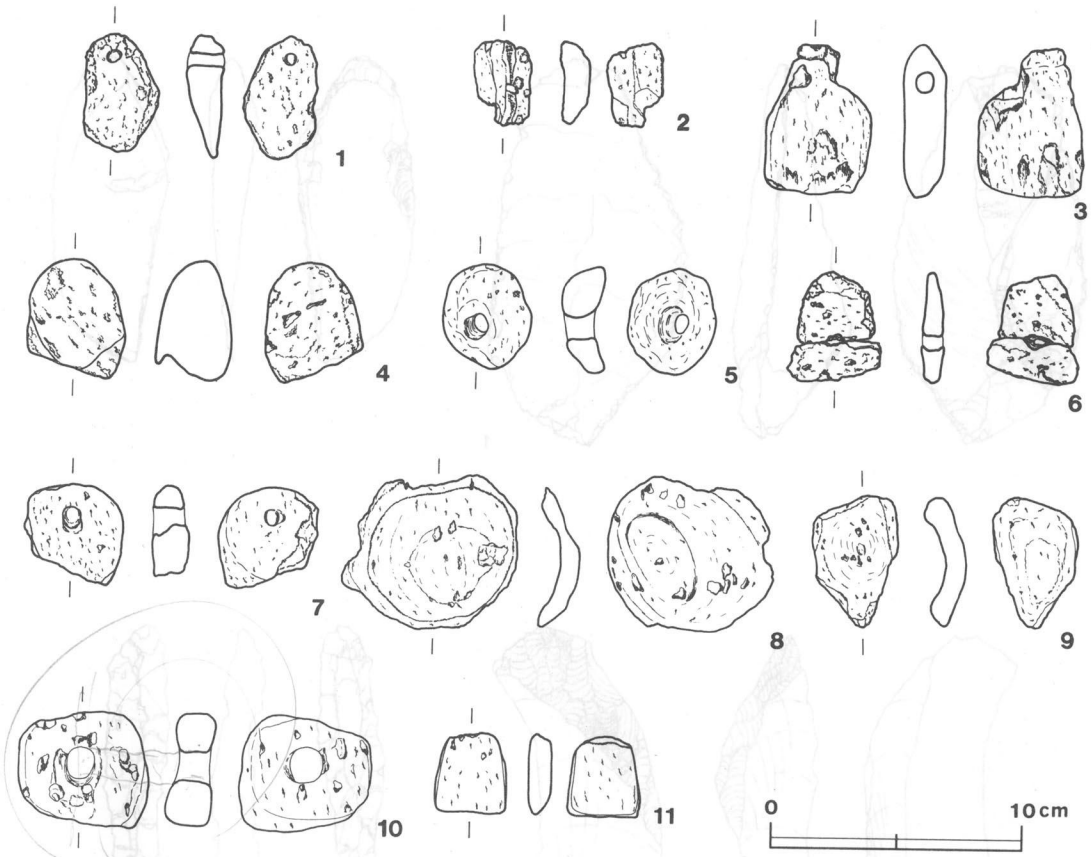
第236図　磨製石斧(2)

⑽　ナイフ形石器（第239図１・２）

剥片の先端を基部にしている。刃潰しは，バルブを取り去り，上下からの刃潰し加工を全面に施し，一方の側は弱い潰しをおこなっている。刃部の刃こぼれが裏面に認められる。上部は削器として使用された痕跡がみられる。石質は，チャート，黒色流紋岩である。



第237図　槍型石器・有孔石製品



第238図　浮子

⑾　加工痕のある剝片（第239図３～５）

不定形の剝片に加工痕，あるいは縁辺部に小剝離痕があるのを一括した。

チャート，黒曜石製で縦長剝片や，剝片，破片類がみられる。

出土した遺物は使用に耐え得ない細かいものもあり，遺跡の性格の一端を示すものと，考えられる資料である。

⑿　礫器（第240図１）

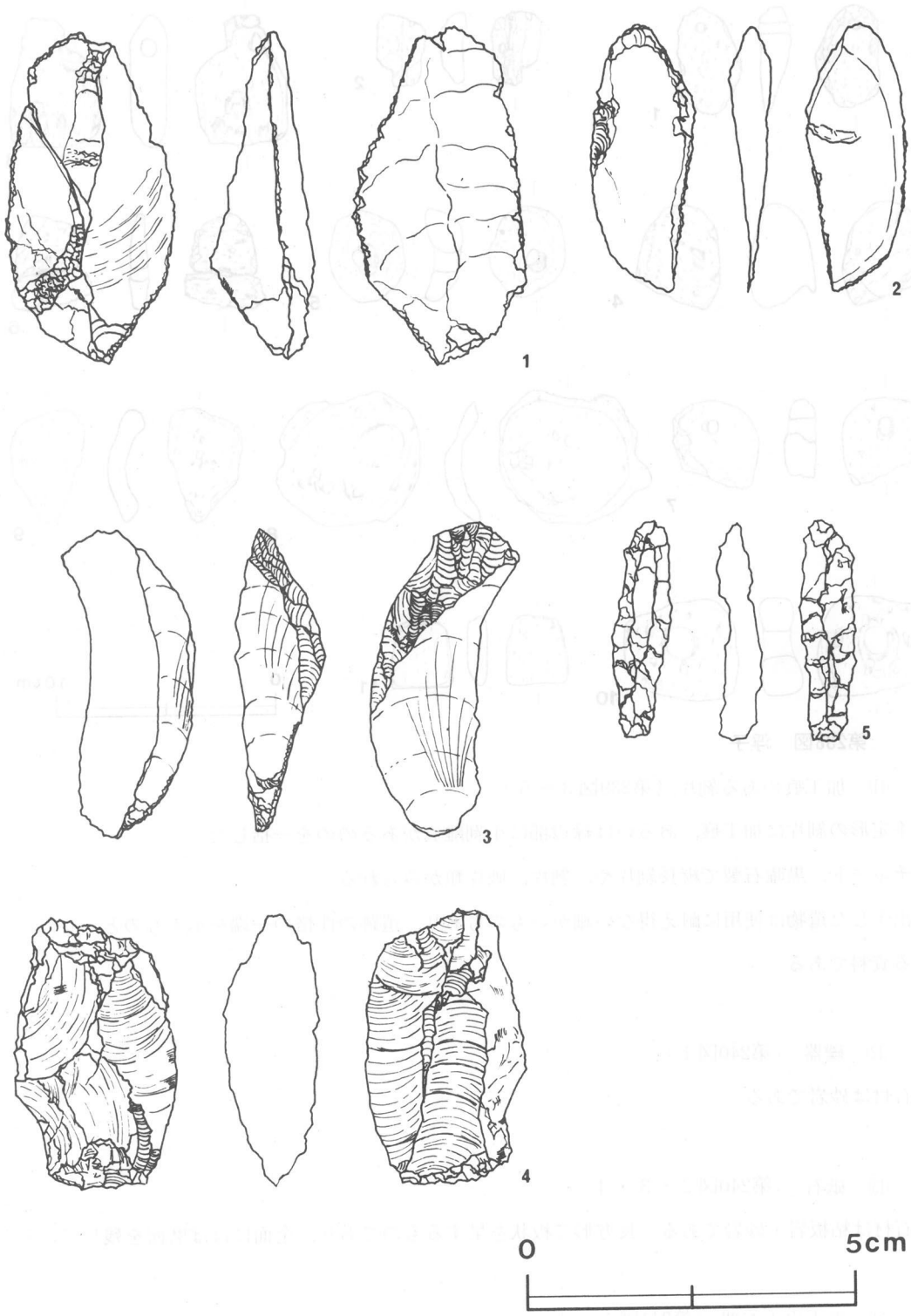
石材は砂岩である。

⒀　砥石（第240図２・３・４）

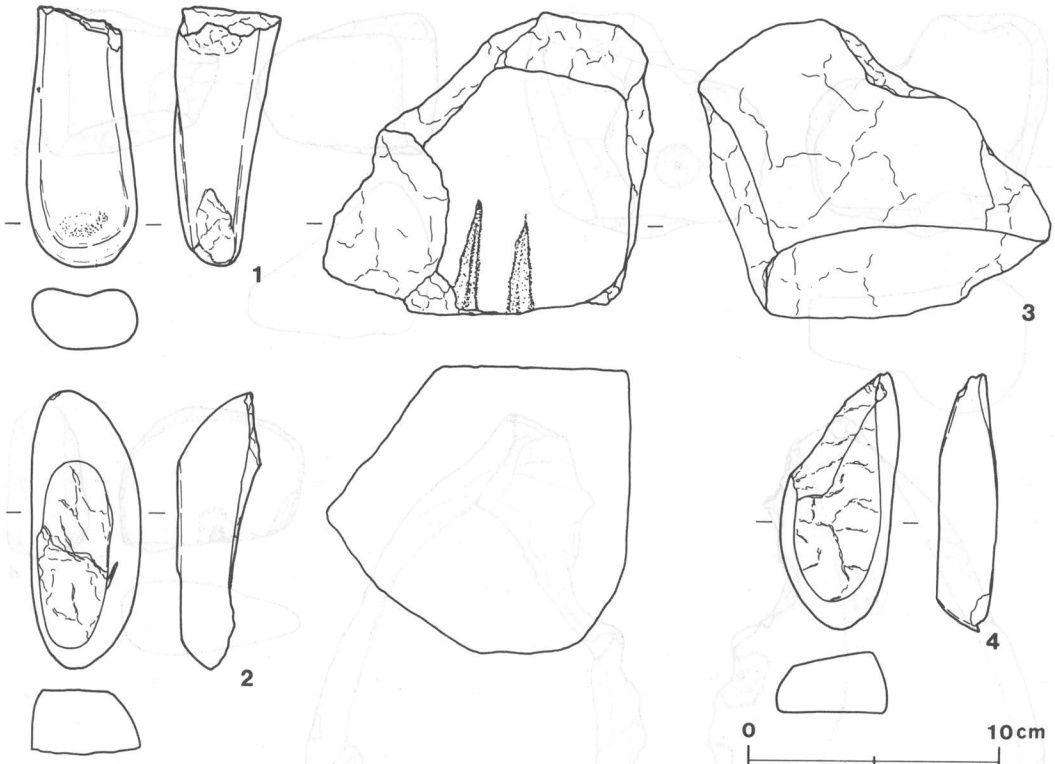
石材は粘板岩・砂岩である。長方形で板状を呈するものであり，全面にほぼ磨面を残している。

⒁　表土出土石器（第241図１～６）

１～３の石皿は，石皿として使用した後，二次利用されている。凹穴が数点認められ使用痕跡がかなり観察される。石材は，安山岩・砂岩である。



第239図　ナイフ形石器・加工痕のある剝片



第240図　礫器・砥石

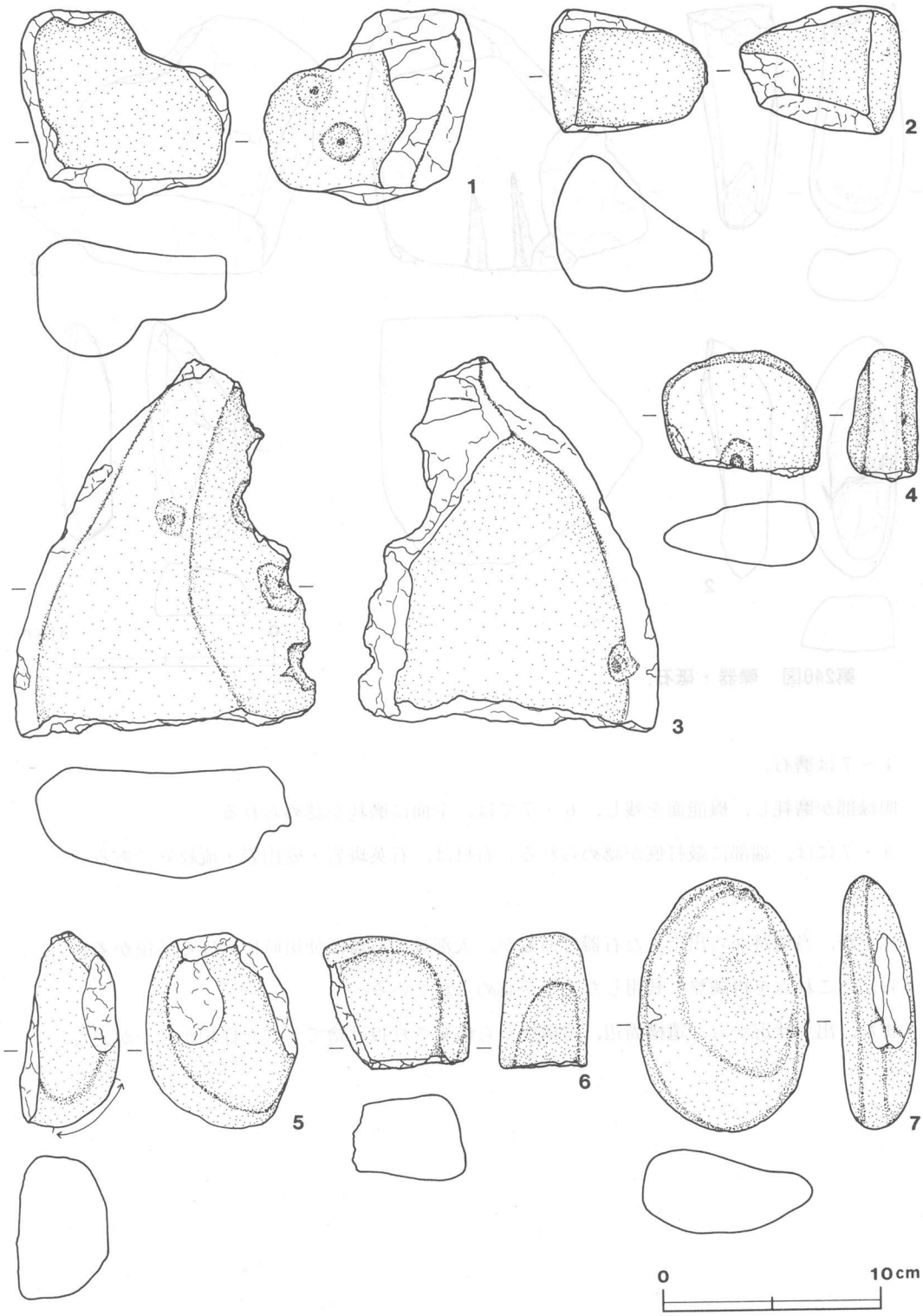
4～7は磨石。

側縁部が磨耗し，機能面を残し，6・7では，全面に磨耗が認められる。

5・7には，端部に敲打痕が認められる。石材は，石英斑岩・安山岩・流紋岩である。

以上が，当遺跡から出土した石器であるが，大部分の石器は使用時における破損が考えられ，さらに，これらを再調整し利用したものが認められている。

また，出土状況から，遺構周辺，遺構内から破棄され投げ捨てられた様相がうかがえる。



第241図　表土出土石器　（石皿・磨石）

表6　石器石質一覧表

挿図	No.	出土区	器種	全長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	備考
214図	1	5号住居跡	石皿	(11.2)	(6.4)	5.4	270	多孔質安山岩	SI-7出土の石皿と接合。
214図	2	5号住居跡	石皿	(6.1)	(5.1)	4.8	131	角閃石安山岩	
214図	3	6号住居跡	石皿	(10.8)	(7.3)	5.1	410	角閃石安山岩	
214図	4	6号住居跡	石皿	(15.1)	(12.4)	5.2	935	安山岩	
214図	5	7号住居跡	石皿	(7.1)	(4.2)	4.3	113	角閃石安山岩	片面のみ使用。
214図	6	8号住居跡	石皿	(10.7)	(10.1)	2.5	265	角閃石安山岩	
214図	7	14号住居跡	石皿	(14.1)	(7.0)	5.5	458	安山岩	
215図	8	15号住居跡	石皿	(5.9)	(8.0)	6.6	270	安山岩	片面のみ使用。
215図	9	15号住居跡	石皿	(5.0)	(6.2)	2.2	76	安山岩	
215図	10	16号住居跡	石皿	(5.8)	(5.7)	3.1	65	多孔質安山岩	
215図	11	16号住居跡	石皿	(9.5)	(6.3)	2.5	130	多孔質安山岩	
215図	12	18号住居跡	石皿	(3.7)	(5.4)	5.6	91	多孔質安山岩	
215図	13	18号住居跡	石皿	(6.3)	(4.3)	5.7	184	角閃石安山岩	片面のみ使用。
215図	14	19号住居跡	石皿	(9.8)	(14.5)	4.9	439	角閃石安山岩	炉石として二次利用。
215図	15	19号住居跡	石皿	(12.4)	(13.6)	6.9	978	角閃石安山岩	炉石として二次利用。
216図	16	19号住居跡	石皿	(13.7)	(8.0)	7.1	610	多孔質安山岩	片面のみ使用。
216図	17	19号住居跡	石皿	(10.0)	(11.2)	9.8	1550	角閃石安山岩	炉石として二次利用。
216図	18	19号住居跡	石皿	(14.7)	(11.6)	7.2	1550	両雲母花崗岩	炉石として二次利用。
216図	19	19号住居跡	石皿	(12.0)	(6.9)	4.6	400	多孔質安山岩	炉石として二次利用。
216図	20	28号住居跡	石皿	(8.8)	(6.4)	3.8	255	角閃石安山岩	片面のみ使用。
216図	21	33号住居跡	石皿	(6.6)	(8.5)	6.6	405	多孔質安山岩	
217図	22	40号住居跡	石皿	(9.5)	(6.3)	6.4	330	角閃石安山岩	片面のみ使用。
217図	23	42号住居跡	石皿	12.7	(10.7)	6.5	700	多孔質安山岩	
217図	24	46号住居跡	石皿	(13.8)	(14.8)	7.2	1500	安山岩	
217図	25	47号住居跡	石皿	(9.2)	(7.8)	4.4	264	角閃石安山岩	片面のみ使用。
218図	26	50号住居跡	石皿	(18.0)	(11.8)	6.1	552	角閃石安山岩	
218図	27	68号住居跡	石皿	(15.7)	(11.4)	6.2	552	角閃石安山岩	
218図	28	68号住居跡	石皿	(19.4)	(12.1)	9.6	1700	角閃石安山岩	炉石として二次利用。
218図	29	68号住居跡	石皿	(13.8)	(12.7)	6.5	554	角閃石安山岩	炉石として二次利用。覆土内出土の石皿と接合。
218図	30	68号住居跡	石皿	(12.4)	(10.5)	5.5	565	角閃石安山岩	炉石として二次利用。
218図	31	68号住居跡	石皿	(13.8)	(9.4)	5.4	620	角閃石安山岩	

挿図	No.	出土区	器種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
218図	32	68号住居跡	石皿	(8.0)	(10.2)	5.7	469	角閃石安山岩	炉石として二次利用。
219図	33	74号住居跡	石皿	(5.0)	(6.5)	3.7	135	安山岩	炉石として二次利用。
219図	34	74号住居跡	石皿	(9.6)	(7.4)	3.0	217	安山岩	炉石として二次利用。
219図	35	74号住居跡	石皿	(6.0)	(7.1)	5.9	256	多孔質安山岩	
219図	36	77号住居跡	石皿	(15.5)	(12.4)	7.9	1350	角閃石安山岩	
219図	37	162号土壙	石皿	(10.6)	(6.4)	4.0	297	角閃石安山岩	
219図	38	531号土壙	石皿	(7.7)	(4.2)	5.3	140	角閃石安山岩	
219図	39	SX－3	石皿	(8.9)	(6.1)	3.6	225	角閃石安山岩	
220図	40	I10i7	石皿	(11.1)	(10.0)	2.7	365	角閃石安山岩	
220図	41	J8i4	石皿	(7.8)	(10.1)	7.3	552	砂岩	
220図	42	K8c0	石皿	(6.8)	(9.1)	(6.9)	422	多孔質安山岩	
220図	43	L11j5	石皿	(10.9)	(7.2)	(6.5)	556	多孔質安山岩	片面欠損。
221図	1	5号住居跡	磨石	(7.2)	(5.8)	(4.1)	230	安山岩	全面使用。
221図	2	6号住居跡	磨石	6.4	4.9	4.0	165	硬砂岩	
221図	3	9号住居跡	磨石	6.8	5.8	2.1	94	砂岩	先端部使用。
221図	4	9号住居跡	磨石	12.3	7.0	4.1	504	安山岩	全面使用。部分的に凹石として利用。
221図	5	9号住居跡	磨石	7.8	4.7	2.0	96	流紋岩	
221図	6	9号住居跡	磨石	5.6	4.7	1.9	67	砂岩	
221図	7	14号住居跡	磨石	(7.1)	(6.5)	3.6	205	流紋岩	
221図	8	15号住居跡	磨石	6.0	5.9	3.6	201	角閃石安山岩	全面使用。部分的に凹石として利用。
221図	9	15号住居路	磨石	6.3	6.3	4.3	265	角閃石安山岩	全面使用。部分的に凹石として利用。
221図	10	15号住居跡	磨石	(4.8)	6.0	4.3	134	安山岩	全面使用。
221図	11	15号住居跡	磨石	6.8	3.8	2.8	87	流紋岩	
221図	12	15号住居跡	磨石	(4.0)	6.1	4.0	122	角閃石安山岩	全面使用。
222図	13	15号住居跡	磨石	9.2	6.4	3.8	335	流紋岩	全面使用。部分的に凹石として利用。
222図	14	15号住居跡	磨石	(6.9)	6.3	4.4	186	安山岩	
222図	15	15号住居跡	磨石	(6.5)	5.7	3.9	194	流紋岩	先端部を敲石として利用。
222図	16	15号住居跡	磨石	(9.9)	6.5	5.0	488	砂岩	
222図	17	15号住居跡	磨石	8.9	(4.9)	5.4	280	石英斑岩	
222図	18	16号住居跡	磨石	(8.0)	6.5	2.8	209	砂岩	
222図	19	18号住居跡	磨石	(7.6)	7.8	3.8	316	安山岩	
222図	20	18号住居跡	磨石	5.9	5.1	2.5	105	流紋岩	

挿図	No.	出土区	器種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
222図	21	19号住居跡	凹石	10.5	7.2	3.5	360	雲母片岩	炉石として二次利用。
222図	22	19号住居跡	磨石	10.4	6.1	5.6	410	石英斑岩	
223図	23	20号住居跡	磨石	8.8	7.1	4.8	390	流紋岩	
223図	24	27号住居跡	磨石	6.4	6.4	4.0	234	角閃石安山岩	全面使用。部分的に凹石として利用。
223図	25	27号住居跡	磨石	9.7	6.8	4.3	444	斑糲岩	全面使用。部分的に凹石として使用。
223図	26	28号住居跡	磨石	(5.7)	(5.3)	3.3	164	角閃石安山岩	
223図	27	28号住居跡	磨石	12.1	7.9	6.7	870	砂岩	部分的に多方向への磨痕が残る。
223図	28	36号住居跡	磨石	8.7	(5.0)	3.3	189	角閃石安山岩	全面使用。部分的に凹石として利用。
223図	29	40号住居跡	磨石	12.5	5.3	(3.4)	295	流紋岩	
223図	30	42号住居跡	磨石	8.4	(3.2)	2.3	85	砂岩	
223図	31	42号住居跡	磨石	6.9	3.8	2.4	94	砂岩	両端部に激しい磨痕が残る。二次的利用か。
223図	32	42号住居跡	磨石	6.6	4.9	2.3	94	砂岩	
223図	33	42号住居跡	磨石	(6.0)	(3.2)	(3.4)	87	砂岩	
224図	34	43号住居跡	磨石	(9.5)	(7.7)	4.6	375	流紋岩	
224図	35	43号住居跡	磨石	(6.4)	6.1	5.0	224	角閃石安山岩	部分的に凹石として利用。
224図	36	45号住居跡	磨石	8.4	4.8	2.6	155	砂岩	
224図	37	45号住居跡	磨石	10.1	(5.5)	2.1	166	斑糲岩	
224図	38	45号住居跡	磨石	11.6	7.5	3.9	56	角閃石安山岩	全面使用。凹石として部分,敲石として一端部利用。
224図	39	50号住居跡	磨石	11.1	7.2	2.6	347	砂岩	
224図	40	50号住居跡	磨石	6.6	5.0	3.9	158	花崗岩	一端部を敲石として利用。
224図	41	50号住居跡	磨石	7.4	6.2	3.2	192	砂岩	
224図	42	50号住居跡	磨石	6.7	6.5	3.2	203	砂岩	
224図	43	50号住居跡	磨石	7.6	5.8	3.1	196	砂岩	
224図	44	50号住居跡	磨石	(6.5)	5.9	3.9	259	安山岩	
224図	45	50号住居跡	磨石	(7.4)	6.2	3.8	196	石英斑岩	一端部を敲石として利用。
225図	46	50号住居跡	磨石	5.2	4.8	2.0	66	砂岩	
225図	47	50号住居跡	磨石	10.4	7.7	(5.1)	491	砂岩	片面欠損。
225図	48	50号住居跡	磨石	7.4	5.8	(3.5)	196	砂岩	
225図	49	56号住居跡	磨石	6.5	5.6	4.1	213	砂岩	
225図	50	61号住居跡	磨石	6.8	6.8	3.5	268	流紋岩	
225図	51	68号住居跡	磨石	(10.3)	(7.5)	4.7	449	砂岩	
225図	52	68号住居跡	磨石	11.6	6.0	3.7	404	安山岩	部分的に凹石として利用。

挿図	No.	出土区	器種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
225図	53	69号住居跡	磨石	7.6	6.0	4.1	239	流紋岩	
225図	54	72号住居跡	磨石	5.4	4.7	3.3	105	石英	短い多方向の磨りが認められる。
225図	55	74号住居跡	磨石	(5.4)	(5.9)	2.2	96	安山岩	部分的に凹石として利用。
225図	56	106号土壙	磨石	6.2	5.3	1.7	90	流紋岩	先端部を敲石として利用。
225図	57	109号土壙	磨石	(4.7)	4.9	3.5	128	角閃石安山岩	
226図	58	111号土壙	磨石	(4.7)	(5.1)	5.5	170	安山岩	
226図	59	160号土壙	磨石	(9.4)	(5.8)	4.2	300	流紋岩	
226図	60	269号土壙	磨石	(5.3)	4.9	3.8	145	多孔質安山岩	部分的に凹石として利用。
226図	61	343号土壙	磨石	(7.7)	5.6	4.7	289	安山岩	
226図	62	351号土壙	磨石	5.7	4.5	2.3	81	流紋岩	先端部を敲石として利用。
226図	63	404号土壙	磨石	6.0	(5.2)	4.2	125	安山岩	
226図	64	J10f3	磨石	(6.6)	6.3	4.0	240	安山岩	全面使用。
226図	65	J10f4	磨石	6.3	4.4	2.3	80	流紋岩	
226図	66	J10f4	磨石	6.3	5.4	2.4	90	流紋岩	
226図	67	J10f5	磨石	6.9	6.7	4.8	375	角閃石安山岩	全面使用。部分的に凹石として利用。
226図	68	J10g3	磨石	6.3	4.8	2.5	94	砂岩	
226図	69	J10g4	磨石	7.6	6.2	3.1	195	流紋岩	
226図	70	J10g4	磨石	6.9	6.2	5.2	325	角閃石安山岩	全面使用。部分的に凹石として利用。
227図	71	J11g1	磨石	11.5	7.0	5.8	670	角閃石安山岩	
227図	72	K8b0	敲石	(10.4)	6.1	3.4	337	流紋岩	先端部使用。
227図	73	K8f8	磨石	6.9	(3.7)	5.1	188	安山岩	全面使用。部分的に凹石として利用。
227図	74	K8f9	磨石	8.7	4.3	2.7	143	安山岩	両端部を敲石として利用。
227図	75	K8i9	磨石	(6.2)	(5.9)	(4.5)	159	安山岩	
227図	76	K9b4	磨石	11.6	8.6	4.9	675	安山岩	
227図	77	K9d1	磨石	(9.1)	6.8	2.6	226	流紋岩	
227図	78	K9f0	敲石	(9.1)	7.8	4.3	447	砂岩	先端部使用。
227図	79	K9h0	磨石	6.5	5.6	2.1	154	流紋岩	
227図	80	K10h1	磨石	7.8	(4.8)	4.2	235	砂岩	一端部を敲石として利用。
227図	81	L10a5	磨石	(5.2)	7.9	4.4	207	多孔質安山岩	
228図	1	5号住居跡	石鏃	1.7	1.0	0.4	0.4	チャート	
228図	2	5号住居跡	石鏃	3.3	2.5	1.1	6.0	チャート	Pit内出土。
228図	3	7号住居跡	石鏃	2.9	(1.7)	0.5	1.0	チャート	

挿図	No.	出土区	器種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
228図	4	7号住居跡	石鏃	(2.6)	2.2	0.5	1.9	チャート	
228図	5	7号住居跡	石鏃	3.1	1.8	0.8	3.0	チャート	
228図	6	15号住居跡	石鏃	2.4	2.0	2.6	1.8	チャート	
228図	7	15号住居跡	石鏃	3.0	(1.0)	0.7	1.4	チャート	
228図	8	16号住居跡	石鏃	2.4	1.5	0.3	0.8	チャート	
228図	9	20号住居跡	石鏃	(1.7)	(1.0)	0.4	0.5	流紋岩	
228図	10	20号住居跡	石鏃	2.4	(1.4)	0.4	1.0	チャート	
229図	11	24号住居跡	石鏃	2.8	1.9	0.5	1.0	チャート	炉跡内出土。
229図	12	32号住居跡	石鏃	(2.9)	2.5	1.0	3.8	チャート	
229図	13	40号住居跡	石鏃	(1.9)	2.0	0.4	1.0	チャート	
229図	14	40号住居跡	石鏃	2.5	(1.8)	0.5	1.2	チャート	Pit内出土。
229図	15	40号住居跡	石鏃	3.7	2.5	1.0	3.5	チャート	Pit内出土。
229図	16	42号住居跡	石鏃	2.0	1.7	0.4	0.8	チャート	
229図	17	43号住居跡	石鏃	3.9	(1.8)	0.5	1.9	チャート	
229図	18	43号住居跡	石鏃	3.0	1.4	0.4	1.4	チャート	
229図	19	43号住居跡	石鏃	1.9	1.9	0.5	1.0	チャート	
229図	20	43号住居跡	石鏃	2.0	1.6	0.6	1.2	チャート	
230図	21	43号住居跡	石鏃	1.6	1.4	0.5	0.5	黒曜石	
230図	22	50号住居跡	石鏃	(1.8)	1.5	0.4	0.8	チャート	
230図	23	56号住居跡	石鏃	(2.0)	1.9	0.5	1.1	チャート	
230図	24	66号住居跡	石鏃	2.2	1.8	0.4	1.0	チャート	
230図	25	72号住居跡	石鏃	2.5	(1.4)	0.5	1.7	チャート	
230図	26	72号住居跡	石鏃	2.1	1.6	0.4	1.0	チャート	
230図	27	248号土壙	石鏃	1.9	1.7	0.4	0.8	チャート	
230図	28	268号土壙	石鏃	1.7	1.3	0.3	0.7	チャート	
230図	29	286号土壙	石鏃	2.6	1.8	0.5	1.6	チャート	
230図	30	343号土壙	石鏃	2.1	1.1	0.5	1.2	チャート	
231図	31	343号土壙	石鏃	2.1	(1.3)	0.7	0.4	黒曜石	
231図	32	J8 j8	石鏃	1.7	1.6	0.4	0.8	チャート	
231図	33	J10 h4	石鏃	1.8	1.8	0.6	1.4	チャート	
231図	34	K8 c5	石鏃	2.6	(2.1)	0.4	1.7	チャート	
231図	35	L9 j3	石鏃	2.7	(1.6)	0.8	2.5	チャート	

挿図	No.	出土区	器種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
231図	36	L10d5	石鏃	(2.9)	(1.7)	0.6	1.6	チャート	
231図	37	M11a0	石鏃	2.1	1.6	0.4	1.4	チャート	
232図	1	K8c3	石匙	1.9	2.5	0.8	3.0	チャート	
232図	2	42号住居跡	石錐	3.7	1.8	0.8	2.7	黒曜石	
232図	3	28号住居跡	十字形石鏃	5.2	1.5	0.5	2.5	黒曜石	
233図	1	5号住居跡	打製石斧	8.2	5.3	1.9	84	片麻岩	
233図	2	9号住居跡	打製石斧	(6.1)	8.1	1.5	105	砂岩	磨滅が激しく剝離面はほとんど確認できない。
233図	3	16号住居跡	打製石斧	(6.2)	6.0	1.5	58	安山岩	
233図	4	27号住居跡	打製石斧	12.0	8.4	3.0	408	片麻岩	
233図	5	33号住居跡	打製石斧	(3.4)	6.0	1.9	48	安山岩	
233図	6	40号住居跡	打製石斧	10.1	6.5	2.5	161	片麻岩	磨滅が激しく剝離面はほとんど確認できない。
233図	7	40号住居跡	打製石斧	(6.4)	7.1	1.9	113	流紋岩	
233図	8	43号住居跡	打製石斧	10.5	5.0	2.6	181	硬砂岩	
234図	9	72号住居跡	打製石斧	10.2	6.8	1.9	141	片麻岩	磨滅が激しく剝離面はほとんど確認できない。
234図	10	J8h4	打製石斧	(6.2)	4.7	1.4	60	片麻岩	
234図	11	K8c3	打製石斧	6.9	(5.0)	2.0	76	粘板岩	
234図	12	K8c9	打製石斧	10.7	6.6	1.9	180	安山岩	
235図	1	14号住居跡	磨製石斧	(4.4)	(3.5)	(1.5)	12	緑泥片岩	
235図	2	20号住居跡	磨製石斧	(11.2)	4.8	2.7	241	緑泥片岩	
235図	3	28号住居跡	磨製石斧	(5.0)	(5.1)	(2.4)	90	雲母片岩	
235図	4	40号住居跡	磨製石斧	(9.9)	6.4	2.6	220	砂岩	
235図	5	42号住居跡	磨製石斧	(1.5)	(3.6)	1.1	5	粘板岩	
235図	6	42号住居跡	磨製石斧	(2.6)	(3.7)	(2.1)	19	緑泥片岩	
235図	7	47号住居跡	磨製石斧	(7.0)	(6.8)	(4.0)	250	流紋岩	
235図	8	50号住居跡	磨製石斧	(6.5)	3.6	1.9	63	砂岩	
235図	9	52号住居跡	磨製石斧	13.7	7.1	3.4	505	閃緑岩	
235図	10	63号住居跡	磨製石斧	(8.9)	4.2	3.1	167	閃緑岩	
236図	11	68号住居跡	磨製石斧	9.1	8.0	2.0	166	砂岩	
236図	12	74号住居跡	磨製石斧	10.7	6.0	4.0	315	砂岩	
236図	13	146号土壙	磨製石斧	(5.6)	3.5	1.6	37	砂岩	
236図	14	450号土壙	磨製石斧	(6.9)	5.9	2.7	243	閃緑岩	
237図	1	19号住居跡	槍型石器	6.3	1.9	0.8	9.5	チャート	

挿図	No.	出土区	器種	全長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
237図	2	68号住居跡	有孔石製品	5.1	2.4	1.1	22	滑石	
238図	1	8号住居跡	浮子	4.8	2.9	1.4	3.5	軽石	
238図	2	19号住居跡	浮子	(3.3)	(2.3)	1.8	1.0	軽石	
238図	3	42号住居跡	浮子	5.9	4.2	2.2	7.4	軽石	
238図	4	42号住居跡	浮子	(4.0)	3.8	2.8	11.5	軽石	
238図	5	46号住居跡	浮子	4.2	3.5	1.8	2.5	軽石	
238図	6	50号住居跡	浮子	4.6	3.6	0.9	1.5	軽石	
238図	7	56号住居跡	浮子	(4.0)	(3.9)	1.5	5.8	軽石	
238図	8	56号住居跡	浮子	6.4	6.9	3.0	5.8	軽石	
238図	9	56号住居跡	浮子	(5.3)	(4.5)	1.8	1.3	軽石	
238図	10	72号住居跡	浮子	(4.6)	5.2	1.8	5.6	軽石	
238図	11	108号土壙	浮子	(3.2)	2.8	0.9	3.3	軽石	
239図	1	5号住居跡	ナイフ形石器	5.1	2.6	1.6	13.0	チャート	
239図	2	11号土壙	ナイフ形石器	4.6	1.5	0.6	4.8	流紋岩	
239図	3	15号住居跡	剥片	4.7	1.9	1.4	6.5	黒曜石	
239図	4	46号住居跡	剥片	4.1	2.4	1.5	14.5	黒曜石	
239図	5	K8 c9	剥片	3.3	0.9	0.7	2.0	チャート	
240図	1	14号住居跡	礫器	(10.3)	4.4	4.2	227	砂岩	
240図	2	16号住居跡	砥石	(11.0)	4.5	3.3	185	粘板岩	SI-50出土の砥石(4)と同一個体か。
240図	3	19号住居跡	砥石	(12.0)	(13.0)	11.5	1500	砂岩	片面のみ使用。炉石として二次利用。
240図	4	50号住居跡	砥石	(10.3)	4.7	2.5	128	粘板岩	
241図	1	表土	石皿	(8.8)	(9.7)	5.4	377	角閃石安山岩	部分的に凹石として利用。
241図	2	表土	石皿	(5.7)	(7.2)	6.3	240	多孔質安山岩	
241図	3	表土	石皿	(17.3)	(12.9)	5.0	1200	砂岩	部分的に凹石として利用。
241図	4	表土	磨石	(6.1)	(6.8)	4.0	220	石英斑岩	全面使用。部分的に凹石として利用。
241図	5	表土	磨石	(9.0)	(4.4)	6.5	334	石英斑岩	
241図	6	表土	磨石	5.8	7.4	3.0	85	多孔質安山岩	全面使用。
241図	7	表土	磨石	11.6	7.7	3.9	408	流紋岩	

第5章　ま　と　め

第1節　遺構について

筒戸A遺跡において検出された遺構は，前述のように竪穴住居跡48軒，土壙189基，埋甕5基である。遺構の分布は，調査予定地内のほぼ全域に散在し，中央部から北部にかけては竪穴住居跡，土壙等が集中しているが，南部は比較的遺構の分布は希薄である。

筒戸B遺跡から検出された遺構は，竪穴住居跡39軒，土壙226基，埋甕2基，その他3基である。遺構の分布は，中央部から南部にかけて竪穴住居跡がやや間隔をおいて所在している。さらに大谷津B遺跡に隣接する北部には竪穴住居跡と共に土壙等が密集して所在している。

なお，両遺跡は，遺跡として確認された地域の中央を南北に走る農道によって便宜的にA・Bの二つに分けられた遺跡であるが，整理，分析の結果，ほぼ同一時期に営まれた集落跡であることがわかり，本報告書においては，二つの遺跡に分離せず同一の集落跡として扱った。また，遺構等の位置の表記については，その位置をより明確に表すためA・Bの両遺跡名を付して記述した。

集落跡が営まれた時代は，縄文時代中期の中葉から後葉にかけてのものがほとんどであるが，平安時代の竪穴住居跡が2軒確認されている。

1　竪穴住居跡について

当遺跡から検出された竪穴住居跡は，縄文時代85軒，平安時代2軒である。

縄文時代の竪穴住居跡（以下住居跡とする。）で時期が判定できうるものは，その内の39軒である。時期区分を行えば，縄文時代中期中葉から後葉で，Ⅰ期からⅤ期に分けられる。

Ⅰ　期　縄文時代中期中葉（加曽利EⅡ式に比定されるもの）――4軒

5・8・45・68号住居跡

Ⅱ　期　縄文時代中期後葉（加曽利EⅢ式に比定されるもの）――14軒

6・16・19・25・28・40・44・50・52A・57・69・72・74・77号住居跡

確定はできないがおおむねこの時期のものと考えられる――7軒

1・30・41・43・48・56・73号住居跡

Ⅲ　期　縄文時代中期後葉（加曽利EⅢ式末に比定されるもの）――5軒

14・15・18・32・78号住居跡

Ⅳ　期　縄文時代中期後葉（加曽利EⅢ式からEⅣ式にわたるもの）――5軒

9・27・36・42・52B号住居跡

Ⅴ　期　縄文時代中期後葉（加曽利EⅣ式に比定されるもの）――4軒

7・17・20・63号住居跡

なお，5期に細分したが，時期的に接近するものが多く，また，出土遺物も床面から浮いたものも多いため確定できうるものは少なく，時期的に前後するものもあると考えられる。

以上のように，時期が判定できうるものは85軒のうち39軒ほどであるが，当遺跡において検出された遺物は，平安時代の2軒の住居跡を除くと縄文時代中期中葉から後葉にわたるもの以外は出土していないため，時期不明の住居跡もこれらの時期に包括できるものと考えられる。それら時期不明のものを判断するために住居の変遷，構造上の変化を分析することに努めた。まず，住居跡の平面形と上屋構造を支えた主柱の本数や配置に注目し，類型化を行った。さらに，炉の構造と位置，壁溝や埋甕の存否，出入口の想定を行い，集落の形成，変遷をとらえようと試みた。

なお，検出された85軒の住居跡の中には，炉の検出されない遺構が22軒ほど認められている。これらは，一般的な日常生活の場とした住居跡とは若干性格が異なる遺構と考えられ，あわせて今後課題にしなければならないものである。

(1) 住居跡の類型化

①平面形と主柱穴からの分類

平面形	主柱の配置	その他
A 円形	1 方形	a 床中央に柱穴があるもの。
B 楕円形	2 長方形	b 壁外に柱穴があるもの。
C 隅丸方形	3 台形	c 方形，長方形の主柱配置の一方に柱穴を有し，五角形状の柱穴配置を呈するもの。
D 隅丸長方形	4 多角形	
E 長方形	5 五角形	d 出入口の施設と想定されるものがみられるもの。
F 不定形	6 六角形	
G 形状不明	7 円形，楕円形	e 支柱穴が主柱をとりまき二重に配列されるもの。
	8 その他	

以上の事項を組み合せて類型化した。例えば「A1」のように表し，その他の特徴がみられる場合には「A2b」として分類を行った。結果は，別表のようである。

次に，平面形ごとに大別して検討を加えてみた。

A 円形（5・14・17・19・28・29・34・41・42・50・52A・56・65・67・69・70・72・73・74・75・88・90号住居跡）

当遺跡では，23軒検出され最も多い形状である。この中には，炉が検出されていない5軒の遺構（67・70・75・88・90号住居跡）と小竪穴的な遺構（28号住居跡）も含まれる。

平面規模についてみれば，長径の平均は5.3m，短径の平均は5.1mである。長径が最大のもの

は，14号住居跡であるが，これは建て替え，拡張がなされたものと考えられるが明確ではない。明確なものは，5・17号住居跡で6.3～6.4mである。最小のものは，28号住居跡で3mであるが，これを除くと，56・65号住居跡で4.3mである。利用実面積(住居跡の床面上で柱穴と炉の構築された所を除いた面積）で，最大は，14号住居跡で36.54㎡，次は17・46号住居跡で24㎡である。最小は56号住居跡で9.26㎡であるが，例外の28号住居跡は4.08㎡である。利用実面積の平均は，16.61㎡であるが，28号住居跡を除く平均面積は，17.18㎡である。

次に，主柱穴間を線で結んだ平面形についてみると，六角形を呈するものが10軒で最も多く，長方形を呈するものが6軒，多角形を呈するものが3軒，台形を呈するものが2軒，方形を呈するもの1軒で，五角形と円形を呈するものは認められていない。

B　楕円形（4・9・15・16・36・43・45・58・60・61・68・71・77・79・80・81・89号住居跡）

当遺跡から17軒検出され，円形に次ぐものである。炉の検出されないものは8軒（58・60・61・71・79・80・81・89号住居跡）である。

平面規模についてみると，長径の平均は5.6m，短径の平均は5.0mである。長径の最大なものは，45号住居跡で6.7mである。最小のものは，58号住居跡で4.7mである。利用実面積の平均は，17.79㎡で分類した平面形での平均では最も大きい。利用実面積で最大なものは，15号住居跡で26.24㎡である。最小は9号住居跡で8.96㎡である。

次に主柱穴の配置状況をみると，台形を呈するものが多く6軒である。次に，長方形を呈するものが5軒，六角形を呈するものが3軒，方形を呈するものが2軒，多角形を呈するものが1軒で，円形と同様に，五角形と円形を呈するものは認められていない。

C　隅丸方形（6・12・18・20・22・27・32・33・40・47・63・66・78・82号住居跡）

当遺跡からは，14軒ほど検出され，炉が検出されないものは2軒（66・82号住居跡）である。なお，壁の状況がかならずしも良好でないため厳密に隅丸方形とすることはむずかしいものもみられる。さらに，隅丸方形という形を規定する概念が主観的なものもあるので，厳密に隅丸方形と確定できうるものは少なく，円形にすべきものもあると思われるが，ここでは，柱穴や炉などの状況を考慮して本類に取り扱った。

平面規模についてみれば，長軸の平均は5.6m，短軸の平均は5.2mである。長軸の最大のものは，22号住居跡で6.9m，最小のものは，82号住居跡で4.1mである。利用実面積の平均は，17.19㎡で楕円形につぐものである。利用実面積で最大なものは，22号住居跡で28.64㎡である。最小のものは，82号住居跡で11.78㎡である。

主柱穴の配置状況は，台形を呈するものが多く5軒で，次に，方形を呈するものが3軒，長方形を呈するものが2軒，六角形を呈するものが2軒，五角形・多角形を呈するものが各1軒検出

平面形 / 柱穴	円形				楕円形				隅丸方形（方形）				隅丸長方形(長方形)				形状不明
主柱配置	住居番号	長径(m)	短径(m)	面積(m²)	住居番号	長径(m)	短径(m)	面積(m²)	住居番号	長軸(m)	短軸(m)	面積(m²)	住居番号	長軸(m)	短軸(m)	面積(m²)	住居番号
方　形	SI 69	5.6	5.2	16.40	SI 68	5.5	4.8	12.34	SI 18	6.8	5.6	24.96	SI 7	6.3	5.4	17.56	SI 3
長方形	SI 29	5.8	5.3	15.64	SI 77	5.9	5.6	17.46	SI 20	5.9	5.7	17.84	SI 52B	6.1			SI 48
	SI 46	6.1	5.7	24.00	SI 4	6.4	5.3	22.16	SI 27	5.5	4.9	15.56	SI 62	5.3	3.7	15.48	SI 57
	SI 67	5.4	4.9	17.68	SI 15	(6.5)	(6.0)	(26.24)	SI 12	5.3	4.9	17.96	SI 8	(5.2)	(4.2)	(18.52)	SI 24
	SI 72	5.5	5.1	19.78	SI 43	5.7	5.0	16.04	SI 32	5.2	4.6	9.92	SI 30	6.2	5.7	19.04	SI 51
	SI 73	5.1	5.1	14.36	SI 58	4.7	3.6	10.90	SI 82	4.1	4.0	11.78	SI 86	3.8	3.0	8.42	SI 54
	SI 74	4.9	4.8	11.94	SI 71	5.1	4.9	18.74	SI 6	6.7	6.1	24.60	SI 87	3.8	2.5	6.38	SI 59
台　形	SI 70	4.7	4.4	12.60	SI 9	5.0	4.9	8.96	SI 47	5.5	4.9	16.68					SI 92
	SI 90	6.0	5.7	23.06	SI 60	5.5	5.2	19.68	SI 66	5.2	5.0	12.76					SI 1
多角形	SI 41	5.2	5.1	11.28	SI 61	6.1	5.8	23.80	SI 78	5.2	5.1	15.10					SI 2
	SI 65	4.3	4.1	10.62	SI 80	5.4	4.7	16.78	SI 22	6.9	6.4	28.64					SI 11
	SI 88	4.5	3.9	11.38	SI 81	5.1	4.0	12.96	SI 40	5.8	5.4	14.28					SI 13
六角形	SI 5	6.4	6.3	22.24	SI 89	5.6	4.3	16.26	SI 63	4.9	4.7	13.44					SI 23
	SI 14	7.4	7.0	36.54	SI 36	5.8	5.0	15.92	SI 33	5.7	5.2	17.16					SI 44
	SI 17	6.3	6.0	24.58	SI 16	5.3	5.2	21.80									SI 49
	SI 19	5.5	5.3	18.24	SI 45	6.7	5.5	22.92									SI 64
	SI 34	4.5	4.3	13.20	SI 79	5.6	4.9	19.48									SI 26
	SI 42	6.4	6.2	21.56													SI 53
	SI 50	6.0	5.5	14.20													SI 55
	SI 52A	5.1	5.0	15.34													SI 76
	SI 56	4.3	3.9	9.26													SI 94
	SI 75	4.6	4.4	14.04													SI 25
その他	SI 28	3.0	3.0	4.08													
平　均		5.4	5.1	17.18		5.6	5.0	17.79		5.6	5.2	17.19		5.1	4.2	13.57	

表７　住居跡の平面形状と主柱配置（筒戸Ａ・Ｂ遺跡）

柱穴＼平面形	円形			楕円形			隅丸方形			隅丸長方形			不定形			形状不明		
主柱配置	住居番号	長径(m)	短径(m)	住居番号	長径(m)	短径(m)	住居番号	長軸(m)	短軸(m)	住居番号	長軸(m)	短軸(m)	住居番号	長径(m)	短径(m)	住居番号		
方形	SI 10B			SI 39	6.4	(4.8)	SI 10A			SI 2	5.5	5.2	SI 38	4.7	3.9	SI 42B	(8.3)	(7.4)
	SI 43	6.6	6.3	SI 40	5.4	5.3	SI 34	5.7	4.9	SI 4	5.1	4.7	SI 12	6.1	4.0	SI 45A	(8.0)	(7.0)
長方形	SI 14	5.1	4.6	SI 41	5.8	4.9	SI 6	4.4	4.4	SI 15	5.3	4.4	SI 13	6.2	3.7	SI 45B	(8.0)	(7.0)
	SI 26	(6.2)	5.2	SI 46	6.0	(5.3)	SI 7	4.6	4.0	SI 35	5.7	4.3	SI 30	5.2	4.7	SI 58		
	SI 56	4.7	4.4	SI 29	5.3	4.0	SI 21	4.7	4.4							SI 5	4.1	
台形	SI 16	5.7	5.5	SI 49	5.1	(4.3)	SI 22	4.9	4.8							SI 25		
	SI 23	3.9	3.9	SI 3	4.25	3.9	SI 37	5.2	4.9							SI 54	4.6	4.6
	SI 24	4.5	4.23	SI 20	5.7	4.9										SI 8		
	SI 27	5.7	5.5	SI 52	(4.4)	4.0										SI 48	6.5	(5.5)
	SI 31	4.0	3.5	SI 55	4.1	3.5										SI 18	(4.9)	(4.0)
	SI 32	4.5	4.0	SI 17	6.4	5.6										SI 19	(3.8)	(3.3)
	SI 51	5.2	4.5	SI 36	4.1	3.9										SI 9A	5.9	4.8
多角形	SI 9A	5.9	4.8	SI 44	8.0	7.0										SI 50C		
	SI 33	7.9	7.9	SI 53A	5.1	4.3												
	SI 47	6.9	6.3	SI 1	4.7	3.5												
六角形	SI 28	7.8	7.6															
	SI 50A	5.1	4.8															
	SI 50B	4.7	(4.1)															
円・楕円形	SI 57	4.7	4.4															
	SI 59	4.7	4.4															
その他	SI 11	4.1	3.5															

表8　住居跡の平面形状と主柱配置（大谷津B遺跡）

され，変化に富んでいるが，円形・楕円形を呈するものは認められていない。

D　隅丸長方形（8・30・52B・62・86・87号住居跡）

当遺跡からは6軒検出され，炉が検出されていないものは2軒（86・87号住居跡）である。

平面規模についてみると，長軸の平均は5.1m，短軸の平均は4.2mである。長軸の最大のものは，30号住居跡で6.2mである。最小のものは，86・87号住居跡で3.8mである。利用実面積の平均は，13.57m²である。最大のものは30号住居跡で19.04m²で，最小は87号住居跡で6.38m²である。

主柱穴の配置状況は，平面形と同じ長方形を呈するものは2軒，六角形を呈するものは2軒，他の2軒は炉が検出されないもので，不規則な配置で主柱は明確ではない。

E　長方形（7号住居跡）

当遺跡では，1軒のみである。長軸は6.3m，短軸は5.4m，利用実面積は17.56m²である。

主柱穴の配置は，中央に4本の方形の主柱穴があり，その延長に長方形を呈する配置がみられる。

F　不定形（93号住居跡）

炉のない住居跡で，不整楕円形状である。長径は6.3m，短径は5.4mである。利用実面積は，17.56m²である。

主柱穴の配置は，中央に2本の柱穴が並び，それらを中心に五角形を呈している。

G　形状不明（1・2・3・11・13・23・24・25・26・44・48・49・51・53・54・55・57・59・64・76・92・94号住居跡）

遺構の掘り込みが浅いことと表土の削平とにより形状が確認されていないものは22軒を数え，その内，炉の検出されていないものは5軒（2・3・76・92・94号住居跡）である。

平面規模については，全く不明である。

主柱穴の配置状況を観察すると，多角形を呈するものが多く8軒である。次に，長方形を呈するものが5軒，六角形を呈するものが4軒，方形を呈するものは3軒，五角形を呈するものが1軒，円形を呈するものが1軒である。

これまでみてきた平面プランにおける柱穴の配置状況から平面形を類推すれば，長方形を呈するものは，住居の平面形が円形ないし楕円形に多く認められる。方形を呈するものは，隅丸方形ないし楕円形にみられる。六角形を呈するものは，円形に多く認められる。その他多角形を呈するものが多くみられるが，主柱穴は明確でないものが多い。妥当な平面形を推定すれば，円形ないし，楕円形になるものと想定される。

以上，平面形と主柱配置との関係を分析してみると，円形プランの住居跡には，主柱配置が六角形，長方形のものが多い。楕円形の住居跡では，主柱配置が台形・長方形・六角形が比較的多く認められる。隅丸方形プランでは，プランに合った方形・台形が多く認められているが，他の

不規則な配置も認められる。形状が不明の住居跡を柱穴の配置だけから平面形を推定することは，容易ではなく，その地域と集落を類型化して分析しなければならないであろう。

(2) 住居跡の変遷

次に，時期が推定できるものを平面形ごとに分けたのが表９である。

Ⅰ期

平面形は，楕円形－２軒，円形－１軒，隅丸長方形－１軒である。長径の平均は6.0ｍ，短径の平均は5.2m，利用実面積の平均は19.01m²で比較的大きな住居である。床面や柱穴もしっかりしたものが多く，８号住居跡以外は壁溝を有している。主柱配置は，68号住居跡が方形を呈する以外は，六角形を呈している。

Ⅱ期

当遺跡の中心をなす時期で14～21軒確認されている。平面形は，円形が多く10軒で過半数に近い。次に，楕円形と隅丸方形が各３軒，隅丸長方形が１軒，平面形状が不明のものは４軒である。長径の平均は5.4m，短径の平均は5.1mでやや小さくなるが，利用実面積の平均は16.59m²で，当遺跡で検出された住居跡の平均面積が16.84m²であるから，ほぼ平均的なものといえる。主柱配置はかなり変化に富み，ほぼすべての配置形が認められている。最も多いのはⅠ期と同じく六角形を呈するもので６軒である。次に，方形，長方形，多角形を呈するものが各４軒ずつ認められている。

Ⅲ期

この時期になると，円形，楕円形の平面形が各１軒と少なく，隅丸方形が３軒である。規模についてみると，隅丸方形を呈するものはⅡ期と変わりないが，円形，楕円形が大型化している。長径の平均は6.2m，短径の平均は5.7mで，利用実面積の平均は22.55m²で最大となっている。主柱配置は，それほど変化はないが，拡張ないしは建て替えをするものも認められる。

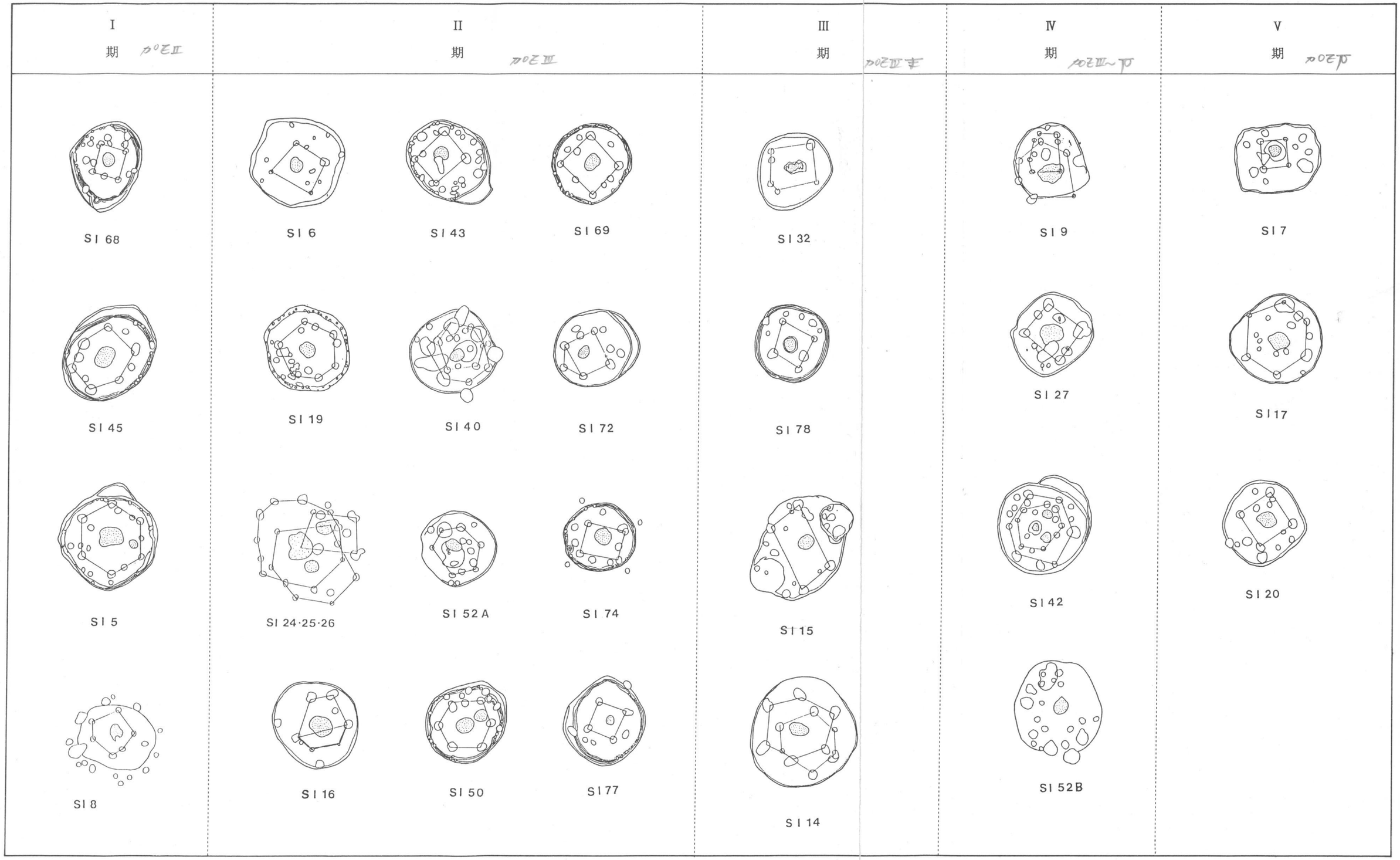
Ⅳ期

この時期は，あまり明確に分けられない時期である。遺構数はⅢ期と同数であるが，平面形をみると隅丸方形を呈するものが減少し１軒となり，他の平面形も少なくなっている。利用実面積の平均は15.5m²と小さくなり，床の状況や柱穴の掘り方も一部の住居を除くと軟弱である。

Ⅴ期

平面形では，楕円形がなくなり，隅丸方形が２軒，円形，長方形が各１軒である。規模はⅣ期とそれほど変化はないが，利用実面積はやや大きくなり，その平均は18.36m²である。

以上，各期にわたって平面形や柱穴配置等について述べてきたが，平面形についてまとめるとⅡ期で円形が多い以外はさほど変化がない。しいてあげれば，Ⅰ期，Ⅳ期で楕円形がやや多く，



第242図　住居跡の変遷図

平面形＼時期	I期 住居番号	長径(m)	短径(m)	面積(m²)	II期 住居番号	長径(m)	短径(m)	面積(m²)	III期 住居番号	長径(m)	短径(m)	面積(m²)	IV期 住居番号	長径(m)	短径(m)	面積(m²)	V期 住居番号	長径(m)	短径(m)	面積(m²)
円形	SI 5	6.4	6.3	22.24	SI 19	5.5	5.3	18.24	SI 14	7.4	7.0	36.54	SI 42	6.4	6.2	21.56	SI 17	6.3	6.0	24.58
楕円形	SI 45	6.7	5.5	22.92	SI 28	3.0	3.0	4.08	SI 15	(6.5)	(6.0)	(26.24)	SI 9	5.0	4.9	8.96	SI 20	5.9	5.7	17.84
	SI 68	5.5	4.8	12.34	SI 50	6.0	5.5	14.20	SI 18	6.8	5.6	24.96	SI 36	5.8	5.0	15.92	SI 63	4.9	4.7	13.44
隅丸長方形	SI 8	(5.2)	(4.2)	(18.52)	SI 52A	5.1	5.0	15.34	SI 32	5.2	4.6	9.92	SI 27	5.5	4.9	15.56	SI 7	6.3	5.4	17.56
					SI 69	5.6	5.2	16.40	SI 78	5.2	5.1	15.10	SI 52B	6.1	6.0					
					SI 72	5.5	5.1	19.78												
					SI 74	4.9	4.8	11.94												
					SI 16	5.3	5.2	21.80												
					SI 77	5.9	5.6	17.46												
					SI 6	6.7	6.1	24.60												
					SI 40	5.8	5.4	14.28												
					SI 44															
					SI 25															
					SI 57															
平均		6.0	5.2	19.01		5.4	5.1	16.38		6.2	5.7	22.55		5.8	5.4	15.5		5.9	5.5	18.36

隅丸長方形

隅丸方形

形状不明

表9　住居跡の時期と平面形状（筒戸A・B遺跡）

時期 / 平面形	加曽利E III期 遺構番号	長径(m)	短径(m)	主柱配置	加曽利E IV期 遺構番号	長径(m)	短径(m)	主柱配置
円形	SI 10B			方形	SI 9A	5.9	4.8	多角形
	SI 14	5.1	4.6	長方形	SI 16	5.7	5.5	台形
	SI 27	5.7	5.5	台形	SI 50A	5.1	4.8	六角形
	SI 28	7.8	7.6	六角形	SI 50B	4.7	(4.1)	六角形
	SI 33			多角形	SI 56	4.7	4.4	長方形
	SI 47	6.9	6.3	多角形	SI 17	6.4	5.6	多角形
	SI 51	5.2	4.5	六角形	SI 21	4.7	4.4	台形
楕円形	SI 20	5.7	4.9	台形	SI 22	4.9	4.8	台形
	SI 44	8.0	7.0	六角形	SI 18	(4.9)	(4.0)	不定形
	SI 46	6.0	(5.3)	方形				
	SI 53A	5.1	4.3	六角形				
	SI 55	4.1	3.5	台形				
	SI 56	4.7	4.35	長方形				
隅丸方形	SI 7	4.6	4.0	長方形				
	SI 10A			方形				
	SI 34	5.7	4.9	方形				
隅丸長方形	SI 15	5.3	4.4	台形				
	SI 35	5.7	4.3	不定形				
形状不明	SI 45B	(8.0)	(7.0)	台形				
	SI 48	6.5	(5.5)	不定形				
	SI 54			不定形				
	SI 58			台形				

表10　住居跡の時期と平面形状（大谷津B遺跡）

Ⅲ期，Ⅴ期で隅丸方形がやや多く認められるにすぎない。

(3) 集落の変遷

当遺跡の集落を考えるには，北側に隣接するほぼ同時期に集落が営まれた大谷津Ｂ遺跡をあわせて考えていかなければならないであろう。

大谷津Ｂ遺跡[(1)]は，昭和55年度から昭和56年度前半にかけて当教育財団によって調査が行われた遺跡で，住居跡55軒，住居跡状遺構12基，土壙854基，溝１条が検出されている。時期が推定できる住居跡はそのうち30軒で，縄文時代中期の加曽利ＥⅢ式期からＥⅣ式期に比定されている。しかし茨城県では，この加曽利Ｅ式の型式区分については，まだ確立されておらず，研究者によって若干の差異があり，今後統一的なものを確立していかなければならないであろう。

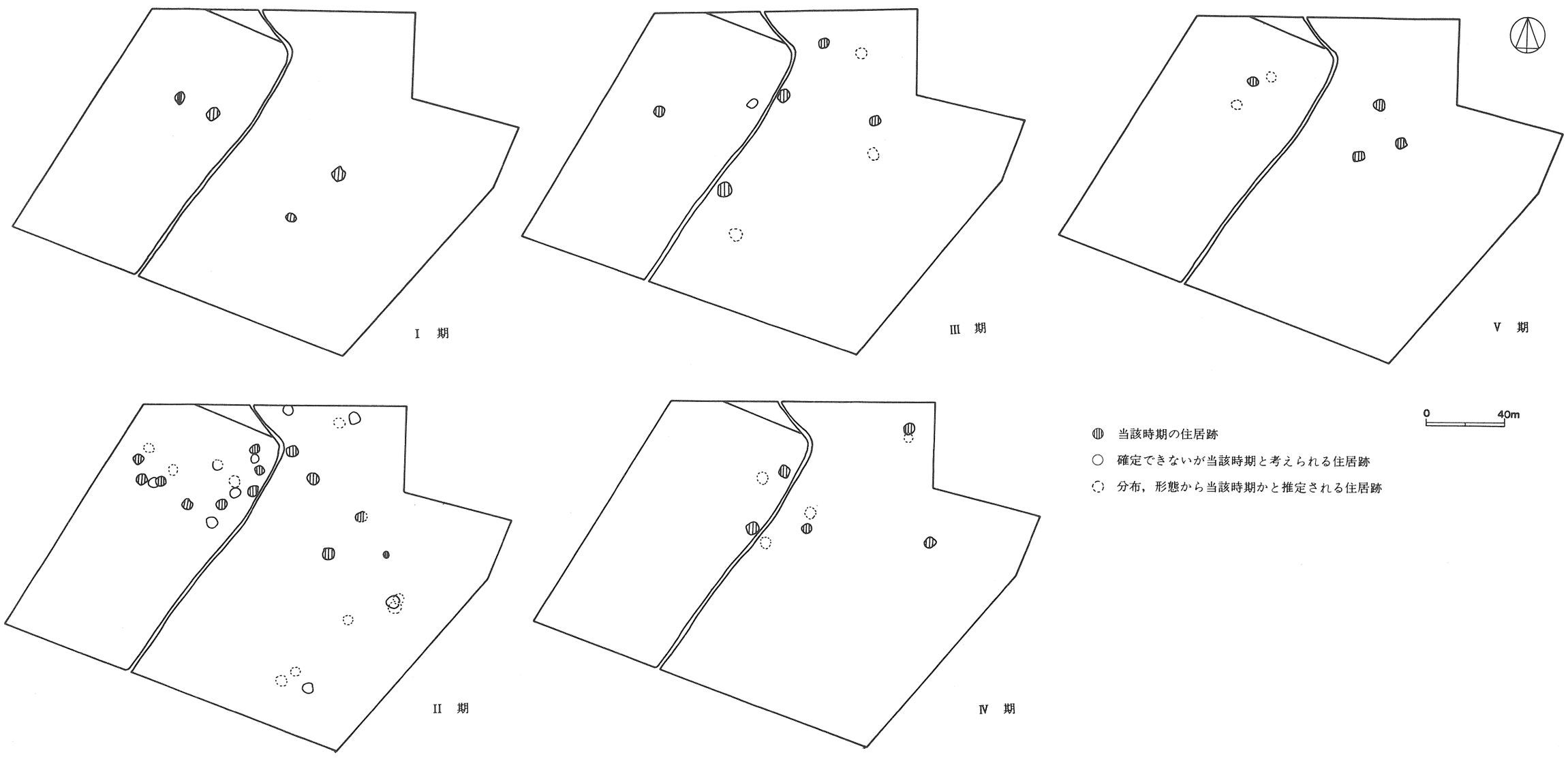
筒戸Ⅰ期

当遺跡では，４軒ほど検出されている。その分布をみると，二つの小グループに分けられる。一つは，筒戸Ａ遺跡の中央部からやや北部寄りの45・68号住居跡である。北側がやや浅い凹地となりそれらを広場としていたと想定される。もう一つは，筒戸Ｂ遺跡のほぼ中央部に位置する，５・８号住居跡である。５号住居跡の西側は凹状の低地となり，８号住居跡の北側も凹地となっておりそれらを広場としてほぼ円形の小グループを形成していると考えられる。大谷津Ｂ遺跡では，この時期の住居跡は確認されていないが，報告書には類例がみられることから何軒かはあったものと想定される。

筒戸Ⅱ期

当遺跡の中心をなす時期で，時期が確認できるものは14軒であるが，他にほぼこの時期と推定されるものが７軒ほど認められている。分布をみると，10～12の円形状の小グループに分けられる。同時期で遺構の重複や小グループの領域に重複する部分がみられることから，２世代以上，３～４世代続いて集落が営まれたものと考えられる。大谷津Ｂ遺跡でも同じように６～７の小グループが認められる。

まず，筒戸Ａ遺跡からみると，３グループであるが，二つのグループに重複するものがみられ５グループないしそれ以上の小グループがあったものと考えられる。次に，西側から東側へと述べることにする。北西端に位置するグループでは，69・72・73・74号住居跡が北側の空間地をとり囲むように弧状に位置している。さらに，73・74号住居跡は重複するため二つの小グループに分けることが可能である。このグループ内に，時期不明の62・64号住居跡が含まれるので，あるいは，これらも同時期に含まれる可能性がみられる。次に，このグループの南東に，43・44・77号住居跡が位置している。その北東に，48・50・52Ａ・56・57号住居跡が位置している。50・52Ａ号住居跡が隣接しているので，48・50号住居跡，52Ａ・57号住居跡のグループに分けることも



第243図　集落の変遷図

可能と考えられる。時期不明の47・51号住居跡もこのグループ内に位置し，52A・57号住居跡と向かい合って所在しており，この時期に入る可能性が考えられる。

筒戸B遺跡では，6グループが想定され，南側から北側へ記述することにする。南端に位置するもので確認されているのは1号住居跡だけであるが，他の小グループをみると2軒ないし3軒を単位としているので，3号住居跡ないしは2号住居跡が入るものと想定される。次に中央から東側には，6・28・25号住居跡が位置し，1ないし2グループが考えられる。28号住居跡はやや特殊な遺構で，帰属時期は明確でなく，この時期あるいはこれ以降とも考えられる。25号住居跡と重複している24・26号住居跡や11号住居跡は時期不明であるが，周囲に他の時期のものがみられないことからこのグループに入るものと考えられる。次に，北側のグループは，3～4グループに分けられ，北端に位置する41号住居跡は，大谷津B遺跡のグループと関係があるものと考えられる。16・19・40号住居跡と時期はやや遅れる32号住居跡は，ほぼ方形状に並んでいる。その北東に，同時期の30号住居跡が位置している。周囲に時期不明の3住居跡が（29・33・34号住居跡）みられる。29号住居跡は，平面形や柱穴の状況がⅢ期の32号住居跡と類似し，34号住居跡は，Ⅴ期の36号住居跡を切っているので，33号住居跡と関係があるものと考えられる。

以上，当時期の小グループを分析すると新たに6～7軒の住居跡が推定される。

筒戸Ⅲ期

時期の確認できるものは，5軒でやや散在しているが，やはりこれらも小グループをなすものと考えられる。西側の78号住居跡は，同時期のものとしては単独で検出されているが，構造的には，69・77号住居跡と類似しそれらとの関連が想定される。次に，中央部に位置する15・49号住居跡があげられる。49号住居跡は本文中では48号住居跡に切られていると記述したが，覆土がほとんどなかったため，その関係はかならずしも明確ではない。15号住居跡の柱穴配置は，長方形を呈し，類似するものでは北側の54号住居跡がみられる。次に，北東に位置する32号住居跡が単独でみられるが，構造的，位置的には29号住居跡との関連が想定される。さらにその南側に18号住居跡が位置している。これとグループをなすものは確認できないが，位置的には4号住居跡との関連も考えられるが判然としない。最後に，中央からやや南西側の14号住居跡であるが，これは単独で確認されているので，この時期は面積が大きくなる傾向がみられることから規模的には南側にやや離れて位置する22号住居跡との関連が考えられる。

筒戸Ⅳ期

この時期は，加曽利EⅢ式からEⅣ式にかかる時期である。かならずしも確定的なものではないが，5軒ほどみられ4～5のグループが考えられる。筒戸A遺跡では，42・52B号住居跡が各々単独で位置しているが，広場となる凹地や他の住居跡の分布状況をみると，52B号住居跡と51号住居跡，42号住居跡と13号住居跡との関連が考えられる。筒戸B遺跡でも，同じように9・27・

36号住居跡が単独で確認されているが，9号住居跡に対応するものとして12号住居跡が考えられる。27号住居跡に対応するものとしては，36号住居跡と構造が類似する4号住居跡が考えられる。

筒戸Ⅴ期

当遺跡では，4軒が2軒ずつのグループで確認されている。筒戸A遺跡では，63号住居跡のみであるが，小集落形成にはあと1～2軒あったものと考えられる。位置的に考えれば，47号住居跡が想定されるが，構造的には67号住居跡も考えられる。筒戸B遺跡では，ほぼ中央部に位置する7・17・20号住居跡が中央を広場として囲むように形成され，17・20号住居跡はそれぞれ広場の方に出入口が想定される。

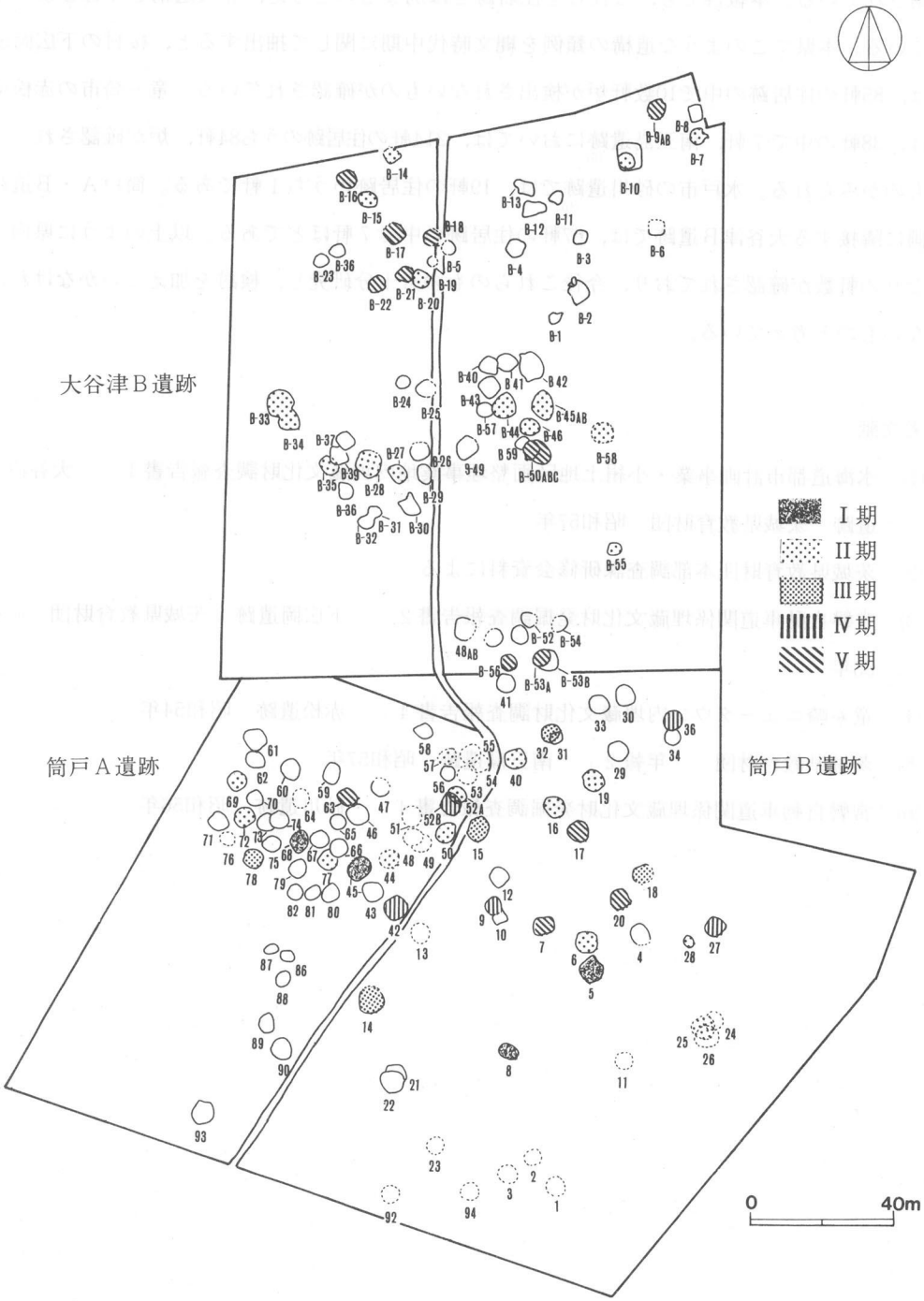
当遺跡では4軒であるが，大谷津B遺跡からは8～10軒の住居跡が確認され5グループをなしている。しかし，大谷津B遺跡の南側の住居跡群は筒戸B遺跡の集落との関連がみられ，筒戸遺跡では3グループ，大谷津B遺跡では4グループと考えた方がよいと思われる。

以上，各期にわたってみてきたが，当遺跡の集落は，2軒ないし3軒からなる小グループが何単位かまとまって集落を形成し，さらに大きく南北に筒戸A・B遺跡を中心とする集落と大谷津B遺跡を中心とする集落という形で分かれて営まれていたと想定される。

(4) 炉の検出されない遺構について

当遺跡において検出された住居跡は87軒であるが，その内で炉が検出されたものは65軒で他のものは炉をもたない遺構である。炉が検出された65軒の住居跡の時期については，集落の変遷の項でほぼ推定できたが，炉のない遺構については不明である。しかし，炉の検出されない遺構の中で66号住居跡としたものは，加曽利EⅢ式の時期と考えられる418号土壙によって切られていることにより，ほぼ同時期ないしそれ以前の時期が想定される。

平面形について分類してみると，円形－6軒，楕円形－5軒，隅丸方形－2軒，隅丸長方形－4軒，不定形－1軒，形状不明－4軒である。分布状況をみると，隣接するものが約8か所認められる。集落内に分布するものは6～7軒で，他は，集落に隣接するがその外側に位置し，かなり距離をもって離れるものも数軒みられる。柱穴の配置は，最も多いものが台形を呈するもので6軒である。次に，円形状を呈するものが5軒，方形と五角形を呈するものが各3軒，長方形と多角形を呈するものは各2軒，六角形を呈するものは1軒である。ここで注目すべきことは，床面の中央に2本の柱を有するものが4軒，それに類するものが2軒，中央に1本だけみられるものが1軒認められることである。これらは，当遺跡で確認された住居跡とは性格が異なるもので，火の使用を前提としない機能をもった遺構と考えられる。床面や柱穴の状況をみるとそれほど日常的に利用されたものではないと考えられる。土器片等の遺物も少ない。これらの性格は明確でないため，想像の域を出ないが，物置的なもの，あるいは，選果場などの作業場，祭祀の場など



第244図　時期別遺構分布図（大谷津・筒戸）

が推測されている。[2]本報告でも，これらを住居跡とは別なものと考え，竪穴遺構と呼称しようと考えている。本県でこのような遺構の類例を縄文時代中期に関して抽出すると，桜村の下広岡遺跡[3]では，85軒の住居跡の中で10数軒炉が検出されないものが確認されている。竜ヶ崎市の赤松遺跡[4]では，38軒の中で７軒，南三島遺跡[5]においては，214軒の住居跡のうち84軒，炉が確認されていないものがみられる。水戸市の砂川遺跡[6]では，19軒の住居跡のうち１軒である。筒戸Ａ・Ｂ遺跡の北側に隣接する大谷津Ｂ遺跡[1]では，67軒の住居跡の中で７軒ほどである。以上のように県内でもかなりの軒数が確認されており，今後これらのものも十分研究し，検討を加えていかなければならないものと考えている。

参考文献

(1)「水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書１」　大谷津Ｂ遺跡　茨城県教育財団　昭和57年

(2)　茨城県教育財団本部調査課研修会資料による

(3)「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書２」　下広岡遺跡　茨城県教育財団　昭和55年

(4)「竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書４」　赤松遺跡　昭和54年

(5)　茨城県教育財団　「年報２」　南三島遺跡　昭和57年

(6)「常磐自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書４」　砂川遺跡　昭和56年

2　土壙について

(1)　土壙の形態分類

当遺跡において検出された土壙は，筒戸Ａ遺跡で189基，筒戸Ｂ遺跡で226基，合計415基である。これらの土壙を報告書中に逐一詳細に記述することは困難であるため，第３章，第１節，遺構の概要と記載方法の(６)遺構の分類の項目に従って類型化し分類を行った。その結果は，表11のようになり，縦の欄は，土壙の平面形とその長径，長軸線上の規模を組み合わせて表し，横の欄は，断面形状と深さを組み合わせて分類したものである。

断面形 / 深さ / 平面規模	１ａ	２ａ	３ａ	２ｂ	３ｂ	３ｃ	計
Ⅰａ	2	5	2				9
ｂ	5	17	2				24
ｃ			3		3		6
小計	7	22	7		3		39
Ⅱａ	3	11		1	1		16
ｂ	35	78	2	2	4	1	122
ｃ	7	21	3	1	1		33
小計	45	110	5	4	6	1	171
Ⅲａ		4	2				6
ｂ	5	23	3				31
ｃ	1	3	1				5
小計	6	30	6				42
Ⅳａ		4	1				5
ｂ	21	39	6	1			67
ｃ	7	15	3		1		26
小計	28	58	10	1	1		98
Ⅴａ	1						1
ｂ	6	12	1		1		20
ｃ	10	15	1	1	1		28
小計	17	27	2	1	2		49
Ⅵａ	2	2					4
ｂ	1	6					7
ｃ		4	1				5
小計	3	12	1				16
合計	106	259	31	6	12	1	415

表11　土壙形態分類一覧表

これをみると，検出された土壙の平面形で最も多いものは，楕円形を呈するもので171基，次に，隅丸長方形，長方形を呈するものが98基，不定形のものが49基，隅丸方形，方形を呈するものが42基，円形を呈するものは39基，その他，重複のため形状不明のものが16基である。

次に，各平面形ごとに細部について検討を加えることにする。

◦円形

当遺跡では，39基で比較的少ない方である。規模は，長径が0.8～1.6ｍ以内のものが多く，深さは，60cm以内のものが大部分を占めている。壁面の状況は様々であるが，外傾ぎみに立ち上がるものが多い。底面は，平坦なものと皿状を呈するものとがみられるが，平坦で硬いものは少ない。遺物は，15基から縄文土器の小片が検出され，そのほとんどは覆土中に混入ないし流れ込んだものである。

◦楕円形

当遺跡では最も多く，171基検出されその分布もほぼ全域にわたっている。規模は，長径が１～２ｍまでのものがほとんどで70％以上を占めている。円形では，掘り込みの深いものは少ないが，楕円形では比較的多く，160cm以上のものも１基認められている。壁面の状況は，外傾して立ち上がるものが66％，ゆるやかに立ち上がるものが26％，垂直に立ち上がるものが６％である。

その底面は，平坦なもの，皿状を呈するもの，凹凸がみられるもの等がみられ，軟弱なものが多い。縄文土器片等の遺物が出土したものは，51基ほどである。そのほとんどは覆土中から出土したものである。

◦隅丸方形・方形

当遺跡では，42基検出されている。規模は，0.6～2m以内のものがほとんどである。深さは，60cm未満のものでそれ以上のものは確認されていない。壁面の状況は，やはり外傾して立ち上がるものが多く71%を占めている。ゆるやかなものと垂直に立ち上がるものは少なく同数で6基のみである。遺物が出土したものは，15基ほどである。そのほとんどは覆土中から出土している。

◦隅丸長方形・長方形

当遺跡では，98基検出されている。規模は，長軸が1～2m以内のものが多く68%を占めているが，2m以上のものも27%みられる。壁面の状況は，外傾して立ち上がるものがやはり多く60%を占めている。他に比して垂直ぎみとなるものがやや多い。遺物が出土したものは39基である。そのほとんどは縄文土器の小片で覆土中に混入したものである。

◦不定形のものや重複して形状が不明なものについても同じような傾向がみられる。

(2) 土壙の分布状況と時期について

当遺跡から検出された415基の土壙の分布状況をみると，中央部のやや凹状を呈するL9・L10区を中心に，その周囲にほぼ環状に分布している。中央部は少なく，住居跡の集中する北西部や北部に特に多く密集してみられる。さらに，それらの土壙は小さなまとまりをもって所在し，16～18の群によって形成されたものと考えられる。それらを概略的にグルーピングしたものが第245図である。これらの土壙群は，遺物が検出されていないものが大部分で時期別に分けることは困難であったため，遺構の集中する部分を囲んだもので確たる根拠はもっていない。しかし，ある程度同形態をなすものが多く認められ，グルーピングすることにより北東側，南東側，南西側の一部に遺構がない所がみられ，通路ないし領域を想定することができたと考えている。

次に，時期についてみると，415基の土壙の中で遺物が出土したものは154基で，そのほとんどは覆土中に混入されたもので，時期が推定されるものは，わずかに58基である。これらについても，床面直上から出土するものは少ないため，出土状況やその他の状況を観察しその前後に位置付けたものもあり，確定できうるものは極く少ないといえる。

次に，時期が推定できるものについてⅠ～Ⅴ期に分けて概略的に記述することにする。

Ⅰ期と考えられるものは8基で，検出された住居跡と同じように少ない。この中には，Ⅰ期末からⅡ期へわたるものも数基認められている。分布は，環状にめぐる土壙群のやや内側の8・9グループと4のグループ内に所在している。Ⅱ期と考えられるものは20基である。その分布は，

ほぼ全域に散在しているが，北側の土壙が密集する４・５のグループに多く認められている。平面形態をみると，楕円形でしっかりした掘り込みのものが比較的多くみられ，長径の平均は2.5ｍと大きい。Ⅲ期と考えられるものは16基である。その分布は，ほぼⅡ期と類似しているが集落の外側に位置するものもみられる。平面形態は，Ⅱ期と同じようで楕円形が多いが，隅丸長方形や不定形もやや多く認められている。Ⅳ期と考えられるものは，９基である。その分布は，当時期の住居跡の分布状況からみるとその内側に隣接している。平面形態は，Ⅲ期とさほど変化が認められない。Ⅴ期と考えられるものは５基で，当時期の住居跡と同じように少ない。その分布は，当遺跡の北側から西側へかけて点々と位置している。

以上，簡単に時期が推定できうるものについて述べてきたが，これだけでは全貌を把握するには至らないので，集落内での土壙群の位置，土壙の状況，その他埋甕等を考慮して第245図に図示したように小グループに分けて，その性格を考えたい。

１グループは，筒戸Ｂ遺跡の南端に位置し，さらにａ・ｂ・ｃの三つに分けられる。平面形態は，楕円形，円形，不定形がみられ，楕円形が多い。壁面は外傾して立ち上がり，底面は平坦であるが軟弱なものが多い。分布は，環状の集落のやや外側に位置している。性格は，貯蔵穴と考えるには掘り方がやや軟弱であり，陥し穴と考えるには浅いものが多い。形状的には楕円形が多いことと西側に埋甕（M1）が所在することにより，墓壙的なものかと想定される。

２グループは，筒戸Ｂ遺跡の南端に位置する一群である。平面形態は，円形，楕円形がみられ，円形のものは小さいものが多い。性格は不明である。

３グループは，筒戸Ｂ遺跡の東側に位置する一群で，南北に同じようなものがみられａ・ｂとして一括した。分布は，Ⅱ期の集落の外側に位置している。平面形態は，楕円形のものが多く，覆土は軟質のものが多い。性格は不明であるが，風倒木的なものもあるかとも考えられる。

４・５のグループは，筒戸Ｂ遺跡の北側に位置する一群で，ほぼ同じような平面形態・分布を示している。５グループはかなりの土壙が密集し，Ⅱ～Ⅳ期までの遺物が検出され多期にわたって形成されたものと考えられる。性格は不明のものがほとんどである。

６グループは，筒戸Ａ遺跡の住居跡群から離れた北西側に位置する一群である。分布的にみると東・西をａ・ｂの二つの小グループに分けられる。平面形態は，楕円形が多く，壁面は外傾するものが多く，底面は軟弱なものが多くみられる。性格は不明であるが，ａ・ｂの二つの小グループに１基ずつ埋甕が検出されているので，あるいは墓域も考えられる。

７グループは，筒戸Ａ遺跡の住居跡の集中する地域に位置するが，埋甕が６グループと同じように１基検出されている。

８・９のグループは，筒戸Ａ遺跡で住居跡が密集する地域に所在する一群である。平面形態は，円形，楕円形，不定形等のものがみられ，概して円形で小型のものが多く認められる。性格は不

明であるが，９グループには284号土壙のように掘り込みが深く陥し穴的なものもみられる。８グループには294号土壙の上面を切る埋甕（M5）も確認されている。

10グループは，筒戸Ａ遺跡で住居跡が密集する地域に所在する一群で，８・９グループと類似している。平面形態は，楕円形でやや大型のものが多く，住居跡を切っているものがほとんどである。性格は不明である。

11グループは，筒戸Ａ遺跡の北西端に位置する一群で，形態的には，６グループに類似している。

12・13グループは，筒戸Ａ遺跡の西側に位置し，住居跡が集中する地域に隣接するがややその外側にみられる一群である。12はやや小型の土壙が多く，13は楕円形，隅丸長方形でやや大きいものが多く認められている。なお，13内には，炉の検出されない遺構群が所在している。

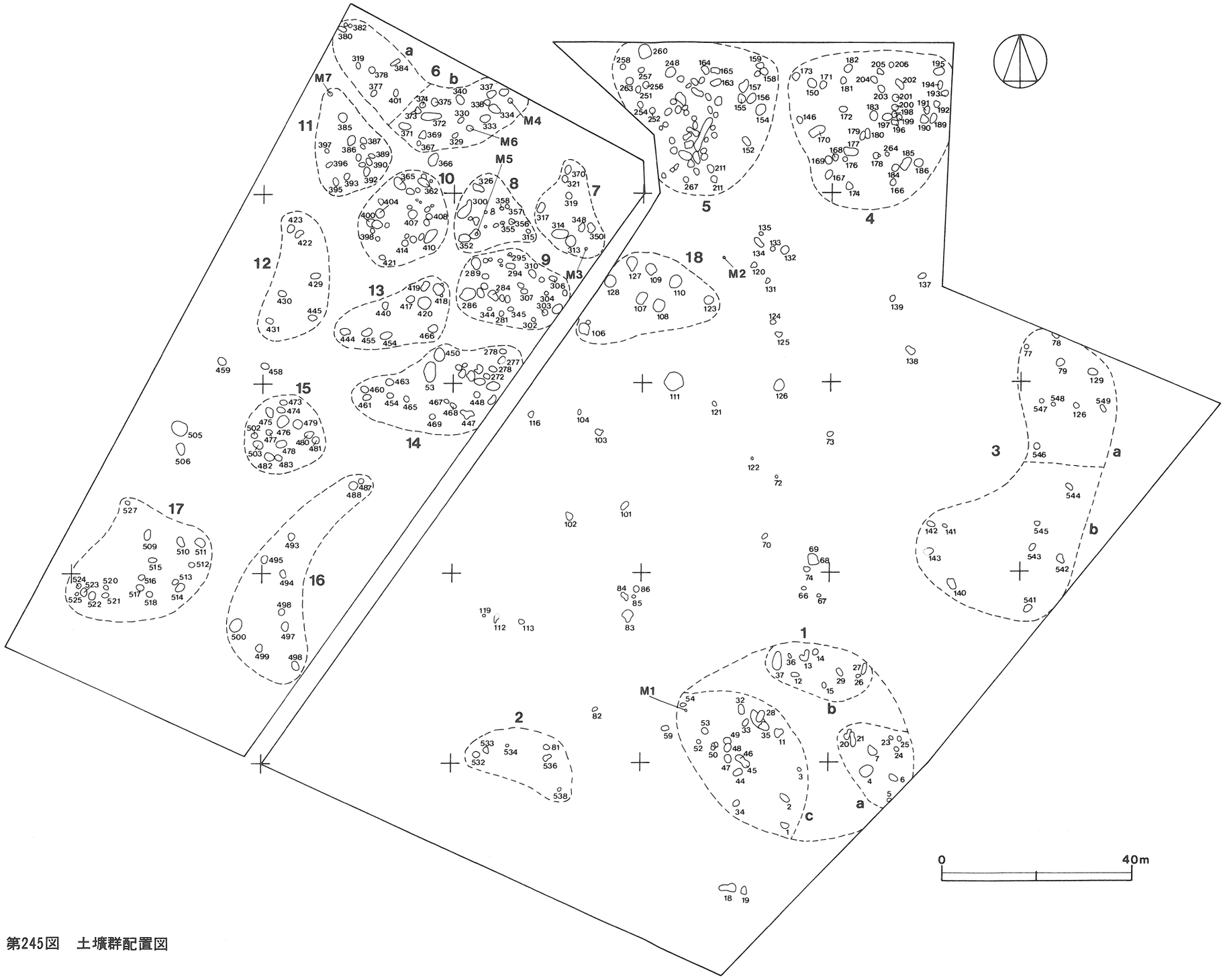
14グループは，環状の集落のやや内側に位置する一群で，42・43号住居跡を切って所在している。平面形態は，楕円形，隅丸長方形，不定形のものがみられ，壁面は外傾して立ち上がるものが多く，覆土は，ローム粒子を含み締まりのある自然堆積層である。遺物は，ほとんど検出されず，性格は不明である。

15グループは，筒戸Ａ遺跡で住居跡が集中する地域の南西の外側に位置する一群である。平面形態は，楕円形，隅丸長方形で１～２ｍ内外のものがほとんどである。性格は不明であるが，貯蔵穴的なものと考えるには，掘り込みが浅く軟弱である。住居跡群から離れていることにより，墓壙的なものあるいは他の性格のものと思われる。

16グループは，筒戸Ａ遺跡の南端に位置する一群で，炉の検出されない竪穴遺構群に沿って弧状に検出されている。平面形態は，楕円形，隅丸方形，隅丸長方形などがみられる。底面は，平坦なものが多いが概して軟弱である。覆土は，ローム粒子・ロームブロック等を含みやや軟質なものが多い。性格は明確なものは認められていない。

17グループは，筒戸Ａ遺跡の南西端に位置する一群である。平面形態は，楕円形が多く，やや小型のものもみられるが，１～２ｍ内外のものがほとんどである。住居跡群からかなり離れていることや形状などから墓壙的なものと考えられるが明確なる根拠や遺物は認められていない。

最後に，環状に分布する土壙群の中で内側に位置する一群を18グループとした。この一群は，平面形態が円形を呈し掘り方のしっかりしたものが多い。長径の平均は2.32ｍで，深さは30～70㎝と深い。壁面は垂直に立ち上がり，底面は平坦で硬く踏み固められ，深いピットを有するものがみられる。ピットの状況をみると，底面の中央に１か所認められるもの（106・108・128号土壙），中央にピットを有し，方形状の深い孫ピットが１か所認められるもの（109号土壙），壁ぎわにピットが認められるもの（127号土壙），その他，ピットが認められないもの（107・110号土壙）とに分けられる。出土遺物は，覆土中に混入されたもので時期的には加曽利ＥⅡ末～ＥⅣ式のも



第245図　土壙群配置図

のが検出されているが，土壙の分布をみると，107・108・128号土壙がほぼ直線上に並び，その北側に，同じように109・110・127号土壙が並んで位置しており，あるいは，同時期のものとも考えられる。性格は，底面のピットを利用した上屋構造をもつ小竪穴で，貯蔵穴的なものと考えられる。当遺跡で類例をさがすと，5グループ内の41号住居跡を切る248号土壙は，底面中央にピットを有し，方形状の孫ピットを一つ有している。さらに，これに類似するものとして28号住居跡があげられる。その他，13グループ内に所在し，66号住居跡を切る418号土壙がある。この土壙は，底面中央にピットを有しその両側に孫ピットを2か所有している。大谷津B遺跡では，底面の壁ぎわに2か所ピットを有する土壙（466号土壙）が1基確認されているだけである。

(3) その他

当遺跡からは，7基の埋甕が検出されている。屋内に埋設されたものは，M2だけである。M1，M3も住居跡内から検出されているが，掘り方や埋甕の遺存状況などから観察すると住居跡よりやや新しいものと考えられる。他の埋甕は，単独で住居跡と別個に所在し，土壙群の中から検出されるものが多い。性格は，墓壙的な施設と考えたい。

SX1は，性格不明であるが，各部の状況や覆土は軟弱であることなどから風倒木的なものと考えられる。SX2は，形状等からみて動物により掘られた穴であると考えられる。SX3は，溝状を呈するが溝ではなく，後世の攪乱によるものと考えたい。

第2節　遺物について

1　土　器

筒戸A・B遺跡（遺跡中央部を南北に走る道路をもって西側部をA遺跡，東側部をB遺跡に分けたもの）からは，縄文中期中葉から後葉にかけての遺物がみられ，遺構の検出状況は，遺跡北側部（A遺跡）に多く，土器の出土量は，B遺跡に多く比較的まとまって出土している。また，遺物の出土は，大部分が住居跡，土壙等から多量に認められる点から，一般的な集落遺跡にみられる土器捨て場の様相を示している。

次いで，筒戸A・B遺跡から出土した土器を観察した結果，遺跡の東・西側から出土した土器は，加曽利EII～III式期が主体であり，北側から出土した土器は，加曽利EIII～IV式期としてとらえられる。このことは，隣接の大谷津B遺跡が加曽利EII～IV式期に位置する点からも，縄文中期中葉から後葉期を画する土器群を形成するものとして位置づけられる。

これらの土器群を，出土土器の文様区画，器形等から説明のための便宜的なものとして「群」

「類」を次のように分類した。

Ⅰ群　中期中葉から後葉の土器群を本群とした。当遺跡において最も出土量の多い土器である。文様，器形により２類に分類した。

１類　口縁部が渦巻状の隆線・沈線によって区画され，胴部に懸垂文（沈線）が施される深鉢形土器。

a　地文として縄文が施されるもの。

２類　連弧文式土器を一括する。

Ⅱ群　中期終末に属する土器群である。文様，器形により３類に分類した。

１類　口縁部に無文帯をもつもの。

a　口縁下に円・楕円区画が施され，胴部に沈線で，「∩」形区画を施し，区画内に縄文を充塡し，区画間を磨り消すもの。

２類　縄文を地文とし，文様区画を沈線でおこなうもの。

a　胴部文様を沈線で施すもの。

b　口縁部に刺突文，胴部に沈線が施されるもの。

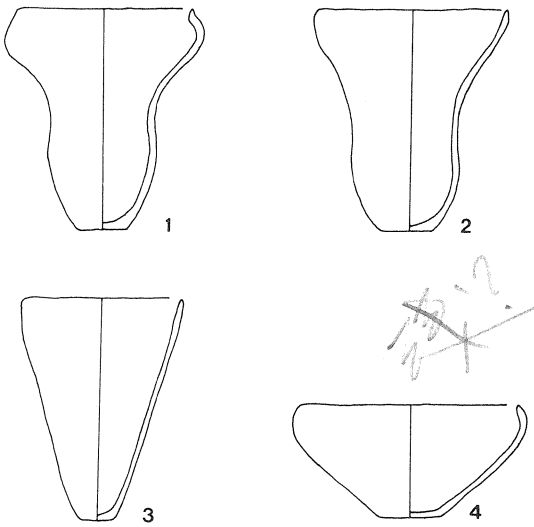
c　地文として，全面に縄文が施されるもの。

３類　櫛歯状工具による沈線文様が施されるもの。

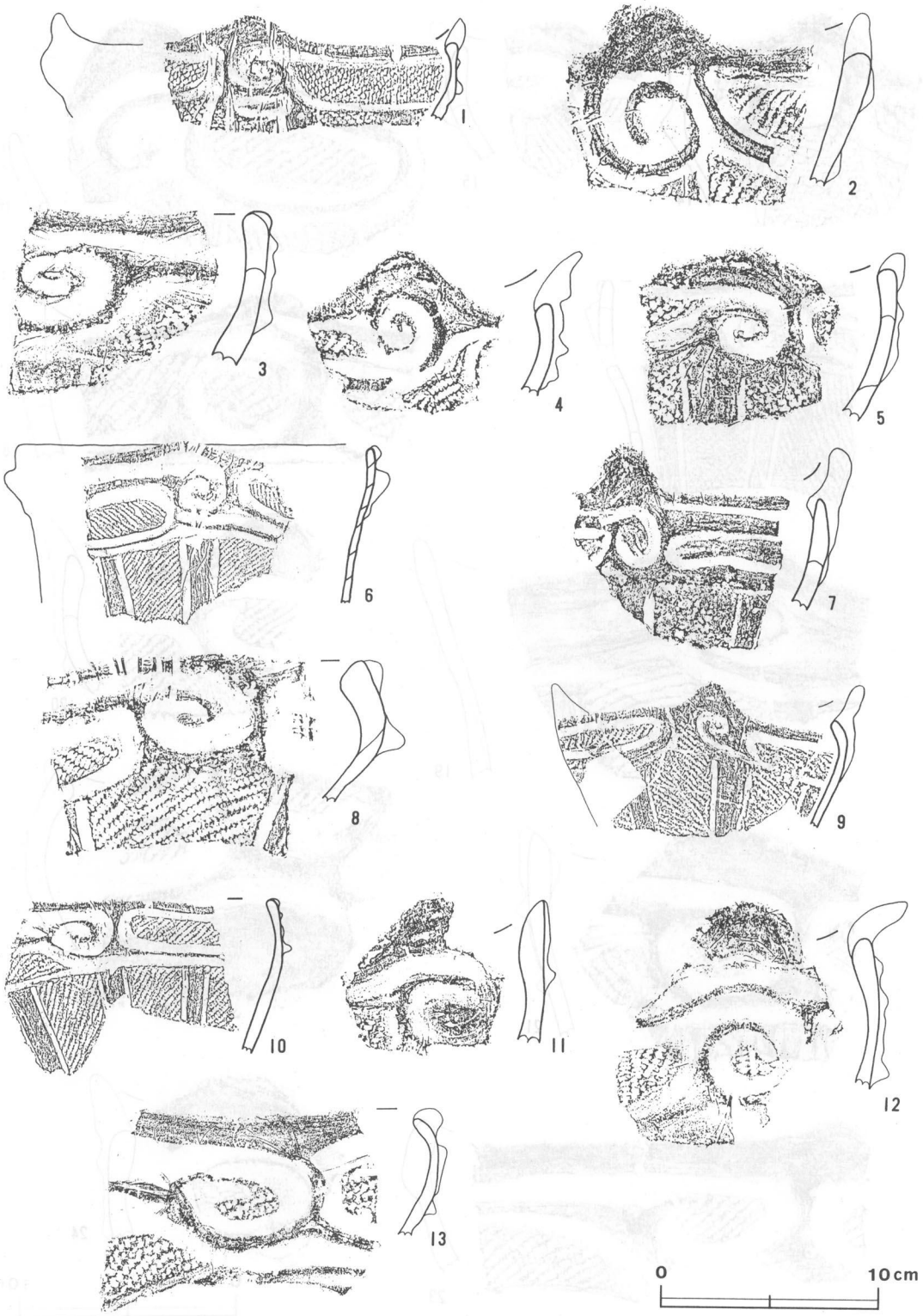
a　口縁部に一本の沈線を巡らせ，口唇部を無文とし，胴部に櫛歯状の沈線又は，細い沈線が施される深鉢形土器。

b　全面に櫛歯状工具による条線が施されるもの。

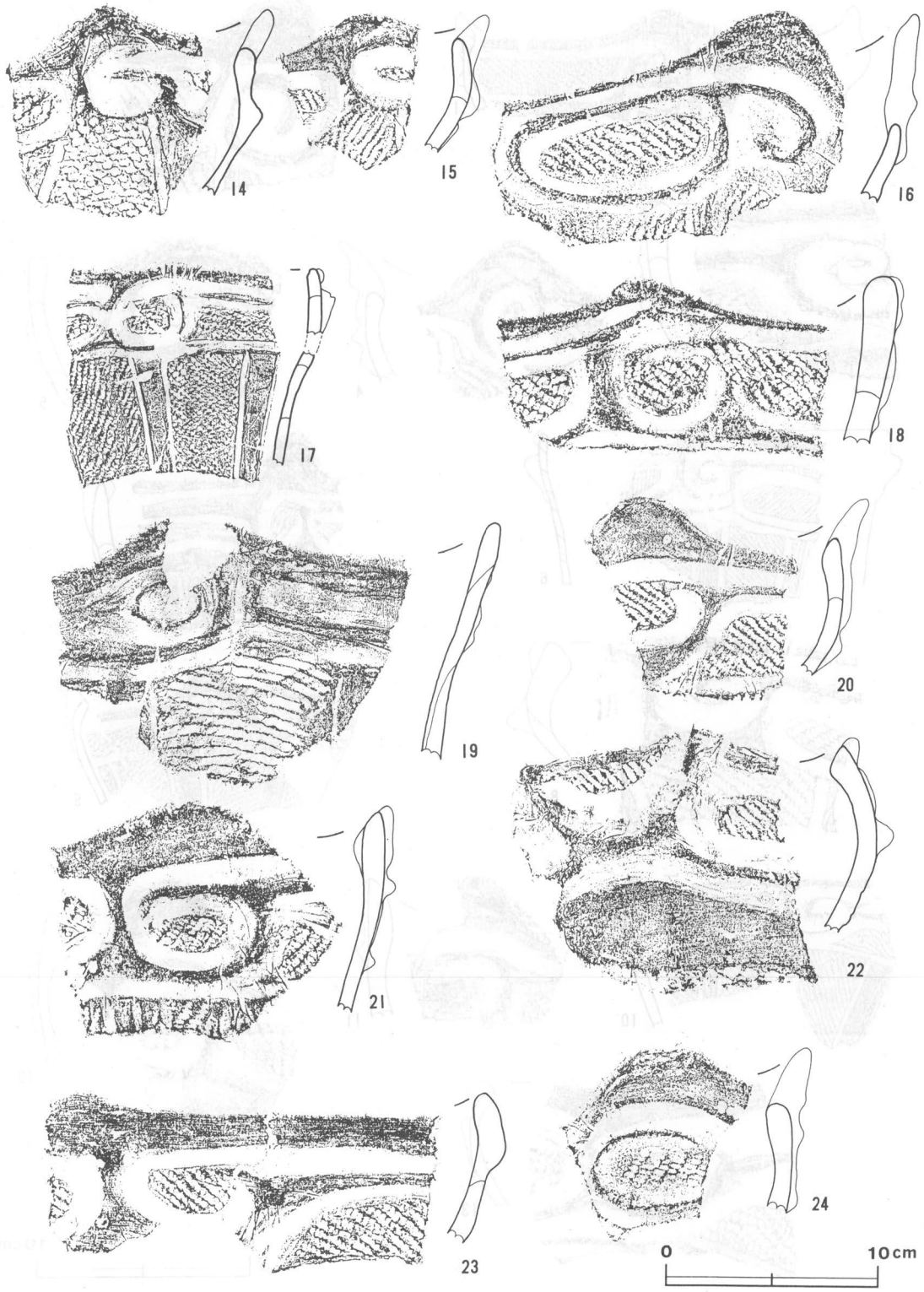
次に，出土土器の内，器形を下図の様に分類した。



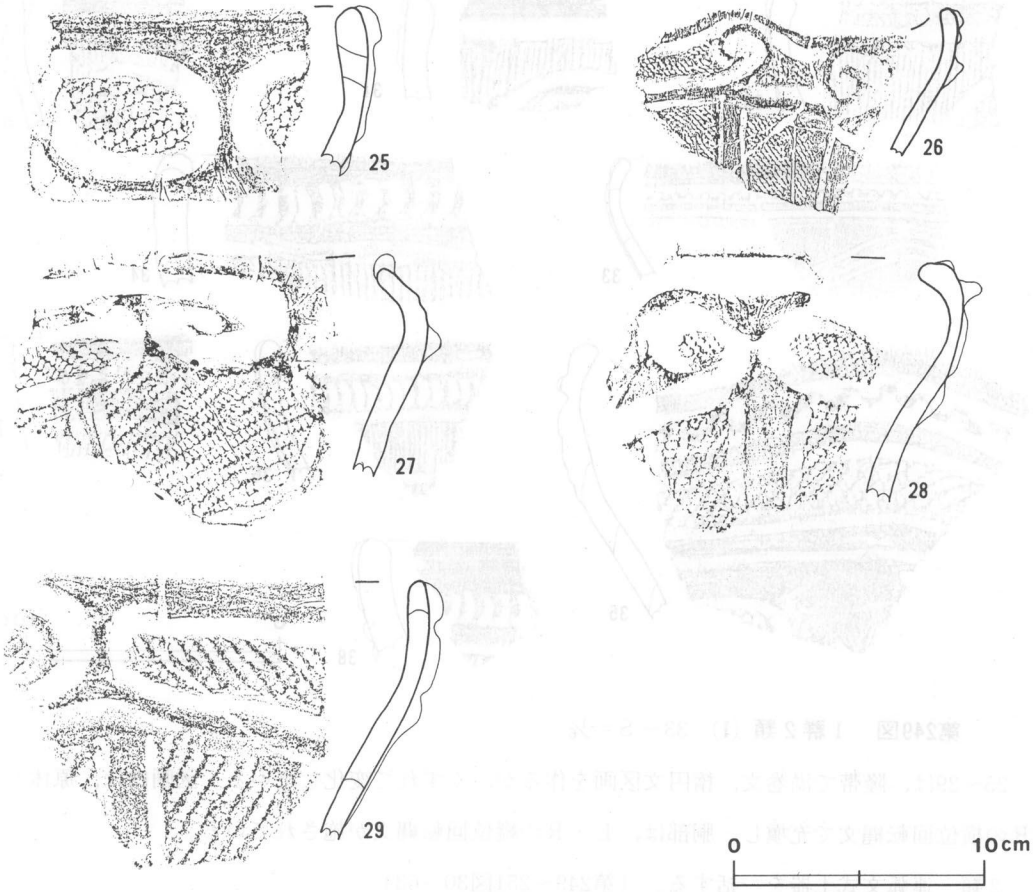
胴部にくびれをもち，口縁部が内彎するもの（１）。胴部にくびれをもち，口縁が外反するもの（２）。胴部にほとんど屈曲がなく，底部から口縁部に向かって開くもの（３）。口径に対し器形が割合い小さい，いわゆる深鉢形のもので，底部から口縁部に向かって大きく開き，胴部にはほとんど屈曲をもたないもの（４），に細分され，いずれも平口縁を有するものが大半を占めている。



第246図　Ⅰ群1類a (1)　1・6・9・10－S＝1/6



第247図　Ⅰ群1類a（2）　17－S＝1/6



第248図　Ⅰ群1類a (3) 26－S＝⅙

以上のように，当遺跡からは，縄文中期に位置する土器が出土し，本来確認された遺構の覆土ごとに土器を分類すべきであるが，遺構の重複関係から充分納得すべき資料を得ることができなかった。

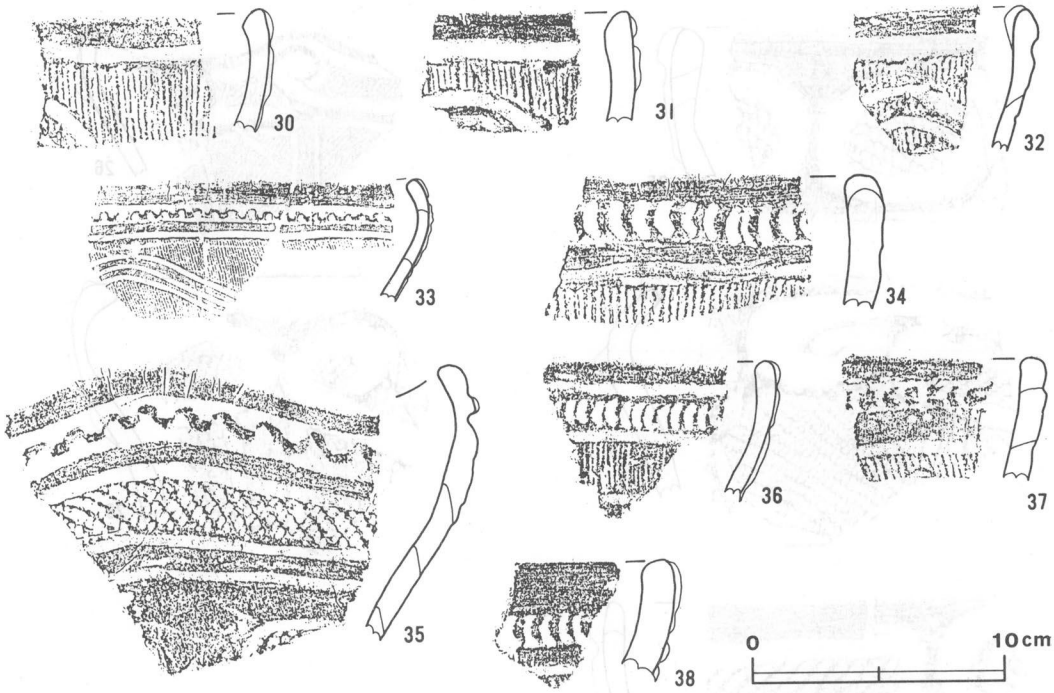
(1)　住居跡出土土器

Ⅰ群　中期中葉から後葉の土器群を本群とした。（第246～251図1～63）

1類　口縁部が渦巻状の隆線・沈線によって区画され，胴部に懸垂文（沈線）が施される深鉢形土器。(第246～248図1～29)

a　地文として縄文が施されるもの。

1～22・24は，隆帯で渦巻文を作り，沈線による区画の中を，原体Rの横位回転，Lの縦位回転縄文で充填している。23は，沈線で渦巻文，楕円文を作り，区画内は，Lの横位回転縄文が施されている。

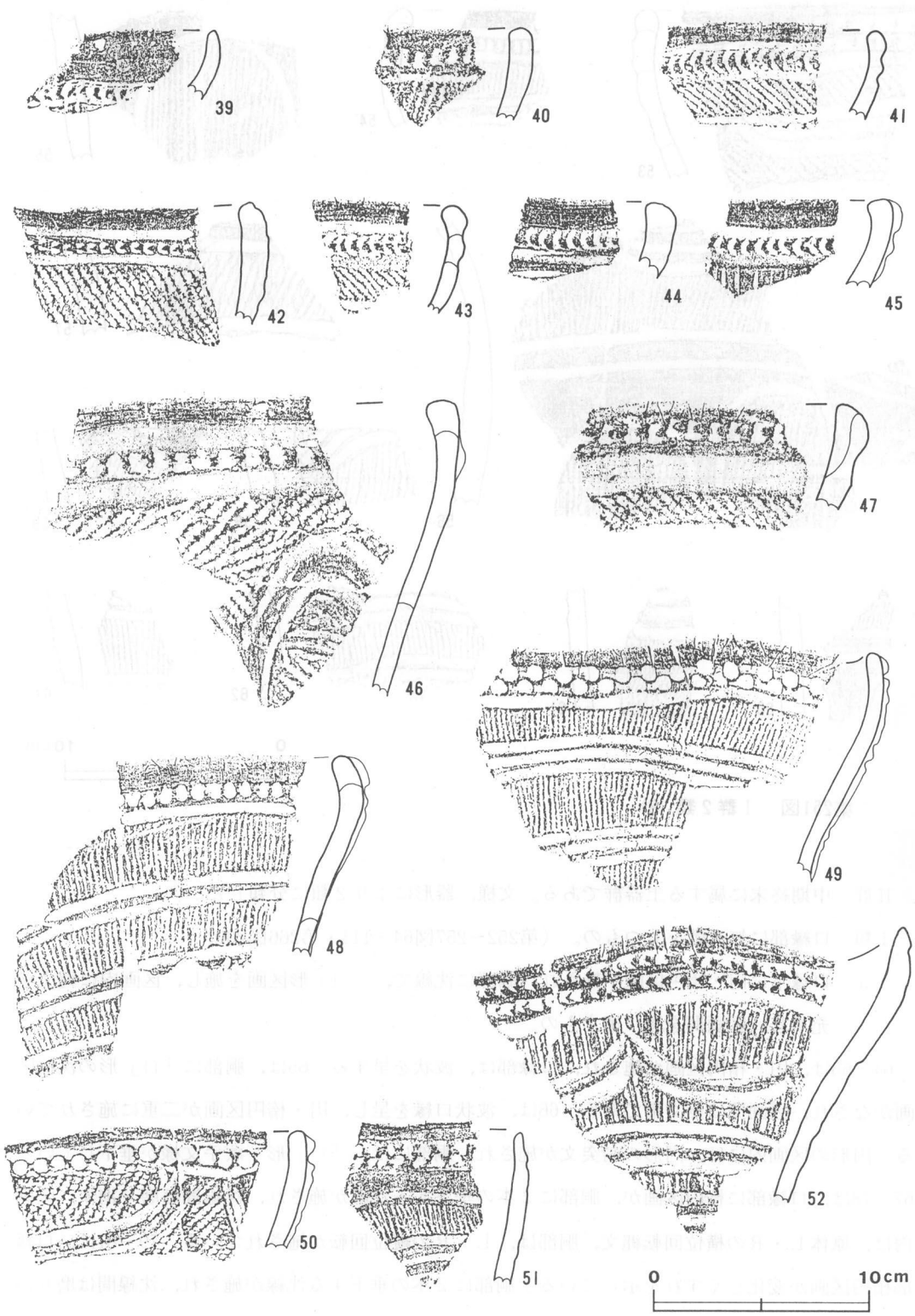


第249図　Ⅰ群2類（1） 33－S＝1/6

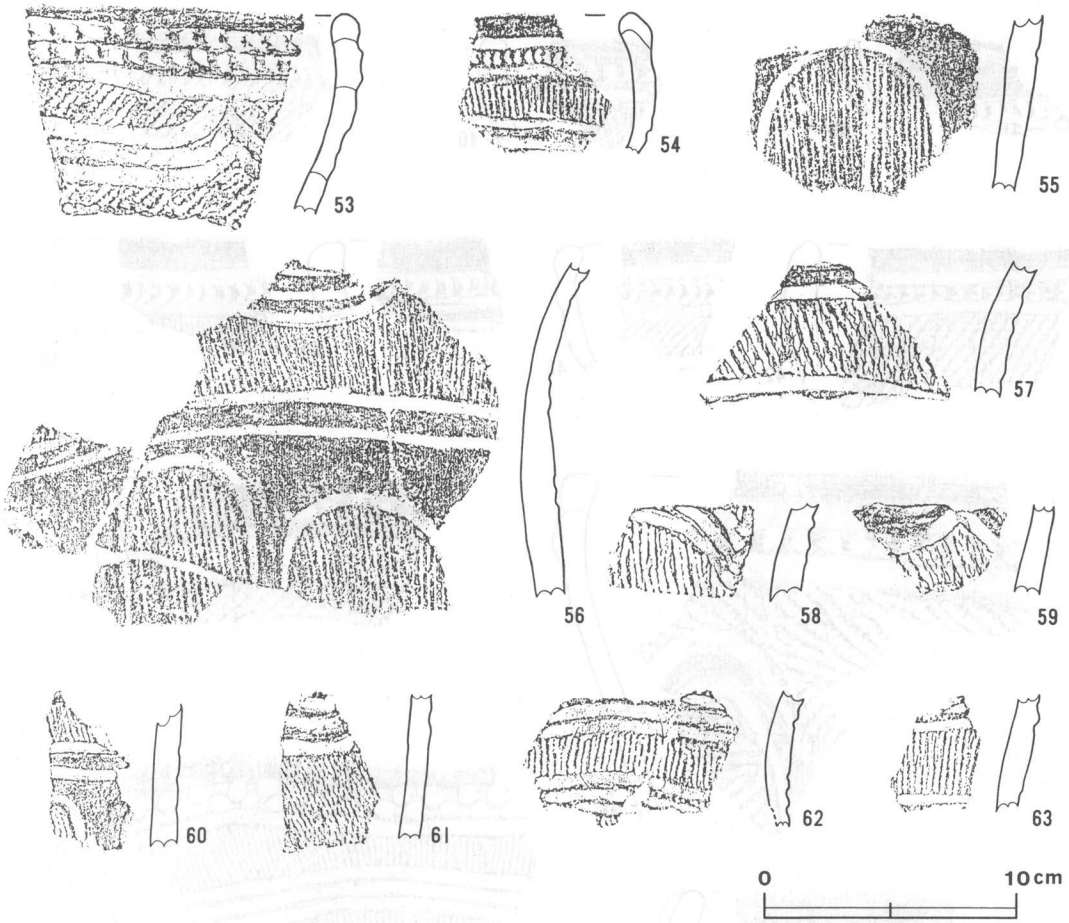
25～29は，隆帯で渦巻文，楕円文区画を作るが，くずれて変化している。区画内は，原体L・Rの横位回転縄文で充塡し，胴部は，L・Rの縦位回転縄文が施されている。

2類　連弧文式土器を一括する。（第249～251図30～63）

30～32は，口唇部を無文化し，口唇部下に1条の横走りする沈線を施し，櫛歯状工具による条線が施文されている。33は，口唇部に横位の鋸歯状文をモチーフとしたもので，胴部の地文は，撚糸文が施され，3本の沈線の連弧文が施文されている。34・36・37～45は，口唇部の横位の爪形の刺突が施され，胴部は，櫛歯状工具による条線文が施され，2本の沈線の連弧が施文されている。35は，口唇部下に蛇行隆帯を巡らし，3本の沈線間に，原体Lの横位回転縄文が施され，胴部に「∩」形の沈線区画がなされ，区画間は無文帯となる。連弧文土器より新しい時期に位置する土器と思われる。40～43は，胴部に原体Lの斜位回転縄文が施文されている。46・47は，口唇部に横位の爪形の刺突が施され，胴部には，46が，原体Rの横位回転，47は，Lの横位回転縄文が施文されている。48～51は，口唇部に円形の刺突が施され，48・49・51は，胴部に櫛歯状工具による条線が施文され，横位に2～3本の沈線が描かれている。50は，胴部に原体のLの横位回転縄文が施文され，弧線文が描かれている。52～54は，口唇部に爪形の刺突が施され，胴部には，櫛歯状工具による条線が施文され，横位に2～3本の直線・弧線文が描かれている。55～63は，胴部破片。胴部地文に，撚糸文・櫛歯状工具の条線が施文され，沈線の直線・弧線文が施されている。



第250図　Ⅰ群２類（2）



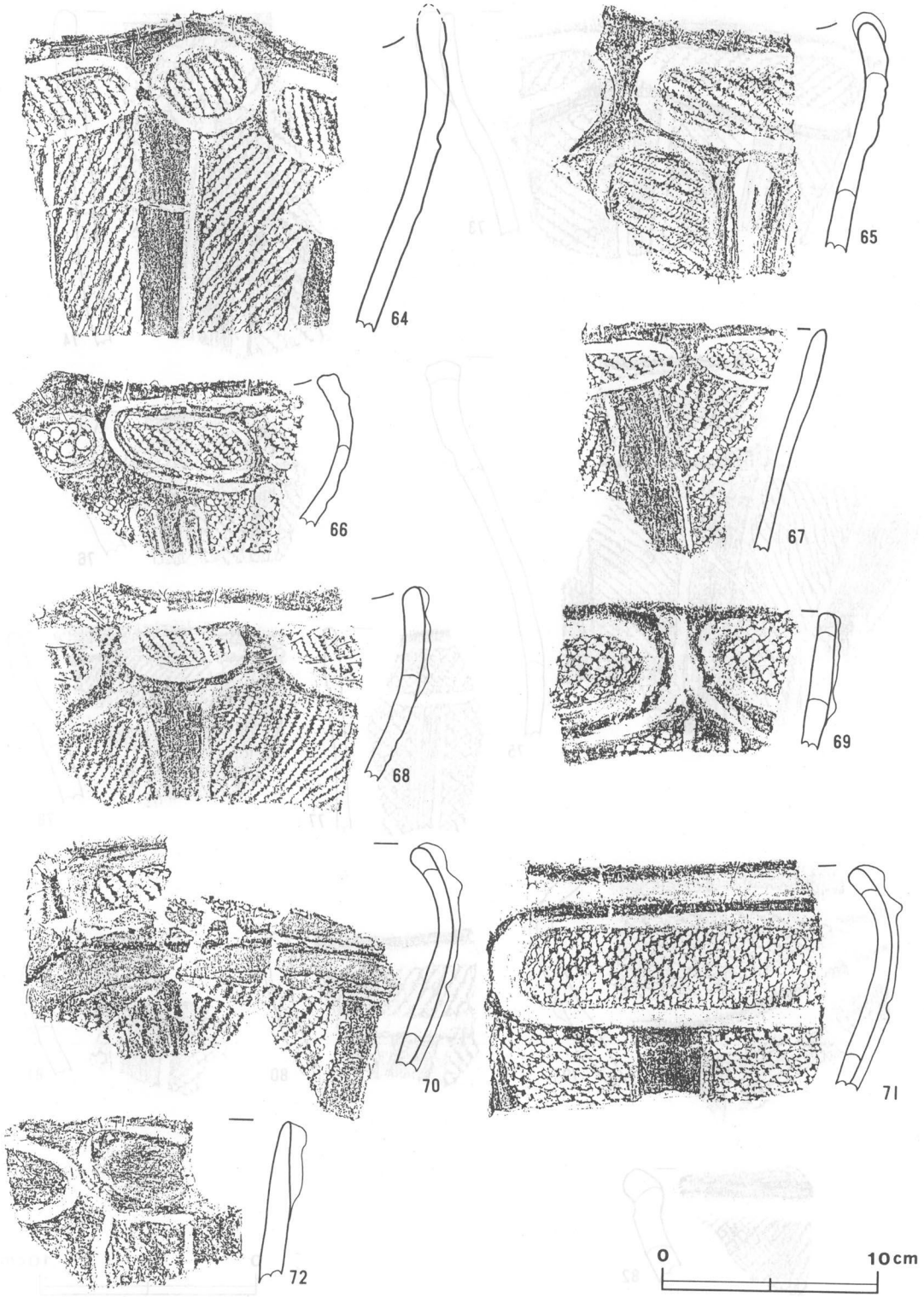
第251図　Ⅰ群２類（3）

Ⅱ群　中期終末に属する土器群である。文様，器形により２類に分類した。

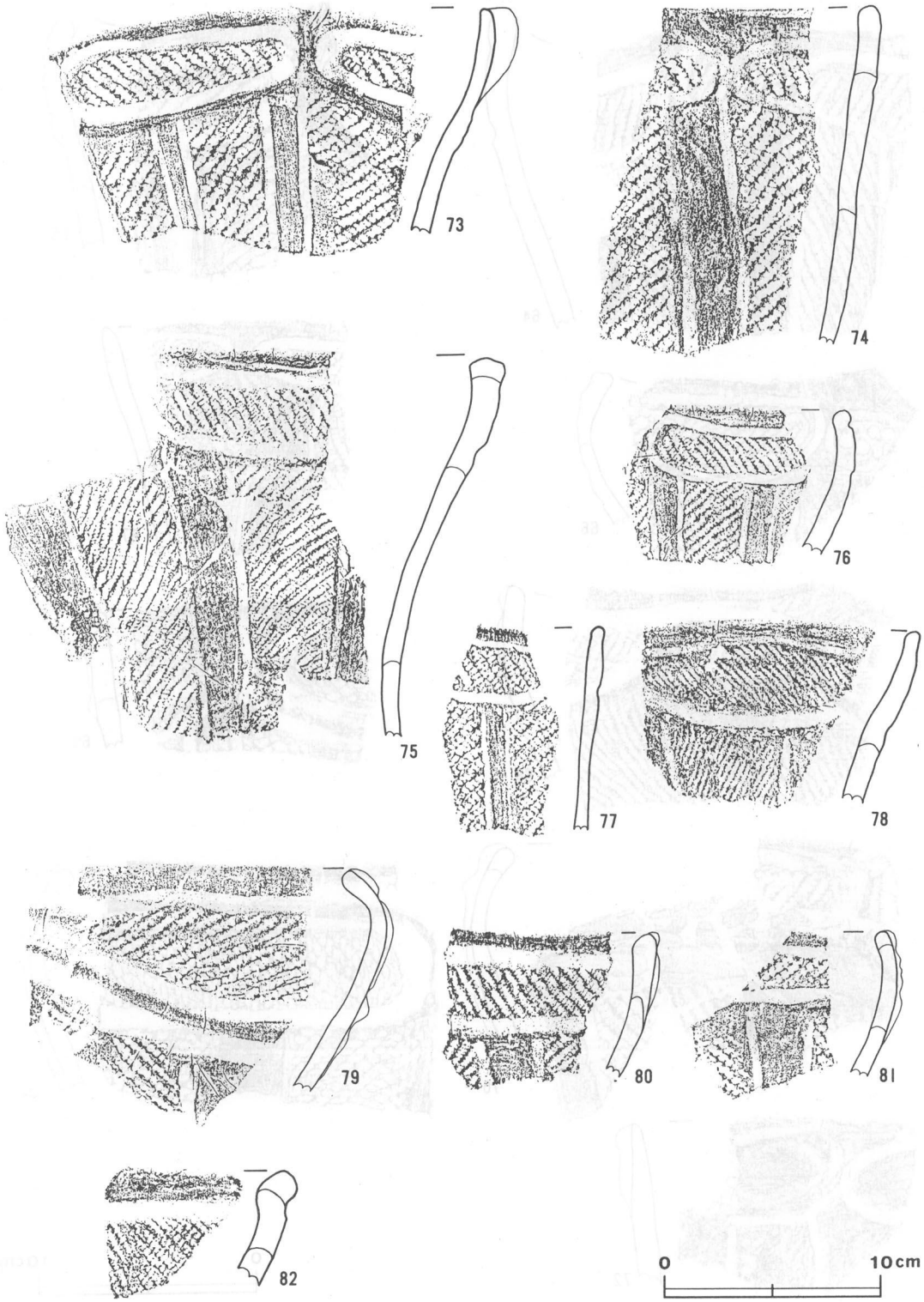
１類　口縁部に無文帯をもつもの。（第252～257図64～111・第266図200）

a　口縁下に円・楕円区画が施され，胴部に沈線で，「∩」形区画を施し，区画内に縄文を充塡し，区画間を磨り消すもの。

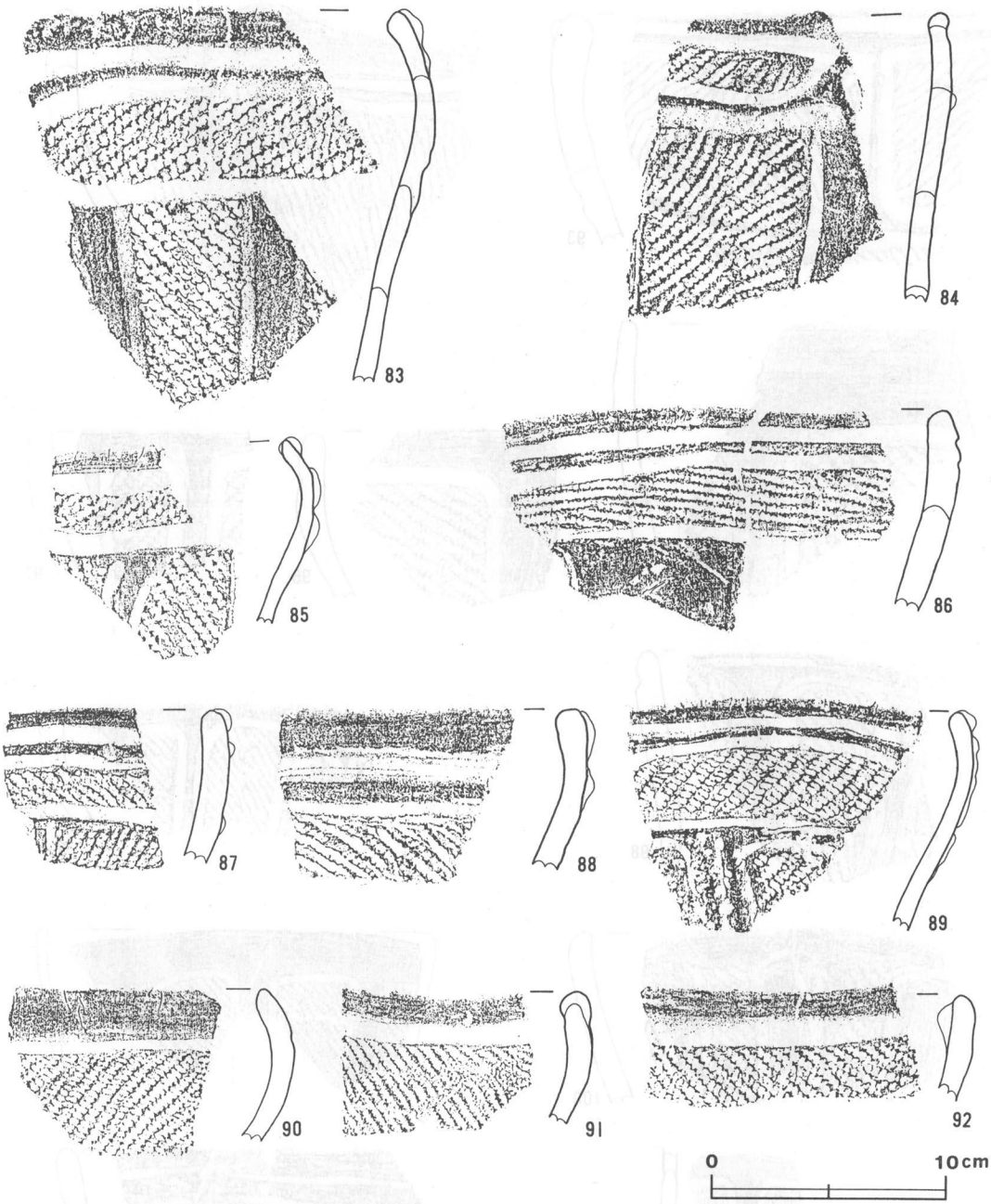
64・65は，円・楕円区画が施され，口縁部は，波状を呈する。65は，胴部に「∩」形の沈線区画がなされ，区画間は無文帯である。66は，波状口縁を呈し，円・楕円区画が二重に施されている。円形の区画内には，円形の刺突文が施され，胴部には，「∩」形・蕨手文様が垂下している。67～78は，口縁部に楕円区画が，胴部に２本の垂下する沈線が施され，沈線間は磨り消す。区画内は，原体Ｌ・Ｒの横位回転縄文，胴部は，Ｌ・Ｒの縦位回転が施されている。79～81は，口縁部楕円区画が変化しくずれを示している。胴部に２本の垂下する沈線が施され，沈線間は磨り消されている。79・81は，口縁部区画内は，原体Ｌの横位回転縄文，胴部は，Ｒの縦位回転縄文が施文され，80の口縁部は，Ｒの縦位回転縄文，胴部は，Ｒの横位回転縄文が施文されている。



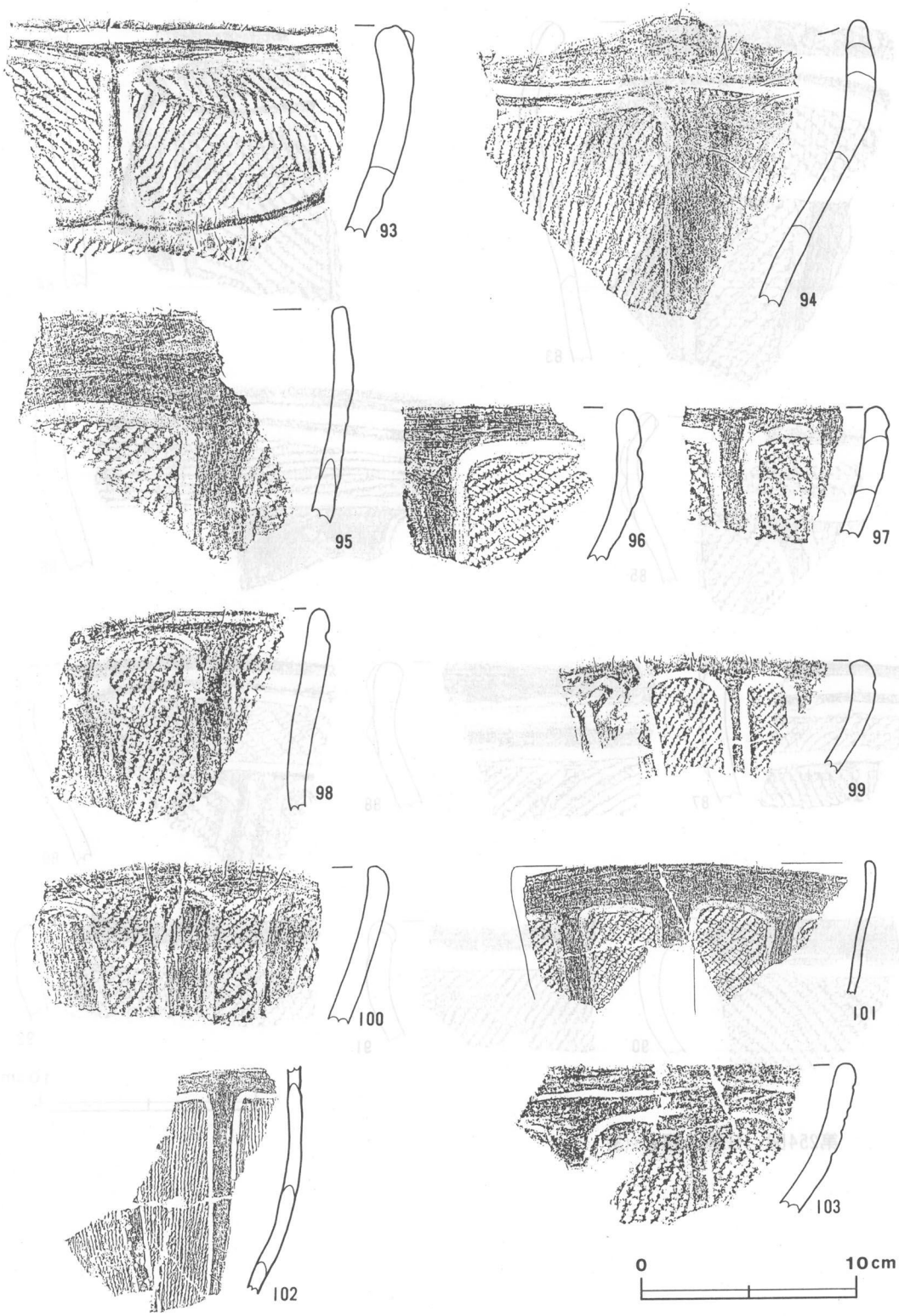
第252図　II群1類a（1）



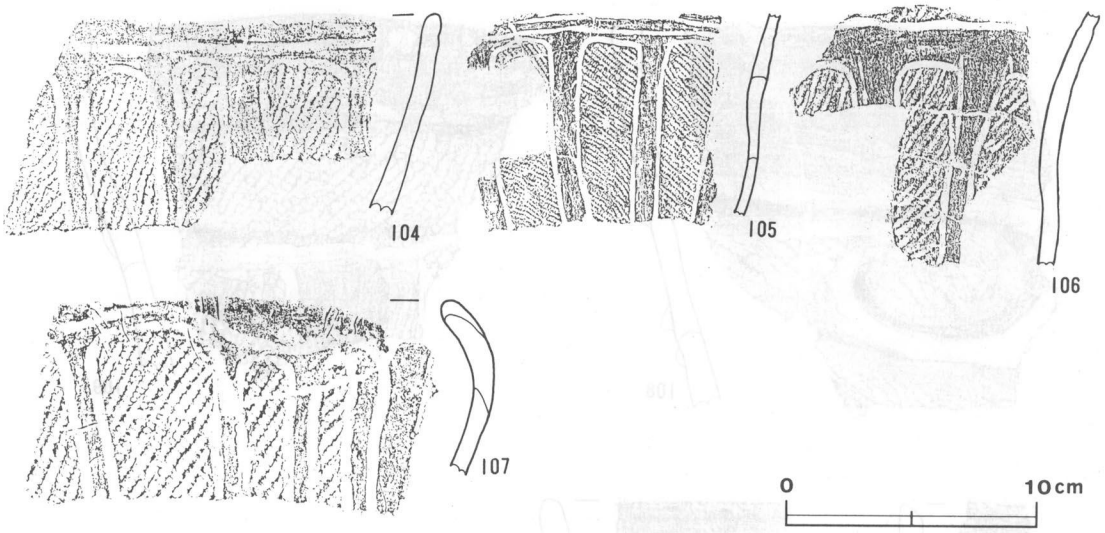
第253図　II群１類ａ（2）



第254図　II群1類a（3）

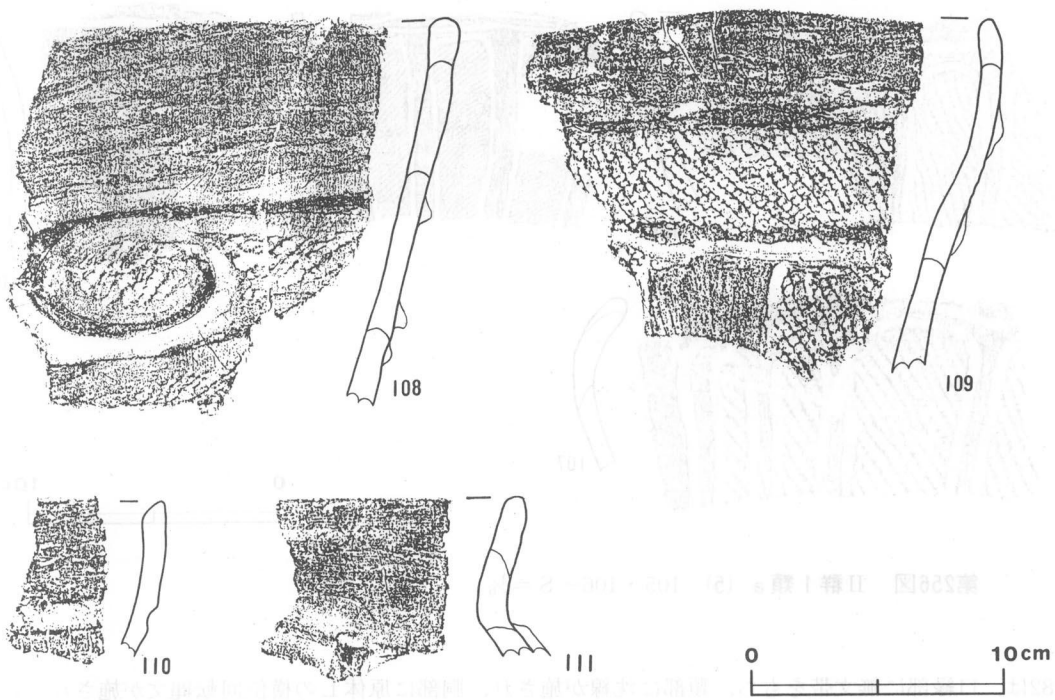


第255図　II群1類a (4)　101・102－S＝⅙



第256図　II群1類a（5） 105・106－S＝1/6

82は，口縁部に無文帯をもち，頸部に沈線が施され，胴部に原体Lの横位回転縄文が施されている。第254図83・84は，口縁部に楕円区画が施され，83は，原体Rの横・縦位回転縄文が，84は，Lの縦位回転縄文が施文されている。85は，隆帯による楕円区画が施され，区画内は，Rの横位回転縄文，胴部は，Rの縦位回転縄文が施文され，2本の垂下する沈線が施され，沈線間は磨り消されている。86・87は，口唇下に2条の沈線が横位に施され，沈線下に原体Lの横位回転縄文が，87の胴部には，Lの縦位回転縄文が施文され，胴部には磨り消しがみられる。200は，口縁部に楕円区画を施し，胴部に垂下する沈線によって区画を施す。口縁部は，Rの横位・胴部は，Rの縦位回転縄文が施文されている。88は，口唇部・口縁部に隆帯が施され，胴部に原体Lの縦位回転縄文が施文されている。89は，胴部に「∩」形区画を施し，区画内に縄文を充填し，区画間を磨り消す。90～92は，口縁部を無文帯にし，胴部との境に1条沈線が巡る。胴部には，縄文が施されている。縄文施文は，90が原体Rの横位回転，91は，Rの縦位回転，92は，Lの横位回転である。93～107は，口唇部を無文帯，または，1条の沈線を巡らし，胴部に「∩」形区画を施し，区画内に縄文を充填し，区画間を磨り消すもの。102は，胴部区画内は撚糸文で充填している。108～111は，口縁部を広い無文帯にし，頸部・胴部を縄文で施文しているもの。108は，口縁部と胴部との境に隆帯によるくずれた渦巻文を施し，全体に縄文が施されている。109は胴部との境に隆沈線を施し，2本の沈線が垂下し，沈線間は磨り消されている。110は，口縁部との境に1条の沈線を巡らし，胴部は縦に櫛歯状工具による条線文が施されている。111は，頸部に隆帯がみられる。



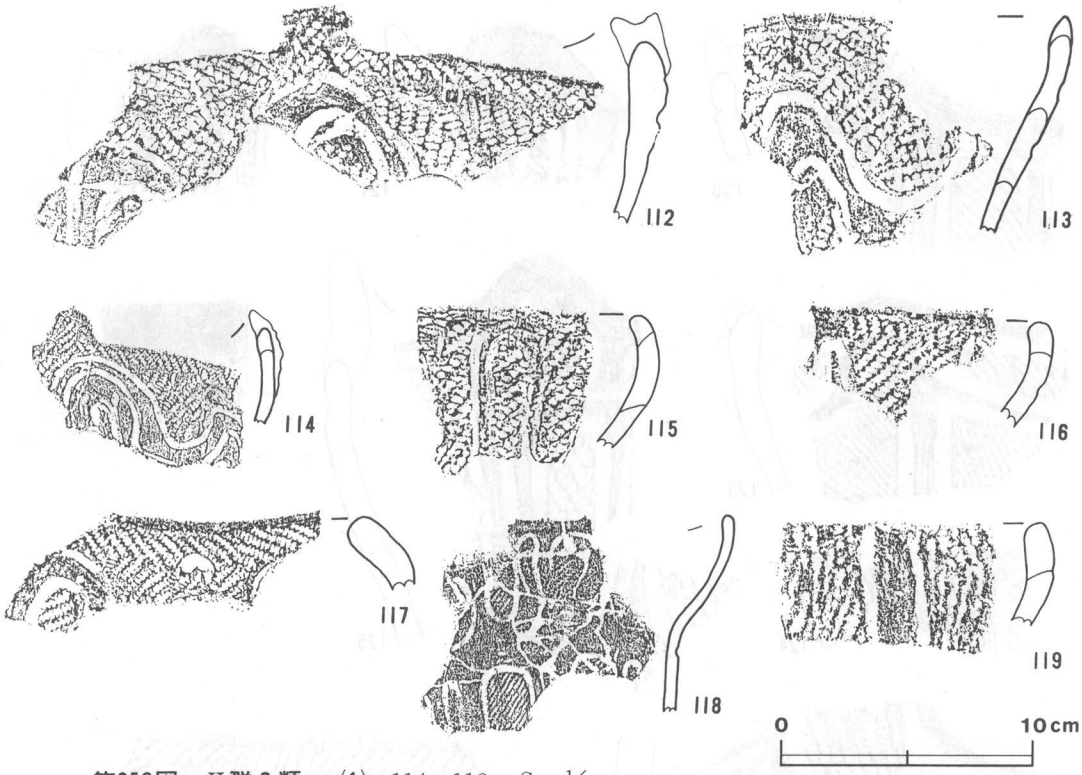
第257図　II群1類a（6）

2類　縄文を地文とし，文様区画を沈線でおこなうもの。（第258～266図112～199・201～209）

a　胴部文様を沈線で施すもの。（第258・259・270図112～132・253～257）

112～117・119は，2本の平行する沈線でU字，あるいは，「∩」形を描き，沈線間には縄文が磨り消されているもの。118は，上半にU字状，下半に「∩」形の沈線を施し，1本の沈線を組み合わせ，沈線間には縄文は施されていない。120～132は，「∩」形区画内に蕨手状の沈線が施文されている。120・121・123～125・129は，原体Rの横位回転縄文，122・127・130・131は，Lの縦位回転縄文，128は，Rの縦位回転縄文が施文されている。132は，円形刺突文が，胴部には，蕨手文・「∩」形区画が施され，区画内に原体Lの縦位回転縄文が施文されている。

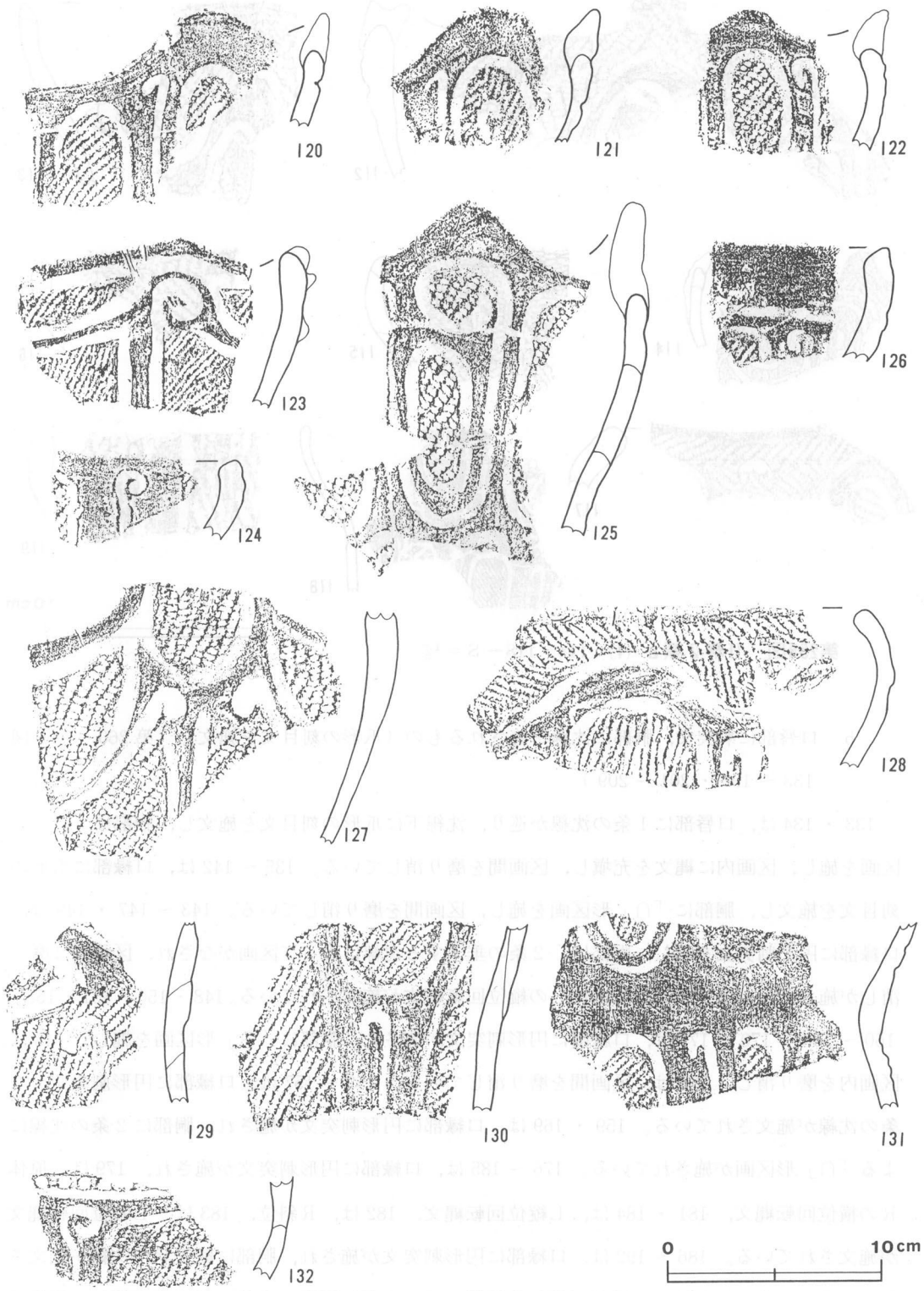
253～257は，隆起線による渦巻文が施されている。255・257には，朱彩が残っている。



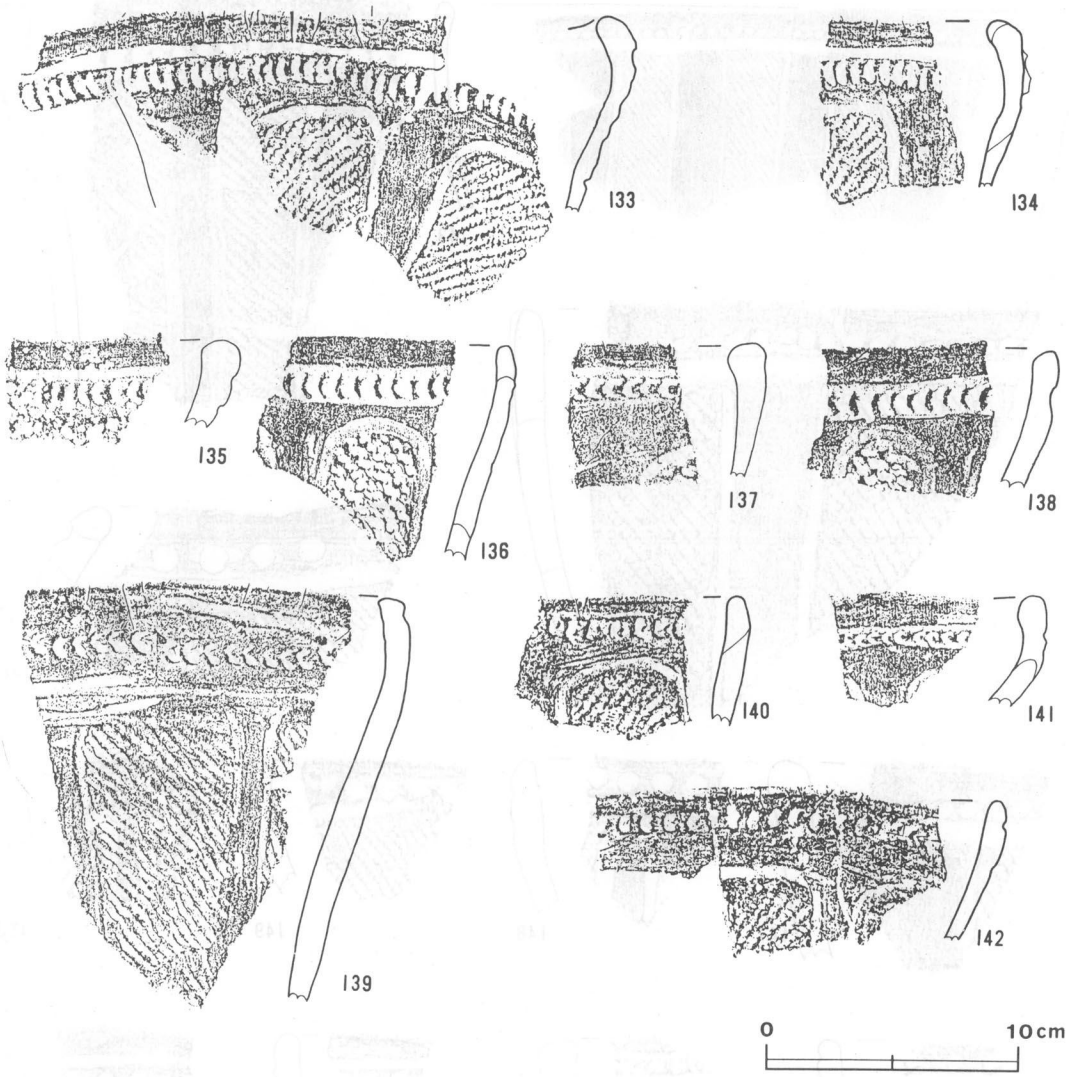
第258図　II群２類ａ（1） 114・118－S＝⅙

b　口唇部に刺突文，胴部に沈線が施されるもの（爪形の刻目文を施文）。（第 260 ～ 266 図 133 ～ 199 ・ 201 ～ 209 ）

133 ・ 134 は，口唇部に１条の沈線が巡り，沈線下に爪形の刻目文を施文し，胴部に「∩」形区画を施し，区画内に縄文を充填し，区画間を磨り消している。135 ～ 142 は，口縁部に爪形の刻目文を施文し，胴部に「∩」形区画を施し，区画間を磨り消している。143 ～ 147 ・ 149 は，口縁部に円形刺突文を施し，胴部は，２条の垂下する沈線によって区画がなされ，区画間は磨り消しが施されている。胴部は，原体Ｌの縦位回転縄文が施文されている。148 ・ 150 ・ 151 ・ 158 ・ 160 ～ 168 ・ 170 ～ 175 は，口縁部に円形刺突文が施され，胴部に「∩」形区画を施し，148 は，区画内を磨り消し，150 は，区画間を磨り消している。152 ～ 157 は，口縁部に円形刺突文・２条の沈線が施文されている。159 ・ 169 は，口縁部に円形刺突文が施され，胴部に２条の沈線による「∩」形区画が施されている。176 ～ 185 は，口縁部に円形刺突文が施され，179 は，原体Ｒの横位回転縄文，181 ・ 184 は，Ｌ縦位回転縄文，182 は，Ｒ斜位，183 は，Ｌ斜位回転縄文が施文されている。186 ～ 192 は，口縁部に円形刺突文が施され，胴部に蕨手状の沈線が施文されている。193 ～ 199 は，口縁部の横位沈線間には，交互に円形・半截の刺突文を施し，鋸歯状文を作り出している。194 は原体Ｌの縦位，196 は，Ｌの斜位，199 はＬの横位回転縄文が施文

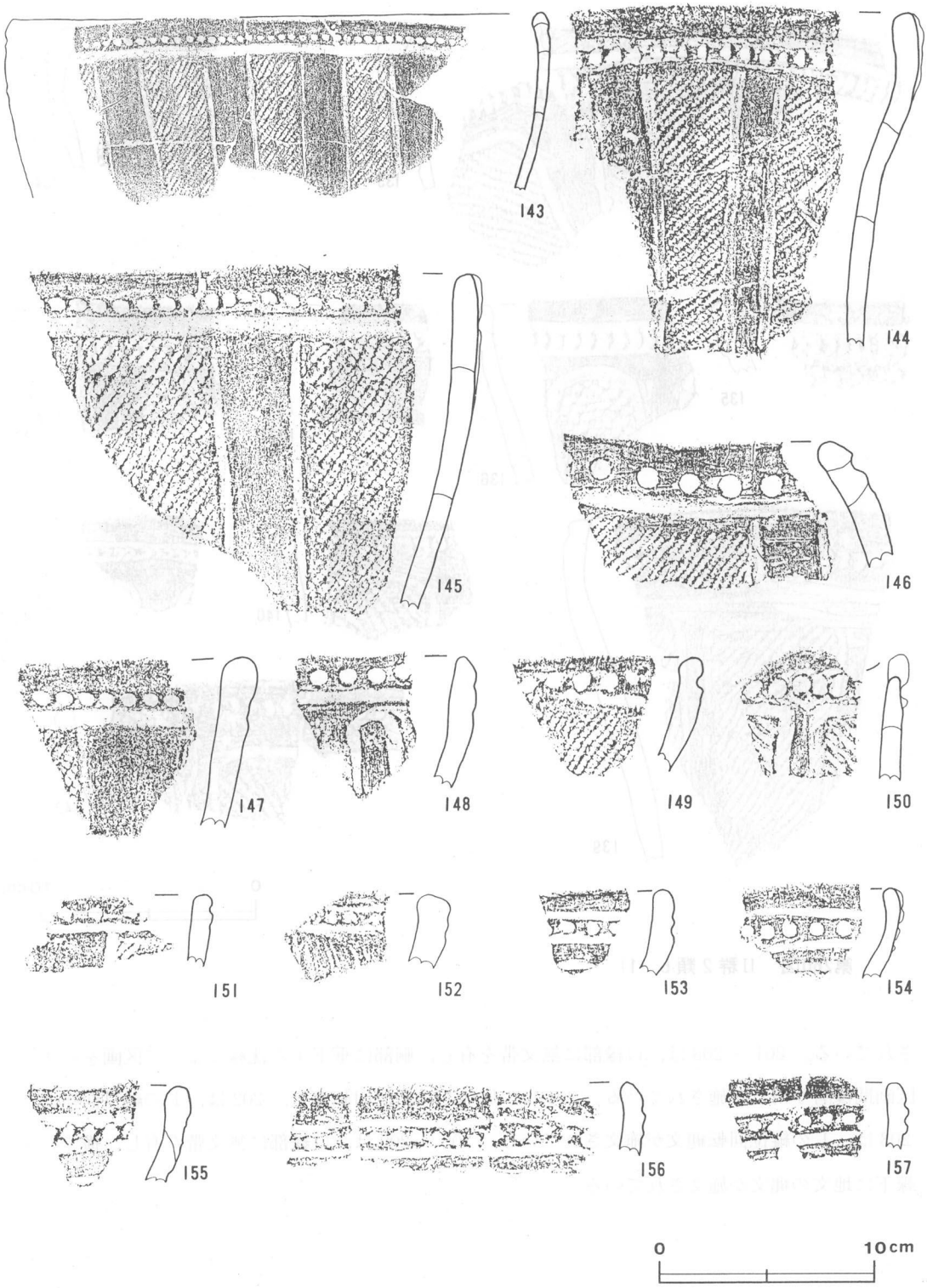


第259図　II群２類ａ（2）

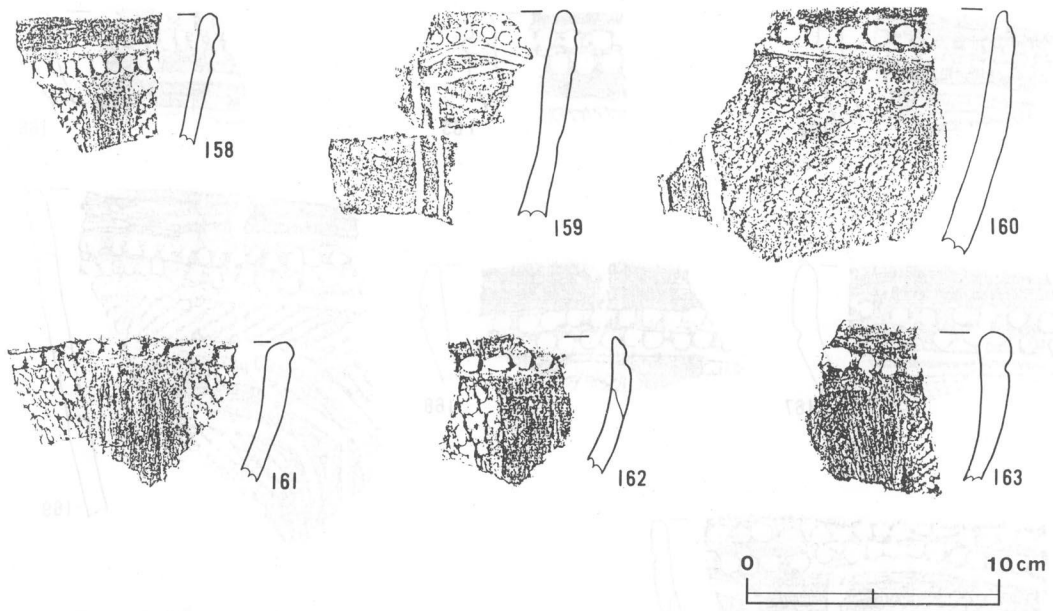


第260図　II群２類ｂ（1）

されている。201～203は，口縁部に無文帯を有し，胴部に垂下する沈線によって区画を施す。区画間は磨り消しが施されている。201は，原体Ｌの斜位回転縄文，202は，Ｌの縦位回転縄文，203は，Ｌの縦位回転縄文が施文されている。205～209は，口縁部に無文帯を有し，横位の沈線下に地文の縄文が施文されている。



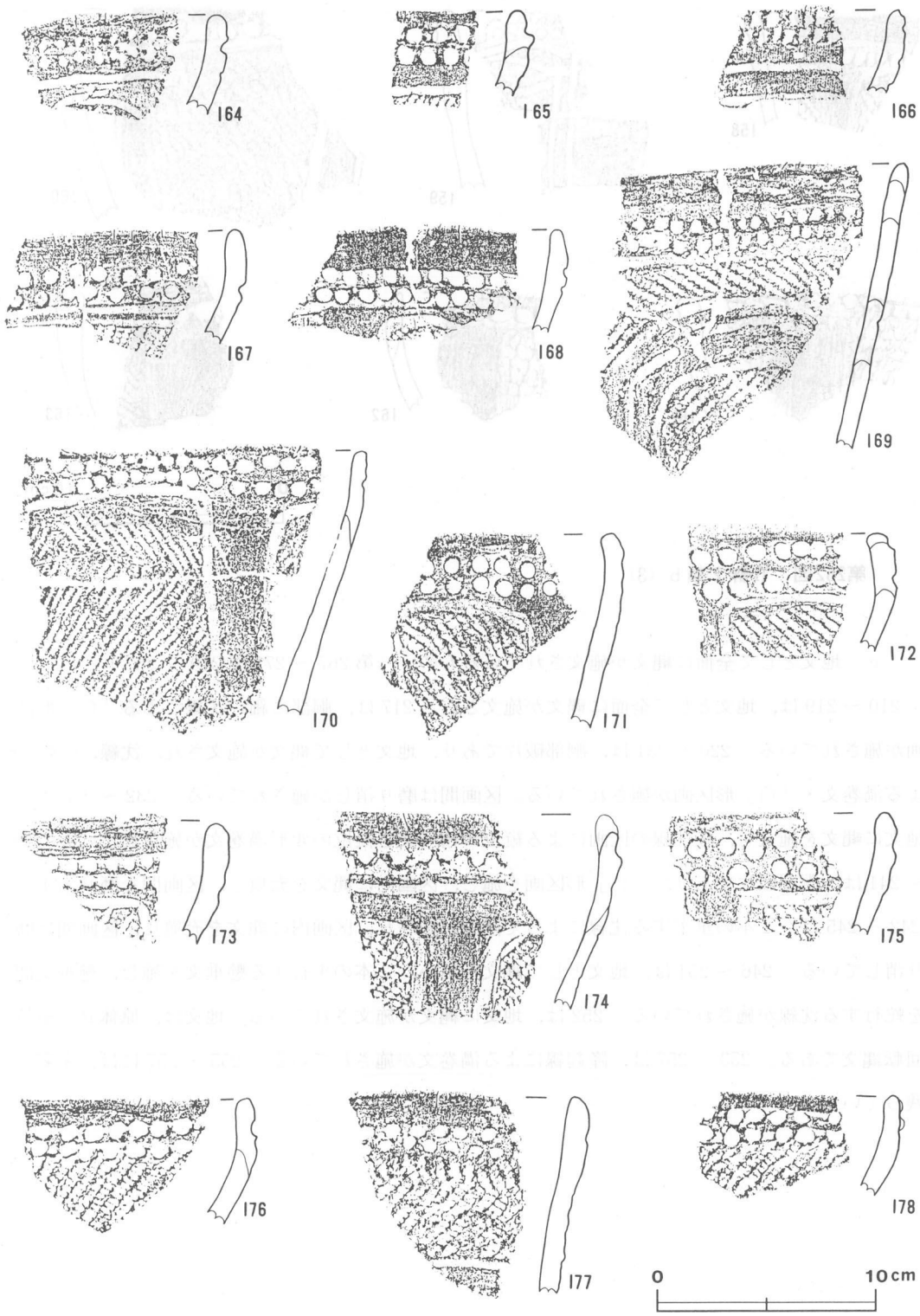
第261図　II群2類b (2)　143－S＝1/6



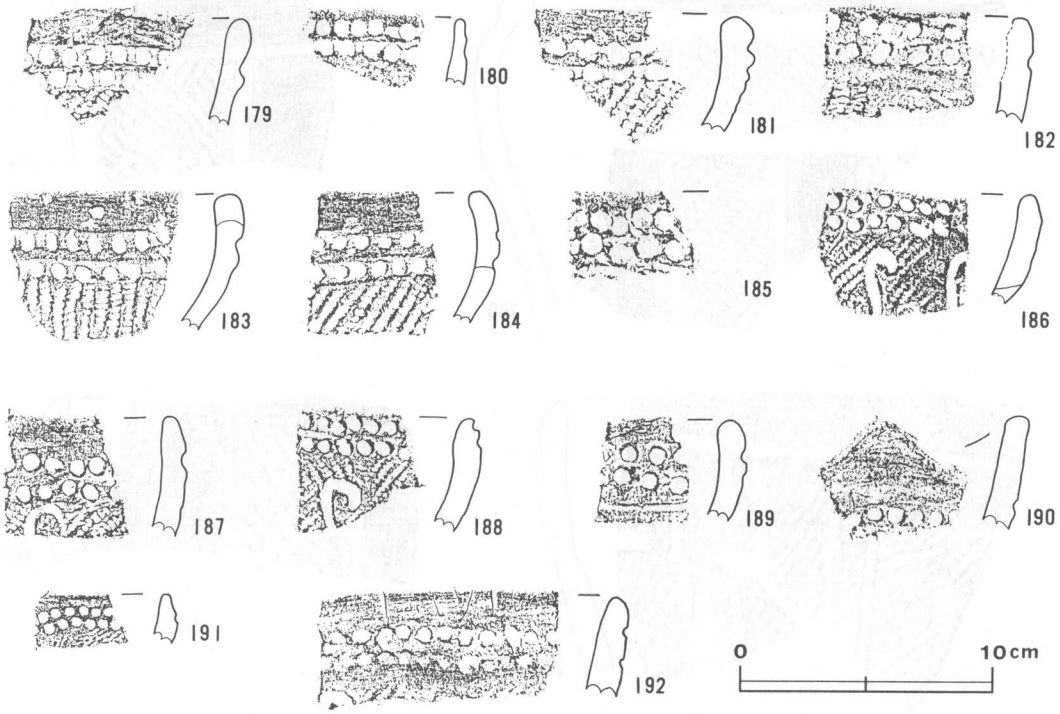
第262図　II群２類ｂ（3）

c　地文として全面に縄文が施文されているもの。（第 267 ～ 271 図 210 ～ 257 ）

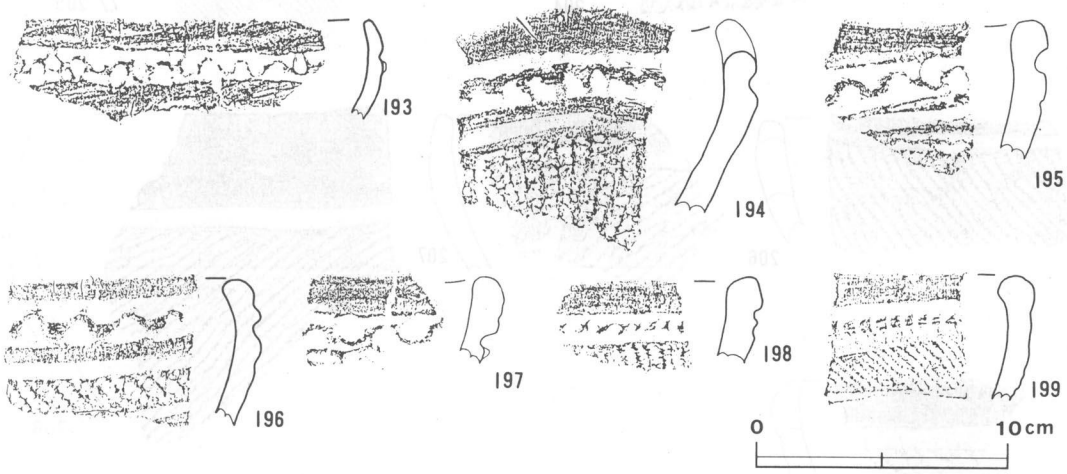
210 ～ 219 は，地文として全面に縄文が施文され，217 は，胴部に細い沈線による「∩」形区画が施されている。220 ～ 231 は，胴部破片であり，地文として縄文が施文され，沈線，隆帯による渦巻文・「∩」形区画が施されている。区画間は磨り消しが施されている。232 ～ 238は，地文に縄文を施文し，隆沈線の区画による縦位の楕円文と縦位の変形渦巻文が施されている。239 ～ 241 は，胴部破片であり，「∩」形区画を施し，区画内に縄文を充填し，区画間を磨り消す。242 ～ 245 は，２本の垂下する沈線によって区画が施され，区画内に縄文を充填し，区画間は磨り消している。246 ～ 251 は，地文として縄文を用い，２本の平行する懸垂文を施し，懸垂文間を蛇行する沈線が施されている。252 は，地文に縄文が施文されている。地文は，原体Ｒの縦位回転縄文である。253 ～ 257 は，隆起線による渦巻文が施されている。255 ・ 257 には，朱彩が残っている。



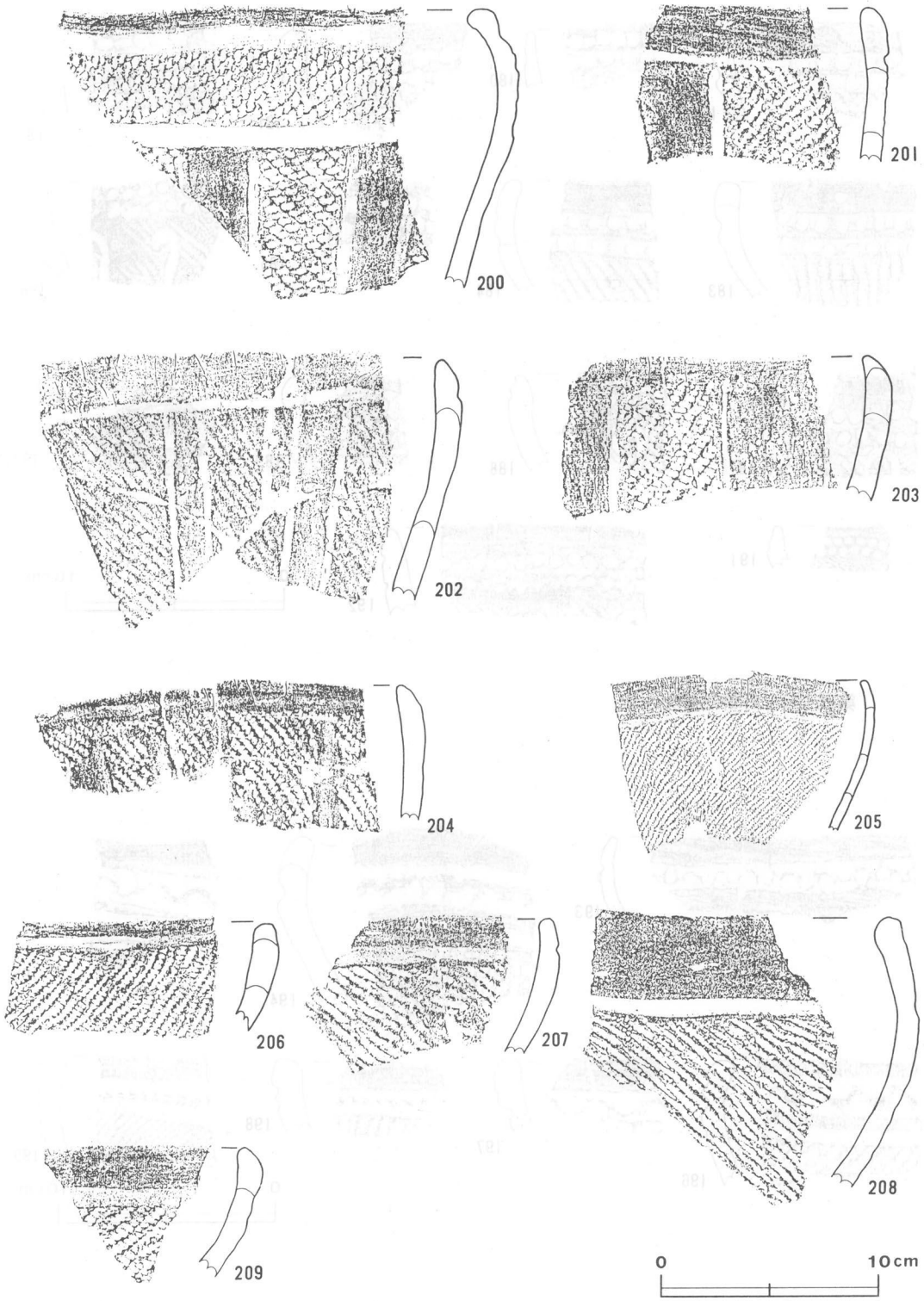
第263図　II群２類ｂ（4）



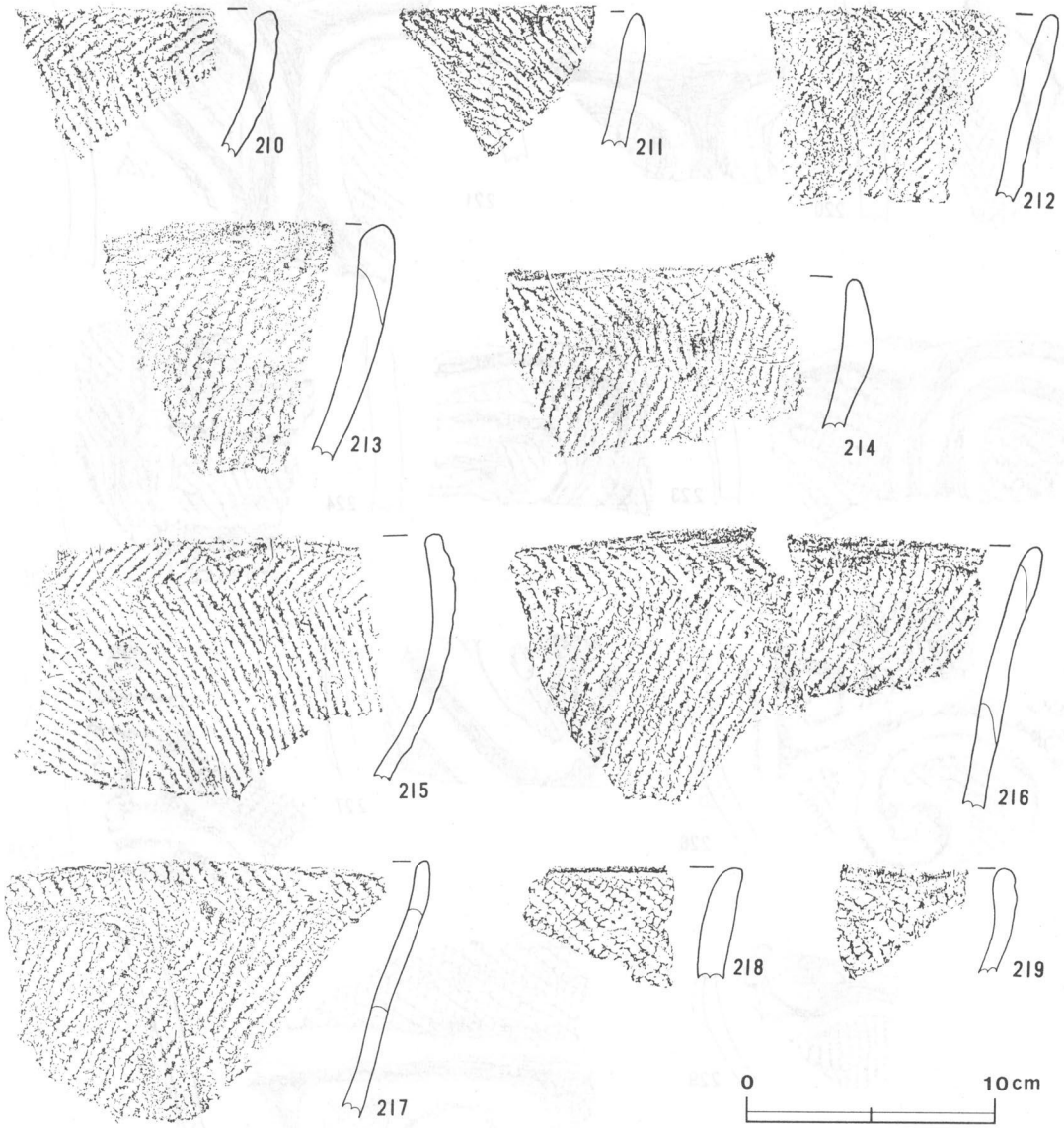
第264図　II群２類ｂ（5）



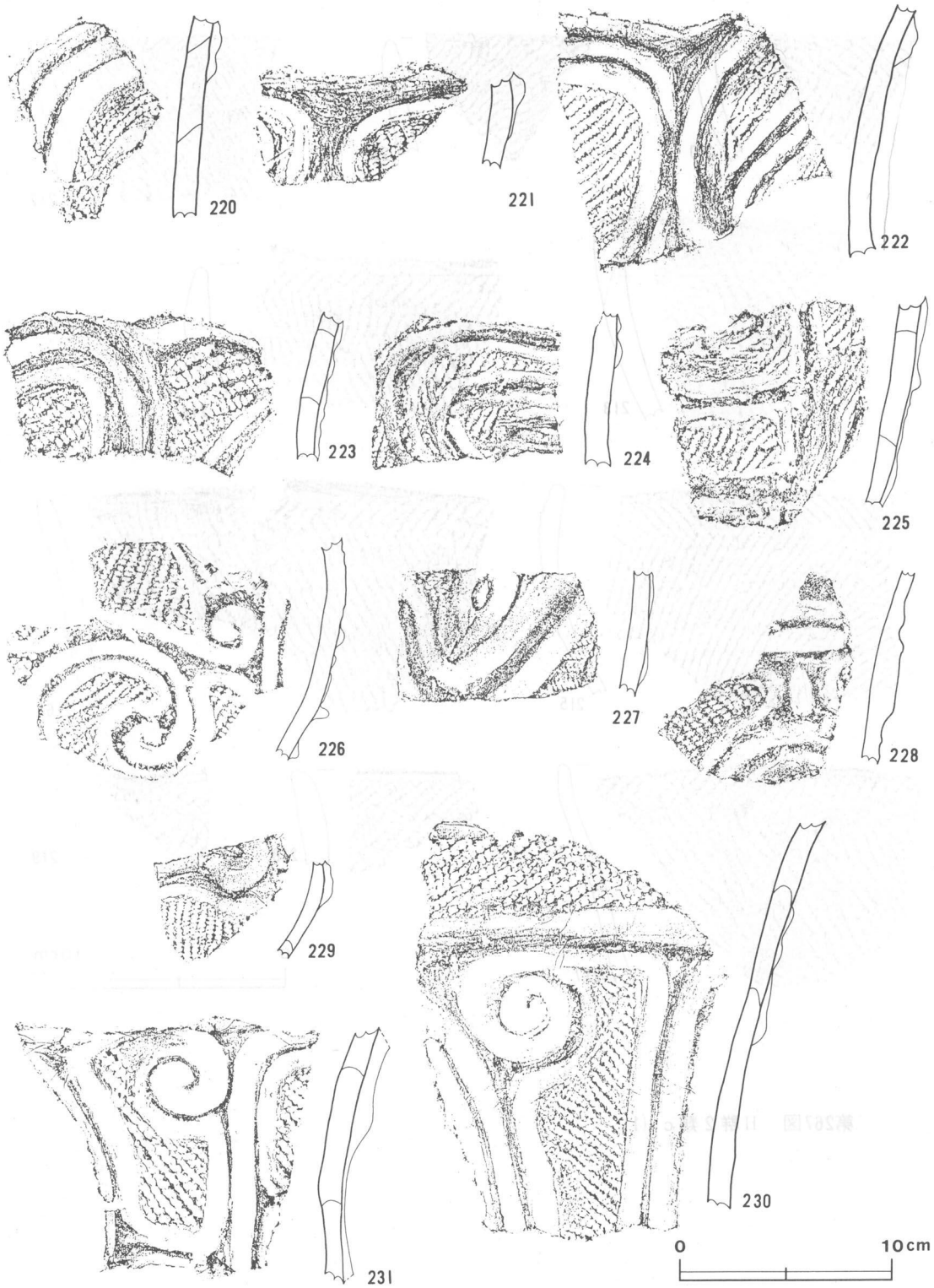
第265図　II群２類ｂ（6）



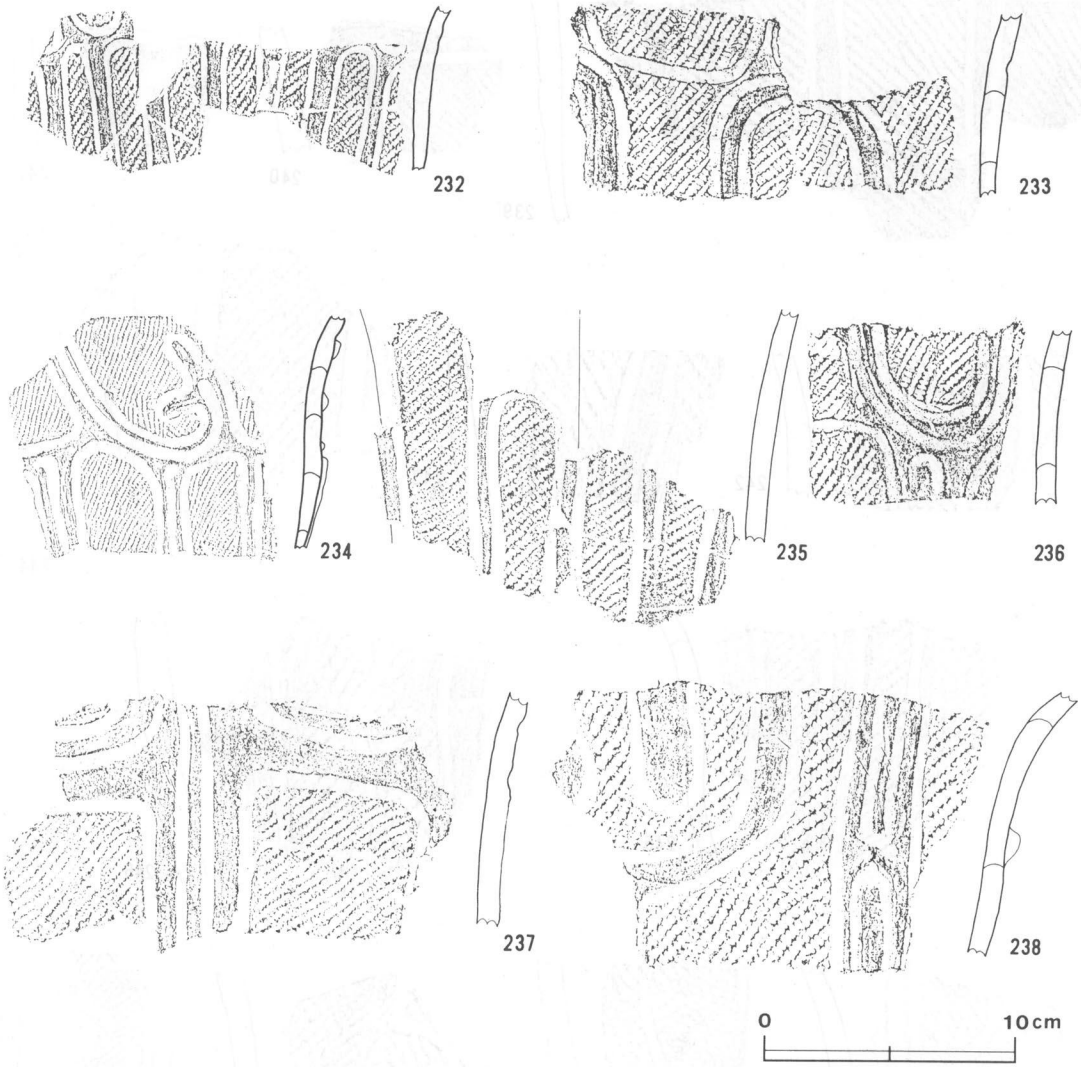
第266図　II群1類a（7）・II群2類b（7）　205－S＝1/6



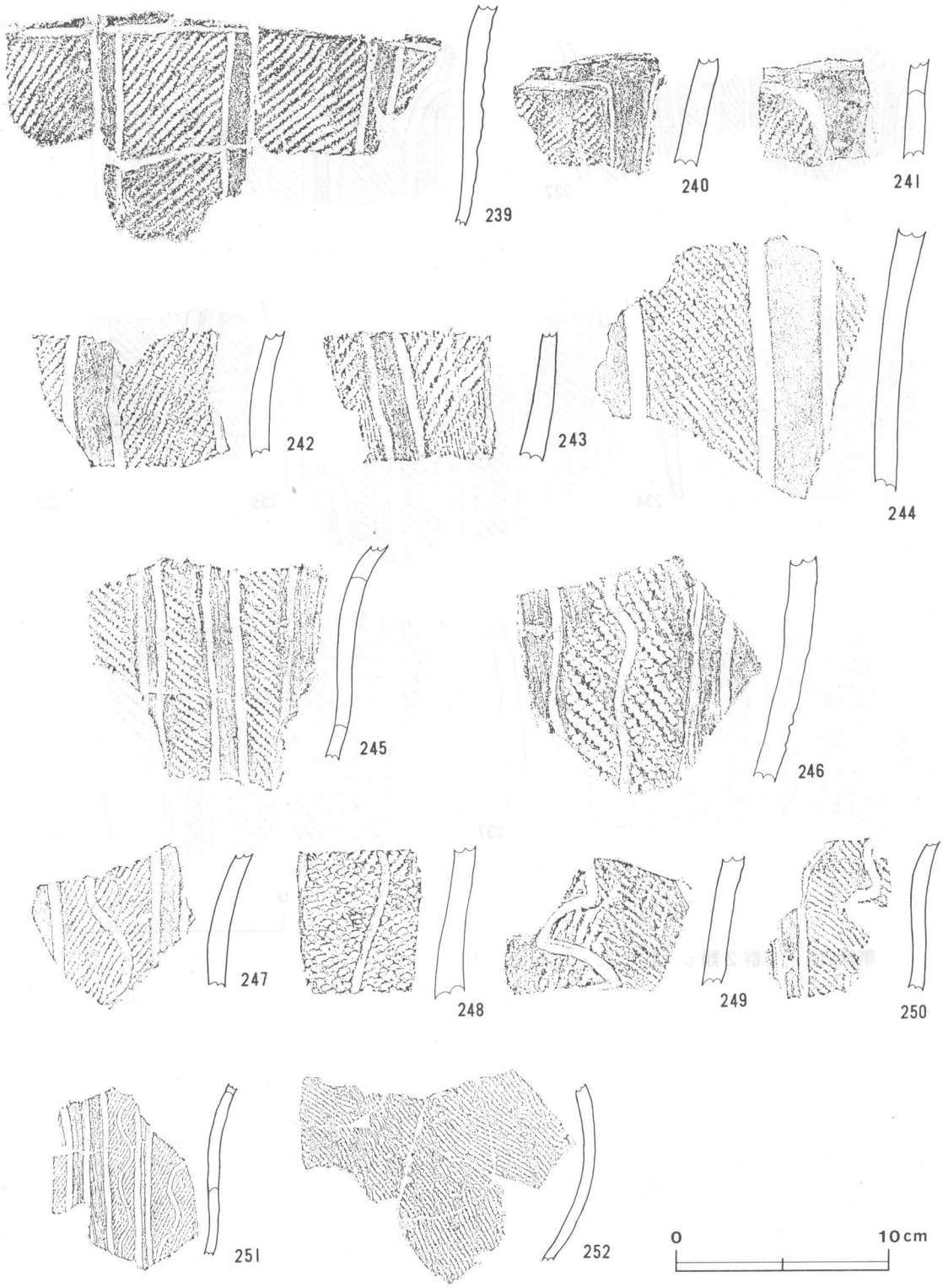
第267図　II群２類ｃ（1）



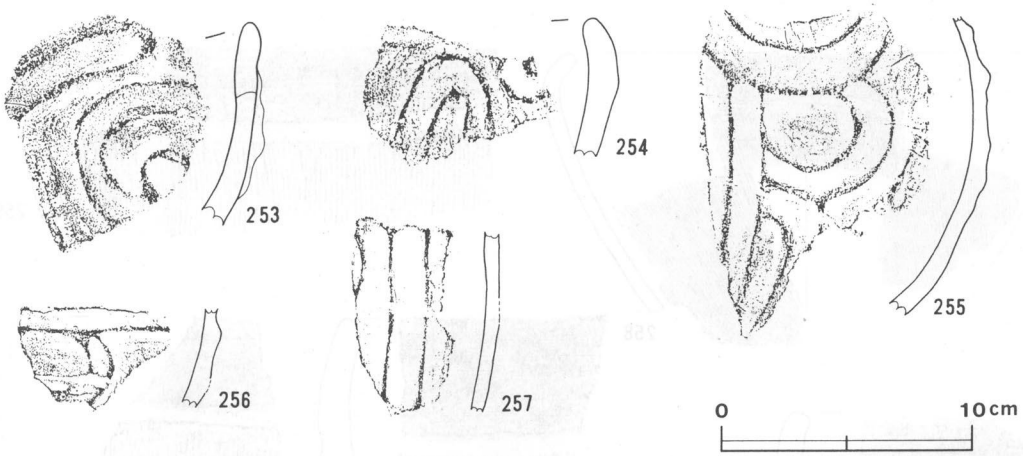
第268図　II群2類c (2)



第269図　II群２類ｃ（3）　232・234－S＝1/6



第270図　II群2類c (4)　251・252－S＝⅙



第271図　II群2類c (5)

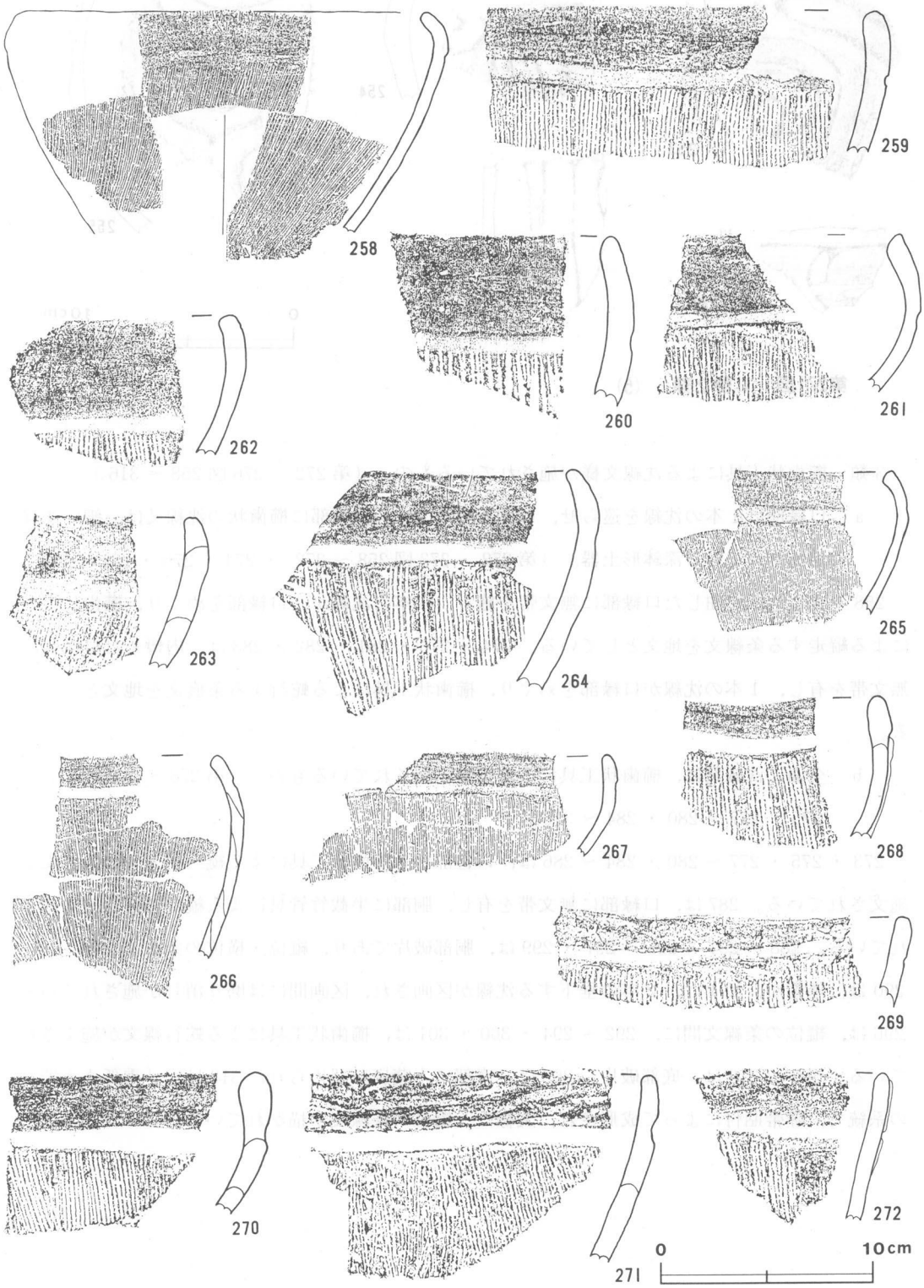
3類　櫛歯状工具による沈線文様が施されているもの。（第272～276図258～316）

a　口縁部に1本の沈線を巡らせ，口唇部を無文とし，胴部に櫛歯状の沈線又は，細い沈線が施されている深鉢形土器。（第272・273図258～272・274・276・281～283）

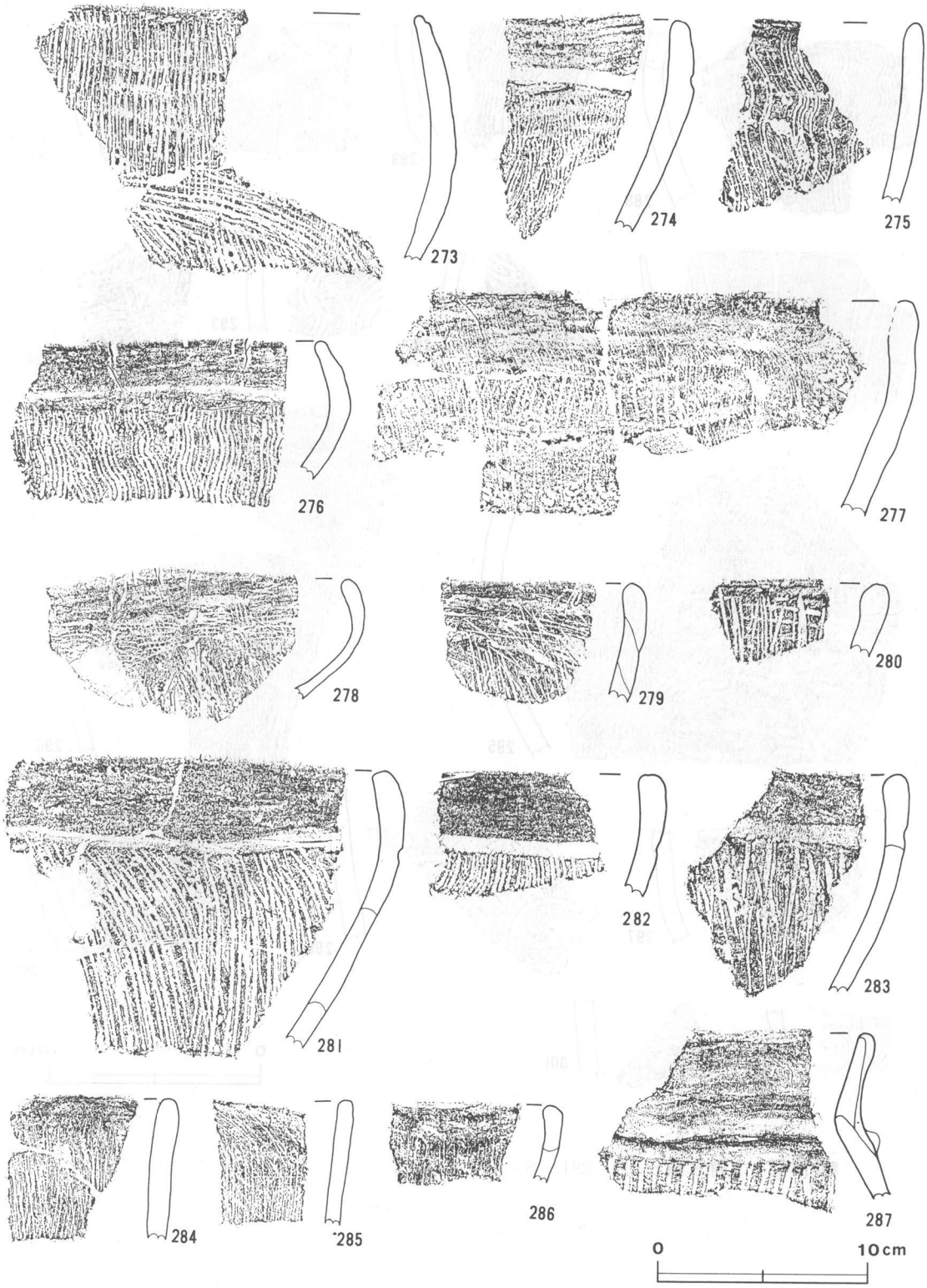
258～272は，屈曲した口縁部に無文帯を施し，1本の沈線が，口縁部をめぐり，櫛歯状工具による縦走する条線文を地文としている。274・276・281・282・283は，内彎した口縁部に無文帯を有し，1本の沈線が口縁部をめぐり，櫛歯状工具による蛇行する条痕文を地文としている。

b　全面に沈線又は，櫛歯状工具による条線が施されているもの。（第273～276図273・275・277～280・284～316）

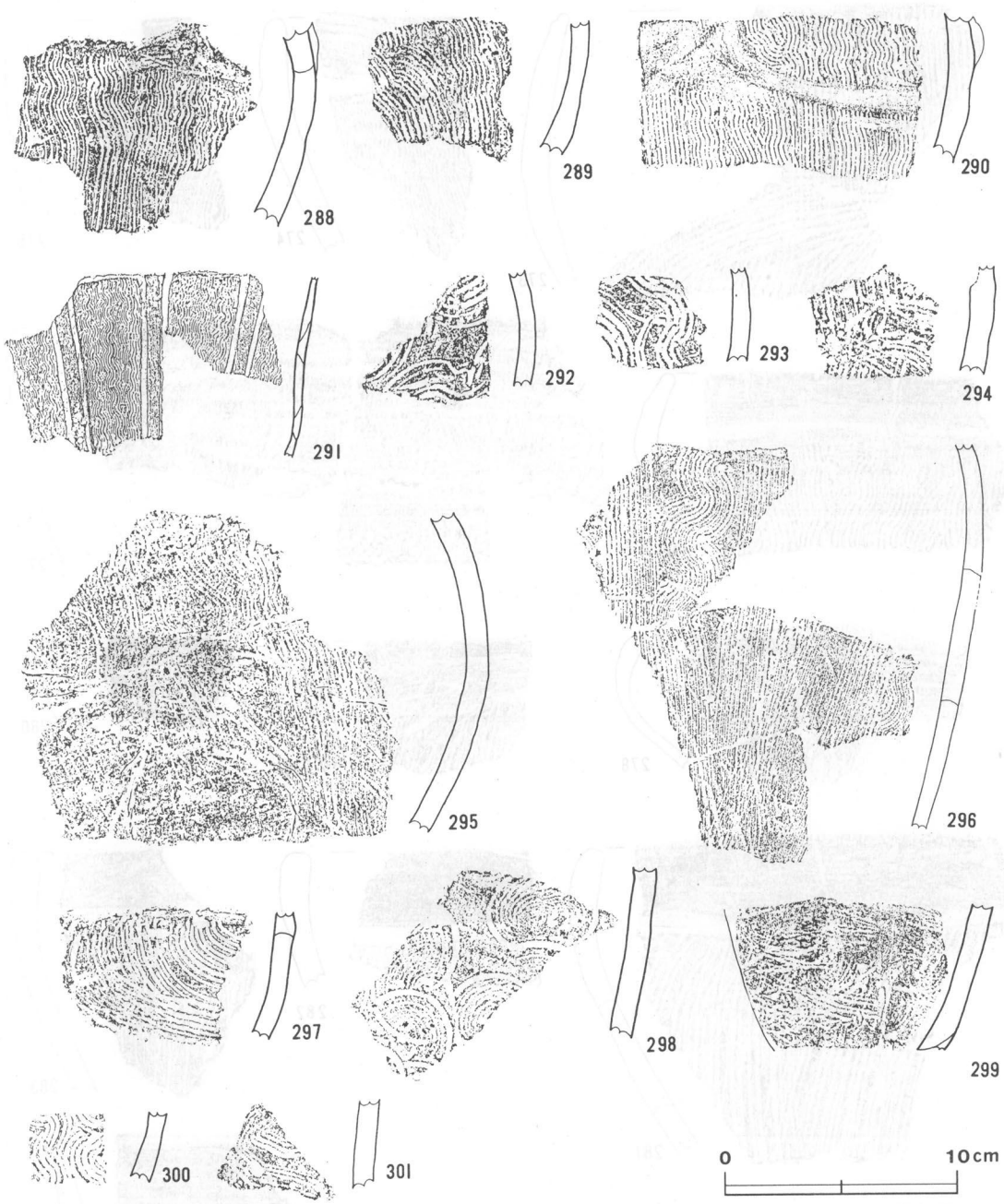
273・275・277～280・284～286は，口唇部から櫛歯状工具による縦・横方向の条痕文が施文されている。287は，口縁部に無文帯を有し，胴部に半截竹管具による縦位の条痕文が施されている。288～291・295～297・299は，胴部破片であり，縦位・横位の条線文が施され，290は，隆帯が，291は，2本の垂下する沈線が区画され，区画間には磨り消しが施されている。296は，縦位の条線文間に，292～294・300・301は，櫛歯状工具による蛇行線文が施文されている。302～316は，底部破片。308は，底部に木葉痕が認められ，312は，「重孤文土器」の系統で，隆帯貼付によって成形され，文様は，縦位の条線文が描かれている。



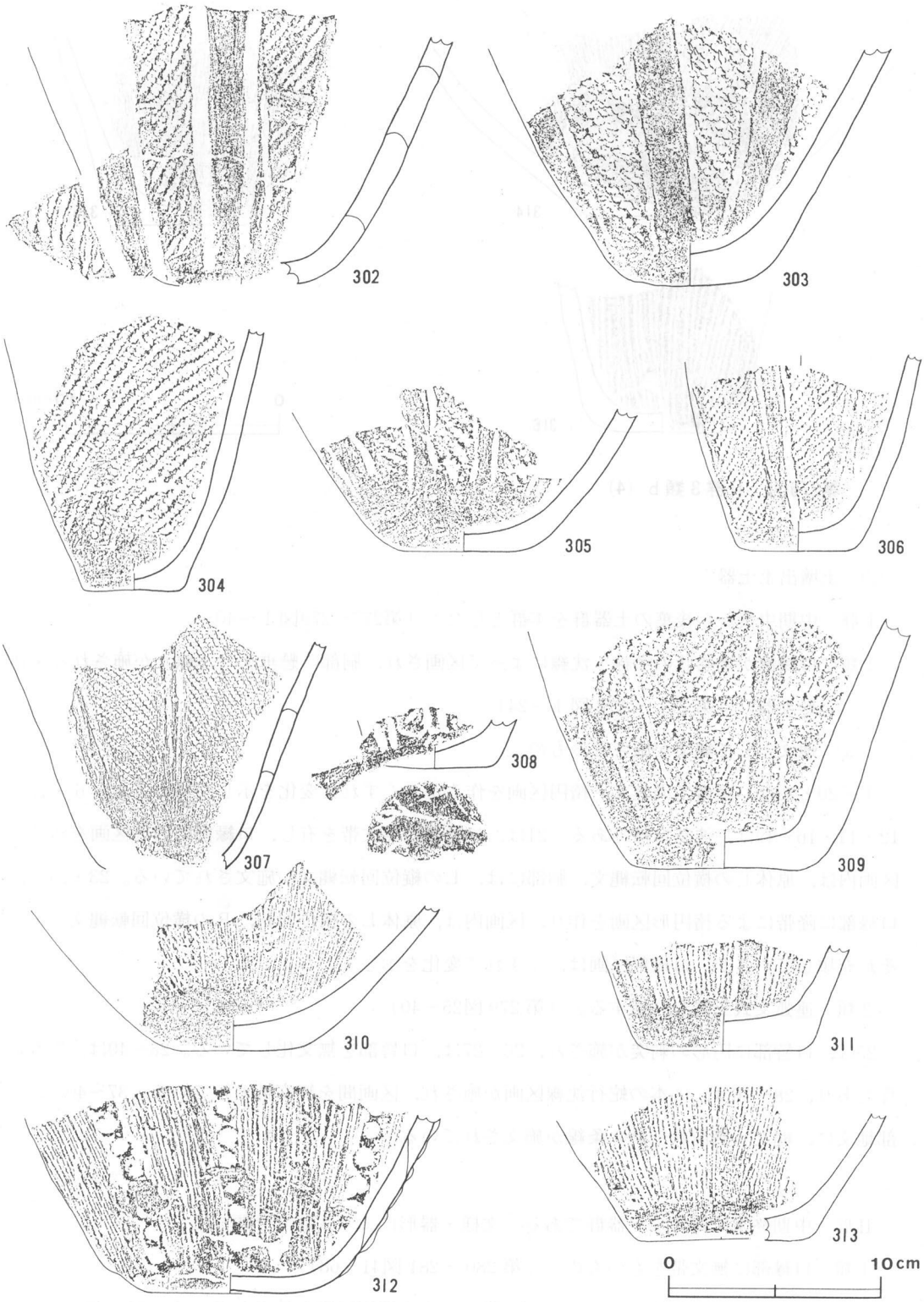
第272図　II群3類a（1）　258・265～267－S＝1/6



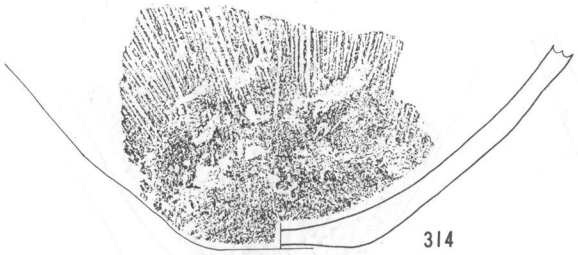
第273図　II群３類ａ（2）・ｂ（1）

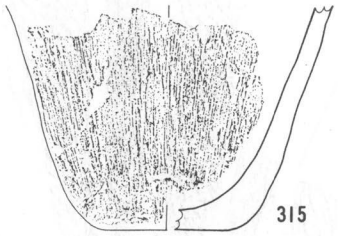


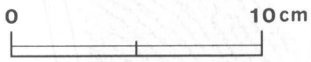
第274図　II群3類b（2）　291－S＝1/6



第275図　II群３類ｂ(3)







第276図　II群３類ｂ（4）

(2)　土壙出土土器

Ⅰ群　中期中葉から後葉の土器群を本群とした。（第277～279図１～40）

１類　口縁部が渦巻状の隆線・沈線によって区画され，胴部に懸垂文（沈線）が施される深鉢形土器。（第 277 ・ 278 図１～24）

ａ　地文として縄文が施されるもの。

１～20・22は，隆帯で渦巻文・楕円区画を作るが，くずれて変化を示している。３・６・10～12・14・16～19は，波状口縁である。21は，口唇部に無文帯を有し，口縁部に円形区画を作り，区画内は，原体Ｌの横位回転縄文，胴部には，Ｌの縦位回転縄文が施文されている。23・24は，口縁部に隆帯による楕円形区画を作り，区画内は，原体Ｌの横位回転，Ｒの横位回転縄文でそれぞれ充塡しているが，口縁部区画は，くずれて変化を示している。

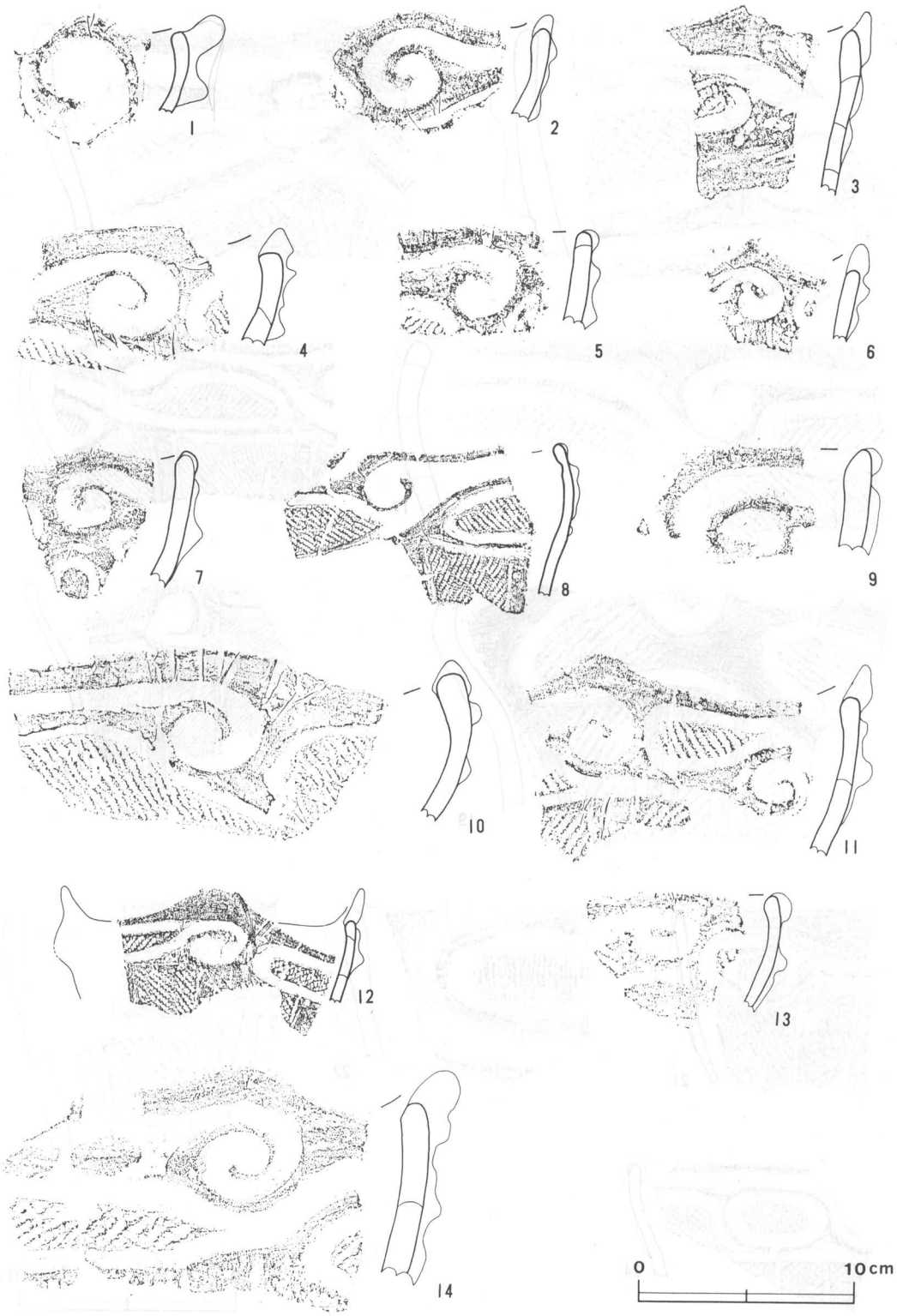
２類　連弧文式土器を一括する。（第 279 図25～40）

25は，口唇部に円形の刺突が施され，26・27は，口唇部を無文化している。28～40は，胴部破片であり，28～36は，３本の蛇行沈線区画が施され，区画間を無文帯としている。37～40は，胴部地文に，縄文・櫛歯状工具の条線が施文されている。

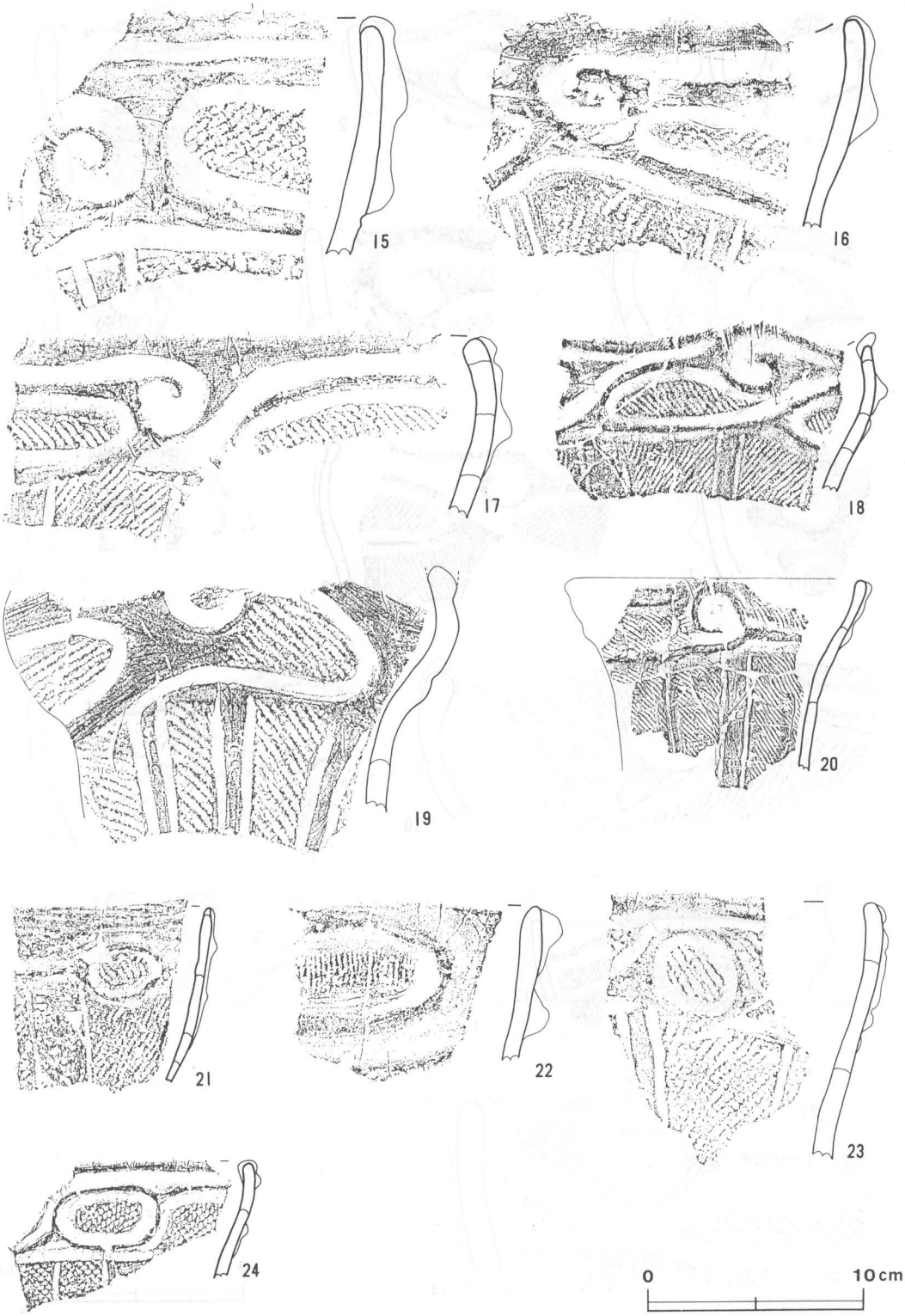
II群　中期終末に属する土器群である。文様・器形により３類に分類した。

１類　口縁部に無文帯をもつもの。（第 280 ・281 図41～68）

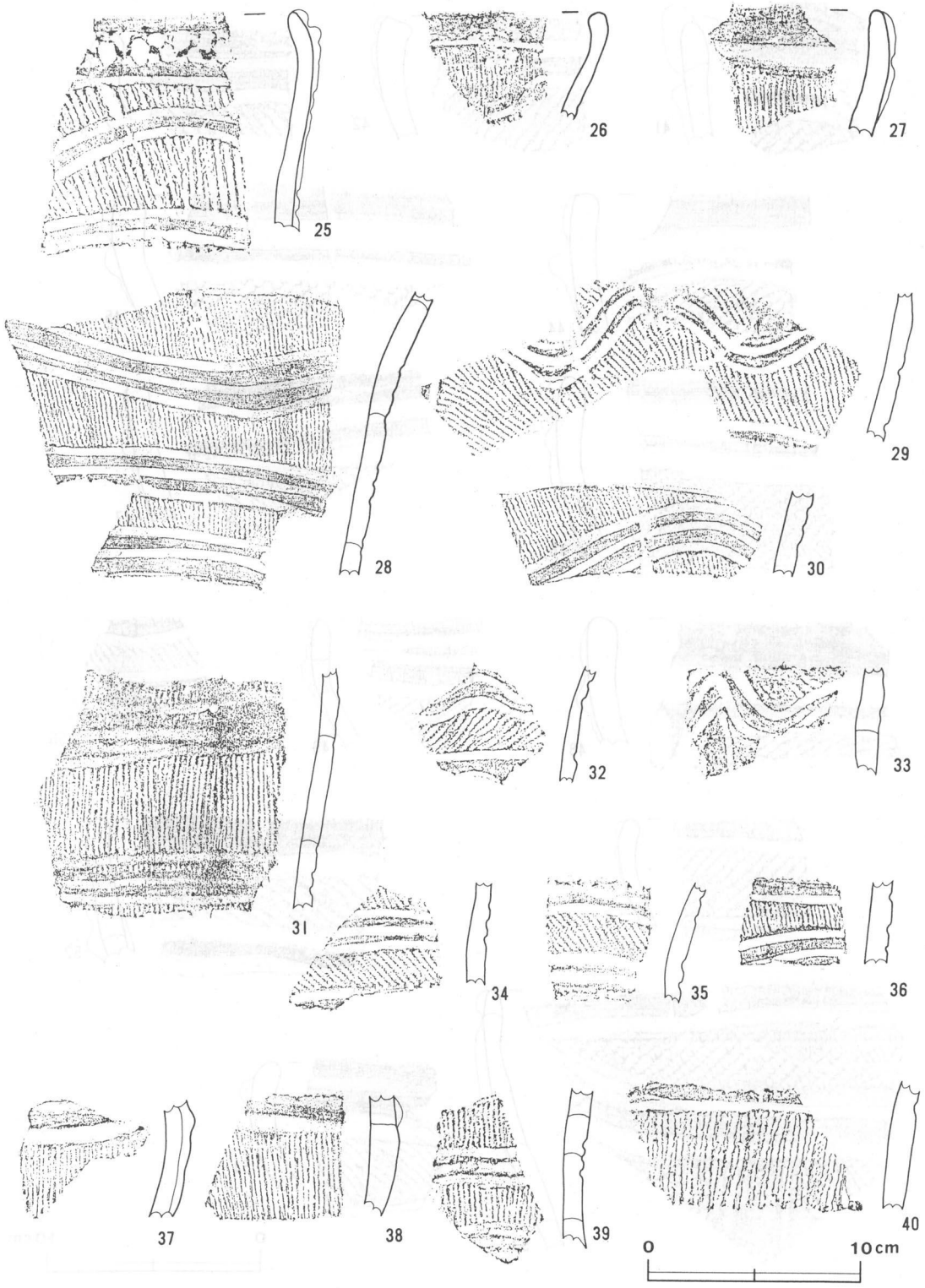
41～49・51～59は，隆帯により，60は，隆線による楕円区画が施されている。41・42・44～46・59の区画内は原体Ｌの横位回転縄文が，43・50・52～54は，Ｌの縦位回転縄文が施文されている。



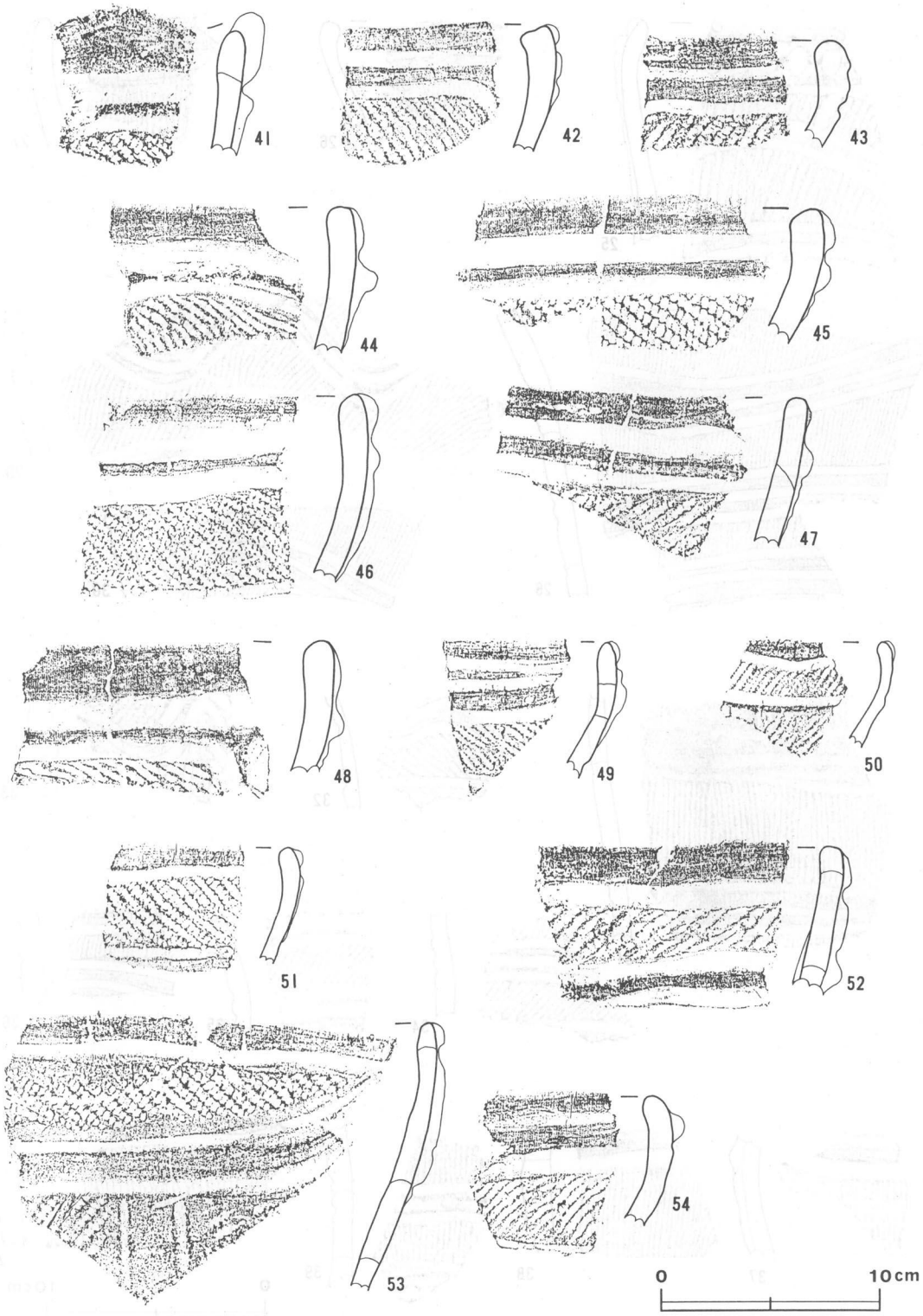
第277図　Ⅰ群1類a（1）　8・12－S＝⅙



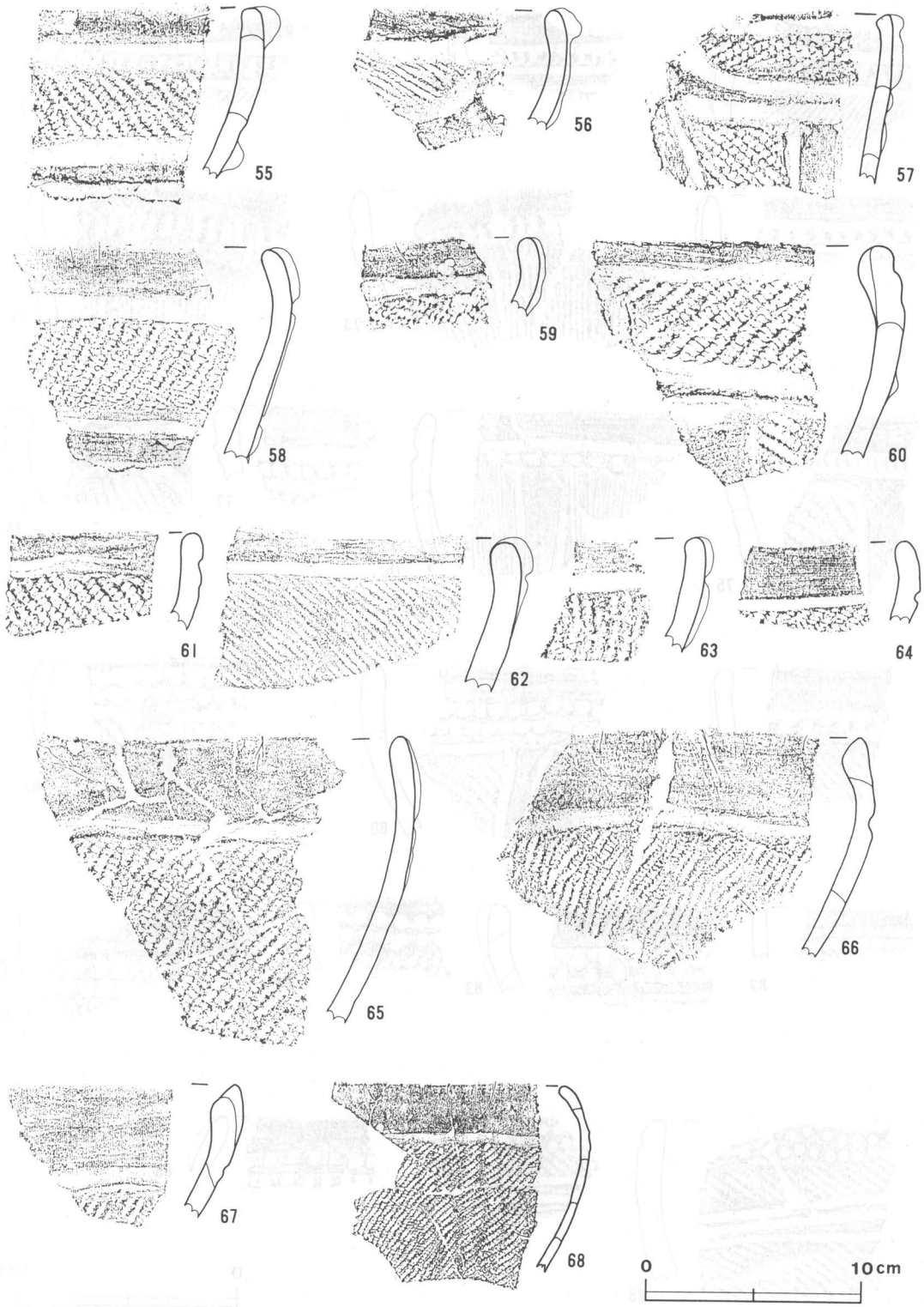
第278図　Ⅰ群1類a (2)　18・20・21・24－S＝⅙



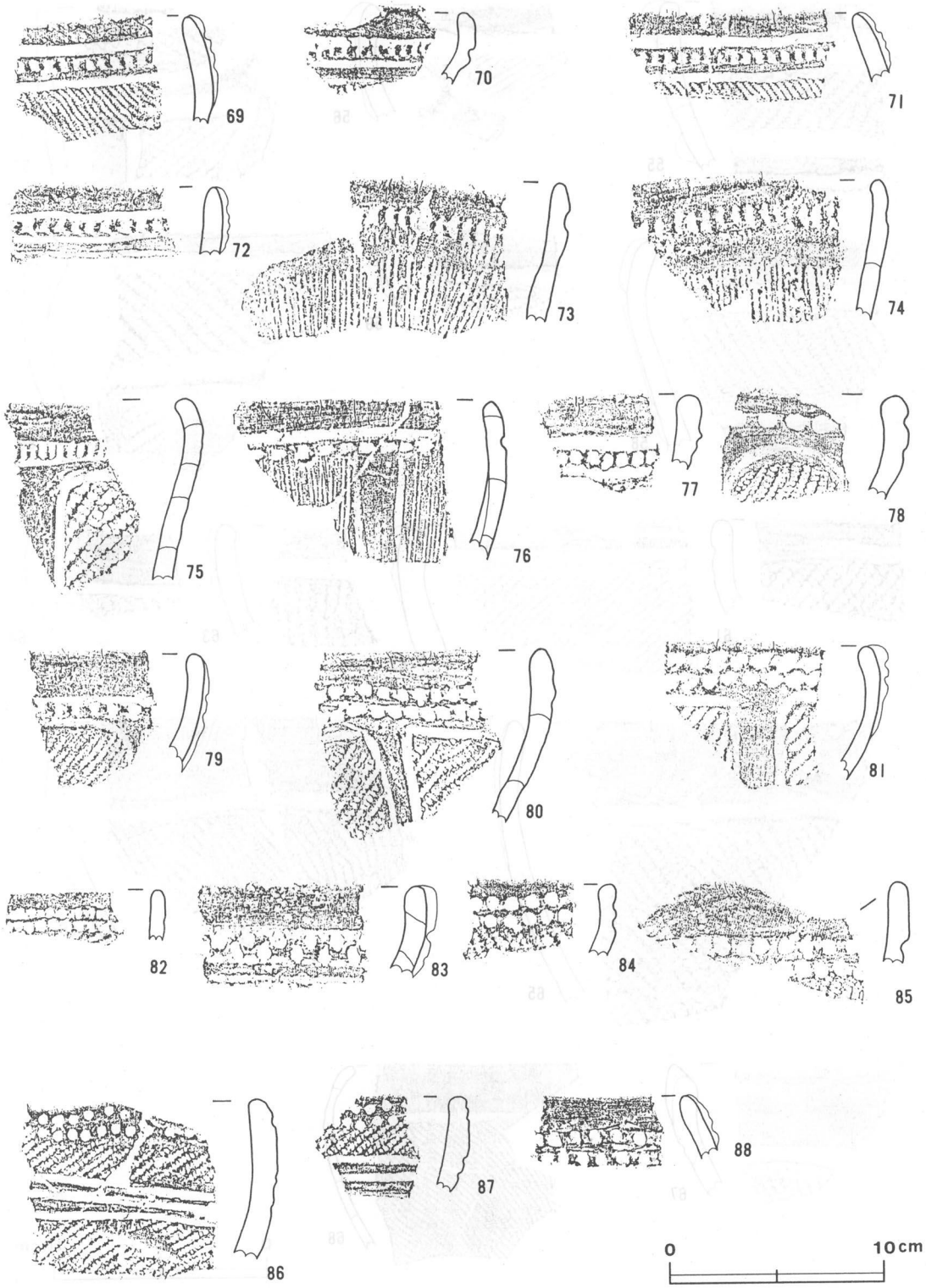
第279図　Ⅰ群２類



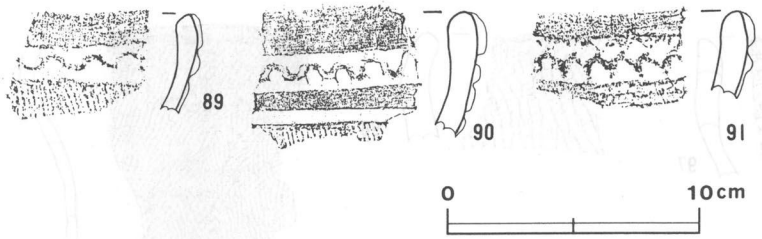
第280図　II群1類 (1)



第281図　II群1類 (2) 68－S＝1/6



第282図　II群２類ｂ（1）



第283図　II群２類ｂ（2）

47・48・51・56は，区画内にＲの縦位回転縄文，55は，Ｌの斜位回転縄文，57・60は，区画内にＲの横位回転縄文，胴部にＲの縦位回転縄文が施文されている。

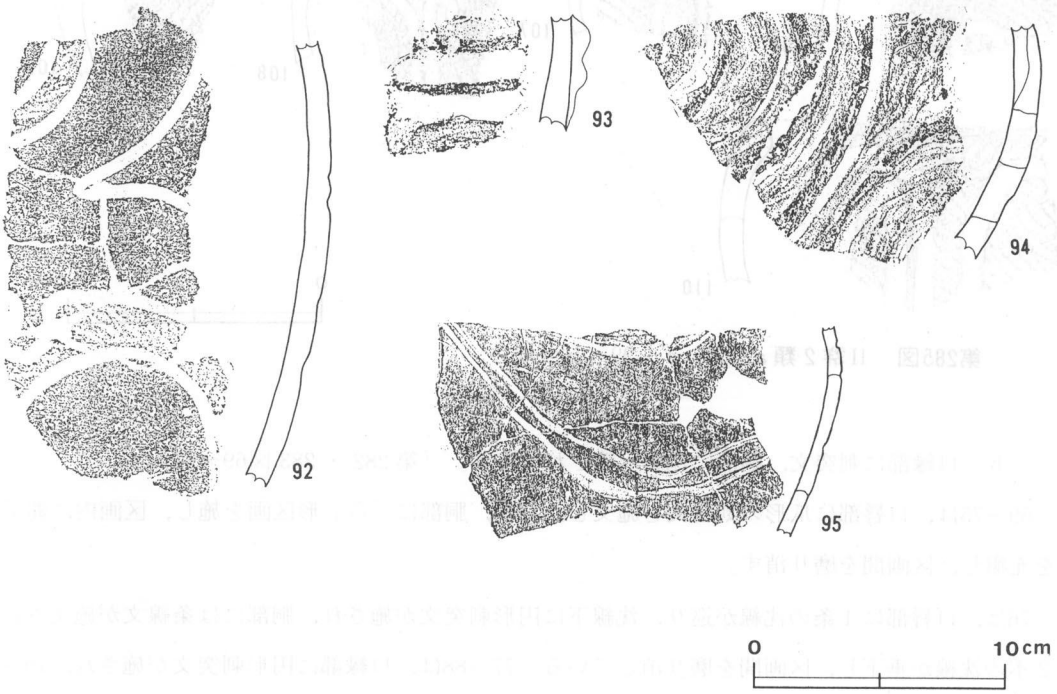
61・68は，口縁部が内彎し，口唇部を無文化し，口唇下に１本の沈線が横位に施され，61は，沈線下に原体Ｌの横位回転縄文，65は，Ｒの横位回転縄文，66・67は，Ｌの縦位回転縄文が施文されている。

２類　縄文を地文とし，文様区画を沈線でおこなうもの。（第282～285図69～110）

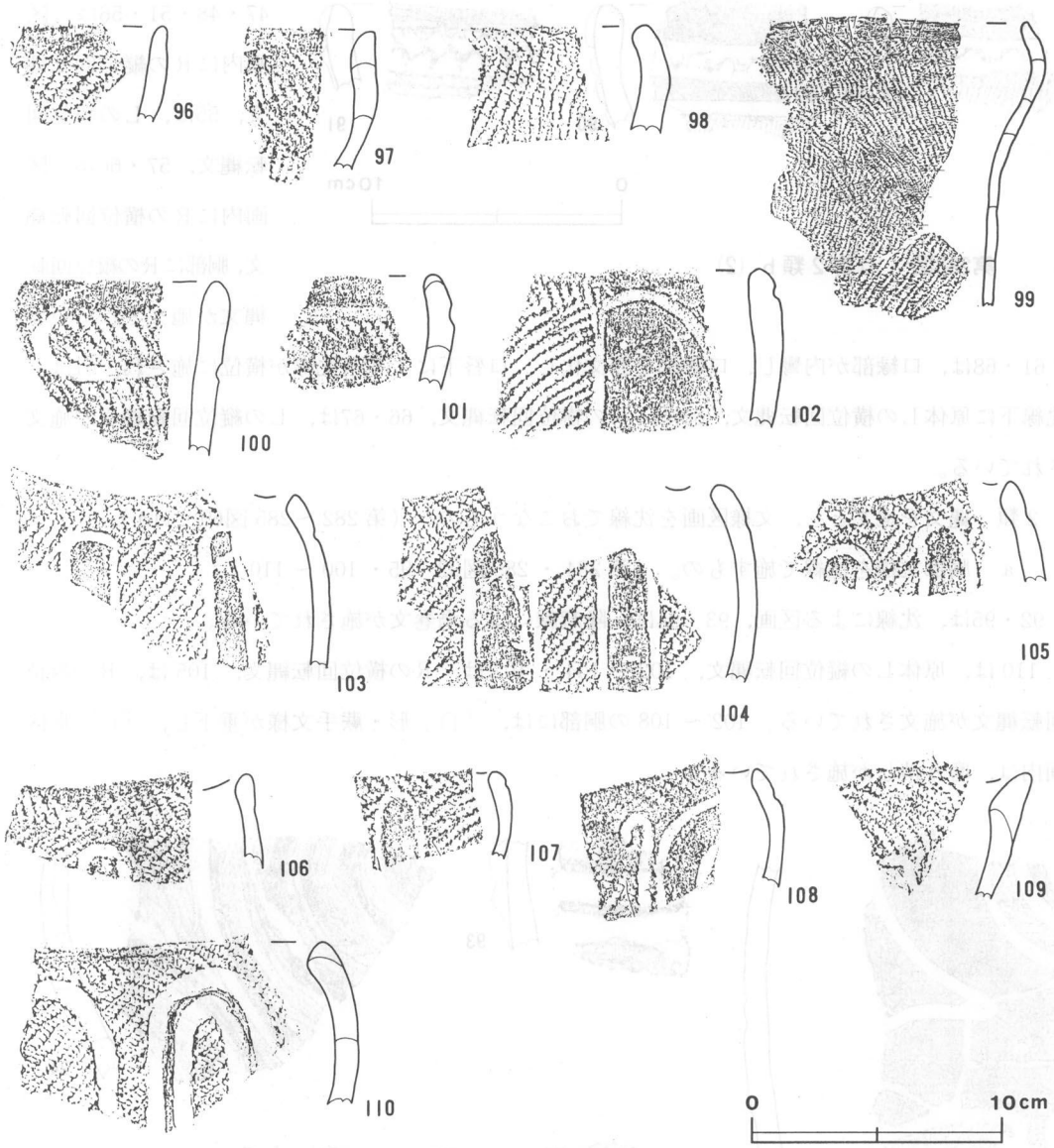
ａ　胴部文様を沈線で施すもの。（第284・285図92～95・100～110）

92・95は，沈線による区画，93・94は，隆起線による渦巻文が施されている。

110は，原体Ｌの縦位回転縄文，102～104・107は，Ｒの横位回転縄文，105は，Ｒの縦位回転縄文が施文されている。102～108の胴部には，「∩」形・蕨手文様が垂下し，「∩」形区画内は，磨り消しが施されている。



第284図　II群２類ａ（1）　95－Ｓ＝1/6

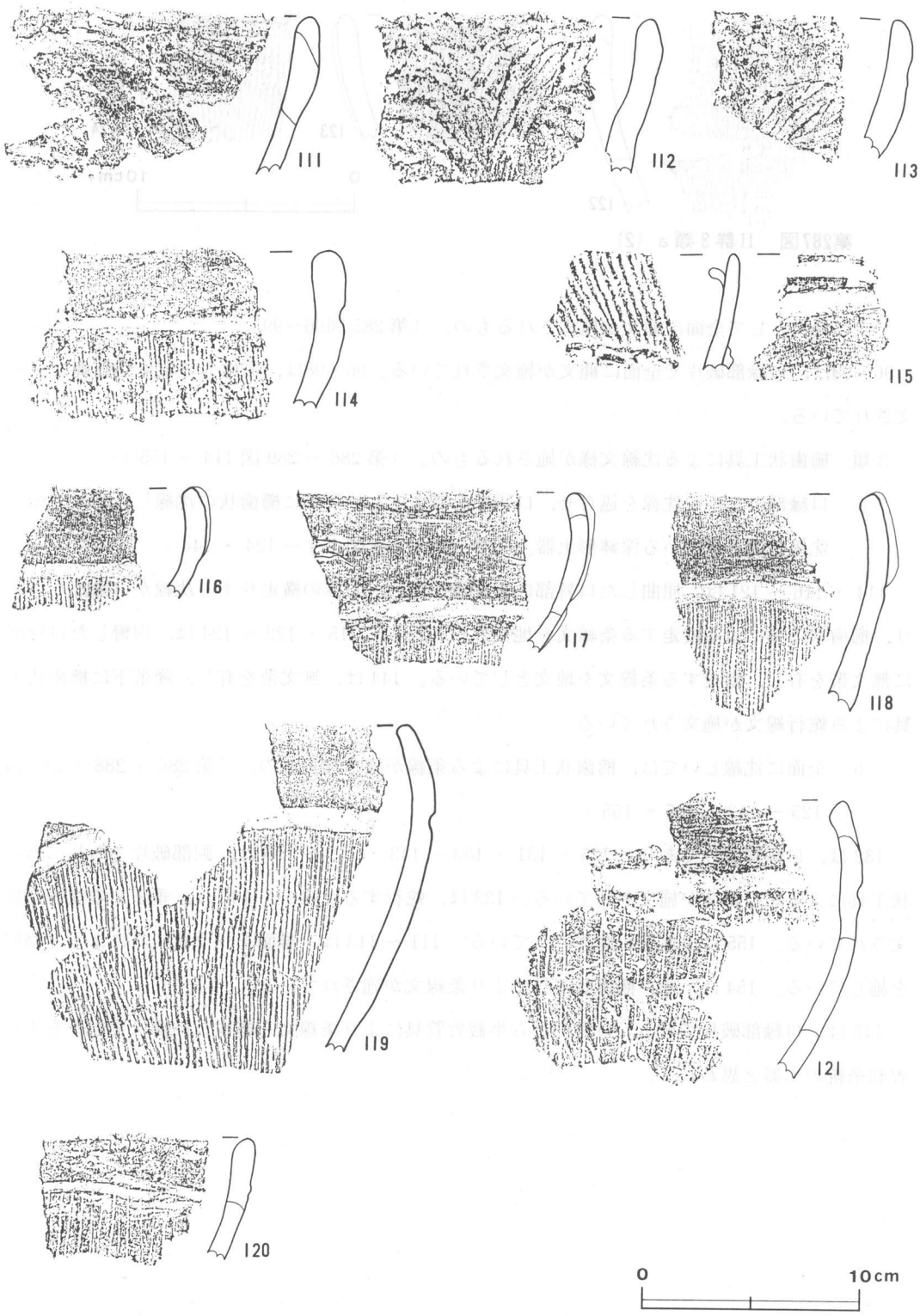


第285図　II群2類a (2)・c　99－S＝⅙

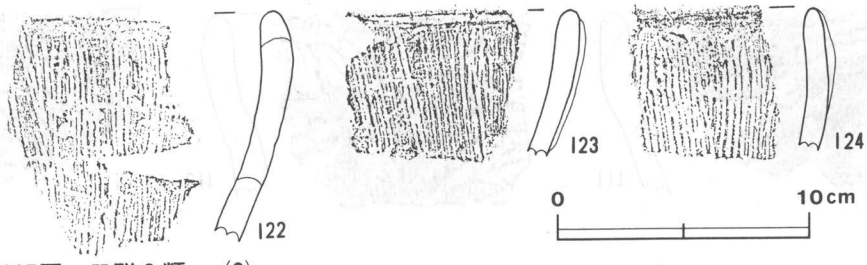
b　口縁部に刺突文，胴部に沈線が施されるもの。（第282・283図69～91）

69～75は，口唇部に爪形の刻目文を施文し，75は，胴部に「∩」形区画を施し，区画内に縄文を充填し，区画間を磨り消す。

76は，口唇部に1条の沈線が巡り，沈線下に円形刺突文が施され，胴部には条線文が施文され，2本の沈線が垂下し，区画間を磨り消している。77～88は，口縁部に円形刺突文が施され，79～81は，胴部に沈線による「∩」形区画が施され，区画間を磨り消している。89～91は，半截の刺突文を施し，鋸歯状文を作り出している。



第286図　II群3類a（1）・b（1）



第287図　II群3類a（2）

c　地文として全面に縄文が施文されるもの。（第285図96～99）

96～99は，口縁部破片で全面に縄文が施文されている。96・98は，原体Lの縦位回転縄文が施文されている。

3類　櫛歯状工具による沈線文様が施されるもの。（第286～289図114～155）

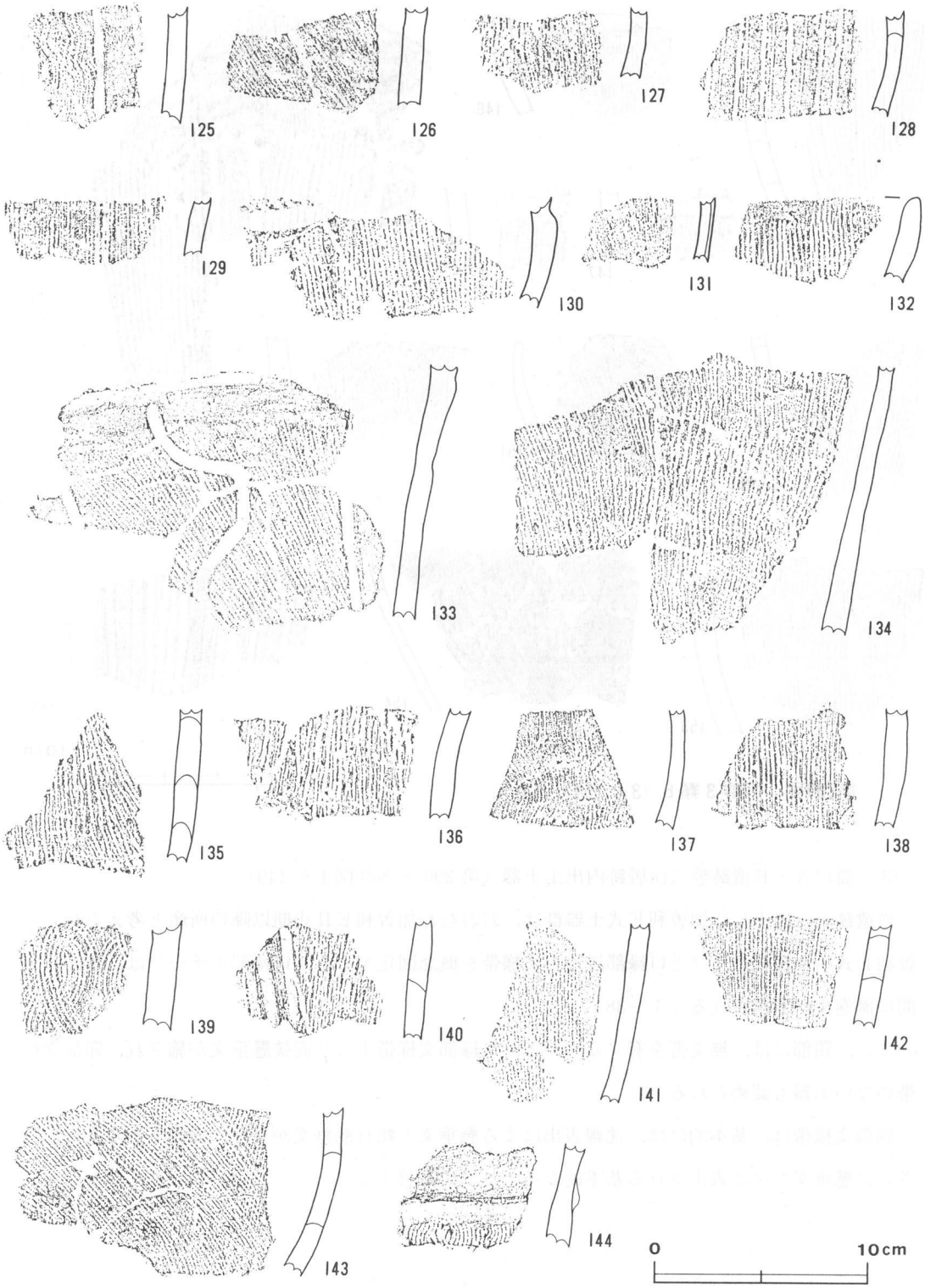
a　口縁部に1本の沈線を巡らせ，口唇部を無文とし，胴部に櫛歯状の沈線しいては，細い沈線が施されている深鉢形土器。（第286～288図114～124・144）

114・116～121は，屈曲した口唇部に無文帯を施し，1本の横走りする沈線が口縁部をめぐり，櫛歯状工具による縦走する条線文を地文としている。115・122～124は，内彎した口唇部に無文帯を有し，縦走する条線文を地文としている。144は，無文帯を有し，隆帯下に櫛歯状工具による蛇行線文が施文されている。

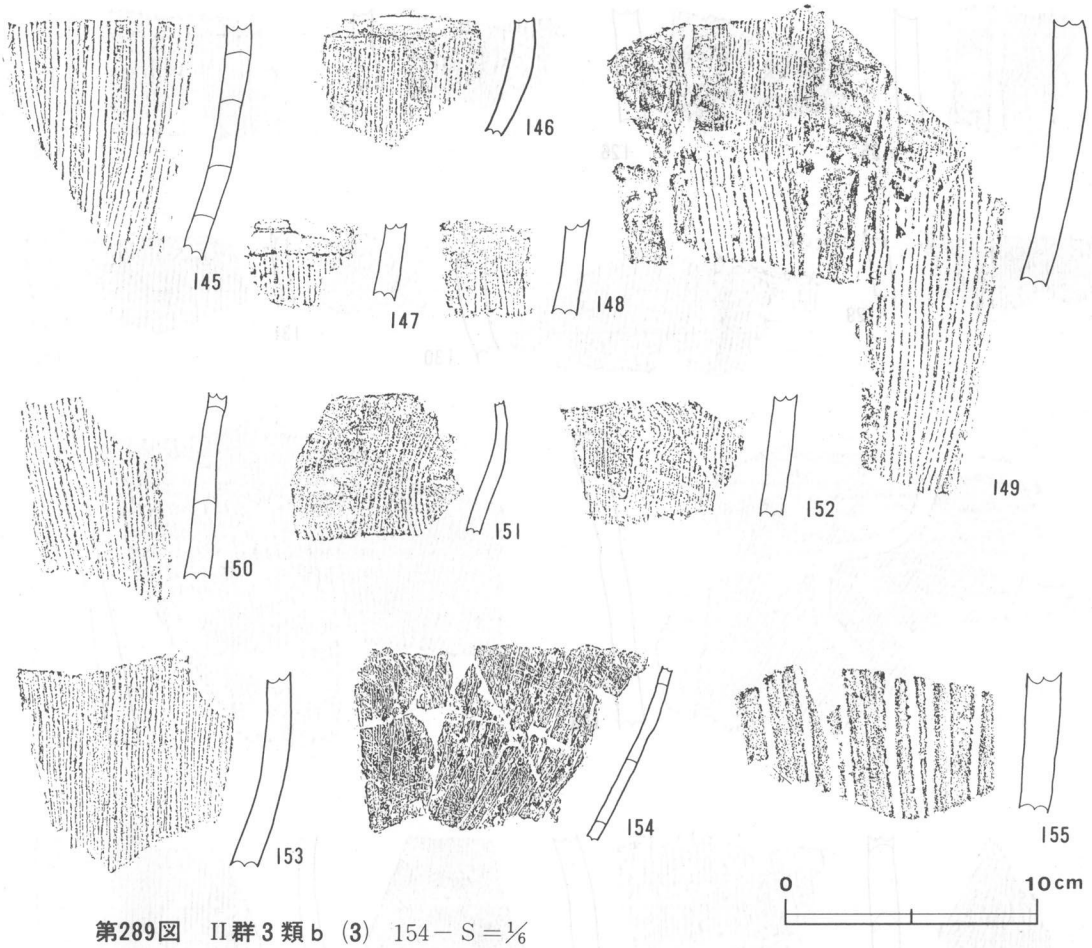
b　全面に沈線しいては，櫛歯状工具による条線が施されるもの。（第286・288・289図125～143・145～155）

132は，口縁部破片であり，125～131・133～143・145～155は，胴部破片であり，櫛歯状工具による蛇行線文が施文されている。133は，蛇行する沈線が，140は，垂下する沈線が施文されている。155は，沈線が施文されている。111～113は，器面をヘラ状工具によって整形を施している。154は，細い櫛歯状工具により条線文が施されている。

115は，口縁部破片である。口唇部から半截竹管具により条線文を施す。内面に突起を有する曽利系統の土器と思われる。



第288図　II群3類a (3)・b (2)



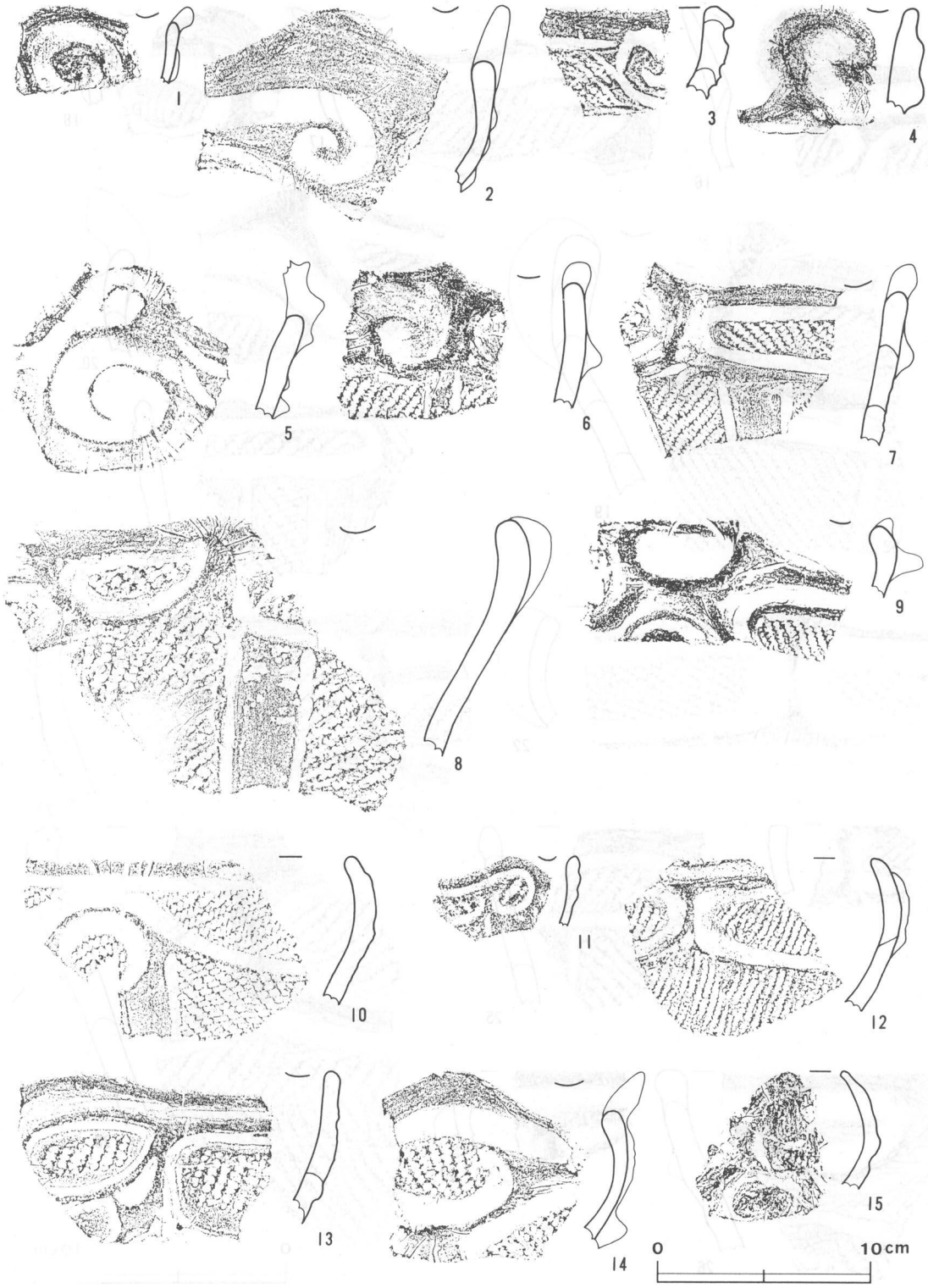
第289図　II群3類b（3） 154－S＝⅙

(3)　筒戸A・B遺跡竪穴住居跡内出土土器（第290～300図1～149）

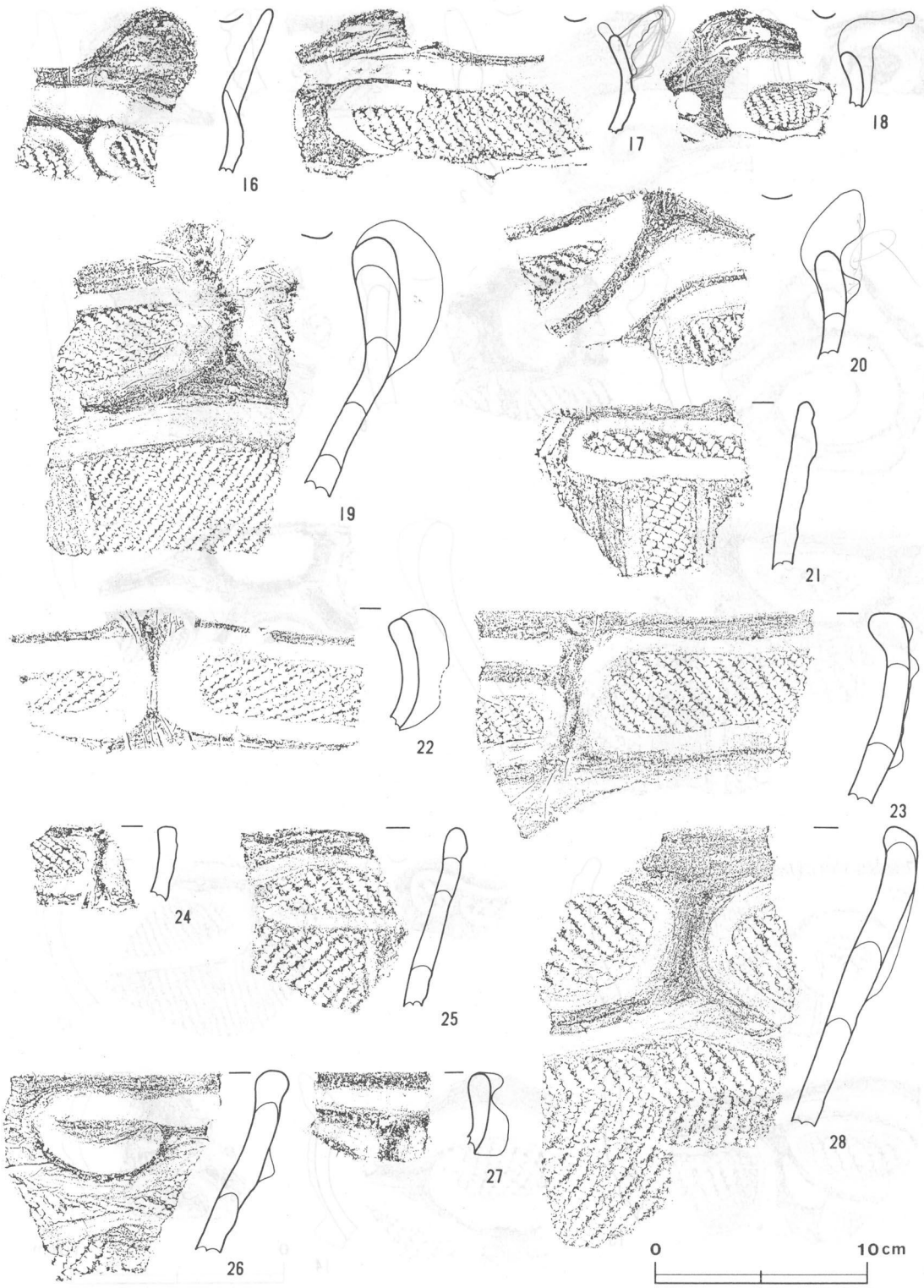
当遺跡から出土した加曽利E式土器群は，おおむね加曽利EII式期以降の所産と考えられ，加曽利E式の文様モチーフと口縁部以外の文様帯を概念図化すると，口縁部モチーフは，楕円区画間に渦巻文が表出される。(1～38)

また，頸部には，無文帯を有するものと，口縁部文様帯下より直接懸垂文が施され，頸部文様帯のない土器も認められる。

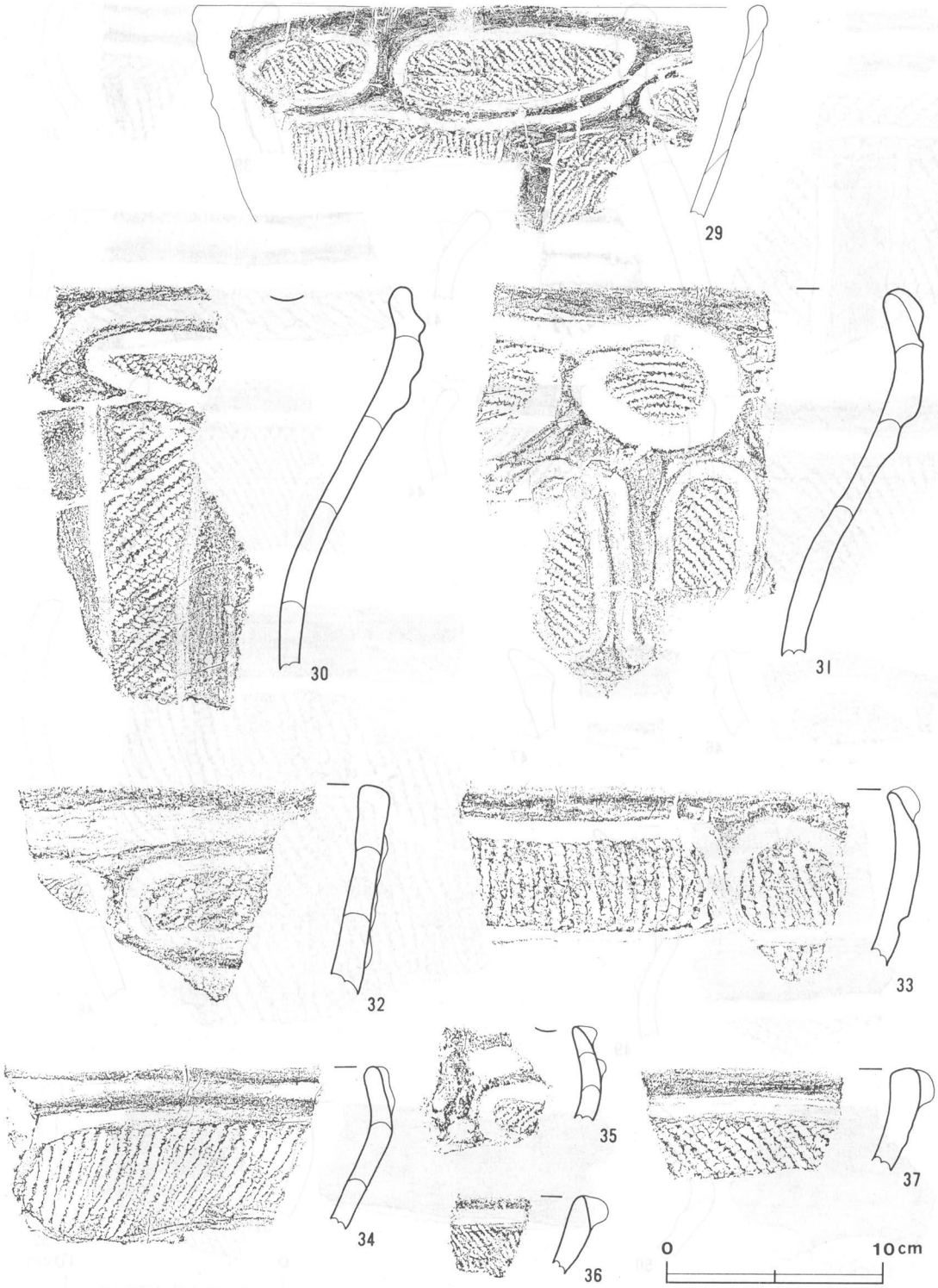
胴部文様帯は，基本的には，沈線表出による懸垂文と蛇行懸垂文が交互に表出されるものと，さらに懸垂文だけに表出される基本的なモチーフに推移する。



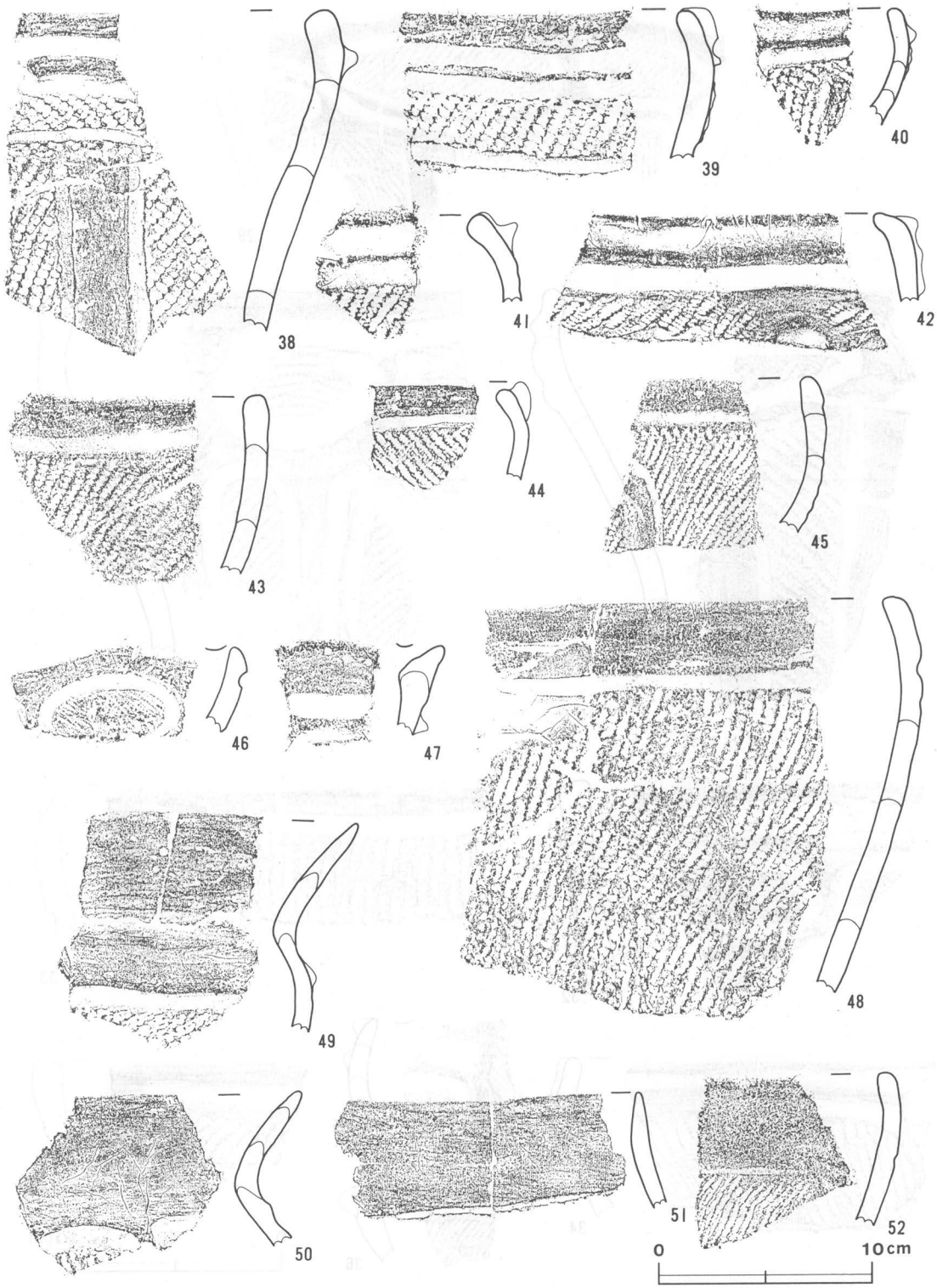
第290図　住居跡出土土器（1）　1・SI－17，2・SI－15，3・SI－63，4・SI－68，5・SI－19，6・SI－12，7・SI－18，8・SI－20，9・SI－42，10・SI－15，11・SI－40，12・SI－18，13・SI－36，14・SI－9，15・SI－17



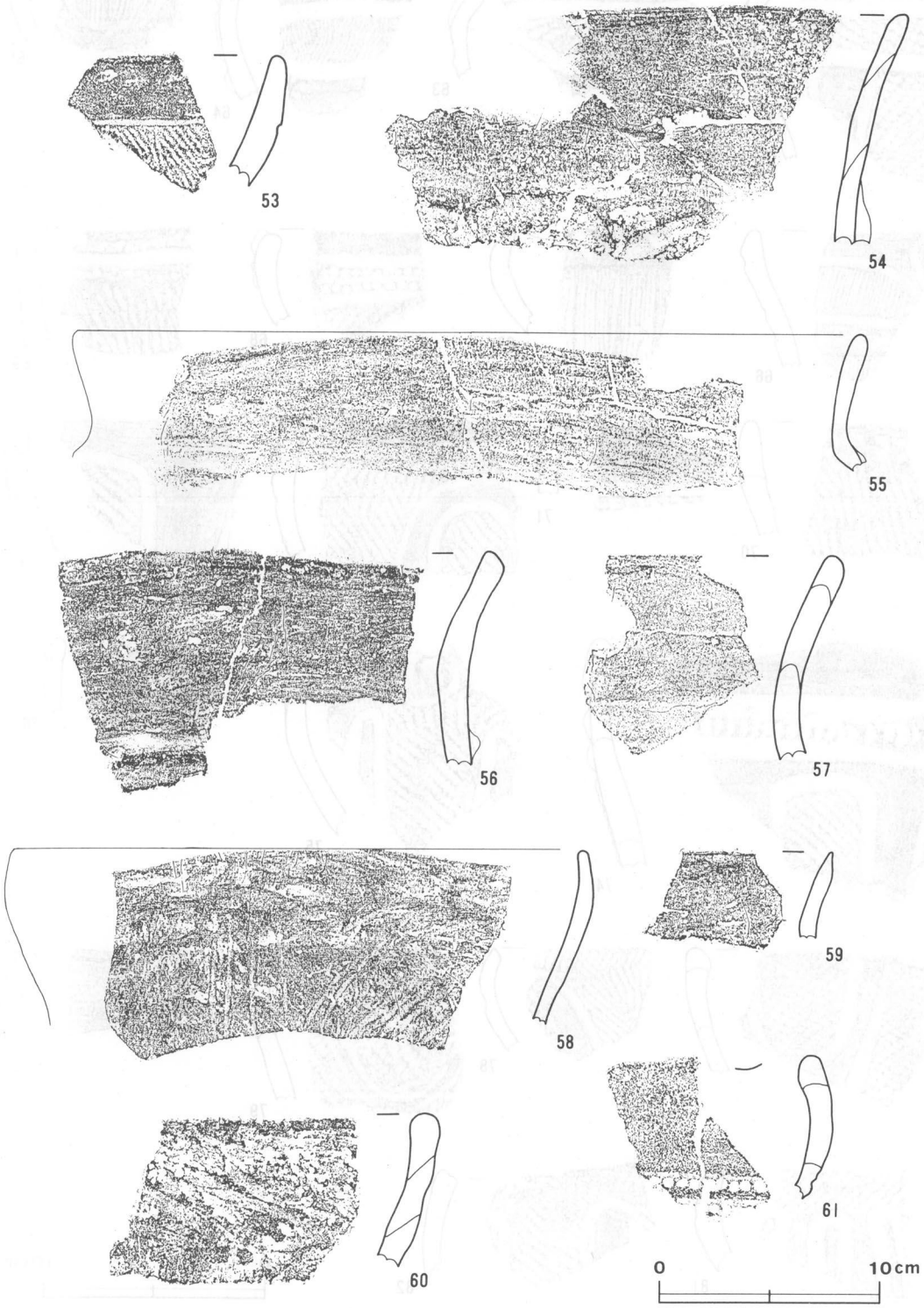
第291図　住居跡出土土器 (2) 16・SI－43, 17・SI－50, 18・19・SI－40, 20・SI－14, 21・22・SI－9, 23・SI－16, 24・SI－15, 25・SI－40, 26・SI－78, 27・SI－17, 28・SI－56



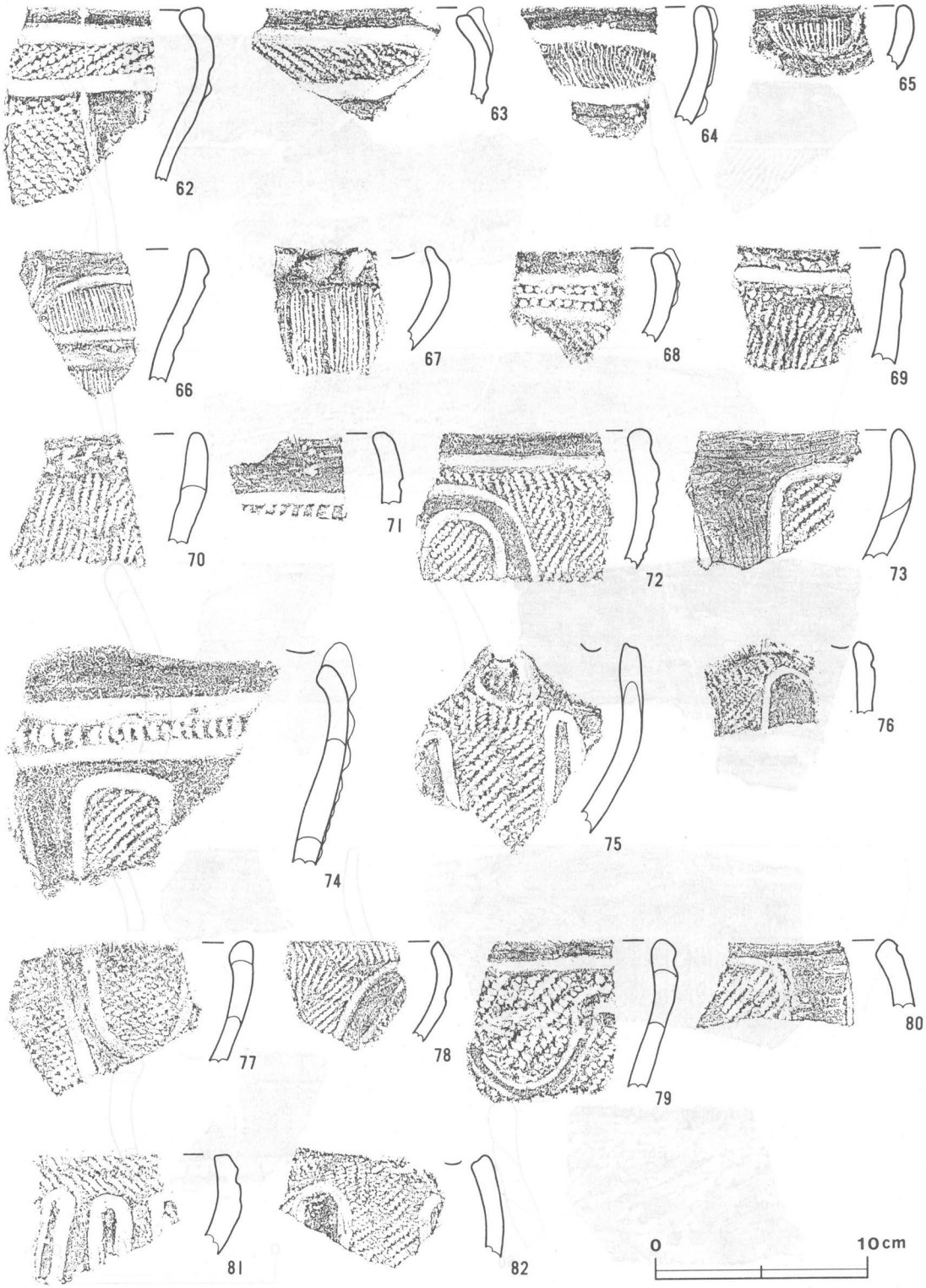
第292図　住居跡出土土器（3） 29・SI－56（S＝1/6），30・SI－42，31・SI－43，32・SI－9，33・SI－42，34・SI－62，35・SI－45，36・SI－73，37・SI－28



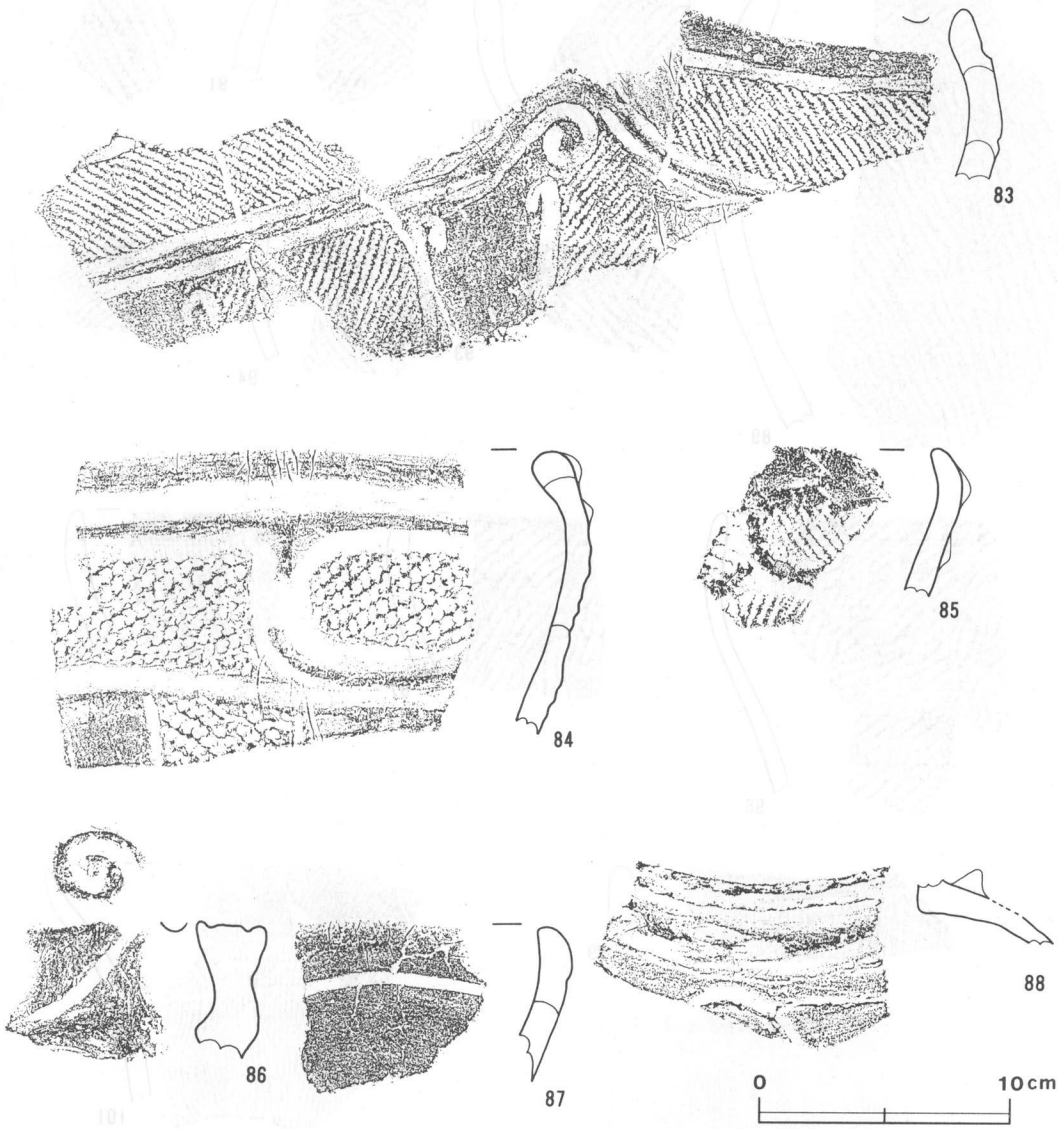
第293図　住居跡出土土器（4） 38・SI－28，39・SI－62，40・SI－52B，41・SI－46，42・SI－50，43・SI－51，44・SI－15，45・SI－40，46・SI－72，47・SI－42，48・SI－17，49・SI－68，50・SI－50，51・SI－40，52・SI－53



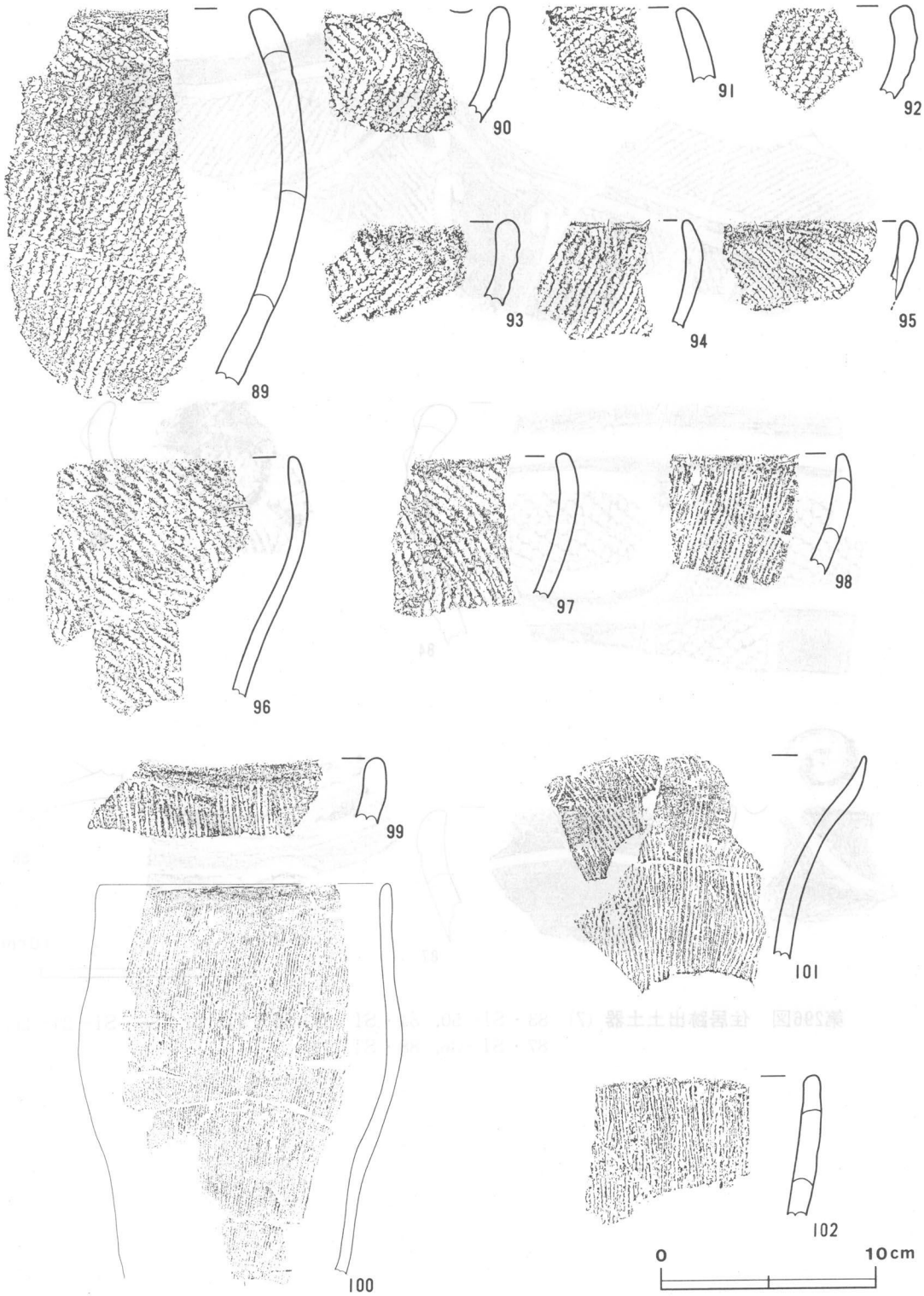
第294図　住居跡出土土器（5） 53・SI－52B，54・SI－43，55・SI－27，56・SI－15，57・SI－78，58・SI－68，59・SI－15，60・SI－12，61・SI－9



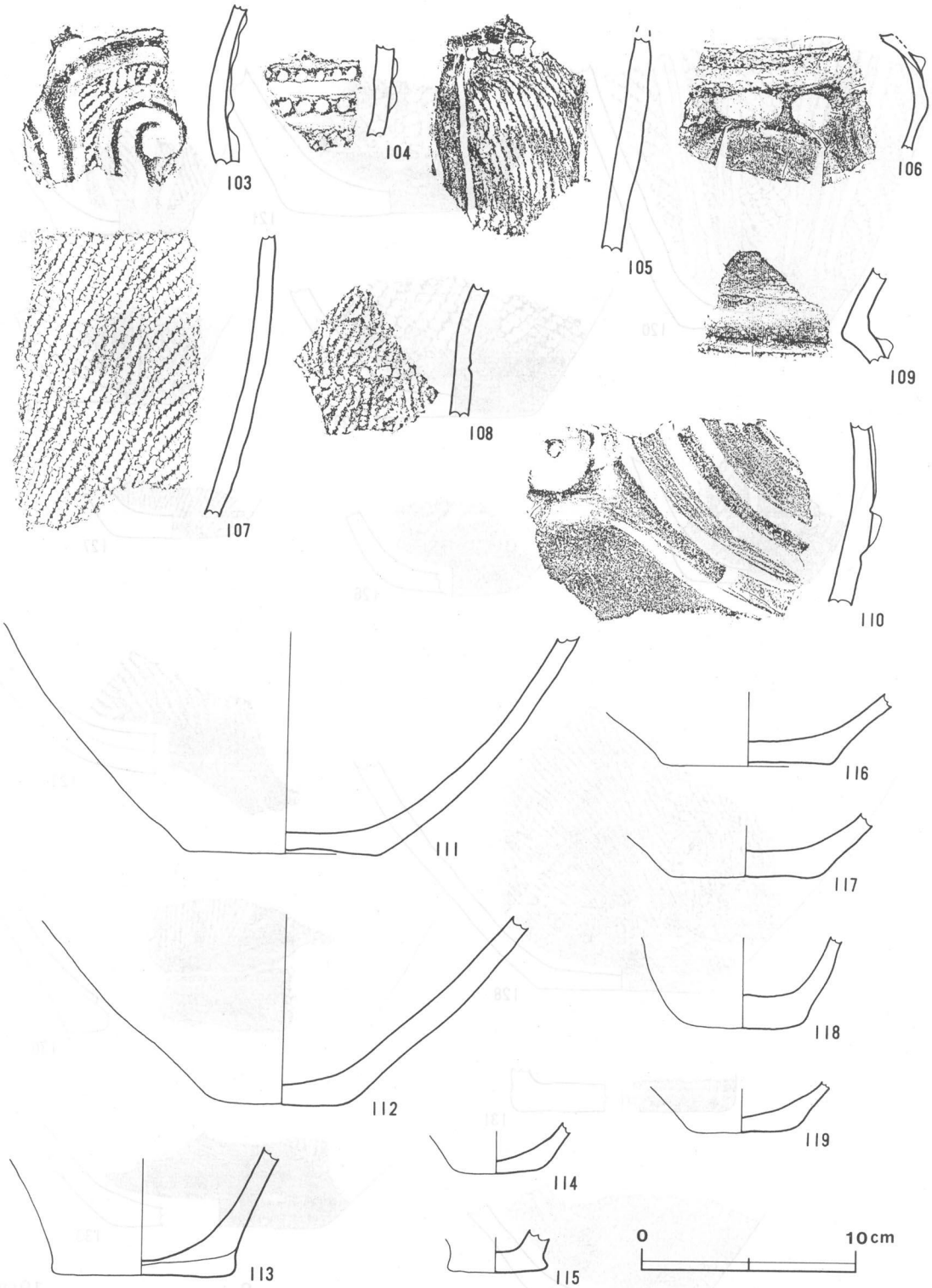
第295図　住居跡出土土器 (6)　62・SI－18, 63～66・SI－68, 67・SI－18, 68・SI－72, 69・SI－68, 70・SI－40, 71・SI－73, 72・SI－40, 73・SI－18, 74・SI－17, 75・SI－50, 76・SI－42, 77・SI－65, 78・SI－68, 79・SI－17, 80・SI－77, 81・SI－42, 82・SI－53



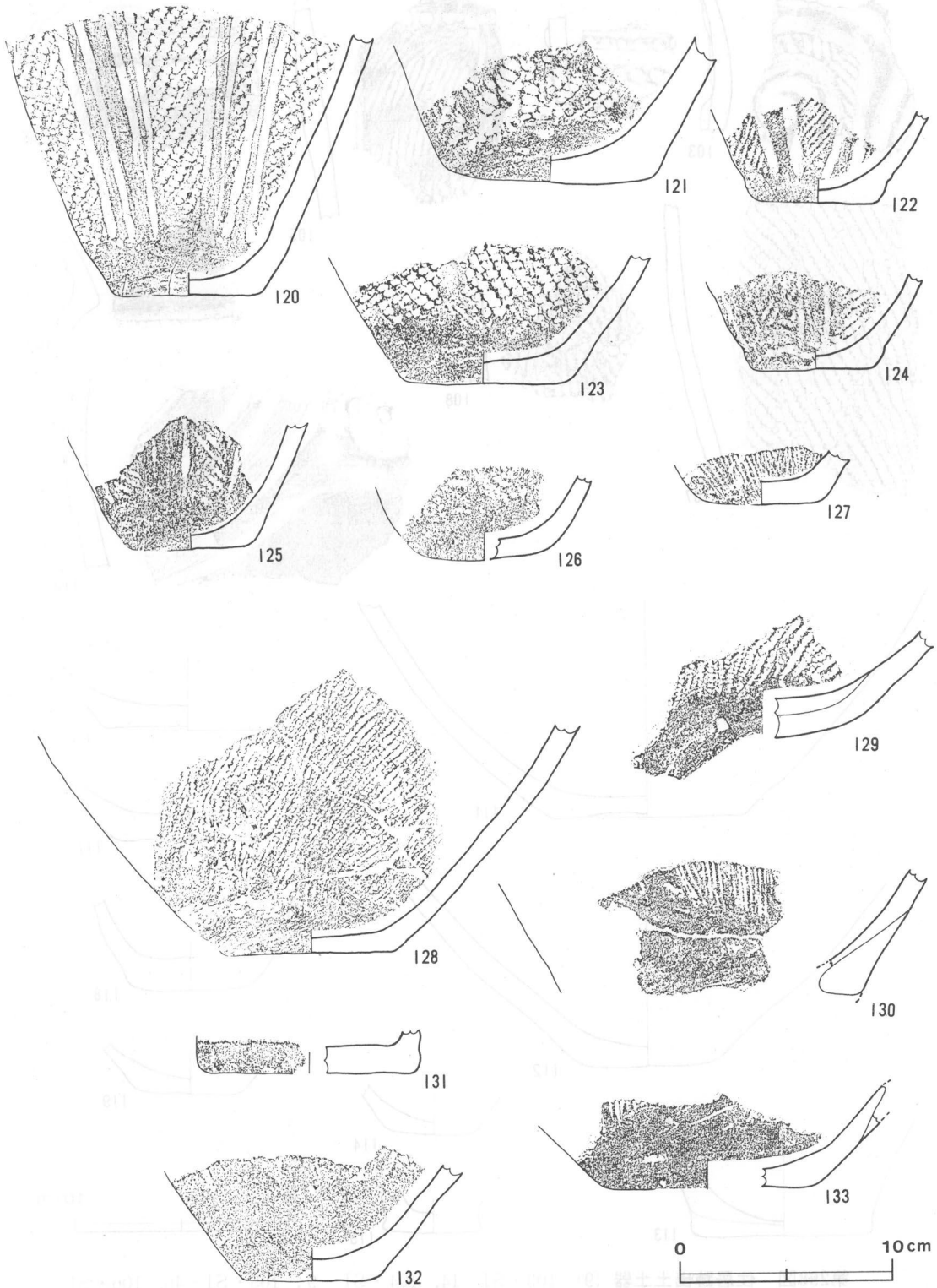
第296図　住居跡出土土器（7） 83・SI－50，84・SI－28，85・SI－14，86・SI－24～26，87・SI－36，88・SI－18



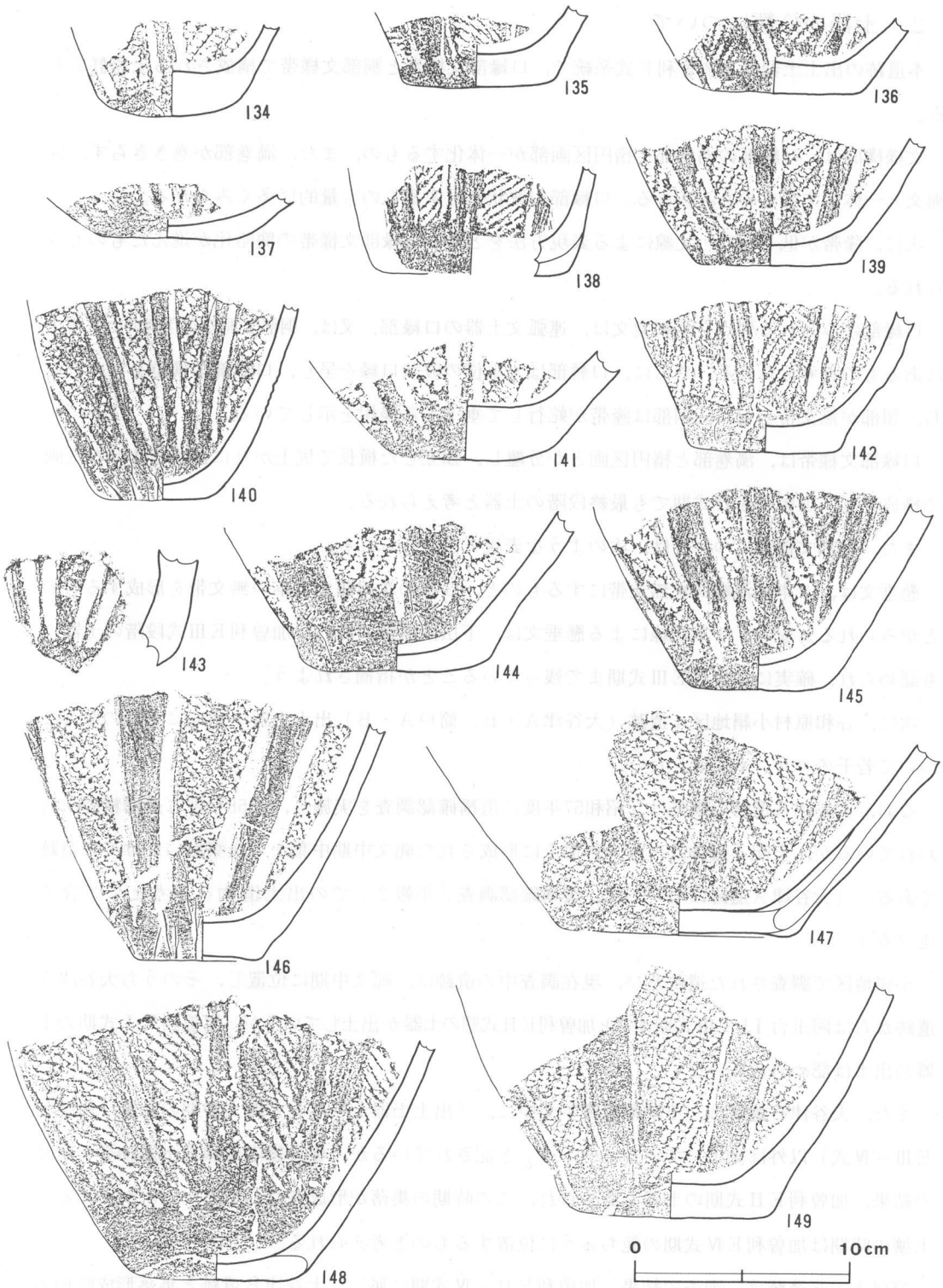
第297図　住居跡出土土器 (8)　89・SI－18, 90・SI－65, 91・SI－52A, 92・SI－19, 93・SI－33, 94・SI－9, 95・SI－42, 96・SI－50, 97・SI－53, 98・SI－33, 99・SI－43, 100・SI－18(S＝1/6), 101・SI－68, 102・SI－40



第298図　住居跡出土土器（9）　103・SI－14，104・SI－9，105・SI－40，106・SI－18，107・SI－16，108・SI－15，109・SI－54，110・SI－5，111・SI－19，112・SI－5，113・SI－42，114・115・SI－50，116・SI－69，117・118・SI－16，119・SI－41



第299図　住居跡出土土器 (10)　120・SI－28, 121・SI－27, 122・SI－50, 123・SI－41, 124・SI－42, 125・SI－20, 126・SI－30, 127・SI－15, 128・SI－17, 129・SI－50, 130・SI－30, 131・SI－42, 132・SI－50, 133・SI－5



第300図　住居跡出土土器 (11) 134・SI－9，135・SI－56，136・SI－16，137・SI－14，138・SI－9，139・SI－42，140・SI－27，141・142・SI－28，143・SI－42，144・SI－56，145・146・SI－28，147・148・149・SI－24

2　土器の分類について

本遺跡の出土土器は，加曽利Ｅ式系統で，口縁部文様帯と胴部文様帯で構成される土器群である。

文様構成は，口縁部の渦巻部と楕円区画部が一体化するもの，また，渦巻部が巻ききらず，区画文と一体化するものもみられる。口縁部が波状を呈するものも量的に多くみられる。

次に，隆帯が低くなり，沈線による表現方法をとり，口縁部文様帯の簡略化が進んだものもみられる。

口縁部にみられる列点交互刺突文は，連弧文土器の口縁部，又は，胴部区画の交互刺突の系譜上にあるものと考えられる。さらに，口唇部は４単位の波状口縁を呈し，口縁部に横位Ｓ字文をもち，頸部が無文帯となり，胴部は隆帯が蛇行して垂下する様相を示している。

口縁部文様帯は，渦巻部と楕円区画とが分離し，独立した横長で尻上がりに流れるような区画で構成され，加曽利ＥⅡ式期でも最終段階の土器と考えられる。

また，胴部文様帯については，次のような表現方法がみられる。

懸垂文は，２本の沈線間を無文帯にするものと，３本の沈線間で２本の無文帯を形成するものとがみられる。なお，３本沈線による懸垂文は，下広岡遺跡[(1)]において加曽利ＥⅢ式段階の土器にも認められ，確実に加曽利ＥⅢ式期まで残っていることが指摘されよう。

次に，谷和原村小絹地区４遺跡（大谷津Ａ・Ｂ，筒戸Ａ・Ｂ）出土土器を中心に土器の変遷について若干のコメントを記したい。

なお，大谷津Ａ遺跡の調査は，昭和57年度に遺構確認調査を実施し，同58年度に遺構精査が行われているが，上記４遺跡は，同一台地上に形成された縄文中期中葉から後葉期にかけての遺跡である。（大谷津Ａ遺跡については，遺構確認調査「年報２」での出土遺物を参考として含み述べる。）

小絹地区で調査された遺跡及び，現在調査中の遺跡は，縄文中期に位置し，そのうち大谷津Ａ遺跡からは阿玉台Ｉｂ～Ⅲ式期までと加曽利ＥⅡ式期の土器が出土しているが，加曽利ＥⅠ式期の土器の出土は認められていない。

また，大谷津Ｂ遺跡は，その報告書本文中に，「出土土器からみると縄文中期の土器（加曽利ＥⅢ～Ⅳ式）以外は出土していない……」と記されているが，報告書内記載出土遺物等の検討の結果，加曽利ＥⅡ式期の土器も認められ，この時期の集落が形成されたことがうかがわれる。土壙の時期は加曽利ＥⅣ式期の範ちゅうに位置するものと考えられる。

筒戸Ａ・Ｂ遺跡は，調査の結果，加曽利ＥⅡ～Ⅳ式期に属し，大谷津Ｂ遺跡と集落形成時期の時間差（時期差）は認められず，同時期に営まれた同一集落である。

以上が，４遺跡の出土遺物からとらえた遺跡の時期であるが，当遺跡から出土した土器をみる

と，完全に復元できたものが若干認められる程度であり，それ以外は破損して廃棄されたものと考えられる。また，各遺跡から共通していえることは，加曽利ＥＩ式期の土器の出土が認められないということである。

遺構についても，赤松遺跡，下広岡遺跡，諏訪遺跡，東大橋原遺跡で調査検出された土壙と若干の違いが認められる。それは，前述の遺跡からは，袋状土壙と，その共伴遺物として，阿玉台式期，加曽利ＥＩ式期，大木8a式期に属する土器が出土していることである。

大谷津Ｂ遺跡，筒戸Ａ・Ｂ遺跡からは，加曽利ＥＩ式期の土器の検出は認められず，また，遺構においても袋状を呈する土壙の検出はみられなかったが，現在調査中の大谷津Ａ遺跡は，阿玉台Ｉb～Ⅲ式期に位置する遺跡であり，遺構の検出にも若干の違いが認められるのではないかと考えられるので，今後の調査結果を待ちたい。

現在までの報告文等の内容から判断して考えられることは，阿玉台式期の終末期と加曽利Ｅ式期の初頭に袋状土壙が認められる例が多いが，すべてにあてはまらず地域的な点を考慮し，追求すべき問題と考える。

さらに，大谷津Ｂ，筒戸Ａ・Ｂの３遺跡から出土した遺物，遺構を考えた場合，３遺跡は，縄文中期中葉から後葉の一時期に当遺跡の形成されている台地上から他に移動し，ふたたび台地上にもどり集落を営んだものか，また，台地上の調査区域外の地区で営まれたのか，二通りが考えられるが，現在の調査範囲等からでは判断はつけがたい。

次に，当遺跡から数多く出土した土器の中から，ここでは，加曽利ＥⅡ式期に編年される連弧文式土器について若干の検討を試みたい。

筒戸Ａ・Ｂ遺跡５・12・15・17・30・45・68号住居跡から連弧文式土器が出土している。出土した層位は，いずれも住居跡覆土中であり，遺構に伴う遺物，時期を決定する遺物としては参考資料としたが，すべて投棄されたものとしてとらえた。

連弧文式土器の施文は，地文に撚糸文，縄文が用いられ，沈線は，竹管状工具と思われるものでおこなわれ，沈線のみで構成されている。

今回，当遺跡から検出された連弧文式土器片は，いずれも施文方法が〝地文の施文→文様区画〟の過程で実施されている。

なお，文様帯の構成は，上下部二文様帯にみられ，口縁下には交互刺突文を周回させ胴部のくびれ付近に複数の沈線を周回させている。縄文施文後に３本単位の沈線が表出され，沈線間は磨り消される。沈線は，口縁部及び胴部のくびれ部に巡り，胴上部で三段の連弧を構成する。

口縁には，平行する単沈線間に交互刺突文，または，２本の沈線上に交互に刺突をして蛇行線を表出している。また，類似した土器は，下広岡遺跡の住居跡，土壙からも出土している。

以上のように，当遺跡から出土した土器は，加曽利ＥⅡ式土器片と共に出土しているが，口縁

部文様に特徴がみられ，横Ｓ字状文（渦巻文）と楕円区画文は，加曽利Ｅ式期の主文様であり，文様構成等から判断して，加曽利ＥⅡ式，大木8b式期に比定され，また，共伴するものと考えられる。

これらの事項から，連弧文式土器は，ある特定のモチーフが用いられて出現したが，短期間に現れてまもなく消滅の経過をたどった土器と考えられる。また，当遺跡でも数遺構からの出土であり，数量的に多くない点から，当遺跡においても短期に使用された土器と思われる。

注１．形式に表出される横位の連続弧線モチーフを主体とする土器である。

表12　住居跡出土遺物一覧

住居番号	総　数	口縁部	胴　部	底部	石器	(土錘)その他	住居番号	総　数	口縁部	胴　部	底部	石器	(土錘)その他
1	82	11	71	0	0	0	31	219	23	189	6	1	0
4	26	3	23	0	0	0	32	510	36	463	7	4	0
5	2,956	361	2,511	62	14	13	33	227	30	181	7	6	3
6	623	92	512	8	9	3	36	118	22	95	0	1	0
7	2,175	249	1,890	28	7	1	40	1,076	104	948	11	11	2
8	128	18	103	2	5	0	41	231	21	201	5	4	0
9	1,259	156	1,071	17	10	5	42	2,613	308	2,249	35	14	7
10	122	16	102	3	1	0	43	2,736	280	2,412	30	11	3
12	148	14	133	1	0	0	44	38	1	37	0	0	0
13	85	13	70	2	0	0	45	920	99	809	6	3	3
14	261	28	223	4	6	2	46	75	2	70	1	2	0
15	2,225	280	1,896	24	21	4	47	39	2	34	1	2	0
16	1,037	124	877	25	11	0	48	27	1	26	0	0	0
17	231	46	171	13	1	1	49	4	3	1	0	0	0
18	850	134	697	15	4	0	50	3,039	302	2,652	61	20	4
19	236	41	175	5	13	2	51	25	6	19	0	0	0
20	391	54	318	15	4	0	52A	82	12	68	2	0	0
21・22	9	3	6	0	0	0	52B	90	7	80	2	1	0
23	1	1	0	0	0	0	53	46	13	32	1	0	0
24～26	270	26	237	6	1	0	54	2	1	1	0	0	0
27	364	48	309	2	4	1	55	1	0	1	0	0	0
28	1,276	181	1,063	23	8	1	56	570	46	511	9	4	0
29	191	18	166	4	2	2	57	23	0	22	1	0	0
30	382	58	323	0	2	1	59	10	0	10	0	0	0

住居番号	総　数	口縁部	胴　部	底部	石器	(土錘)その他	住居番号	総　数	口縁部	胴　部	底部	石器	(土錘)その他
60	20	2	18	0	0	0	89	3	1	2	0	0	0
61	28	3	24	0	1	0							
62	160	18	142	0	0	0							
63	294	39	245	5	1	4							
64	10	1	8	1	0	0	合　計	32,056	3,717	27,545	497	238	72
65	210	26	181	3	0	0							
66	79	5	71	1	2	0							
67	77	9	68	0	0	0							
68	1,300	166	1,096	21	13	5							
69	267	30	231	3	1	2							
70	12	2	10	0	0	0							
71	11	0	11	0	0	0							
72	148	19	121	3	4	1							
73	180	8	169	3	0	0							
74	91	6	77	2	6	1							
75	13	3	9	1	0	0							
77	223	24	195	2	2	0							
78	294	28	259	7	0	1							
79	41	6	35	0	0	0							
80	338	17	320	0	1	0							
81	80	2	77	1	0	0							
82	30	2	28	0	0	0							
87	93	6	87	0	0	0							
88	5	0	5	0	0	0							

表13　土壙・埋設・その他の出土遺物一覧表

土壙番号	総数	口縁部	胴部	底部	石器	(土錘)その他	土壙番号	総数	口縁部	胴部	底部	石器	(土錘)その他
1	47	3	44	0	0	0	87	1	0	1	0	0	0
28	16	1	15	0	0	0	90	1	1	0	0	0	0
35	23	0	23	0	0	0	94	1	0	1	0	0	0
41	3	0	3	0	0	0	100	2	0	2	0	0	0
44	1	0	1	0	0	0	104	3	0	3	0	0	0
50	3	1	2	0	0	0	105	19	0	19	0	0	0
54	2	0	2	0	0	0	106	132	15	114	2	1	0
61	11	0	11	0	0	0	107	25	6	19	0	0	0
62	52	7	45	0	0	0	108	181	22	152	7	0	0
63	64	12	51	1	0	0	109	113	12	99	0	2	0
64	40	5	35	0	0	0	110	3	0	3	0	0	0
65	73	10	61	2	0	0	111	322	25	291	5	1	0
66	5	1	4	0	0	0	115	2	0	2	0	0	0
67	3	0	3	0	0	0	116	119	17	99	3	0	0
68	9	1	8	0	0	0	120	15	1	14	0	0	0
69	28	3	23	2	0	0	124	6	0	6	0	0	0
71	16	2	14	0	0	0	126	2	0	2	0	0	0
75	8	1	7	0	0	0	127	84	12	71	0	1	0
76	7	0	7	0	0	0	128	102	5	96	0	1	0
78	3	0	3	0	0	0	132	11	1	9	1	0	0
81	9	2	7	0	0	0	134	4	2	2	0	0	0
83	12	1	11	0	0	0	136	9	1	8	0	0	0
85	1	0	1	0	0	0	137	3	1	2	0	0	0
86	35	8	27	0	0	0	138	50	0	50	0	0	0

土壙番号	総数	口縁部	胴部	底部	石器	(土錘)その他	土壙番号	総数	口縁部	胴部	底部	石器	(土錘)その他
139	4	1	3	0	0	0	178	1	0	1	0	0	0
144	110	11	98	1	0	0	184	1	0	1	0	0	0
145	1	0	1	0	0	0	187	1	0	1	0	0	0
146	9	1	7	0	1	0	194	1	0	1	0	0	0
147	6	0	6	0	0	0	208	2	0	2	0	0	0
148	18	0	18	0	0	0	210	1	0	1	0	0	0
149	20	1	19	0	0	0	212	1	0	1	0	0	0
150	3	1	2	0	0	0	213	1	0	1	0	0	0
154	28	5	22	0	1	0	216	6	1	5	0	0	0
155	6	1	5	0	0	0	217	9	0	9	0	0	0
156	26	3	22	0	1	0	219	1	0	1	0	0	0
157	5	1	4	0	0	0	220	7	0	7	0	0	0
158	6	0	6	0	0	0	221	9	1	8	0	0	0
159	2	0	2	0	0	0	223	1	0	1	0	0	0
160	7	0	6	0	1	0	224	9	0	9	0	0	0
161	9	0	9	0	0	0	226	2	0	2	0	0	0
162	15	1	13	0	1	0	229	1	0	1	0	0	0
163	11	2	9	0	0	0	233	2	0	1	1	0	0
164	22	3	19	0	0	0	234	4	0	4	0	0	0
165	16	1	15	0	0	0	235	5	0	5	0	0	0
166	11	0	11	0	0	0	238	4	0	4	0	0	0
171	16	4	11	1	0	0	239	1	0	1	0	0	0
174	7	1	6	0	0	0	240	17	4	13	0	0	0
177	8	0	8	0	0	0	241	4	1	3	0	0	0

土壙番号	総数	口縁部	胴部	底部	石器	(土錘)	土壙番号	総数	口縁部	胴部	底部	石器	(土錘)その他
242	3	0	3	0	0	0	275	1	0	1	0	0	0
243	3	0	3	0	0	0	276	3	0	3	0	0	0
244	3	0	3	0	0	0	277	4	0	4	0	0	0
246	1	0	1	0	0	0	278	10	0	10	0	0	0
247	14	2	12	0	0	0	280	1	1	0	0	0	0
248	139	12	114	12	1	0	282	6	0	5	1	0	0
249	1	1	0	0	0	0	283	5	0	5	0	0	0
250	1	0	1	0	0	0	285	1	0	1	0	0	0
252	1	1	0	0	0	0	286	11	0	10	0	1	0
253	1	0	1	0	0	0	287	4	3	1	0	0	0
254	1	1	0	0	0	0	291	5	0	5	0	0	0
255	1	1	0	0	0	0	295	2	0	2	0	0	0
259	26	5	19	2	0	0	299	15	1	14	0	0	0
260	20	0	20	0	0	0	300	33	3	29	1	0	0
263	1	0	1	0	0	0	303	4	0	4	0	0	0
264	1	0	1	0	0	0	304	24	2	22	0	0	0
265	16	1	15	0	0	0	306	24	2	22	0	0	0
266	1	0	0	1	0	0	308	1	0	1	0	0	0
267	2	1	1	0	0	0	309	3	0	3	0	0	0
268	2	0	0	0	2	0	310	2	0	2	0	0	0
269	188	18	167	2	1	0	311	1	0	1	0	0	0
270	1	0	1	0	0	0	313	11	1	8	2	0	0
272	1	0	1	0	0	0	314	4	0	4	0	0	0
273	20	0	19	1	0	0	315	2	0	2	0	0	0

土壙番号	総数	口縁部	胴部	底部	石器	(土錘)その他	土壙番号	総数	口縁部	胴部	底部	石器	(土錘)その他
317	5	0	5	0	0	0	372	3	2	1	0	0	0
318	4	2	2	0	0	0	376	1	0	1	0	0	0
323	1	0	1	0	0	0	377	1	0	1	0	0	0
325	15	0	15	0	0	0	380	64	4	60	0	0	0
326	5	0	5	0	0	0	382	20	0	20	0	0	0
327	1	0	1	0	0	0	383	1	0	1	0	0	0
336	4	0	4	0	0	0	389	2	0	2	0	0	0
339	16	4	12	0	0	0	393	3	0	3	0	0	0
342	730	82	637	9	2	0	396	3	1	2	0	0	0
343	983	119	843	16	5	0	397	8	0	8	0	0	0
345	2	0	2	0	0	0	398	1	0	1	0	0	0
346	59	15	44	0	0	0	399	20	3	17	0	0	0
347	8	2	6	0	0	0	402	1	0	1	0	0	0
348	78	8	69	1	0	0	403	3	0	3	0	0	0
350	163	18	141	4	0	0	404	30	5	23	1	1	0
351	20	0	19	0	1	0	405	3	0	3	0	0	0
352	4	3	1	0	0	0	406	11	2	9	0	0	0
353	3	0	3	0	0	0	407	20	4	16	0	0	0
361	5	1	4	0	0	0	408	2	0	2	0	0	0
362	9	0	9	0	0	0	410	2	1	1	0	0	0
363	1	0	1	0	0	0	414	1	0	1	0	0	0
365	11	1	9	0	1	0	415	11	1	10	0	0	0
366	1	0	1	0	0	0	416	12	1	11	0	0	0
370	1	1	0	0	0	0	417	12	2	10	0	0	0

土壙番号	総数	口縁部	胴部	底部	石器	(土錘)その他	土壙番号	総数	口縁部	胴部	底部	石器	(土錘)その他
418	298	30	257	10	1	0	471	1	0	1	0	0	0
419	1	0	1	0	0	0	472	8	1	7	0	0	0
420	536	54	473	8	1	0	473	1	0	1	0	0	0
421	3	0	2	1	0	1	476	1	0	1	0	0	0
428	17	3	13	1	0	0	487	2	0	2	0	0	0
432	5	1	4	0	0	0	488	17	4	12	1	0	0
434	1	0	1	0	0	0	491	1	0	0	0	1	0
440	2	1	0	1	0	0	492	1	0	0	0	1	0
441	1	0	1	0	0	0	533	2	0	2	0	0	0
445	1	0	1	0	0	0	536	2	0	2	0	0	0
447	4	1	3	0	0	0	537	1	0	0	0	1	0
448	2	0	2	0	0	0	539	2	0	2	0	0	0
450	219	7	210	1	1	0	540	18	2	16	0	0	0
451	4	0	4	0	0	0	541	2	0	2	0	0	0
452	13	0	13	0	0	0	542	1	0	1	0	0	0
453	3	1	2	0	0	0	34	1	0	1	0	0	0
455	2	1	1	0	0	0	37	1	0	0	0	1	0
456	11	0	11	0	0	0	表採	2	0	1	1	0	0
458	2	0	2	0	0	0							
459	6	0	6	0	0	0	合計	6,343	670	5,537	103	33	1
461	7	1	6	0	0	0							
462	1	0	1	0	0	0							
463	3	1	2	0	0	0							
465	3	0	3	0	0	0							
466	7	1	6	0	0	0							

グリッド	総　数	口縁部	胴　部	底部	石器	(土錘)その他	埋　設	総　数	口縁部	胴　部	底部	石器	(土錘)その他
I 7	31	0	30	1	0	0	M 1	1	(1	0	0	0)	0
J 8	10	2	4	0	4	0	M 2	1					
J 9	42	8	32	2	0	0	M 3	1 −51	(1	50	0	0)	0
J 10	1,007	86	904	1	12	4	M 4	1	(1	0	0	0)	0
J 11	162	30	130	0	2	0	M 5	1 −49	(5	44	0	0)	0
K 8	271	39	209	7	16	0	M 6	1 − 9	(1	8	0	0)	0
K 9	333	82	244	3	4	0	M 7	2 −21	(1	20	0	0)	0
K10	1,780	190	1,575	6	9	1	合計	8	(10	122	2	0)	0
K11	353	23	328	1	1	0							
L 9	543	51	483	3	6	0							
L10	1,155	139	999	12	5	0	SX-3	2	0	0	0	2	0
L11	1,159	159	992	3	4	1	合計	2	0	0	0	2	0
L12	229	13	214	2	0	0							
M 8	14	2	10	1	1	0							
M 9	189	12	175	0	2	0		総合計	47,667				
M10	97	11	86	0	0	0							
M11	315	24	287	1	3	0							
M12	40	3	36	1	0	0							
N 8	3	0	3	0	0	0							
N 9	119	2	117	0	0	0							
N10	184	13	170	0	1	0							
N11	5	0	5	0	0	0							
I 10	3	0	3	0	0	0							
合計	8,044	889	7,036	44	70	6							

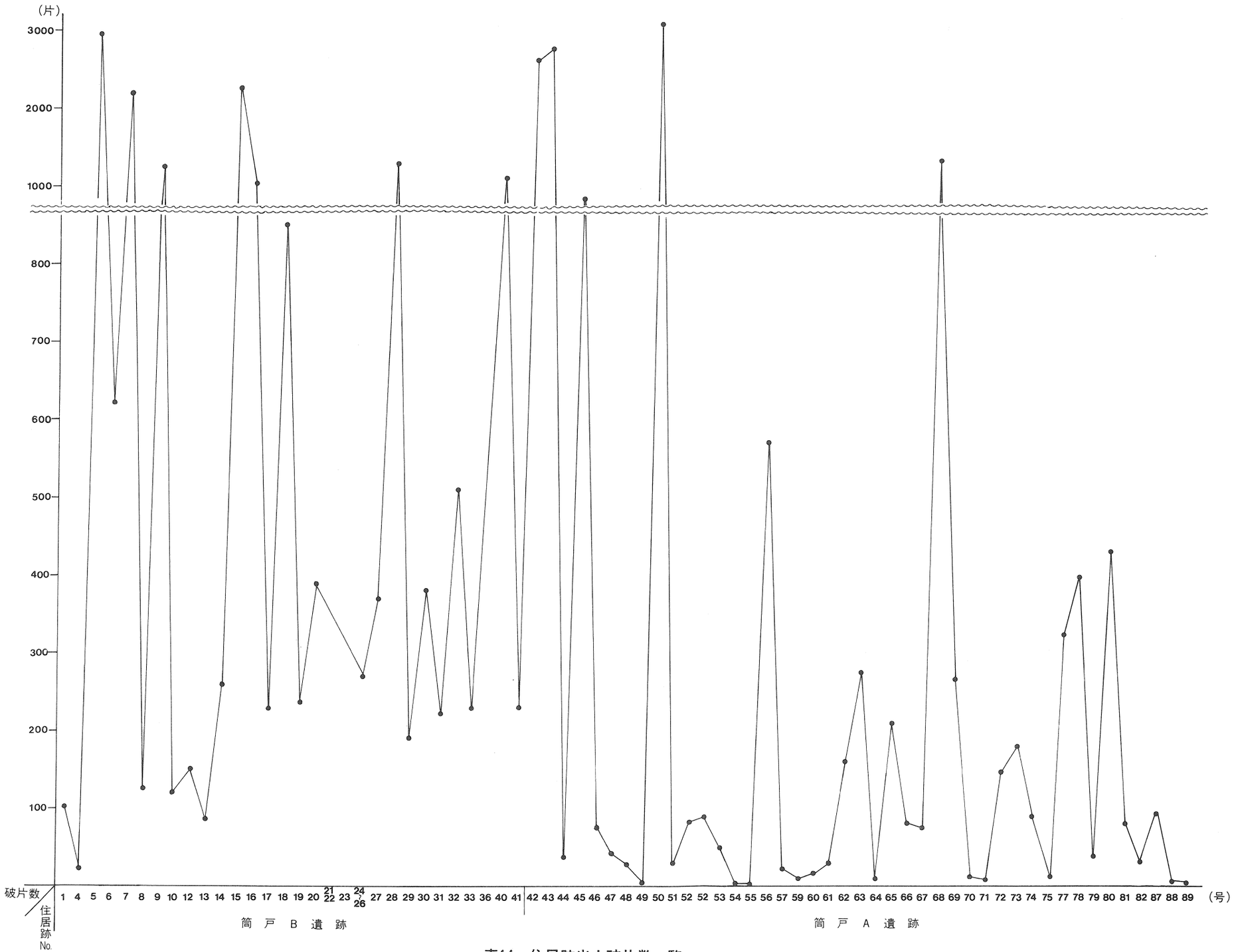
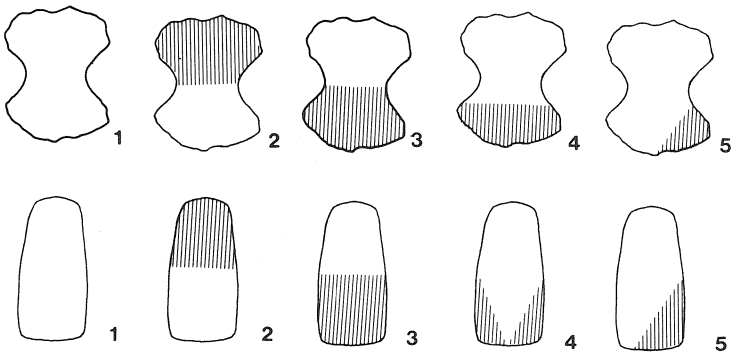


表14　住居跡出土破片数一覧

3　石斧の分類

石斧は，打製石斧12点，磨製石斧14点が出土しており，石斧を形態的に分類すると分銅形，短冊形である。石斧は，出土石器類の中では数量的には多くはない。当遺跡で出土した石斧の80%は分銅形石斧である。

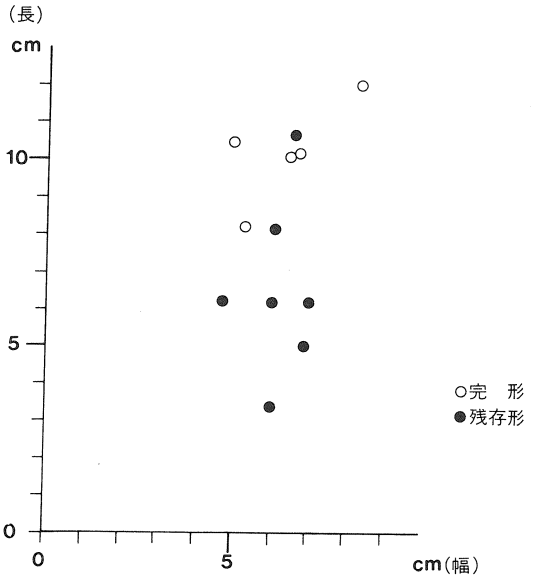
次に，それぞれ出土した石斧の遺存状態を第301図に模式図として記載し，破損状況をスクリーントーンで示した。



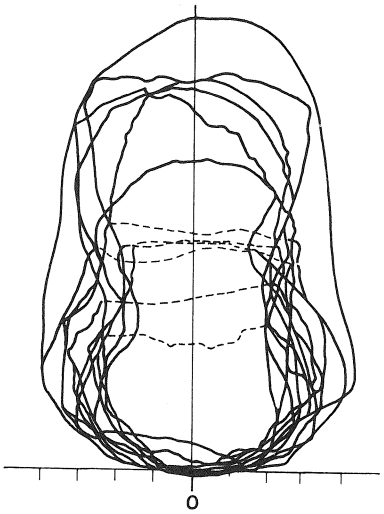
1　完形
2　中央で折れた上半分
3　中央で折れた下半分
4　刃部を欠くもの
5　片側縁のみのもの

第301図　打製・磨製石斧模式図　（▥部分は破損か所）

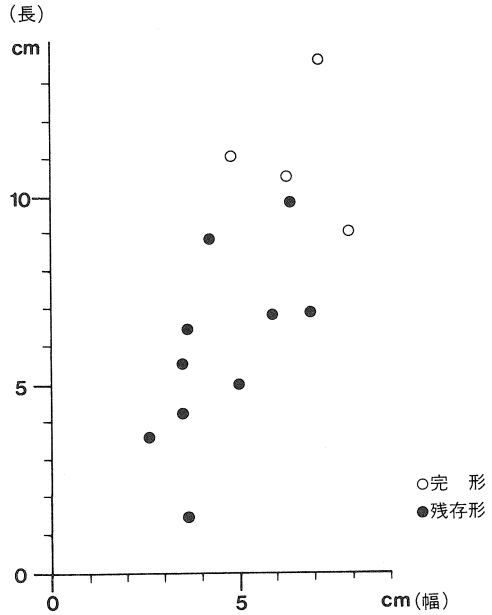
以上のように，出土石斧を分類したが，完形品は少なく，破損した石斧の大部分は胴部中央で折れたものが多い。この点から考えられることは，石斧の形態及び，使用時における石質に対しての打撃方向（打撃時の力の加わり方）等によって遺存度が大幅に変わることがうかがえる。

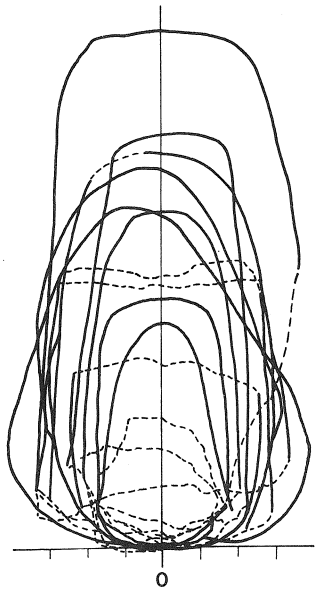


第302図　打製石斧の長さと幅・形状と大きさ



打製石斧基線・正中線を重ねた図





磨製石斧基線・正中線を重ねた図

第303図　磨製石斧の長さと幅・形状と大きさ

分銅形石斧については，刃部の剥離調整は両面方向から実施され，短冊形石斧は，片面剥離が行われている。形態によって剥離調整に違いが認められる。従って，器種により用途が違い，用途によって剥離調整に変化が認められる。

また，検出された石斧の状況観察の結果，破損した石斧をさらに再調整し利用したものも認められ，出土状況は，遺構内に破棄された様相もうかがえる。石器製造に関しても，適切な石材選択を行っていたことと思われる。第302・303図は，打製石斧，磨製石斧の形状と大きさを示した図である。

4　石鏃の分類

石鏃の形態分類は，第304図に示した。茎・基部・側辺・先端の形態について分類を行った。出土した石鏃・個々の破損状態については，以下の通りに分類した。

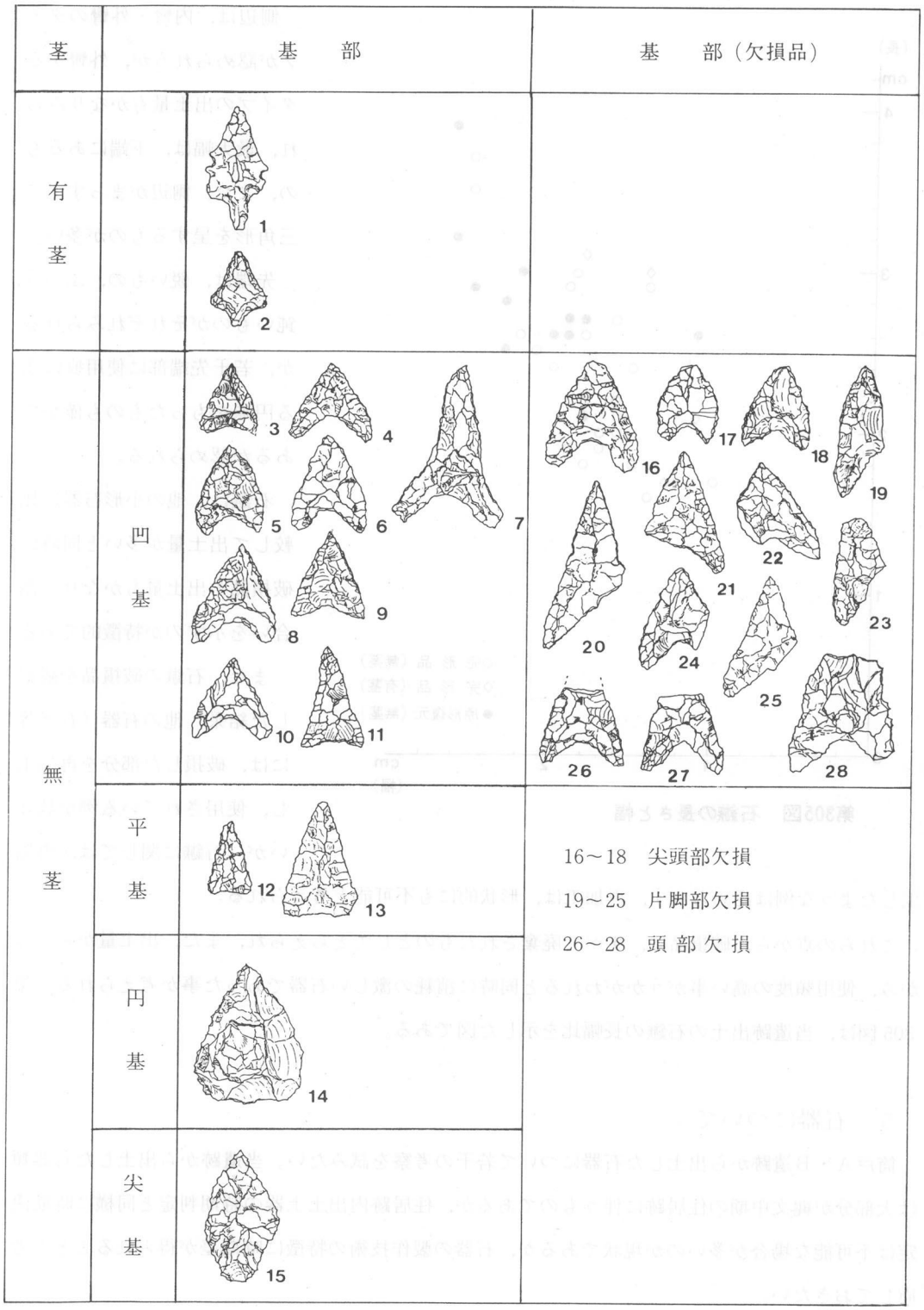
1．尖頭部先端または尖頭部破損。

2．片脚部先端または片脚部が破損。

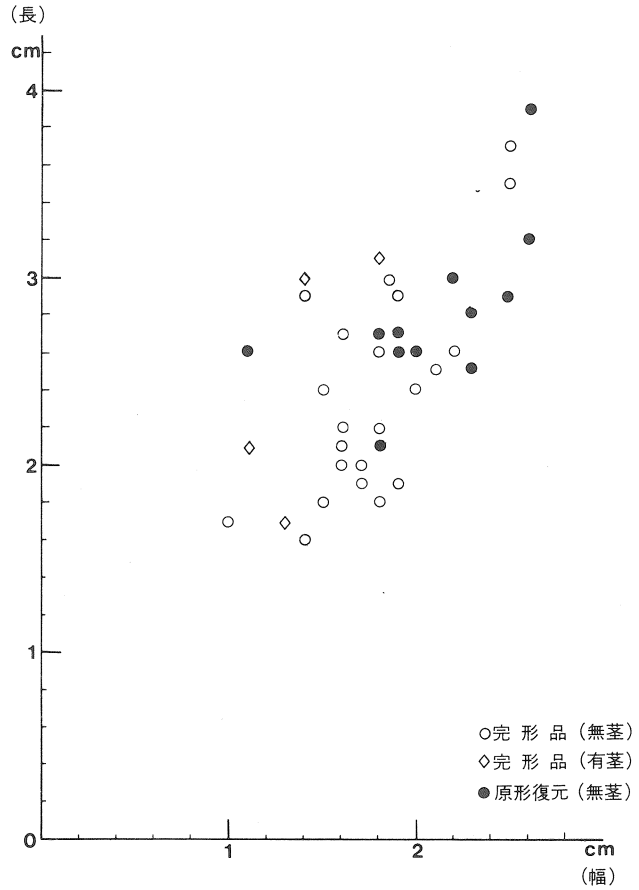
3．尖頭部と片脚部が破損。

石鏃の出土点数は，37点である。

形態についてみると，有茎・無茎のタイプであるが，無茎のタイプが主であり，基部は凹基が大半である。平基が2点，円基が1点みられる。



第304図　石鏃の形状分類図



第305図　石鏃の長さと幅

側辺は，内彎・外彎のタイプが認められるが，外彎するタイプの出土量もかなりみられ，最大幅は，下端にあるもの，また，側辺がまっすぐで三角形を呈するものが多い。

先端は，鋭いもの，ふつう，鈍いものがそれぞれみられるが，若干先端部に使用痕による円味をもったものも僅かであるが認められる。

石鏃は，他の小形石器に比較して出土量が多いと同時に，破損品の出土量もかなりの割合いを示すのが特徴的である。

また，石鏃の破損品を観察した結果，他の石器（石斧等）には，破損した部分を再加工し，使用されている例が数多いが，石鏃に関しては，再加工したような例は認められず，再加工は，形状的にも不可能と考えられる。

これらの点から，破損品は，すべて廃棄されたものとしてとらえられ，また，出土量からかんがみ，使用頻度の高い事がうかがわれると同時に消耗の激しい石器であった事が考えられる。第305図は，当遺跡出土の石鏃の長幅比を示した図である。

5　石器について

筒戸A・B遺跡から出土した石器について若干の考察を試みたい。当遺跡から出土した石器類は大部分が縄文中期の住居跡に伴うものであるが，住居跡内出土土器の時期判定と同様に時期決定は不可能な場合が多いのが現状であるが，石器の製作技術の特徴に時期差が得られることを考慮しておきたい。

次に，出土した石器であるが，表6に示したように，石皿，磨石類が比較的多い点が注目される。このことは，縄文中期における当遺跡の経済状況，社会背景等を考えるうえで貴重な資料

と思われる。

石材として，安山岩，粘板岩，砂岩，流紋岩，石英斑岩，斑糲(はんれい)岩，チャート，黒曜石，片麻岩，緑泥片岩，閃緑(せんりょく)岩，滑石，軽石などが用いられている。

片麻岩，斑糲岩は，筑波山系から産出される。黒曜石，滑石を除いて他のすべての石材は，鬼怒川系流出の礫を使用している。また，有孔石製品として使用されている滑石は，長瀞（埼玉県秩父郡），黒曜石は，霧ヶ峰・星ヶ塔（長野県）・那須（栃木県）産出のものである。この事項から考えて，石材の調達は，使用量の多いものは大部分が遺跡周辺，鬼怒川，筑波山系からおこなわれ，特殊な石材（産出地の限定されているもの）等は，量的に少ないことも認められる点から，入手方法の困難（産地から遺跡まで届く間の問題等も考慮しなければならない。）さがうかがえる。こうした点からかんがみ，比較的広範囲にわたって石材を求めていることが証明されるが，今後は，さらに大谷津Ａ遺跡も含めて，小絹地区の縄文中期集落出土石器石材産地の究明を行いたい。

6　黒曜石の原産地分析について

筒戸Ａ・Ｂ遺跡で検出された黒曜石数は，石器，剥片を合計すると数百点を数え，この検出された黒曜石を理化学的方法によって原産地について追求した。

分析，並びに解釈等については，東京学芸大学理化学研究室二宮修治氏に依頼した。

資料は，筒戸Ａ・Ｂ遺跡出土の黒曜石である。

表15・16が黒曜石の分析結果であるが，これらの分析結果をもとに黒曜石の交易（原産地⟶遺跡）について若干の私見を述べてみたい。

筒戸Ａ・Ｂ遺跡，大谷津Ｂ遺跡から検出された黒曜石は，現在までに茨城県内で調査された遺跡内から出土した黒曜石数（チップ類も含む）に比較すると量が多い。

次に，ここで問題になるのは縄文期における黒曜石の入手方法並びに運搬経路についてであるが，黒曜石を産出しない茨城県下で，県下の各遺跡から黒曜石の石材，石器が多数出土していることや，石器製造跡として検出されている遺構が確認された点などを考えた場合，特有の資源，生産物等については交易が実施され，間接的に運ばれたものと考えられる。

石器製造跡については，大谷津Ｂ遺跡[(1)]の14・28・50Ａ号竪穴住居跡調査において，住居跡の周辺，覆土，床面から多量の黒曜石，チャートのフレイク，チップ類が集中して検出された。特に，14号住居跡調査におけるその数は，2,000個以上であり，この点からこれらの住居跡を石器製造跡としてとらえてみた。大谷津Ｂ遺跡のほか，筒戸Ａ・Ｂ遺跡においても黒曜石片の出土は，他の石材に比較すると圧倒的に多いが，出土する石器（石製品）の数は少ない。これらの遺跡からの黒曜石の検出状況等を考えた場合，黒曜石に限らず，茨城県内では産出しない石材の確保，搬入についての問題が生じる。この問題について，小田静夫氏は『黒曜石の使用頻度を関東四県で

成分 / 試料	Na (%)	K (%)	Fe (%)	Rb (ppm)	Cs (ppm)	Ba (ppm)	La (ppm)	Ce (ppm)	Sm (ppm)	Eu (ppm)	Yb (ppm)	Lu (ppm)	U (ppm)	Th (ppm)	Hf (ppm)	Ta (ppm)	Co (ppm)	Sc (ppm)	Cr (ppm)
1	2.87		0.45	127			14	31	4.7			0.4		9.8				2.9	
2	2.83		0.47	119			14	30	4.7			0.4		9.9				3.0	
3	2.85		0.43	127			14	32	4.7			0.4		10				3.0	

表15　筒戸A・B遺跡出土黒曜石試料分析表

成分 / 原産地対照表	Na (%)	K (%)	Fe (%)	Rb (ppm)	Cs (ppm)	Ba (ppm)	La (ppm)	Ce (ppm)	Sm (ppm)	Eu (ppm)	Yb (ppm)	Lu (ppm)	U (ppm)	Th (ppm)	Hf (ppm)	Ta (ppm)	Co (ppm)	Sc (ppm)	Cr (ppm)
霧ヶ峰 星ヶ塔	2.93		0.46	150	6.9	360	16	31	4.7	0.66	2.3	0.39	3.0	9.9	3.5	0.6	0.11	3.0	3
	2.96		0.49	160	6.6	330	16	31	5.0	0.60	2.2	0.39	2.4	10	3.3	0.8	0.12	2.9	2
	2.88		0.47	160	6.8	370	16	32	4.3	0.63	2.2	0.41	2.4	10	3.5	0.9	0.08	3.0	5
	2.87		0.44	170	6.2	380	16	34	4.7	0.62	2.1	0.41	3.1	10	3.3	0.7	0.08	2.9	5
	2.88		0.48	160	6.5	340	17	33	4.8	0.61	2.0	0.41	3.7	11	3.4	0.7	0.06	2.9	3
	2.86		0.44	150	6.7	380	15	30	4.8	0.60	2.2	0.42	3.0	10	3.3	0.7	n.d.	2.9	3

表16　原産地対照表

比較して，神奈川，東京都，埼玉県と千葉県と順次減少していく』と述べ，『この現象は，黒曜石の入手方法または，原石が原産地から遠隔地に拡散していく過程で近接地で多く流入し，そこを通過し伝播する時点で少しずつ原石量が減っていく結果が得られた』[(2)]と述べている。

以上のような説については，茨城県内では確たる証明はなされていない。

今後，さらに遺跡の調査が進み資料等が増加することによって，小田氏の述べている原石の伝播によっての減少過程が多少なりとも証明され，新たな資料が提出されるものと考える。

当遺跡出土の黒曜石の原産地分析の結果，筒戸A・B遺跡，大谷津B遺跡出土の黒曜石は，霧ヶ峰・星ヶ塔（長野県）産であることが判明した。この結果からこれらの限られた原産地と遺跡までの間に，需給関係を通して交易が実施されて当遺跡に搬入されたものと考えられる。

今後は，さらに各遺跡から得られた資料等の分析を実施し，今まで考古学上証明することが不可能であった事柄についても自然科学の分野を通して追求し，交易活動等とあわせて，総合的に見詰めていく必要があるものと考えられる。

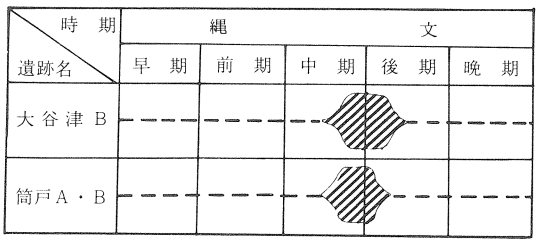
(1). 「水海道都市計画事業・小絹土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書１」大谷津Ｂ遺跡　茨城県教育財団　昭和57年

(2). 縄文文化の研究〝８〟「黒曜石」　小田静夫　雄山閣

終章　む　す　び

昭和56年度後半から昭和57年度にかけて発掘調査を行った筒戸Ａ・Ｂ遺跡からは，前述したように多くの遺構と遺物が検出され，縄文時代中期中葉から後葉にかけて長期的に営まれた集落跡と平安時代に短期的に営まれた集落跡であることが判明した。

当遺跡の北側には，昭和56年度に発掘調査が行われた大谷津Ｂ遺跡が隣接している。大谷津Ｂ遺跡からは，当遺跡と同時期と考えられる竪穴住居跡55軒，住居跡状遺構12基，土壙854基，溝１条が検出されている。検出された遺構の分布状況を観察すると，大谷津Ｂ遺跡の中央から北側にかけて遺構が集中し，その南側はやや空白地をおいて８軒ほどの住居跡が検出され当遺跡に続いている。これらの状況や出土遺物等から判断して，大谷津Ｂ遺跡の南側の住居跡群は，当遺跡から検出された住居跡群との関連をもつものと考えられる。当遺跡で住居跡と確定できるものは，炉の検出されない遺構22軒を除くと65軒である。これに前述した８軒を含めると73軒となる。大谷津Ｂ遺跡は47軒となり遺構数は少なくなるが集落自体は，その北側に延びるものと考えられる。昭和58年度に調査が行われている大谷津Ａ遺跡との関連を今後追求すれば大谷津Ｂ遺跡の集落の全体像が把握されると考えられる。現段階で筒戸Ａ・Ｂ遺跡を，大谷津Ｂ遺跡との関連でみると，この南・北二つの遺跡は密接な関係があったと想定される。両遺跡とも最盛期は，縄文時代中期後葉の加曽利ＥⅢ式期である。その後，集落は加曽利ＥⅣ式期・称名寺式期に，終末をむかえるものと考えられる（第306図）。



第306図 大谷津Ｂ遺跡・筒戸Ａ・Ｂ遺跡の集落形成時期

なお，当台地上には，大谷津Ａ遺跡では縄文時代中期前葉の阿玉台式期，大谷津Ｂ遺跡では縄文時代後期の称名寺式期までの集落が営まれているが，加曽利ＥＩ式の遺構・遺物は検出されていない。加曽利ＥＩ式期に至ると集落が断絶するという状況は，茨城県下においても認められているが，確実な資料としては述べられていない。

今後は，整理報告される大谷津Ａ遺跡の資料も含めて，当台地上での集落の構成・変遷，縄文時代中期の遺跡の在り方等についても検討をお願いいたしたい。

茨城県教育財団文化財調査報告第24集

水海道都市計画事業・小絹土地区画
整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2

筒戸A遺跡
筒戸B遺跡

昭和59年3月24日印刷
昭和59年3月31日発行

発　行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号
印　刷　株式会社 高野高速印刷
水戸市東原2丁目8番1号